

SE05の覆土は粘質土と地山ブロックを含む砂質土が交互に堆積しており、人工的に埋められた様相も呈している。

出土遺物は、前記した炭化米・鉄屑の他、須恵器・土師器がほとんどで、混入品である弥生土器が若干ある。SE05下部からの出土量が一番少なかった。D74-1・2は須恵器である。1は天井の平坦な蓋で、体部は内湾ぎみに下降し、口縁端部は角をなし垂下する。2は外に反り上った高台の付く壺で、底面は平べったく湾曲して立ち上がる。D74-3～6は土師器で、3は内寄りに高台の付く壺で、高台は断面三角形を呈する。緩やかな立ち上がりをみせ、内面に朱塗りの痕跡を残す。4・5は壺である。5は底部回転糸切りを行い、共に底部から体部へはナデによりくびれをつけて移行する。5の胎土は粉っぽく緻密で、外面にはススが付着する。6は壺の口縁部である。緩く屈曲する頸部から外反した口縁部へと移行する。

以上の出土遺物などより、上位の堅穴状の遺構は12～13世紀、SE05・06は8～9世紀に該当すると考えられる。

SE07 (D75・D76図)

A・B-69・70Gr内、標高8.3mで検出した井戸である。南側は調査区外へと延びるが平面形態はほぼ円形を呈し、掘り方直径3.8m、深さ1.4mを測る。東西には深さ20cm程度のステップ面があり、実際の直径はそれらを差し引いて2.8mを測り、断面円筒形である。1・2層間には若干の地山ブロックの混入がみられるが、2層以下は粘性が強くソフトで下にいくほどそれらが強くなり、自然堆積と考えられる。4層上面では植物質が出土した。水を浄化したものか。4層中からは長さ30～40cmの木杭2本と曲物が出土した。曲物は深さ12cmのもので器底のみであった。内には若干の礫が入っており、その下には水溜部と考えられるような落ち込みを検出した。

出土遺物は、弥生土器・須恵器・土師器の小片のみ1袋分で、時期決定になるほどの遺物は出土していない。弥生土器は確実に混入品であるが、須恵器が3割方を占めており、ある程度の時期決定に有利であると考えられる。D76図に掲載したのは実測に耐えうるもの3点である。D76-1は須恵器の壺で、高台が外縁寄りに付き、湾曲して立ち上がるようである。D76-2・3は土師器で、底部回転糸切りの壺底部である。残存率が悪く、底部から体部への立ち上がりも定かではないが、2の方はナデにより若干くびらせているように見受けられる。3は変化なくスムーズに移行し、胎土が2よりも粉っぽく堅密である。

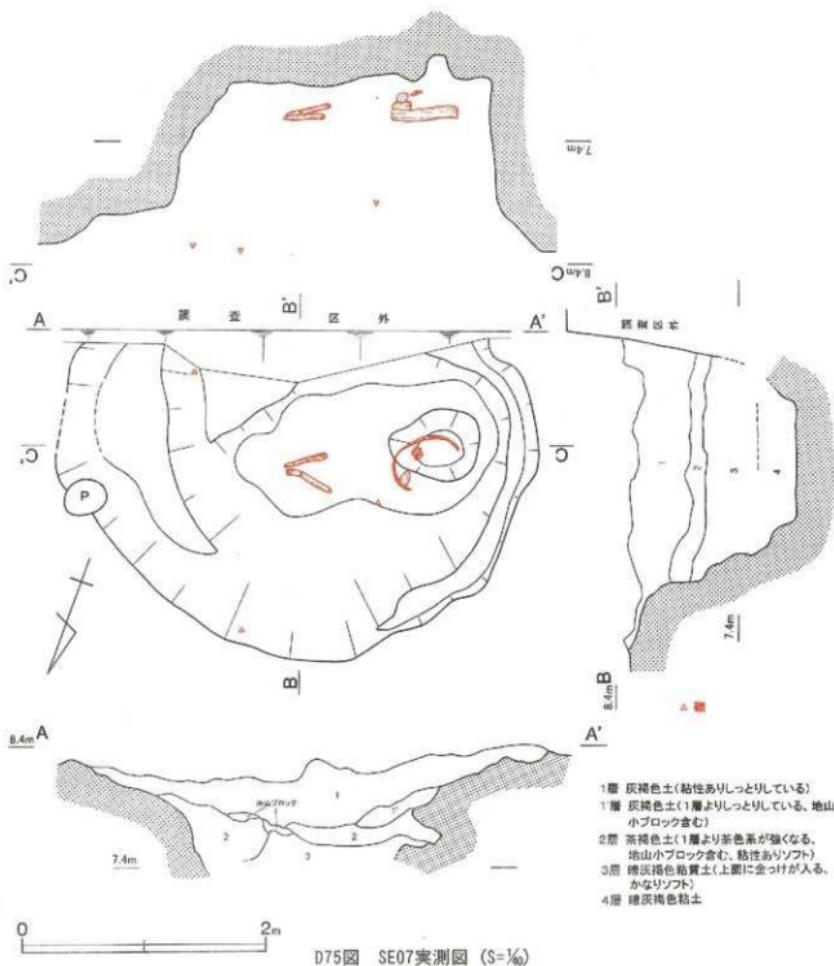
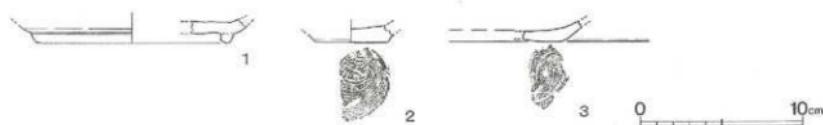
以上の出土遺物などより、当遺構は9世紀以降の平安期であると考えられる。

SE08 (D77図)

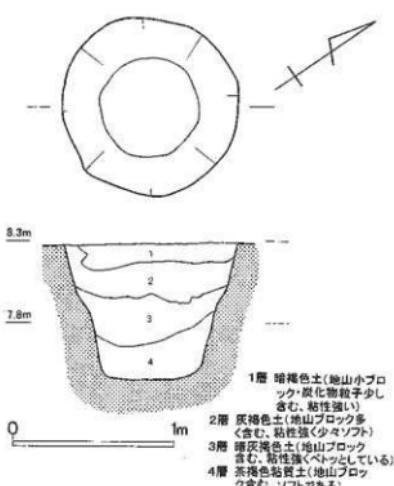
C-72・73Gr内、標高8.3mで検出した。直径1.1m、深さ85cmを測る平面円形、断面円筒形の井戸である。下位にいくほど粘性が強くソフトになり、地山ブロックを各層で含むため、廃棄後に自然堆積したものと考えられる。

出土遺物は、弥生土器・須恵器・土師器の小片が小袋1袋分ほどで実測に耐えうるようなものは皆無であった。弥生土器は混入品であるが、土師器壺の破片には朱塗りを施されたものが半数を占めている。

以上の出土遺物などより、当遺構は8～9世紀に該当すると考えられる。

D75図 SE07出土遺物実測図 ($S=1\%$)

SE09 (D78・D79図)



D77図 SE08実測図 (S=1%)

B・C-73Gr内、標高8.3mで検出した。直径1m、深さ1.05mを測る平面円形、断面円筒形の井戸である。規模・形態が似ているSE08が2.5m西に位置する。下位にいくほど粘性が強くなり、自然堆積状況を呈している。2・4・5層内では10~20cm大の礫が集中して入れ込んである。5層では底面から積み重なって出土し、水を浄化するためのものようである。最終的に入れ込んであるのは井戸を廃棄して埋めるためのものと考えられる。

出土遺物は、須恵器・土師器の小破片が20点程である。土師器の壊には底部回転系切りのみられるものがある。D79-1は須恵器壊の底部で、断面四角形の高台が外縁寄りに付くものである。

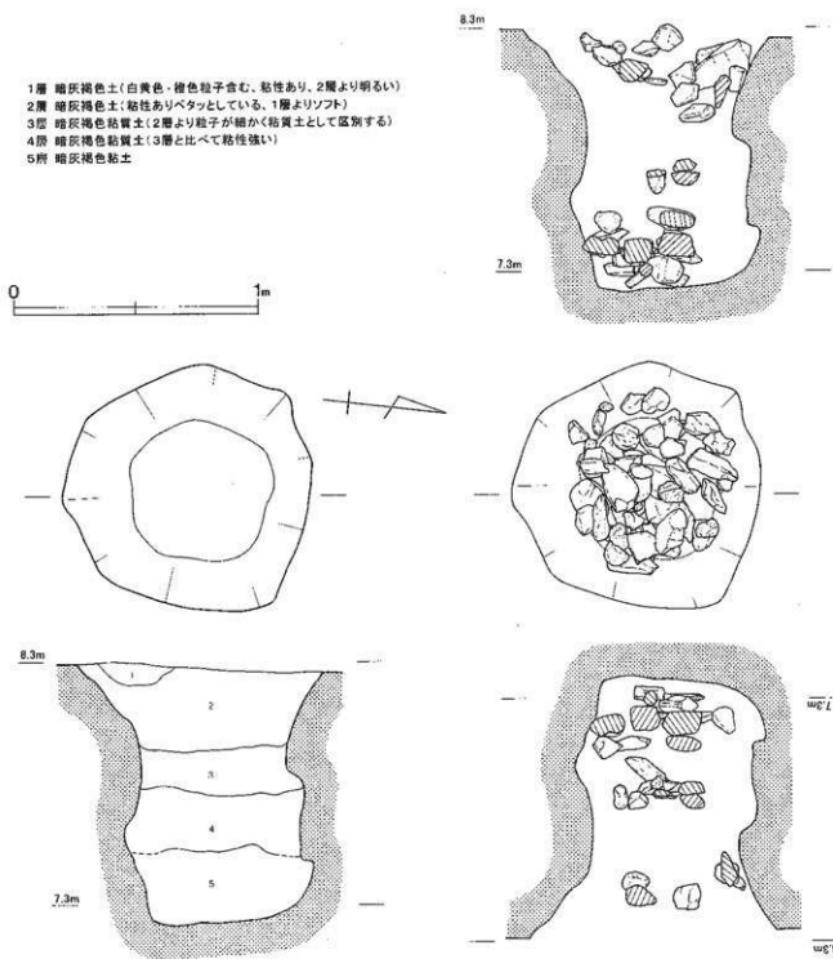
以上の出土遺物などより、当遺構は8~9世紀に該当すると考えられる。

SE10 (D80・D81図)

C-76・77Gr内、標高8.5m弱で検出した井戸である。北側は調査区外へと延びるが、掘り方平面は角をもつ隅丸方形を呈し、東西長3.6m、南北検出長2.4m、深さ1.6mを測り、断面逆台形を呈する。南に位置するSK32とは溝で繋がり、東に位置するSD17とは連続するようである。SK32間の溝には20cm長さの礫が1点出土しており、堰き止め的な感じを受ける。井戸側の構築物は残存していないが、土層断面より7~10層は地山ブロックが多く含み表込め的な様相を呈し、11~17層は砂と粘土が互層状に堆積し草様の植物質を若干含み、流水状態・耐水状態を呈している。井戸内で流水状態とは不可思議ではあるが、SD17からの流れ込みなどが想定できる。このことより当遺構は集水機能も兼ねていた可能性が考えられる。

上層から下層まで中央寄りではあるが、10~20cm大の礫がばらばらと入っている。上層からは棒状の鉄製品が2点、最下層からは舟物の底部、中央に穿孔ある円形板、木杭などが出土している。

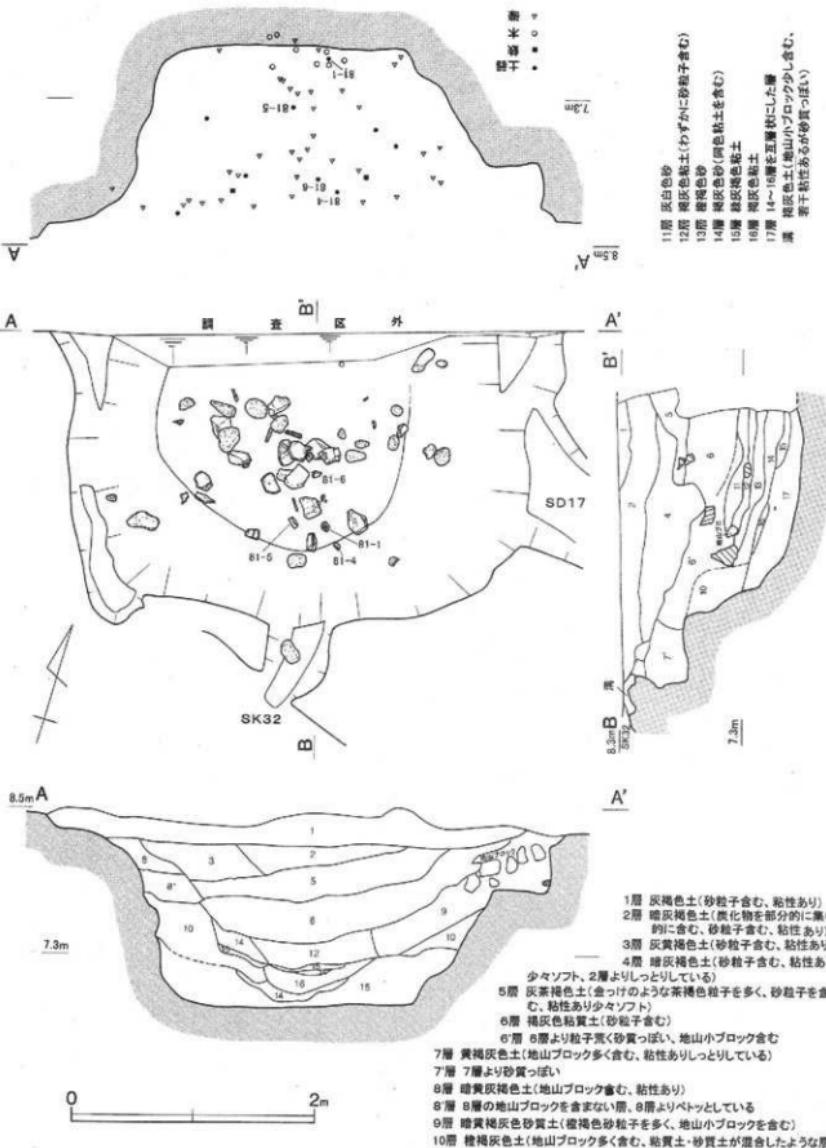
上記以外の出土遺物は、弥生土器・須恵器・土師器・陶器がコンテナ半箱分である。弥生土器は混入品、須恵器も一部混入品である。D81-1は須恵器の長頸瓶の底部である。外に反り上がった高台が付き、内面は同心円ナデによる粘土の盛り上がりがみられる。D81-2~4は土師器である。2と3は底部回転系切りを行った壊と小皿で、淡色を呈し、堅緻な胎土で、底部から体部へは未調整のまま移行する。4は擂鉢の胴部破片である。内面にしっかりした擂り目が施してある。SD27出土のD51-1と同一個体の可能性あり。D81-5は備前焼の擂鉢の底部である。やや湾手の平底で、内面には自然釉がかかり、

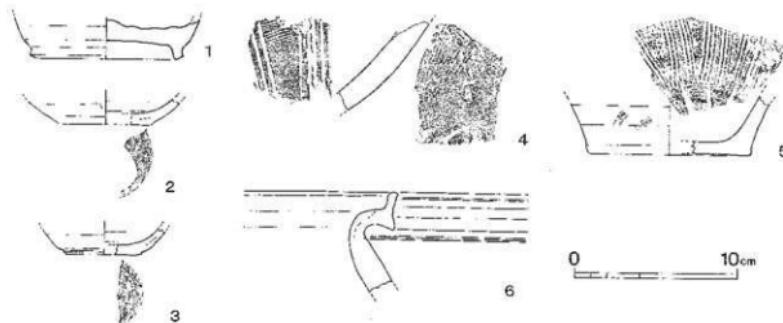


6本単位の掘り目が施されている。D81-6は常滑焼の大甕の口縁部である。「L」字状口縁を呈し、頸部はきつく湾曲する。同一個体と考えられそうな胴部破片が数点出土している。

以上の出土遺物などより、14～16世紀と時期幅があるが、その間に使用され、埋まったものと考えられる。



D80図 SE10実測図 ($S=1\%$)

SE10図 SE10出土遺物実測図 ($S=1/3$)

SE11 (D82・D83図)

C-79・80Gr内、標高8.7mで検出した井戸である。北側半分以上が調査区外へと延び、南東に位置するSD22を切っているのか連続するかは不明である。検出径2.8m、深さ1.7mを測り、断面逆台形である。最下層の6層のみが粘質土で耐水状態を呈している。その6層上面には地山が入り込んだ状況を呈し、径が狭くなったところに10cm大の礫が集中して出土している。水を浄化するためのものか、または井戸としての機能を捨てた時点で埋めるために投げ入れたものであろうか。それ以上の4・5層は粘性はあるがシャリッとした砂質土であり、井戸廃棄後には集水機能を備えた可能性が考えられる。

出土遺物は、須恵器・土師器・瓦質土器が中袋1袋分である。最下層の6層から遺物が出土しておらず、井戸の確実な時期を追うことはできない。D83-1・2は土師器の壊である。底部は糸切りを行い、底部から体部へはナデによるくびれをつけて内済ぎみに立ち上がる。軽々した焼成である。D83-3は瓦質土器のこね鉢である。「ハ」の字状に立ち上がる体部から口縁部に至り、端部は若干肥厚して面をもち、ナデにより窪みができる。

以上の出土遺物などより、当遺構は14世紀頃に該当すると考えられる。

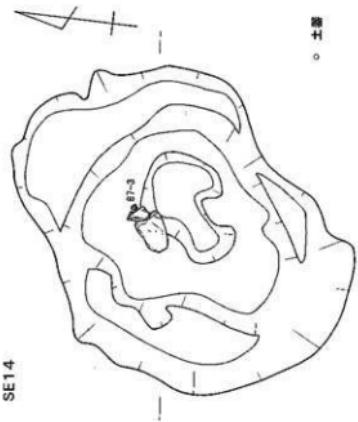
SE12・13 (D84~D86図)

B・C-80Gr内、標高8.5mで検出した井戸2基である。SE13を廃棄したのち人工的に埋め、そののち重なるような大きな掘り方を掘り、SE12を構築している。A-A'土層断面では井戸側をかすってしまい、また流水が激しいためそれ以下の土層を確認することができなかった。

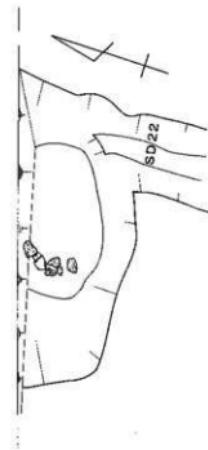
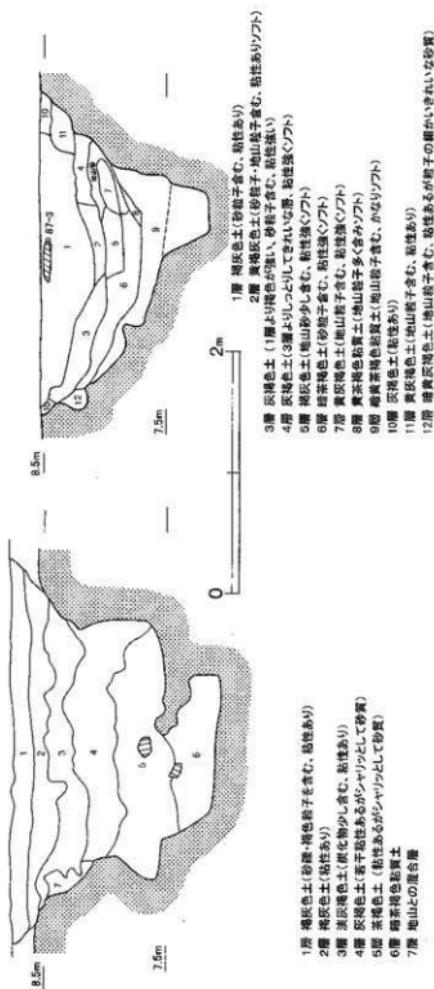
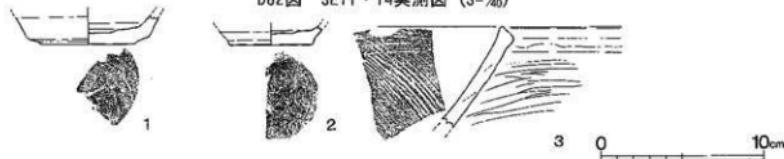
SE13は直径2.2×1.8m、深さ2.2m（曲物の下底）を測り、断面円筒状を呈する。北側の膨らみは崩壊したものと考えられる。水溜部に直径50cm、高さ50cmのスギ材で作られた曲物が据えてある。その中央には現状で40cm長を測り、節がとつてある竹筒が1本埋めてある。井戸廃棄の際に行われた祭祀行為であると考えられる。廃棄後に自然堆積した12~14層、その上に10・11層が人工的に埋められている。

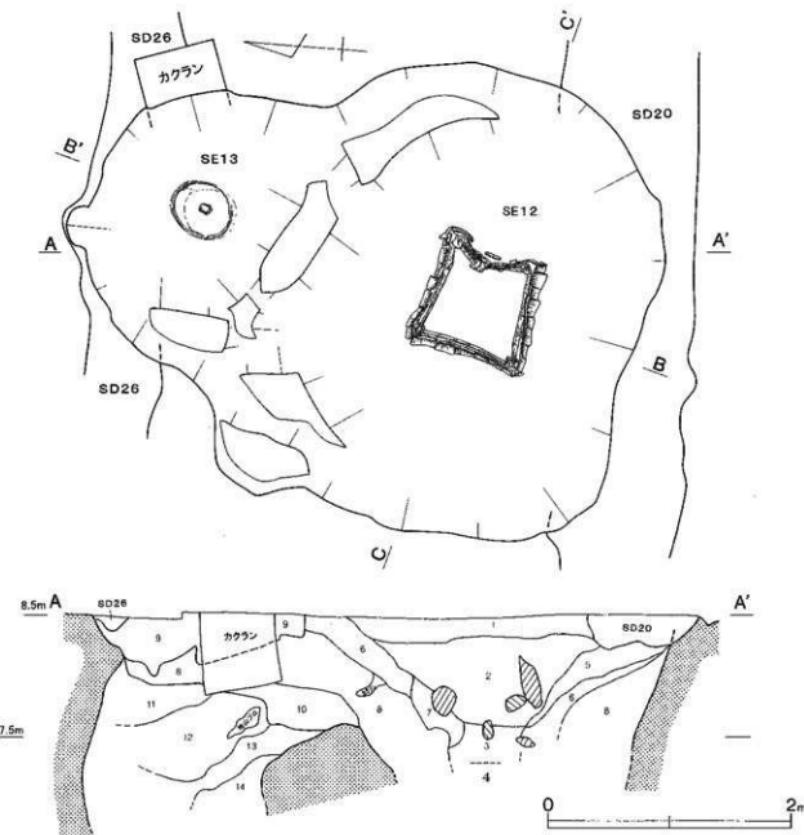
SE12はSE13が人工的に埋められてのち、ステップ面を含めると長径4.6m、短径3.8m、深さ2.15mを測る掘り方を掘り、一辺90cmの木組みの井戸側を構築し、6・8層を裏込めしたものである。その上位

SE14



SE11

D82図 SE11・14実測図 ($S=1/40$)D83図 SE11出土遺物実測図 ($S=1/3$)



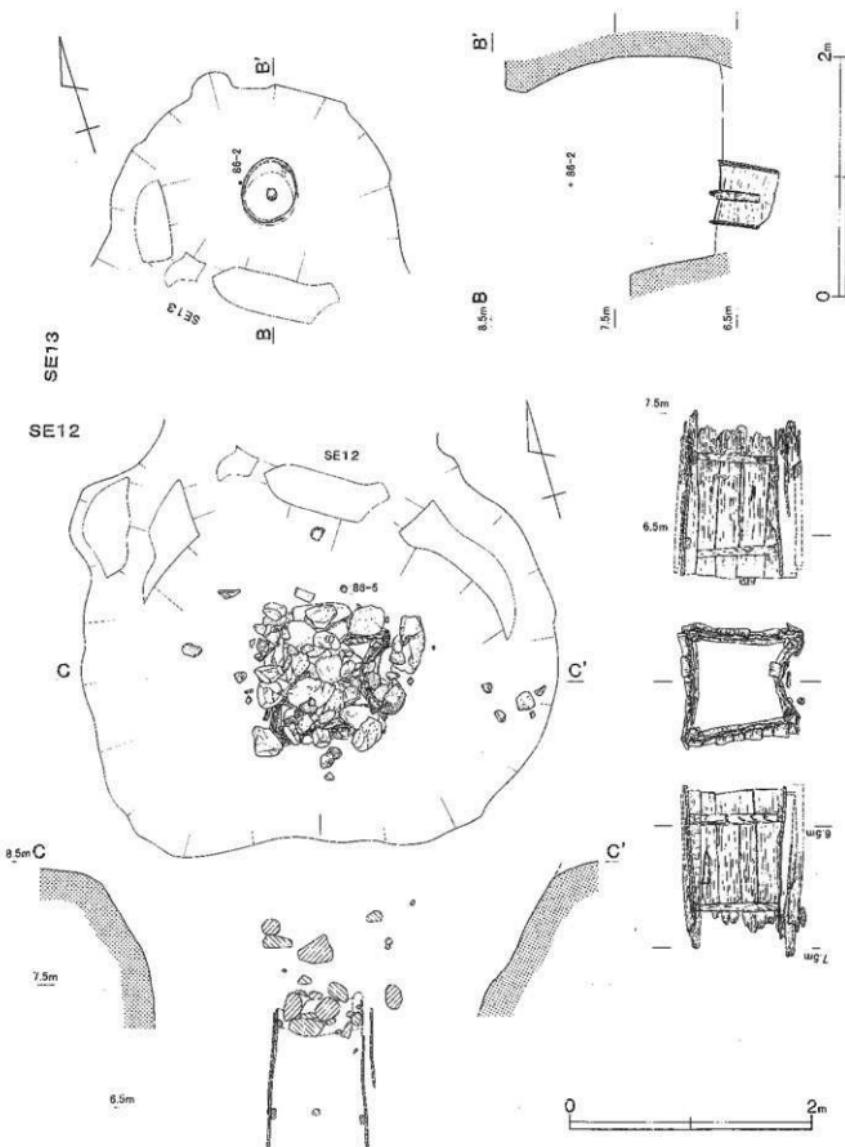
- 1層 喀茶褐色土(砂粒子・炭化物含む、粘性あり)
- 2層 喀茶褐色土(砂粒子含むが1層のものより小さいためしましとしている)
- 3層 焙茶褐色粘質土
- 4層 烧灰茶色土(3層より離い、粘性強い、粒子がザラッとしている)
- 5層 喀茶褐色土(地山小ブロック少し含む、粘性あるが砂質っぽい)
- 6層 明褐色砂質土
- 7層 插灰色土(粘性あるが粒子がザラッとして少々砂質っぽい)
- 8層 灰白色マーブル砂質土

- 9層 喀茶褐色土(地山小ブロック含む、粘性あるが砂質っぽい)
- 10層 灰白色砂
- 11層 黄褐色細砂(黄褐色の地山砂に灰褐色土が筋状に入り込んでいる、炭化物含む、粘性強い)
- 12層 喀茶褐色土(地山小ブロック含む、粘性が強かい、粘性あり)
- 13層 插灰色土(若干の炭化物・灰白色砂含む、粘性あり)
- 14層 灰褐色土(植物質含む、粘性あり)

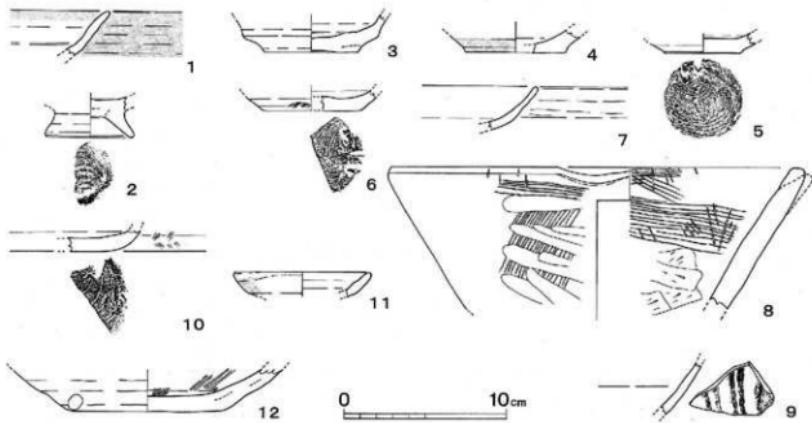
D84図 SE12・13実測図 ($S=1\%$)

には正確不明であるが、掘り込まれて堆積した9層が載っている。SE12が構築されて以後と考えられる。

木組みは調査時には湧水点の標高7.6m以下に残存し、高さ1.4mの検出であった。各コーナーに一辺10cmの角材を据え、上下二段のほぞ穴に幅6~8cmの横木を差し込み、外側から横木に立てかけるよう



D85図 SE12遺物出土状況図及び木組み展開図 ($S=\frac{1}{40}$)
SE13曲物・竹筒出土状況図 ($S=\frac{1}{40}$)



D86図 SE12(3~9)・SE13(1・2)・9層(10~12) 出土遺物実測図 (S=1)

に縦板材で壁を作る。壁は2枚重ねである。東側の上段の横木はなくなつておらず、そのため内部へ入り込んでいた。木組みの横木は全てスギ材である。

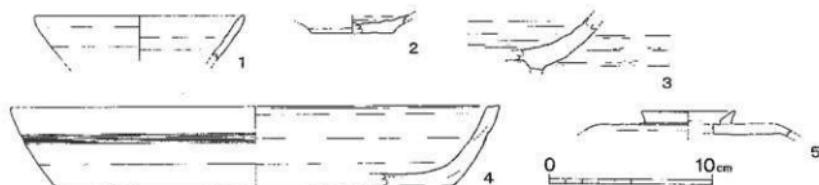
木組み内南西コーナー付近の標高6.77m位から、朱と糞状のものが10cm四方ずつ出土した。これらの約20cm下からはD86-8が出土している。そのほか同レベルで木組み内中央の横木一段目とほぼ同レベルには15cm大の礫が1点出土している。これは井戸を廃棄する際に行った祭祀行為ではないかと考えられる。

SE12を廃棄する際には、1・2・7層が埋まっている部分を掘り込み、上部施設を破壊したものと考えられる。そして残存する井戸内上位から上面を埋めるように10~30cm大を中心にして最長50cmの礫が投げ込まれている。あとは自然堆積のようである。

出土遺物は、SE13から須恵器・土師器の破片が中袋1袋分、SE12から弥生土器・須恵器・土師器・青磁・瓦質土器の破片が2袋分である。弥生土器・須恵器は混入品と考えられる。9層からは須恵器・土師器・陶器の破片が1袋分出土している。

D86-1・2はSE13出土の土師器である。1は外面及び内面縁に朱塗りが施してある坏口縁部である。体部は開きぎみに立ち上がり、ナデによる稜線が明瞭に残っている。口縁端部は引き伸ばしておさめる。2は高台部である。底部は回転糸切り痕が観察され、径は小さいがしっかりと長めのものである。

D86-3~9はSE12出土の土器である。3~7は土師器で、7は他よりも薄手で径も小さいようなので小皿と考えられ、他は坏である。5・6は底部回転糸切り痕が明瞭に残っている。3は若干小さめの底部から体部へはナデにより大きく窪ませ、外反するように立ち上がる。内面には同心円状のナデが明瞭に残っている。4は外面に朱塗りが施されており、1と同一個体の可能性がある。内面の風化が著しく、内面もきれいな1とは若干違うようではあるが、外面の色調、断面の焼成具合がよく似ている。底部

D87図 SE14(1~4)・SE15(5)出土遺物実測図 ($S=1/3$)

から体部へはナデによりメリハリをつけて立ち上がる。5~7は堅緻で粉っぽい胎土である。7の体部は内湾して丸みをもつ。8は土師器の片口をもつ鉢である。内面に掘り目が観察されないのでこね鉢として使用されたようで、内面のミガキ調整部分はツルツルしている。9は龍泉窯系青磁碗の破片で、鎬連弁が施されている。釉は若干暗い色調を呈する。

D86-10~12はSE12裏込め土の上に位置する9層出土の上器である。10・11は土師器の坏と小皿で、10は回転糸切り痕を残す底部から体部へは丸みをもたせて移行する。両者とも堅緻で、11は粉っぽい胎土である。12は素焼きの鉢底部である。素焼きとしたのは、上師器の鉢と比べると、色調に黄橙色を全く呈せず、緑灰色を呈し、胎土も緻密さがなく粗いためである。内面には使用痕としての磨り減りが全体に観察される。

以上の出土遺物などより、SE13は12世紀に、SE12が構築され使用されたのは12~14世紀で、廃棄され上部が堆積したのが15~16世紀であると考えられる。

SE14 (D82・D87図)

C79Gr内、標高8.5m強で検出した井戸である。周辺では最も新しい遺構で、平面くびれた梢円形、断面漏斗状を呈し、長径3m、短径2m、深さ1.4mを測り、E-43°-Nに位置する。東西に傾斜する平坦面を有しており、調査時に置いてそれ以下に湧水点があり、粘質土が堆積しているため、耐水状態であったのはほぼそれ以下と考えられる。しかし上半部にも粘性の強いソフトな土が堆積しており、集水施設として利用されていた可能性も考えられる。上面中央付近で平たいが30cm大の礫が出土した。井戸を廃棄した際に置かれたもののように見受けられる。

出土遺物は、各層から土師器の小破片を中心に、須恵器が中袋1袋分である。D87-1・2は土師器坏の口縁部と底部である。1はあまり開きをもたずに立ち上がり端部が伸びたもので、2は回転糸切りによる底部から体部へはナデにより若干変化をつけて移行する。3・4は須恵器の高台付き坏と大皿である。3の高台は途中欠損しており全体を知ることはできないが、縁寄りに付き、体部へは丸く厚みをもって湾曲するが開きぎみに立ち上がる。4は還元不良のためか表面は茶褐色を、断面は暗橙色を呈している。平らな平底に直線的に立ち上がる体部で、口縁端部はナデによる平坦面をもつ。外面には平行沈線文を施す。

以上の出土遺物などより、当遺構は13世紀頃に該当すると考えられる。

SE15 (D87・D88図)

B81Gr内、標高8.6mで検出した井戸である。S D34を切り、平面ほぼ円形で、直径1m、深さ1.5 5mを測り、断面円筒状を呈する。6層途中までは確実に掘り下げ、作図を行ったが、湧水が激く壁が崩壊する恐れがあり、それ以下は手探りにて底面を確認した。底面には高低差があり、ステップ面が存在する。最下層6層のみが粘質土で、5層以上には地山ブロックなどが混入しており、早くから井戸を放棄し、自然堆積に任せたものようである。

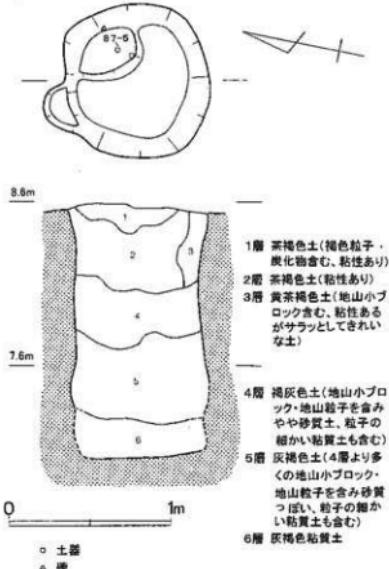
出土遺物は、須恵器・土師器・瓦質土器が小袋1袋分である。6層からは土師器壺と甕の小破片が1点ずつ出土しているが、時期を決定するほどのものではない。4層から1点瓦質土器鉢の小破片が出土しているが、國化できるものではない。D87-5は唯一國化できた4層出土須恵器蓋である。メリハリのある輪状つまみが付き、天井部は平坦で、体部へ屈曲するように移行する。

以上の出土遺物などより、8~13世紀内に該当するとしかいえない。

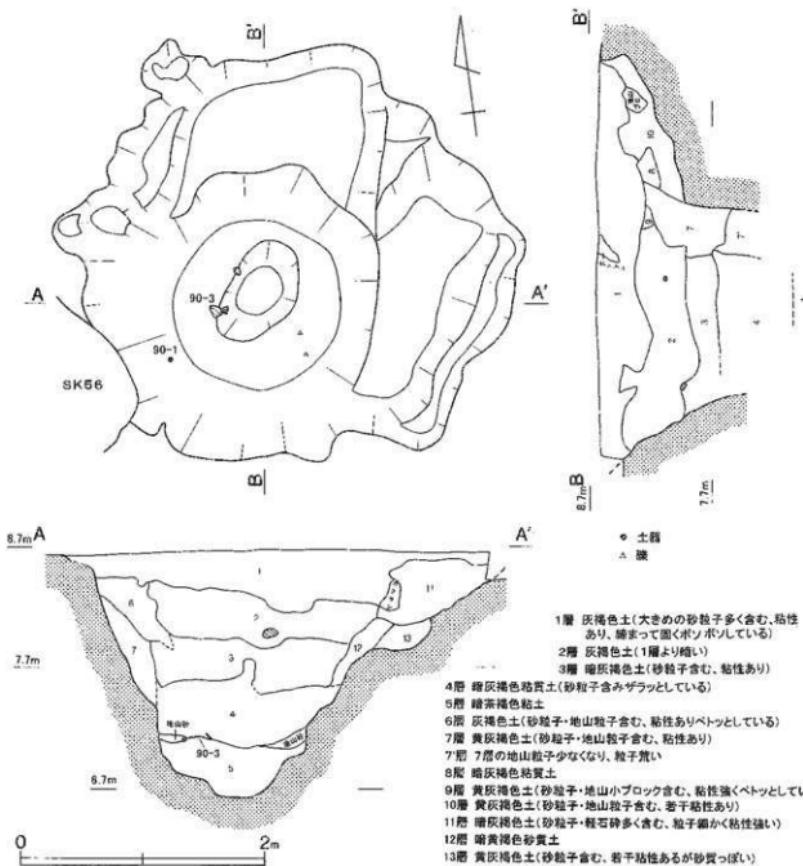
SE16 (D89・D90図)

C-81・82Gr内、標高8.7mで検出した井戸である。一部をSK56に切られているが、掘り方平面椭円形、断面「U」字状を呈し、直径3.5m、深さ2.05mを測る。底面には一段と下がった水溜部のような落ち込みがある。3~5層は、直径2mの本来の井戸として機能していた堆積土で、2層は廃棄後の自然堆積土と考えられる。4層下底には地山砂が若干入り込んでいるため、一度はそこが底面であると誤認していた。北・東側にあるステップは、本来の井戸側である2~5層が掘り込まれる以前に堆積した8・10・11・13層を覆土とする造構の残存、または井戸側を構築する際の掘り方で、井戸側を構築後の裏込めとして6~13層が埋め込まれ、廃棄後の2層が堆積したのちに1層の範囲が掘削された、という可能性を考えられる。

出土遺物は、弥生土器・須恵器・土師器の破片が2袋分、上層出土の製塙土器と考えられるような土器小破片が5点である。弥生土器は混入品であるが、10m西に位置する大溝出土のD60-9と同一個体と考えられるような小破片が1点上面から出土している。D90-1~4は須恵器である。1は蓋で、つまみ部は欠損して不明である。天井部は低く平べったい器形を呈するが、焼成時の歪みで中央部は窪んでいる。短い体部から下がり、口縁部は逆「L」字状を呈して垂下する。2は壺で、体部は湾曲し、口縁部は直立ぎみに立ち上がり、端部下に浅い沈線を施す。3は皿で、底部から体部へは丸みをもって移

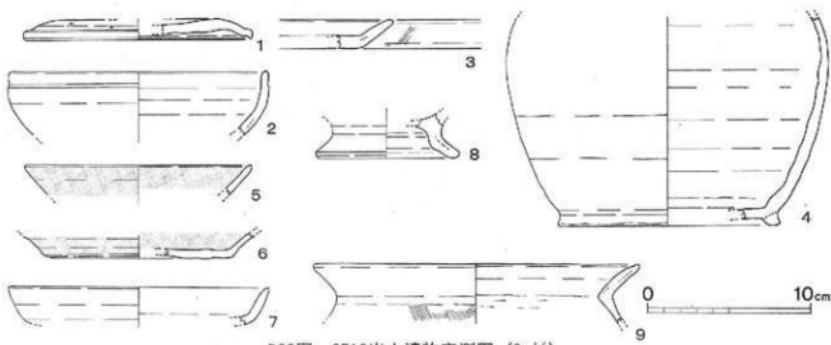


D88図 SE15実測図 (S=1/50)

D89図 SE16実測図 ($S=1\%$)

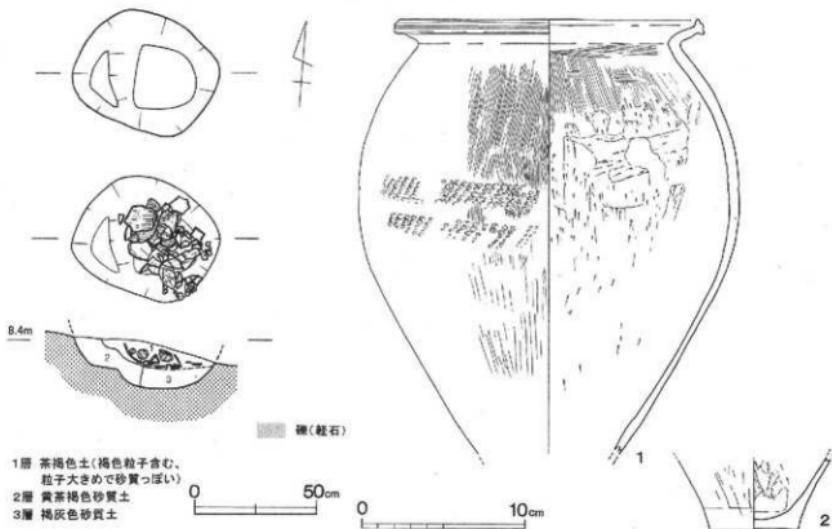
行し直線的に立ち上がる。4は壺の体部下半であろう。断面凸角形の高台が付き、平らな底部から体部は若干膨らみをもって湾曲する。D90-5～9は土師器である。5～7は皿で、5は内外面、6は内面及び底面縁に朱塗りが施してある。5はやや外開きに立ち上がり、端部は丸く納める。6の底面は粗雑なナデによる凹凸をもち、縁辺はナデ上げ、体部へはナデにより屈曲させて外反ぎみに立ち上げる。7は短い体部が外傾して立ち上がる。8は足の長めな高台で、内面が屈曲する。9は若干薄手の壺の口縁部である。頸部が「く」の字状に屈曲する。

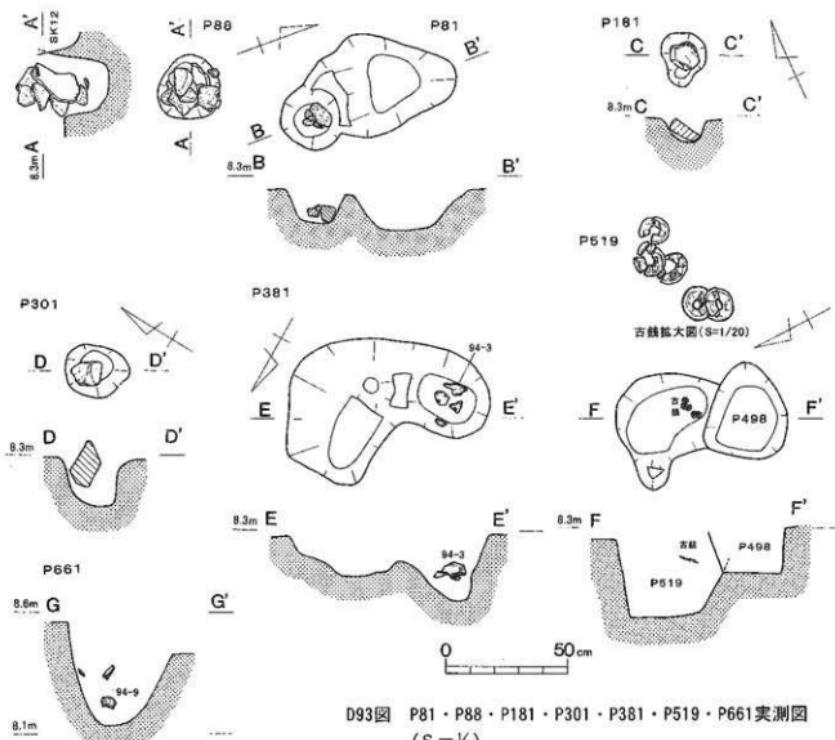
以上の出土遺物などより、当遺構は8世紀頃に使用され、埋められたと考えられる。

D90図 SE16出土遺物実測図 ($S=1/2$)

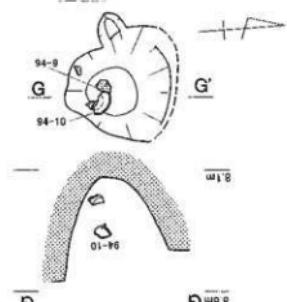
P709 (D91・D92図)

B65Gr内、上面を重機掘削により破壊されてしまい標高8.45mで検出した。柱穴状を呈する平面椭円形で、 55×45 cm、深さ20cmを測る遺構である。底面から約10cm浮いて弥生甕がほぼ1個体（残存3/4）が潰れた状態で出土した。土器の中に軽石の小礫が数個入っている。伏せて埋置した土器に前記した礫を投げ込み、土器を破碎したような状況である。周辺は、SD06に区画された土塙墓が集中している場所であり、当遺構も同様に土器棺墓と捉えたい。

D91図 P709実測図 ($S=1/20$)D92図 P709出土遺物実測図 ($S=1/2$)



D93図 P81・P88・P181・P301・P381・P519・P661実測図
(S = 1/20)



出土遺物は、前記した壺D92-1・2のみである。2の底部は1と同一個体であるが、接合面がなかった。1はやや薄手の器壁で、口縁部は上下に拡張して0.9cm長の面をもち、2条の凹線文を施す。頸部はきつく屈曲して肩部から胴部はあまり張らずに移行し、胴部最大径位から底部へは裾すぼまりとなり、胴部最大径位には2段の列点文が施される。それと同径位から下にはスヌが付着する。2は1と同様薄手の平底である。

以上より、当遺構は中期後葉に埋設されたものである。

P81 (D93図)

C69Gr内、標高8.25mで検出した。長径75cm、短径40cm、深さ15~20cmの長楕円形を呈する柱穴であるが、ピットが2基穿たれたものである。その南側ピットの中底面に10cm大と数cm大の礫が数個入っていた。

出土遺物は、弥生土器と須恵器の小片が1点ずつである。弥生土器は混入品である。以上、当遺跡

の須恵器を伴う時期のものと考えられる。

P88 (D93図)

C68Gr内、標高8.4m強で検出した。SK12に切られており、直径25cm、深さ40cm弱の柱穴の中に10cm弱の大の礫が10点近く積み込まれていた。出土遺物は、弥生土器と須恵器の小片が1点ずつである。弥生土器は混入品である。以上、当遺跡の須恵器を伴う時期のものと考えられる。

P181 (D93図)

C73Gr内、標高8.3mで検出した。直径20cm、深さ10数cmの梢円形の柱穴の中に10cm角、厚さ5cmの平べったい礫が斜めに立てかけたように埋設してあった。出土遺物は、弥生終末期と思われる小破片が1点である。

P301 (D93図)

C74Gr内、標高8.35mで検出した。直径20~25cm、深さ25cmの梢円形の柱穴の中に長さ20cm、厚さ10数cmの礫が1点立てた状態で出土した。出土遺物は皆無で、時期は不明である。

P381 (D93・D94図)

B73Gr内、標高8.3mで検出した。長さ1m、幅35~40cm、深さ20~30cmの「L」字状を呈する柱穴であるが、ピットが2基穿たれたものである。その東側ピットの中に浮いた状態で土器破片が5点出土した。これらは碎片1点以外全て接合した。D94-3がそれである。弥生終末期から古墳初頭の古式土師器の壺で、かなり摩滅が激しく残りの悪いものである。極薄の器壁をもち、複合口縁で、若干長めの頸部を有する。

P519 (D93図)

C75Gr内、標高8.3mで検出した。P498に切られており、長径40cm以上、短径35cm、深さ30cm強の柱穴の中に中位よりも上のレベルで古銭が5枚出土した。全部表面を上に向いている。調査後の不手際により文字解読をする前に遺物を行方不明としてしまい、正確な文字は確認する術はないが、写真(図版161-2)から「開元通〇」のように読みとれるものもある。出土遺物は、弥生土器の小片が3点のみで時期決定とはならない。

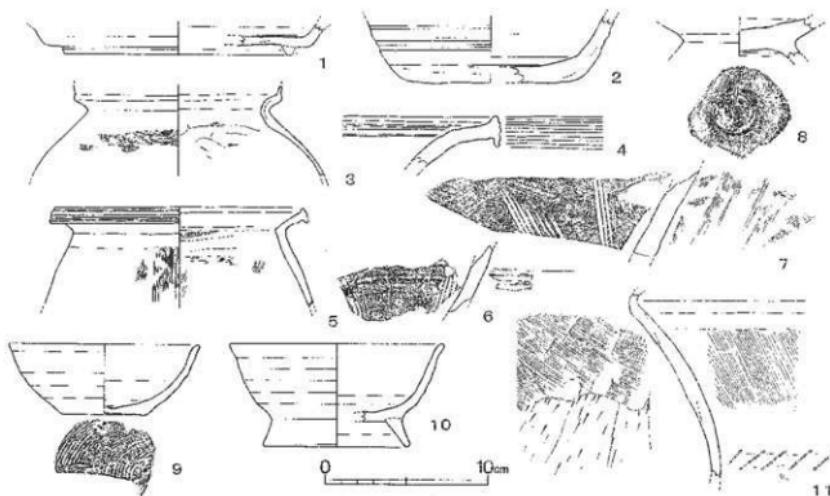
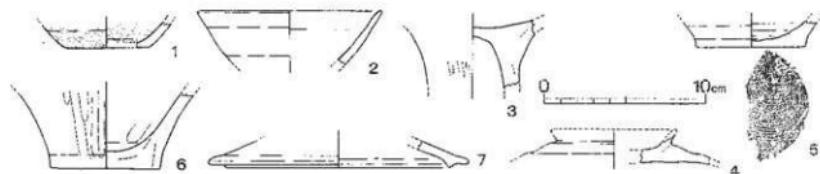
P661 (D93・D94図)

B81Gr内、標高8.55mで検出した。SD26に切られているが、直径45cm、深さ45cmの柱穴の中から、柱穴としては多くの土師器破片が小袋1袋分出土し、特にD94-9は底面出土のものとも接合して8割方復元できた。D94-9・10は土師器の壺である。共に体部は内湾して立ち上がり、口縁端部は外反し、外面には回転ナテ調整の痕跡を明瞭に残す。9の底部は回転糸切り、10は長めの高台が付くものである。10世紀頃のものであろう。

SK12・SK48・SK53・SD04・SD40・他の柱穴・遺構外出土遺物 (D94~D97図)

DIX内より検出された遺構で、特記するには及ばないが、時期決定及び今後の検討において必要と考えられる遺物を掲載した。詳細は観察表に委ねる。

遺構外出土遺物も詳細は観察表に委ねる。

D94図 柱穴出土遺物実測図 ($S=\frac{1}{2}$)D95図 SK12(1)・SK48(2・3)・SK53(4・5)・SD04(6)・SD40(7)出土遺物実測図 ($S=\frac{1}{2}$)

その他にも弥生時代～古墳時代初頭、奈良・平安時代～中世の柱穴が多数検出されたが、思うように組み立てることができなかった。D98図に委ねたい。

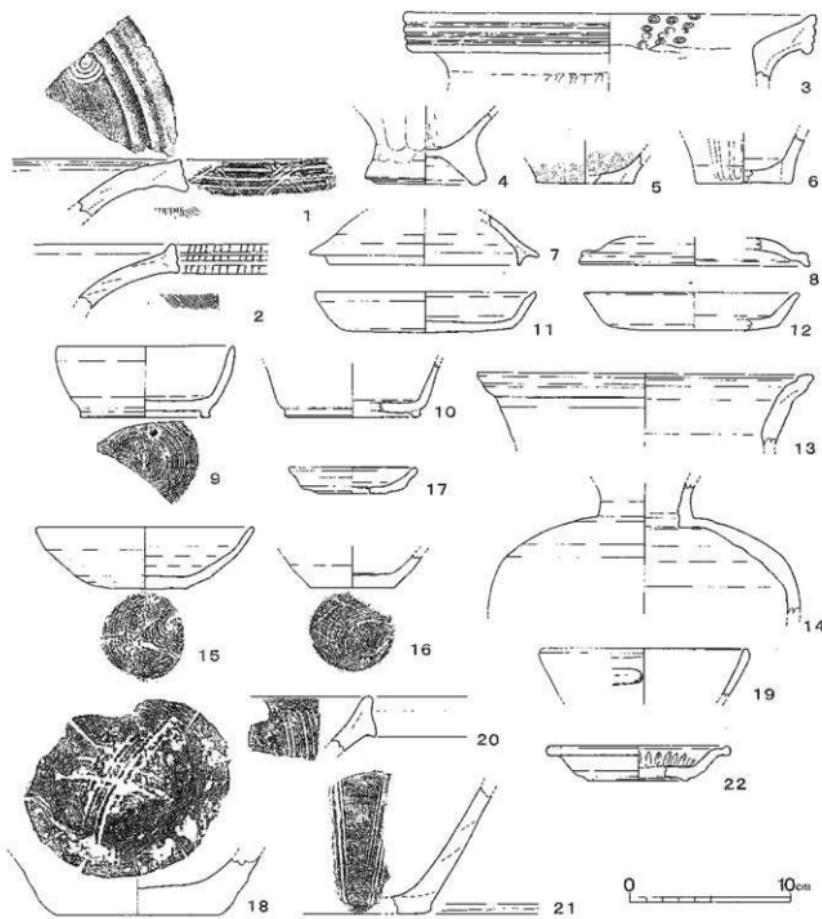
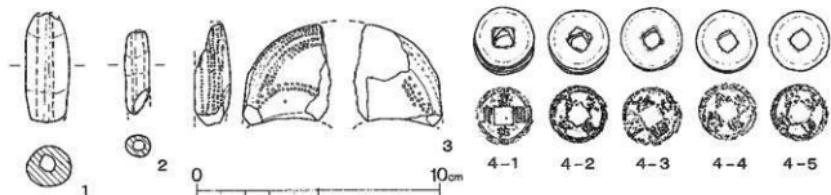
注1 製鉄遺跡研究会代表の穴澤義功氏よりご指摘いただいた。

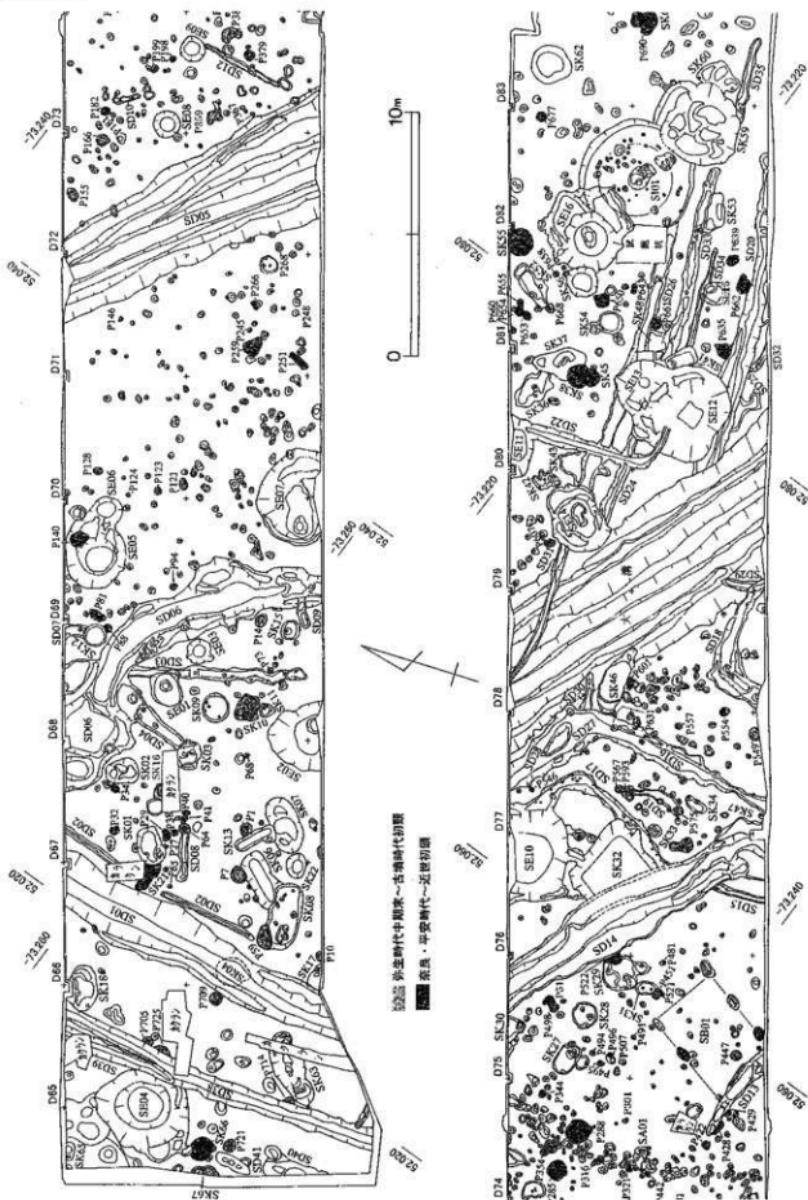
注2 元島根大学教授山中義昭氏に原案を作図頂き、福岡市教育委員会の常松幹雄氏にご教示を受けながら、長崎県教育委員会『原の辻遺跡調査事務所調査報告書 第19集』2000 第36図-320 図1号漆出土土器を参考に復元した。

注3 須玖式土器に関しては、常松氏の他、愛媛大学教授下条信行氏、同助教授田嶋博之氏からもご教授頂いた。

注4 塩町式土器に関しては、広島県立歴史民俗資料館の伊藤実氏にご教授頂いた。

注5 土層の判断は中村唯史氏からご教示頂き、確認した。

D96図 遺構外出土遺物実測図1 ($S=\frac{1}{2}$)D97図 遺構外出土遺物実測図2 及び古銭拓影 ($S=\frac{1}{2}$)



D98図 D区柱穴時期別実測図

E区の調査結果

E区の調査結果

E区の調査概要（第2図、E01・E02図）

E区は下古志遺跡の中央やや南東寄りに位置する長さ97mにわたる調査区である。工事の予定幅は12mであったが、調査区壁の崩壊を考慮し調査区幅は10mにとどめた。また、D100-B103ライン付近は民家への進入路確保の必要があり調査が困難な箇所であった。この範囲は地山面が砂地であるため、遺構の残存状態が悪く、かつ、遺構の密度も小さい箇所であったため本調査のまま調査を終了している。

E区の調査期間については、まず、平成8年(1996)9月に表土掘削工事などの調査準備を行い、同年の10月から本格的に発掘調査を開始して、平成9年(1997)3月にすべての調査を終了している。

調査にあたっては、表土から20cm～30cmまでの土を重機によって取り払った。これはE区が調査前に畑として利用されていた土地であり、表土は既に耕作による攪乱を受けていたためである。この後、D区の基準杭ラインの延長線上に、D区から継続する5m×5mの間隔で基準杭を3列設置して、各杭に他の調査区にも関連する連番の名称を与えた。この結果、E区の基準杭はB85～B105、C85～C105、D85～D105となっている。また、グリッドの名称についてはその南角に位置する杭の名称を与えている。

調査を進めるにあたっては、基本的にグリッドの数値が小さなものから大きなものへと、手掘りによって徐々に土を剥ぎ取りながら進めていった。その結果、標高8.55m～9.10m付近で地山面に到達し、この面で遺構が確認されたため、精査を行い個別に遺構の調査にあたった。

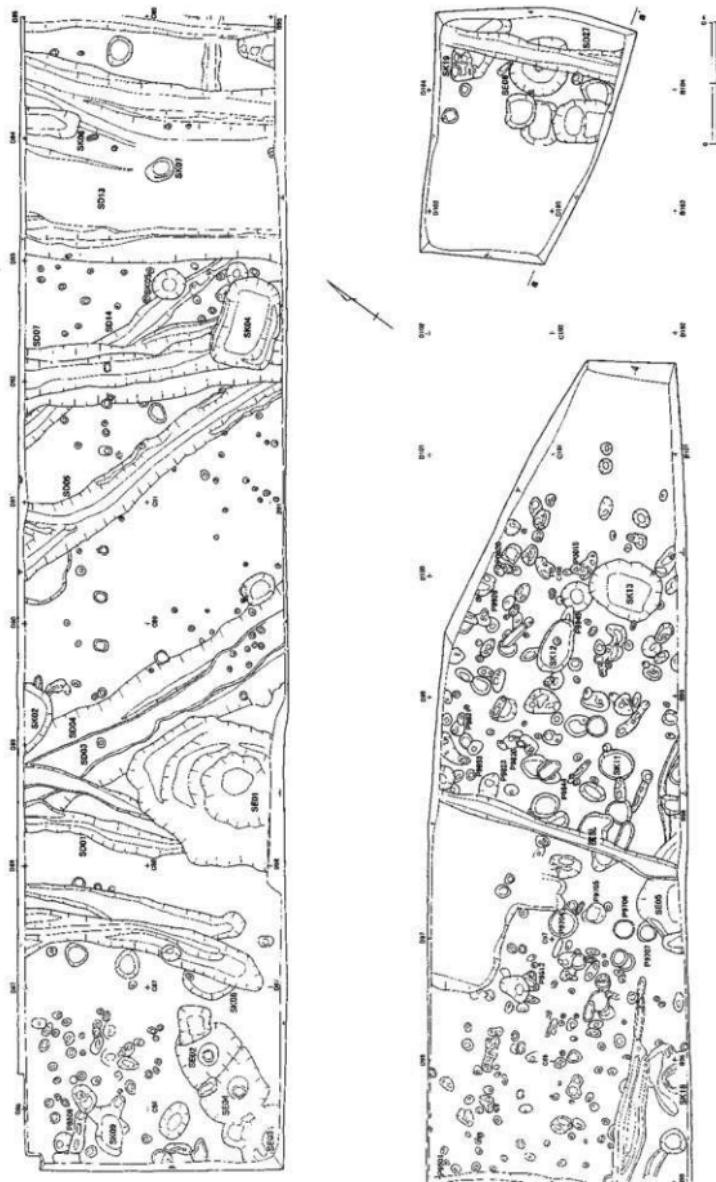
E区の遺構と遺物

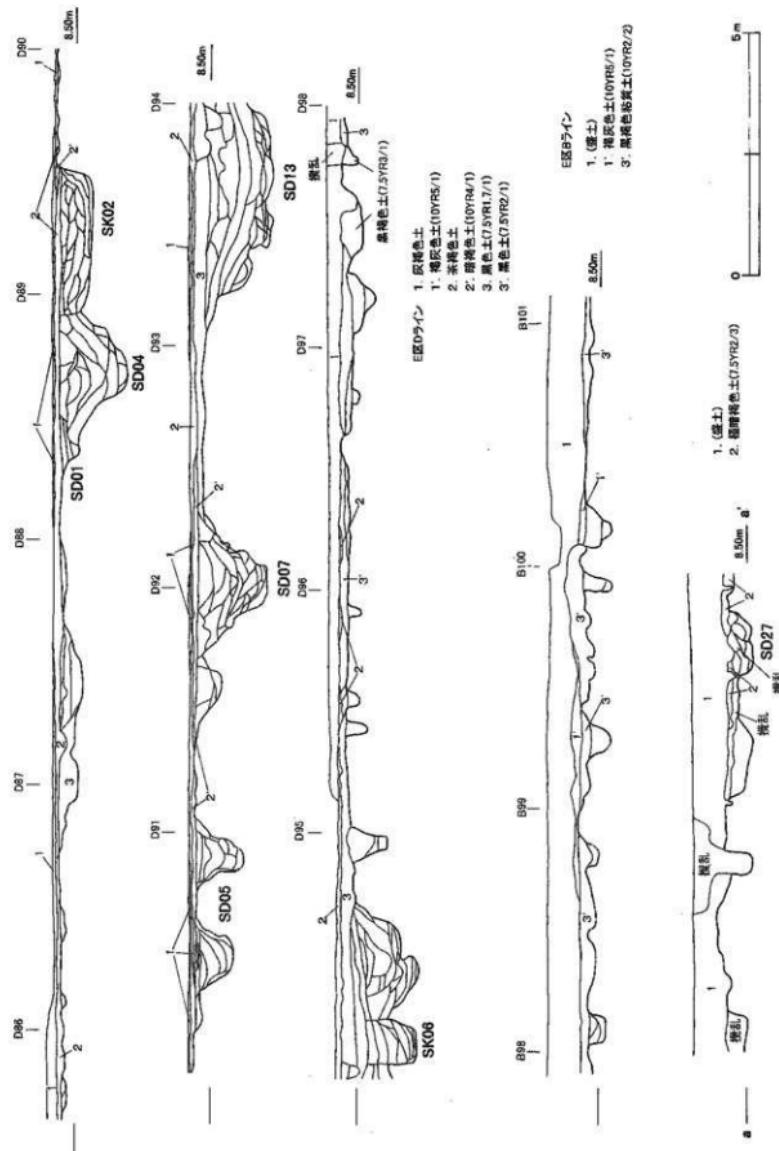
地山面で遺構検出を行ったところ、多数の遺構が検出された。地山面には土と砂地の箇所が認められた。砂地の箇所は85Grから88Gr付近、90Gr付近、95Grから104Grであり、遺構の残存状態は、当然、土の地山面と比較するとやや悪かった。また、100Grから103Grにかけては他のグリッドと比較し、遺構の密度がやや小さくなっている。

検出した遺構の種類は、井戸跡、土坑、ピット、溝状遺構などである。これらのうち良好な出土遺物があった遺構を中心に、以下、個別に報告する。

杭名称	X座標	Y座標	杭名称	X座標	Y座標
B86	-73210.099	52103.519	B98	-73174.470	52151.796
C86	-73206.076	52100.550	C98	-73170.447	52148.827
D86	-73202.053	52097.581	D98	-73166.424	52145.858
B90	-73198.223	52119.611	B102	-73162.594	52167.888
C90	-73194.200	52116.642	C102	-73158.371	52164.919
D90	-73190.177	52113.673	D102	-73154.548	52161.950
B94	-73186.347	52135.703	B104	-73156.656	52175.934
C94	-73182.324	52132.734	C104	-73152.633	52172.965
D94	-73178.301	52129.765	D104	-73148.610	52169.996

第2表 E区主要基準杭座標一覧表

E01図 E区遺構配置図 ($S=1/200$)



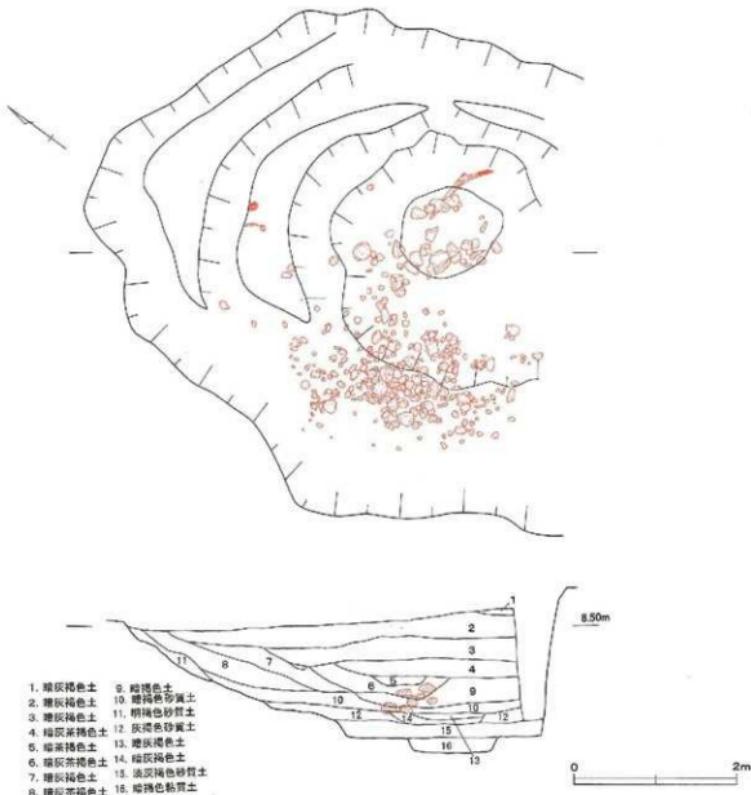
E02図 E区D・Bラインセクション図 (S=1/100)

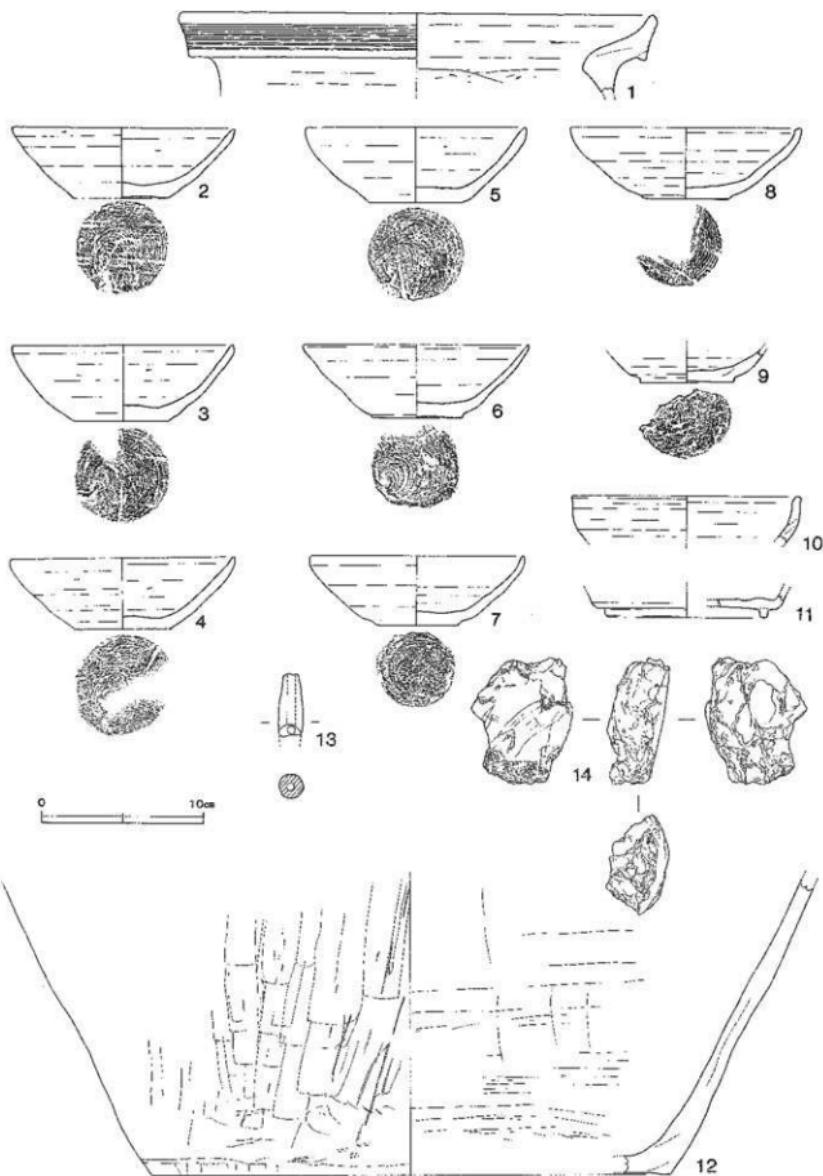
井戸跡等

SE01 (E03～E07図)

B88Grの標高8.58mの地山面においてSE01を検出した。遺構の一部が調査区外に及んでいるが、平面形はN-19°-Wに長軸を有する不整な楕円形を呈するものと思われる。検出規模は長径566cm以上、短径604cm、深さ165cmを測る。側壁の立ち上がりは比較的緩やかで、北西には段を2段有している。検出面では径6m規模の広がりをみせていたこの遺構は、標高6.93mの底では径110cm程度の円形におさまっている。

この遺構の覆土は16層に分層可能であり、主に中層以上で遺物が出土した。出土遺物の量は全体でビニール1袋分と多くはない。内訳は弥生土器、土師器、須恵器、中世土師器、陶磁器、土製品、石

E03図 SE01実測図 ($S=1/60$)



E04図 SE01出土土器等実測図 ($S=\frac{1}{6}$)

製品、木製品、鉄製品などであり、中世土師器の占める割合が高い。これら出土遺物のうち残存状態の良いものだけを図示した。

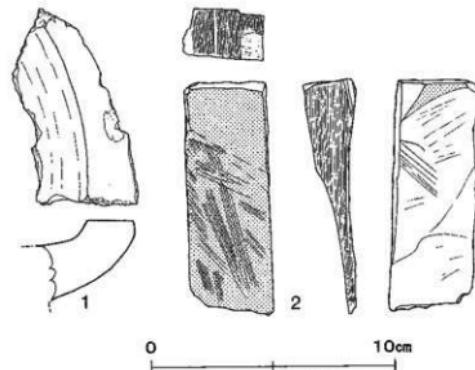
E04-1～E04-14には土器、土製品などを取り上げた。E04-1など弥生土器片も僅かに混ざって出土するものの、中核となる遺物はE04-2～E04-9に示す12世紀頃の中世土師器の壊であり、それ以外にはE04-13の管状土錘、E04-14の輪の羽口が出土している。

続いて石製品を示した。E05-1は石臼と思われるが小片であり定かではない。E05-2は砥石である。2面に研磨面が認められ、うち1面はかなり使い込まれており磨滅が激しい。

E06-1には木製品を示した。小片であるが、楕の口縁部付近の破片と考えられる。全面に漆が塗られており、橙色の顔料で描かれた筒の葉状の文様が確認できる。

次に金属製品と思われるものを示した。E07-1は長さ21.0cmを測り断面は円形あるいは楕円形を呈している。中央を境に断面の径が大きく変わるのが特徴である。E07-2は長さ8.6cmを測り、一部が欠損していると考えられ、断面は楕円形を呈している。いずれも全面が鏽で覆われているため、本来の形態や用途は不明である。

出土した中世土師器の時期から判断し、この遺構の廃絶時期は12世紀頃と考えられる。遺構の性格としては底から水が湧くことから、井戸あるいは溜池として利用されていたと推定される。また、覆土からは5cm～20cm大の礫も多数出土しているため、本來、一部に石が組まれていた可能性もある。



E05図 SE01出土石製品実測図 ($S=1/2$)



E06図 SE01出土木製品
実測図 ($S=1/3$)

E07図 SE01出土金属製品実測図 ($S=1/2$)

SE02～SE04 (E08～E10図)

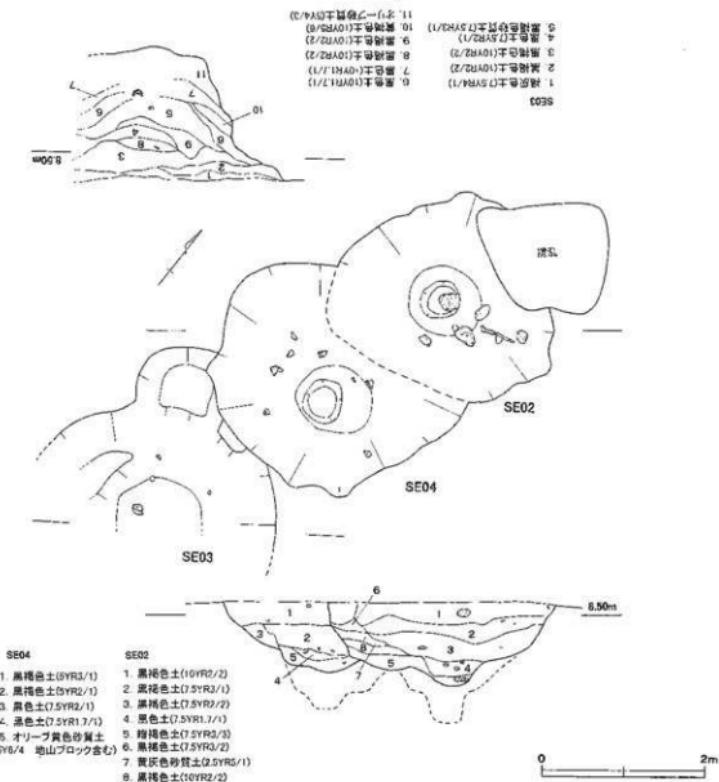
B85GrからB86Grの標高8.65m～8.90mの地山面において、切り合い関係にあるSE02、SE03、SE04を検出した。遺構検出時には不明瞭であったが、断面の観察からSE02がSE04を、SE04がSE03を切っている。よって、SE02が最も新しく、SE03が最も古い遺構と推定できる。

SE02は一部に搅乱を受けているが、不整な円形の平面形を呈していたと考えられる。検出規模は径260cm程度、深さ150cmを測り、底の標高は7.18mである。

SE03は調査区隅での検出であったため一部の検出にとどまったが、径320cm程度の円形の平面形を呈していたと推定でき、深さの実測値は164cmで底の標高は7.17mである。

SE04はSE02によって搅乱を受けているが、径300cm規模の円形の平面形を呈すると考えられ、深さの実測値は132cmで底の標高は7.35mである。

いずれも井戸跡と考えられるが、地下壁面の施設は確認できなかったため、素掘りであったと思わ

E08図 SE02～SE04実測図 ($S=1/50$)

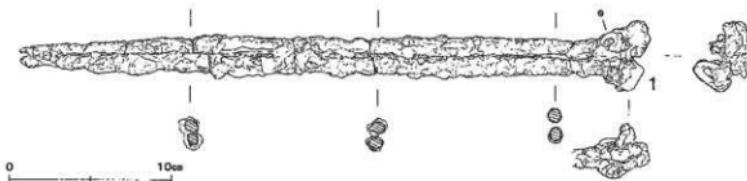
れる。しかし、SE02では30cm大の礫が数点出土しているため、石組の井戸側を有していた可能性もある。なお、SE02とSE04では底において、径50cm程度を測る円形の水溜と思われる落ち込みが確認されている。

各遺構からの出土遺物は少なく、全部まとめてビニール袋半分程度であった。

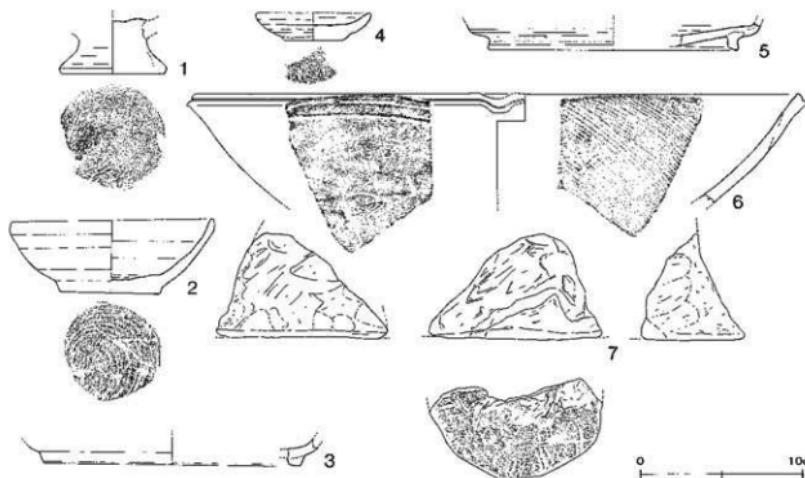
SE02からは須恵器や中世土師器の小片が出土するほか、E09-1に示す鉄製品が出土した。火箸と考えられ長さは38.9cmを測る。全面を鏽で覆われているが、端部には二本の箸をつないでいたと思われる環状の鎖が認められる。

SE03からは須恵器や中世土師器の破片が出土しており、残存状態の良いものをE10-1～E10-3に示した。E10-1・E10-2は中世土師器であり、前者は高台付皿の高台部、後者はほぼ完形に復元できた坏である。いずれも12世紀頃のものと考えられる。E10-3は須恵器であり、低い高台を有する坏あるいは皿の破片である。8世紀前半から9世紀末の所産と思われる。

SE04からは須恵器や中世土師器などの破片が出土しており、実測可能なものをE10-4～E10-7に示し



E09図 SE02出土火箸実測図 (S=1/2)



E10図 SE03・SE04出土土器等実測図 (S=1/2)

た。E10-4は中世土師器の小皿である。E10-5は須恵器であり、底面外縁やや内寄りに低い高台を有する皿と思われる。また、E10-6は瓦質の擂鉢であり、E10-7は土製支脚の脚部片である。

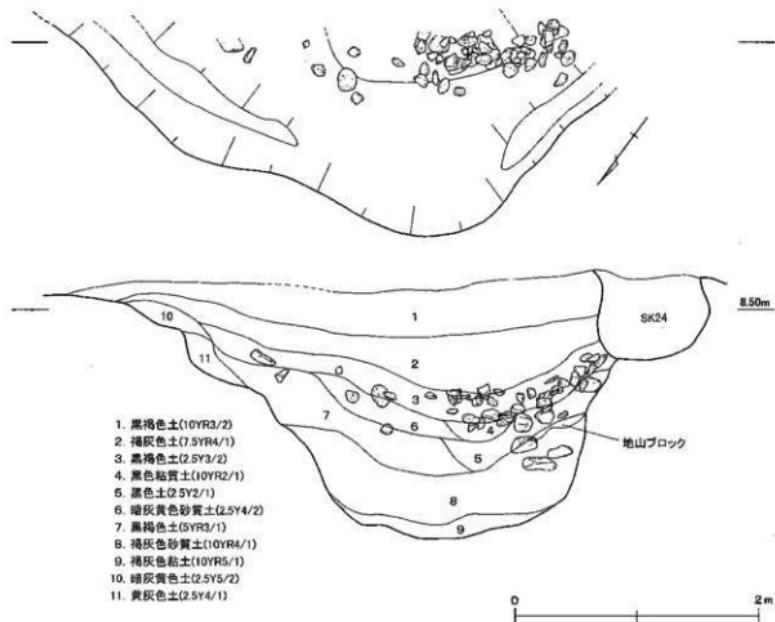
各遺構の出土遺物の中核期はいずれも12世紀から13世紀頃と考えられることから、これらの遺構はSE03、SE04、SE02の順に、比較的近い時期に連続的に築かれては廃棄されたものと思われる。

SE05 (E11・E12図)

B97Grの調査区Bライン際標高8.77mの調査面においてSE05を検出した。ごく一部の検出にとどまつたため全容は不明であるが、長さは450cm以上を測る比較的大きな遺構である。底が一部検出できたことから、深さについては215cmという実測値が得られている。検出した範囲での側壁の立ち上がりは、上方に向かうにつれ傾斜が緩やかになっている。

覆土は11層に分層可能で、ここから僅かに須恵器、中世土師器、陶磁器の破片が出土しているが、いずれも小片であり実測に堪えないものであった。第3層から第8層にかけて5cm～25cm大の砾が出上しており、この中にE12-1に示す石製品が混入していた。砥石と考えられ1面に複数の条溝が残っている。

遺構の性格としては素掘りの井戸が考えられるが、砾も比較的多く出土していることから石組の井戸側を有するものであった可能性も残す。遺構の時期については出土遺物から中世と思われる。



E11図 SE05実測図 (S=1/40)

SK18 (E13~E17図)

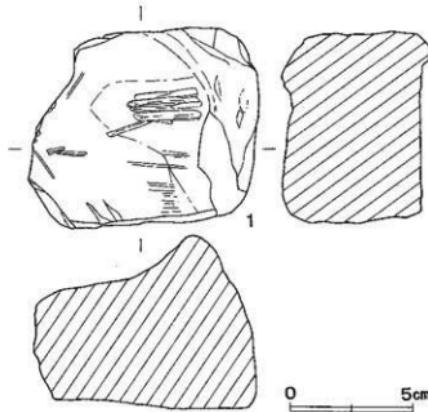
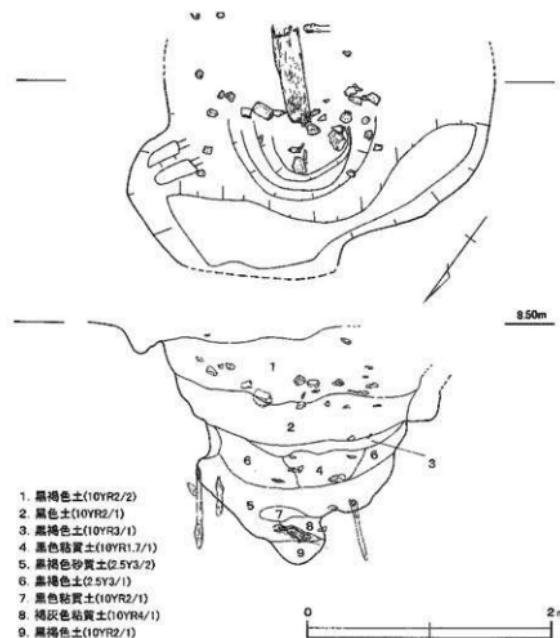
B95GrのBライン際標高8.46mの調査面においてSK18を検出した。遺構の約半分は調査区外に続いているため部分的な調査にとどまったが、平面形は径270cm程度の円形を呈するものと思われる。また、深さは200cmを測り、底の標高は6.46mである。さらに、底付近には杭や板材が検出できることから、この遺構は板組の井戸側を有する井戸であったと推定できる。

覆土は9層に分層可能であり、ここから中世土師器、須恵器、陶磁器などがあわせてビニール袋半分程度出土したほか、石製品や木製品も出土している。

E14-1~E14-8には中世土師器、陶磁器を示した。E14-8は第2層から出土した美濃焼の天目茶碗であり、遺構の廃棄時期を示すと思われる。

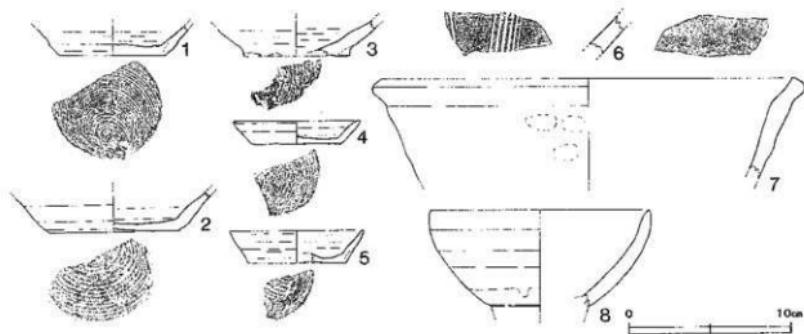
統いて石製品を取り上げた。E15-1は皿状容器と思われる。内外面が研磨されて成形されており、内面は特に滑らかに仕上げられている。E15-2は砥石である。直方体の石材の3面に研磨面が残っている。E16-1は3面に研磨面を残しており、うち1面は磨られて凹んでいるため、凹石を砥石に転用した可能性がある。

次に木製品を示した。E17-1は両端が欠損しているが杭状に加工されているため、井戸側の隅柱として用いられたものと考えられる。E17-2は板状に加工された部材であり、井戸側の横板として用いられ

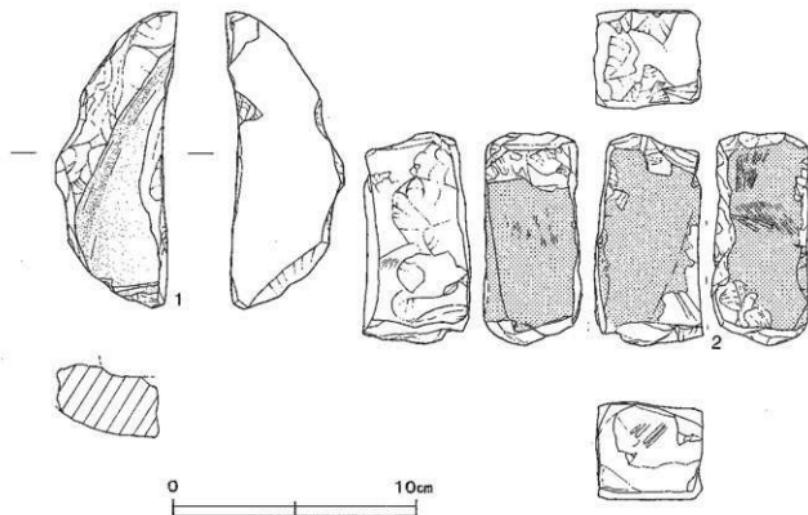
E12図 SE05出土砥石実測図 ($S=1/2$)E13図 SK18実測図 ($S=1/2$)

たものであろう。なお、この部材は調査区Bライン壁に突き刺さった状態で出土したものと、調査時に切り取って持ち帰ったものである。

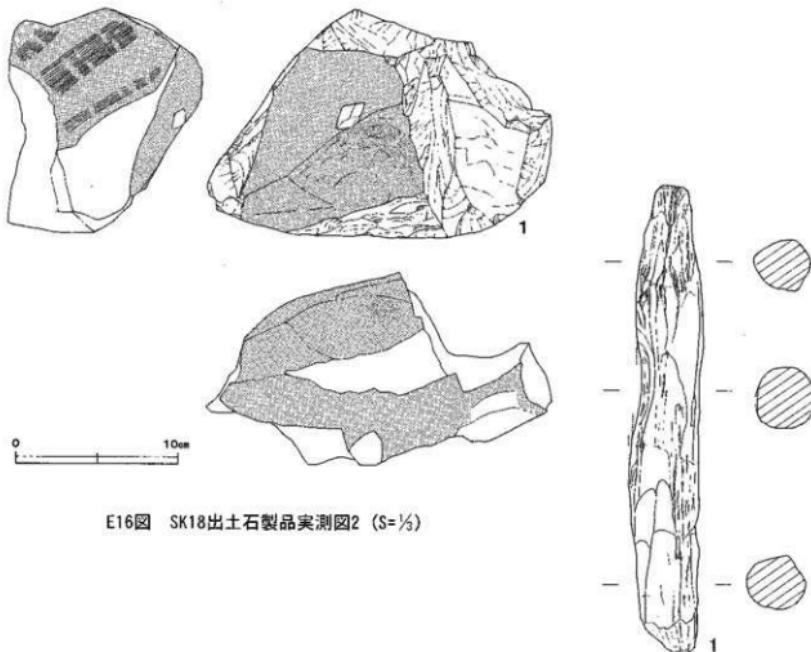
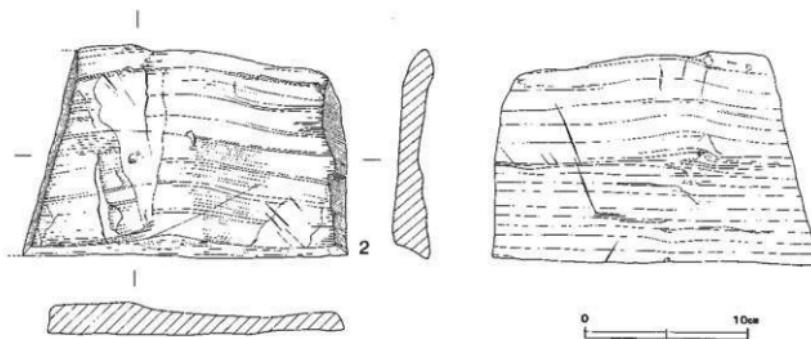
出土した木製品から、この井戸は横板隅柱どめの井戸側を有していたと推定される。また、時期についてはE14-8から勘案し16世紀頃に廃棄されたものと考えられる。

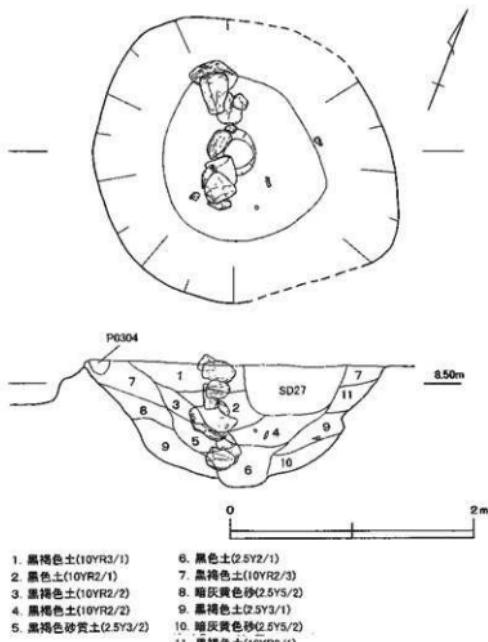


E14図 SK18出土中世土師器等実測図 ($S=\frac{1}{2}$)

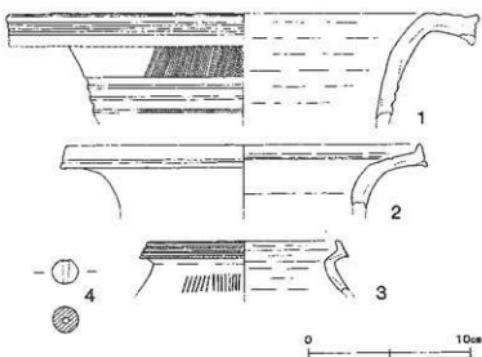


E15図 SK18出土石製品実測図1 ($S=\frac{1}{2}$)

E16図 SK18出土石製品実測図2 ($S=\frac{1}{3}$)E17図 SK18出土木製品実測図 ($S=\frac{1}{3}$)



E18図 SE06実測図 (S=%)



E19図 SE06出土弥生土器実測図 (S=%)

土坑

SE06 (E18・E19図)

B104GrからC104Grの標高8.73mの調査面において、SD27に切られた状態でSE06を検出した。平面形は円形を呈し、検出規模は径250cm程度、深さ110cmを測り、最下底の標高は7.63mである。底は丸く、中央には径32cm、深さ7cmのピット状の落ち込みが認められる。また、側壁は底から上端に向かい若干開いて立ち上がっている。

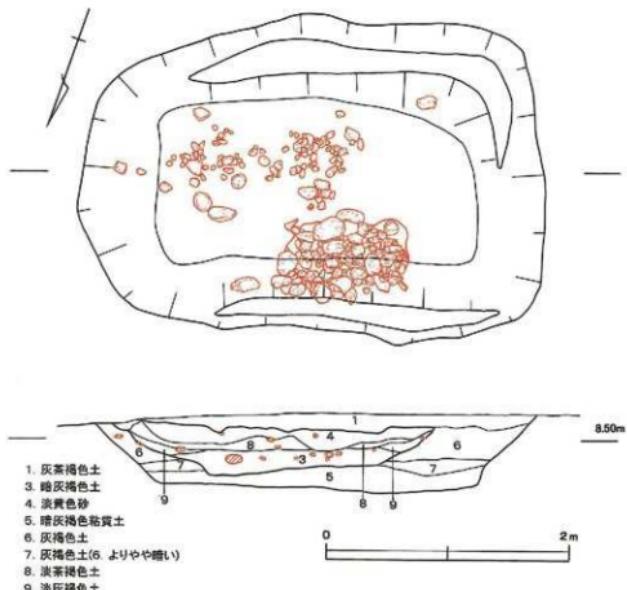
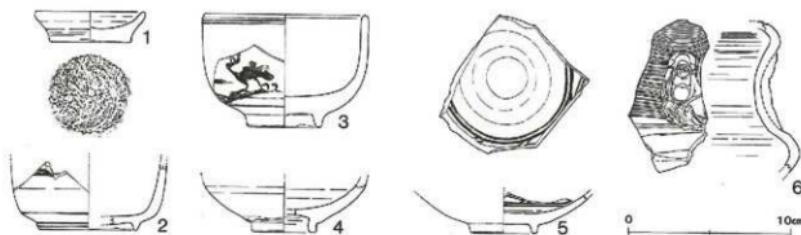
断面を観察すると覆土が11層確認できた。この覆土からは、10cm～35cm大の礫のほか、弥生土器を主とする土器片がビニール袋半分崩出土している。このうち実測可能なものを図示した。E19-1～E19-3は弥生中期の壺と甕である。E19-4は土玉であり、長径3mm、短径2mmの楕円の孔を穿っている。

図示しなかった遺物の中には須恵器や中世土器の小片が数点認められるが、これらは遺構覆土の上層からの出土であり、混入品である可能性が高い。これに対して弥生土器片は上層から下層で出土しており、図示遺物以外にも中期後葉と判断できる壺の口縁部片などが数点認められる。よって、この遺構の時期は弥生時代中期後葉と推定できるが、遺構の性格は不明である。

SK04 (E20・E21図)

B92Grの標高8.71mの調査面において、SD16などを切った状態でSK04を検出した。平面形はN-70°-E方向に軸を有する隅丸方形状を呈しているが、遺構の東寄りはやや幅が狭くなっている。完掘後の検出規模は長さ380cm、幅210cm～250cm、深さ64cmである。

覆土は9層確認しているが、第1層を取り払った際、中央北寄りで4cm～28cm大の碟が集中していた。この時点での掘り方は明確には確認できなかったが、主軸に沿った断面を観察するとSK04の内部に落ち込みが確認できた。この落ち込みの覆土は第4層、第8層、第9層、第3層であり、碟が集中していたの

E20図 SK04実測図 ($S=1/40$)E21図 SK04出土陶磁器等実測図 ($S=1/4$)

は第4層である。礫の狭間には近世以降の陶磁器などが少量出土しており、状態の良いものを選別し図示した。

E21-1は十師質土器の小皿である。口縁部に煤の付着が認められる。E21-2は伊万里焼の碗であり、底部や高台の外面に染付が認められる。E21-3は肥前系の碗である。体部外面に松が描かれている。E21-4は18世紀から19世紀頃の碗と思われる。E21-5は伊万里焼の皿である。底部付近の内面に円圧文などが認められる。E21-6は備前焼の徳利と思われる。近世から近代にかけての所産であろう。これらの出土遺物はこの落ち込みの時期を示すと考えられる。また、第3層からは細かく碎けた骨が出土

していたためこの落ち込みは墓穴と考えられる。この落ち込みの外側の第5層～第7層からは土師器などの遺物が出土しているほか、第5層からは松毬、葉、木片なども出土している。

SK04とこの内部の落ち込みが別々の遺構とは考えにくいことから、おそらく両者でひとつの墓を形成していたものと思われ、落ち込みは墓の内部構造を示すと思われる。

SK05 (E22・E23図)

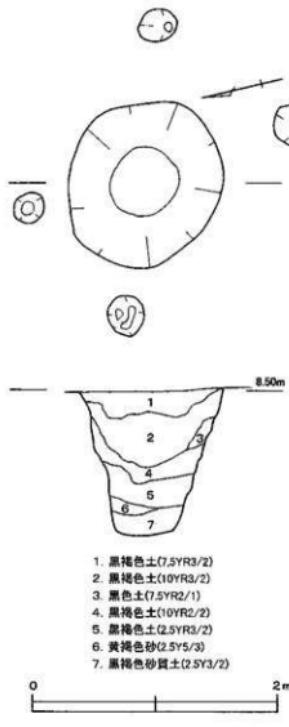
SK05はB92Grの標高8.50mの調査面において、SD14を切った状態で検出した。平面形は径128cmの円形を呈しており、深さは118cmを測る比較的深い上坑である。また、坑底は平坦で側壁の立ち上がりは急である。

7層に分層可能な覆土からは、中世土師器の小片が数点出土しており、実測に堪えるものをE23-1に示した。これは小皿であり遺構の時期を示す可能性がある。

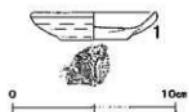
遺構の性格については、第1層から第5層までの土で脂質が混ざったような感触が得られたため、当初、墓坑と思われたが、径がやや小さいことからその可能性は低いであろう。また、SK05を長方形に囲むように径30cm、深さ20cm規模のピットが4基認められるが、出土遺物もないため関連するものかどうかは不明である。

SK06 (E24図)

C94GrのDライン際標高8.28mの調査面において、SD13を切った状態でSK06を検出した。遺構の一部が調査区外に伸びているため部分的な検出にとどまったが、検出した範囲では長さ208cm以上、幅116cm、深さ104cmを測り、N-32°-W方向に長軸を有する遺構であると思われる。また、底は平坦であり側壁の立ち上がりは急である。



E22図 SK05実測図 (S=1/40)



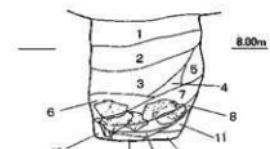
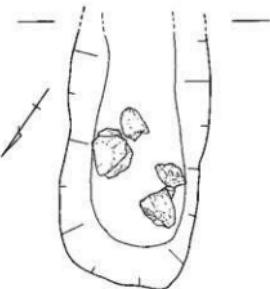
E23図 SK05出土中世土師器実測図 (S=1/40)

覆土は13層確認でき、ここから土師器片が数点出土しているが、いずれもごく小片であり器種や時期などは不明である。また、底付近の第6層以下からは15cm～35cm大の角礫が出土しているが、いずれも自然石である。これらの礫は遺構に伴うものであるが、遺構の性格や時期が不明であるため、どのように関わっていたかは分からぬ。

SK09 (E25～E29図)

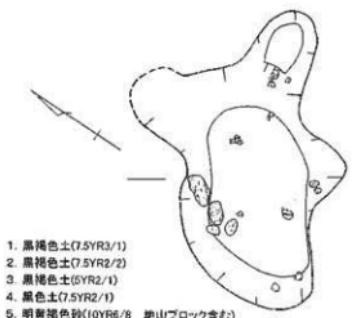
C85GrからC86Grにかけての標高8.70mの調査面においてSK09を検出した。地山が砂地であり上端の一部が崩壊したためか、検出時の平面形はいびつであった。また、他の遺構や現在の擾乱によって遺構の一部は破壊されているが、検出規模は長さ210cm程度、幅120cm程度、深さ66cmを測り、長軸をN-48°-E方向に有していることは確認できた。坑底の平面形については不整な楕円形を呈しており、長径140cm、短径80cmを測る規模である。側壁の立ち上がりについては、平坦な底面から上端にかけて垂直に近い急な勾配で立ち上がっている様子が確認できた。

覆土については5層を確認している。この覆土からは15cm

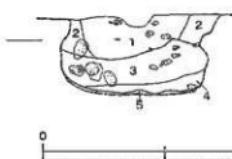


- | | |
|----------------------|---------------------|
| 1. 黒褐色粘質土(7SYR2/1) | 8. 黑色粘質土(10YR1.7/1) |
| 2. 黑色粘質土(7YR2/1) | 9. 黑色粘質土(10Y1.7/1) |
| 3. 黑色粘質土(7.5YR2/1) | 10. 黑色粘土(10YR1.7/1) |
| 4. 黑色粘質土(7.5YR1.7/1) | 11. 黑色粘土(10YR1.7/1) |
| 5. 黑色粘質土(7.5YR2/1) | 12. 黑色粘土(10YR1.7/1) |
| 6. 黑色粘質土(7SYR1.7/1) | 13. 黑色粘土(10YR1.7/1) |
| 7. 黑色粘質土(10YR1.7/1) | |

E24図 SK06実測図 (S=1/100)

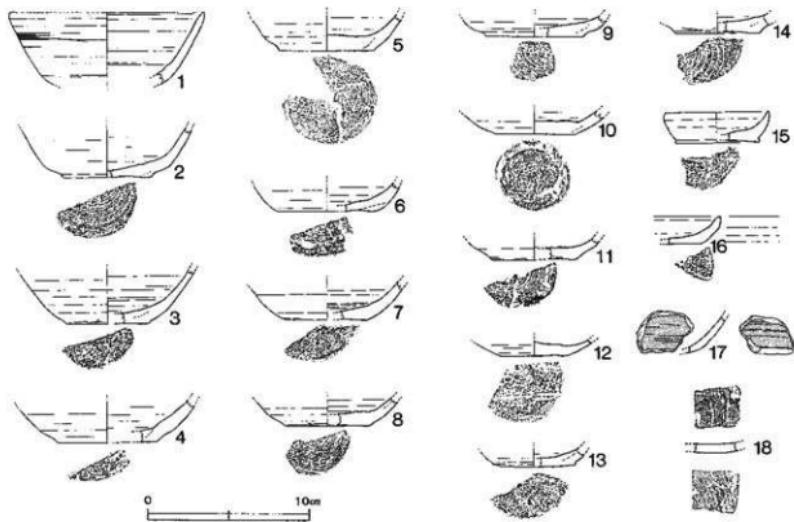


1. 黑褐色土(7SYR3/1)
2. 黑褐色土(7.5YR2/2)
3. 黑褐色土(5YR2/1)
4. 黑色土(7.5YR2/1)
5. 明黄褐色砂(10YR6/8 地山ブロック含む)



E25図 SK09実測図 (S=1/100)

大の礫のほか、中世土師器の壊や小皿のものと考えられる小片がビニール袋2袋分程度出土しており、遺構の規模を勘案すると比較的多い出土量となっている。しかし、1cm～3cm大のものが大半を占めているため実測に堪えるものは少なく、E26-1～E26-18に示した18点を数えるに過ぎない。これらは底部には回転糸切り痕が残るものが多く、側壁は底部でやや絞られているものも認められる。また、ほとんど体部から口縁部を欠いているが、他の体部や口縁部の破片から推測すると、内湾気味に立ち上がると思われる。これらは13世紀前後の所産と考えられ、

E26図 SK09出土中世土師器等実測図 ($S=1/2$)

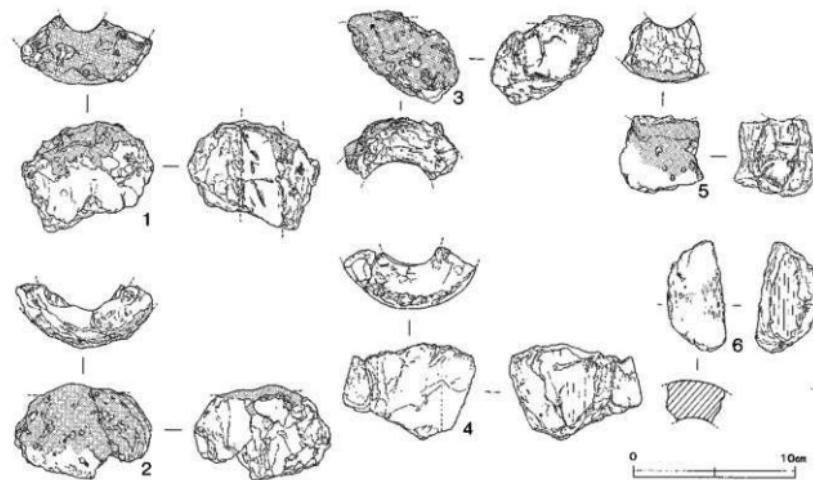
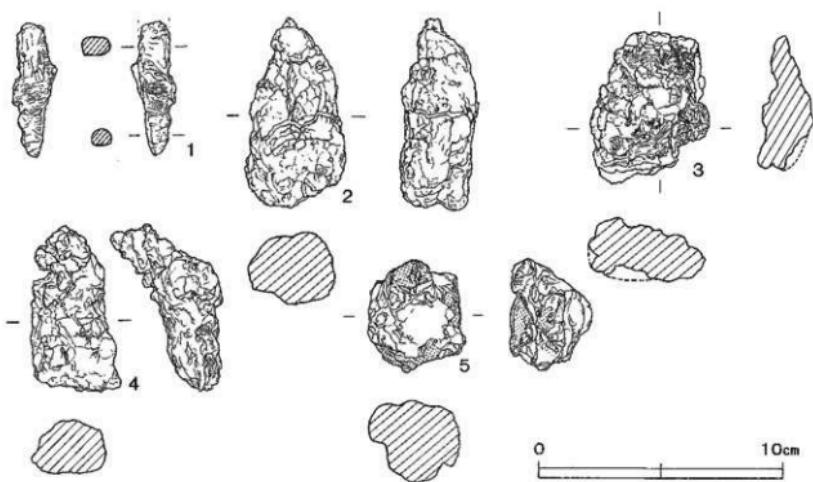
遺構の時期を示すと考えられる。

また、このSK09からは大鍛冶に関係する遺物も出土しており、これらをE27-1～E29-2に示した。

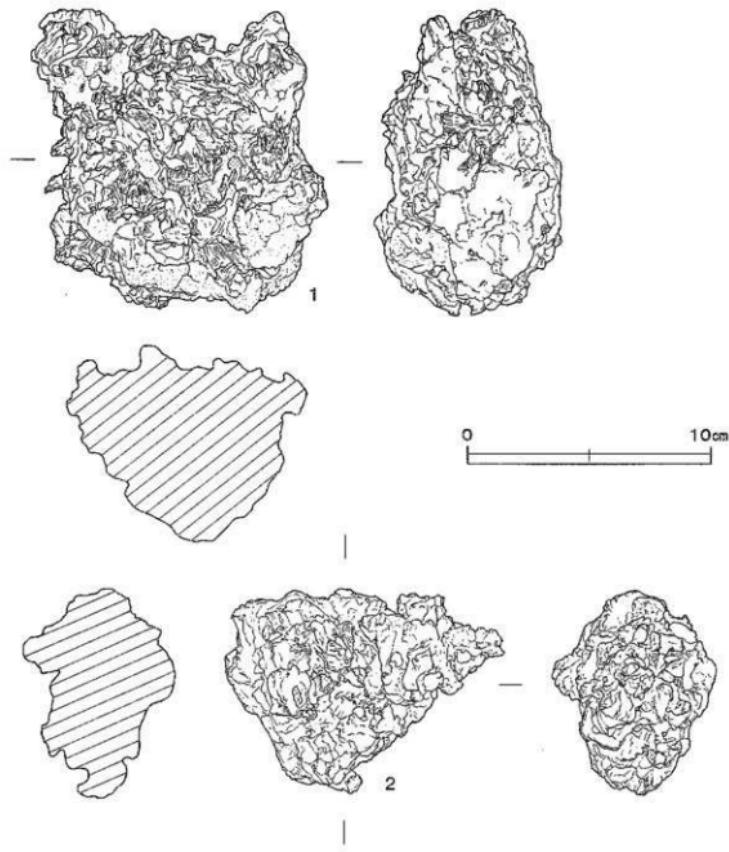
E27-1～E27-6には補の羽口を示した。羽口先端部付近から中程にかけてのものが認められ、先端部付近のものはいずれも表面が溶解しガラス質に変化している。

E28-1は唯一出土した鉄製品である。小型の着柄彫具と思われるが判然としない。茎部分と想定される箇所には木の繊維質の痕跡が残っている。E28-2は鉄塊である。錆化が著しく重さは114gを計るものである。E28-3は含鉄炉底塊と思われる。重さは93gを計り錆化が著しい。E28-4は鉄滓である。重さは52gでやはり錆化が著しい。E28-5は羽口先端の付属物と思われる。色彩は黒色を呈しガラス質である。羽口の先端部分に付着していたものがはがれ落ちたものと思われる。E29-1は重さ610gを計る炉底塊である。表面には木炭の嗜み込みも観察できる。E29-2は炉内滓と思われる。重さは200gを計り、一部に木炭の嗜み込みが認められる。また、各層のサンプル土を篩いにかけた結果、第5層を除く第1層から第4層で鍛造剝片と粒状滓が検出された。

これらの出土遺物から、SK09は大鍛冶に関係する遺構であると思われる。しかし、SK09の側壁や底には特に熱を受けたと思われる箇所は見あたらなかった。したがって、SK09が炉であった可能性は低いと思われる。中世土師器の小片が各土層から満遍なく多数出土すると同時に、比較的小さな羽口片、鉄滓、微細な鍛造剝片などが出土することから、SK09は鍛冶場あるいは鍛冶場付近の床面を掃除などで浚った際に生じた土を埋めるために築かれた廃棄坑ではないかと思われる。また、時期については出土した中世土師器から13世紀前後と推定される。

E27図 SK09出土羽口実測図 ($S=\frac{1}{3}$)E28図 SK09出土鉄滓等実測図 ($S=\frac{1}{2}$)

なお、このSK09から約15m離れたD区のB82GrからB83Grにかけては、碗形鍛冶溝(D29-15)およびSK09と同時期頃の土器片を出土する廃棄坑と考えられるSK59が存在する。これらの事実は付近に大鍛冶が存在する可能性を示唆する。



E29図 SK09出土鉄滓実測図 ($S=1/2$)

P9706 • P9707 (E30)

B97Grの標高8.61mの地山面でP9706とP9707を検出した。検出時には柱穴として捉えたが、土坑として報告する。両者はN-30°-W方向に並んでおり、距離は17cmしか隔てていない。また、いずれも径80cm程度の円形の平面形を呈しているなど、検出時には類似点も多かった。しかし、覆土を掘削してみると、P9706は底から桶の底と考えられる円盤の板材が検出できたが、P9707には認められなかった。また、深さはP9706が28cmであるのに対し、P9707は16cmとやや浅かった。

出土遺物は僅かで、P9706から中世土師器の小片が数点出土するに過ぎず、P9707からの出土遺物は

その他の主要土坑（E31～E36図）

SK02はC89GrのDライン際標高8.81mの調査面において、SD04など他の遺構を切った状態で検出した。遺構の半分以上が調査区外に及んでおり部分的な調査にとどまったため、平面形や規模など不明な点を多く残す結果となったが、深さ65cmを測るしっかりとした遺構である。また、底は平坦で側壁の立ち上がりは急である。

調査区Dラインで断面を観察すると19層の覆土が確認できた。しかし、ここからの出土遺物はごく僅かの土師器の小片であるため、造営の時期や性格などの詳細は不明である。

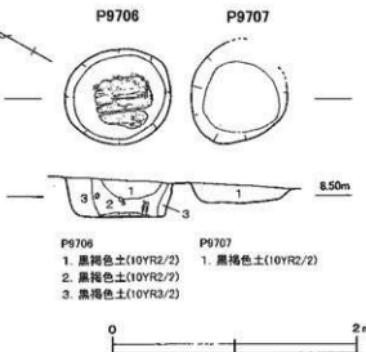
SK07はB93Grの標高8.13mの調査面においてSD13を切った状態で検出した。検出面ではいびつな構造の平面形を呈しており、検出規模は長径119cm、短径88cm、深さ114cmを測る。また、底面は平坦で側壁の立ち上がりは急である。

覆土は6層に分層可能で、ここから数点の土師器、須恵器などが出土しており、実測可能なものをE33-1・E33-2に示した。E33-2は擂鉢であり遺構の時期を示すと考えられる。なお、遺構の性格については判然としないが底から水が湧くため、表掘りの井戸である可能性がある。

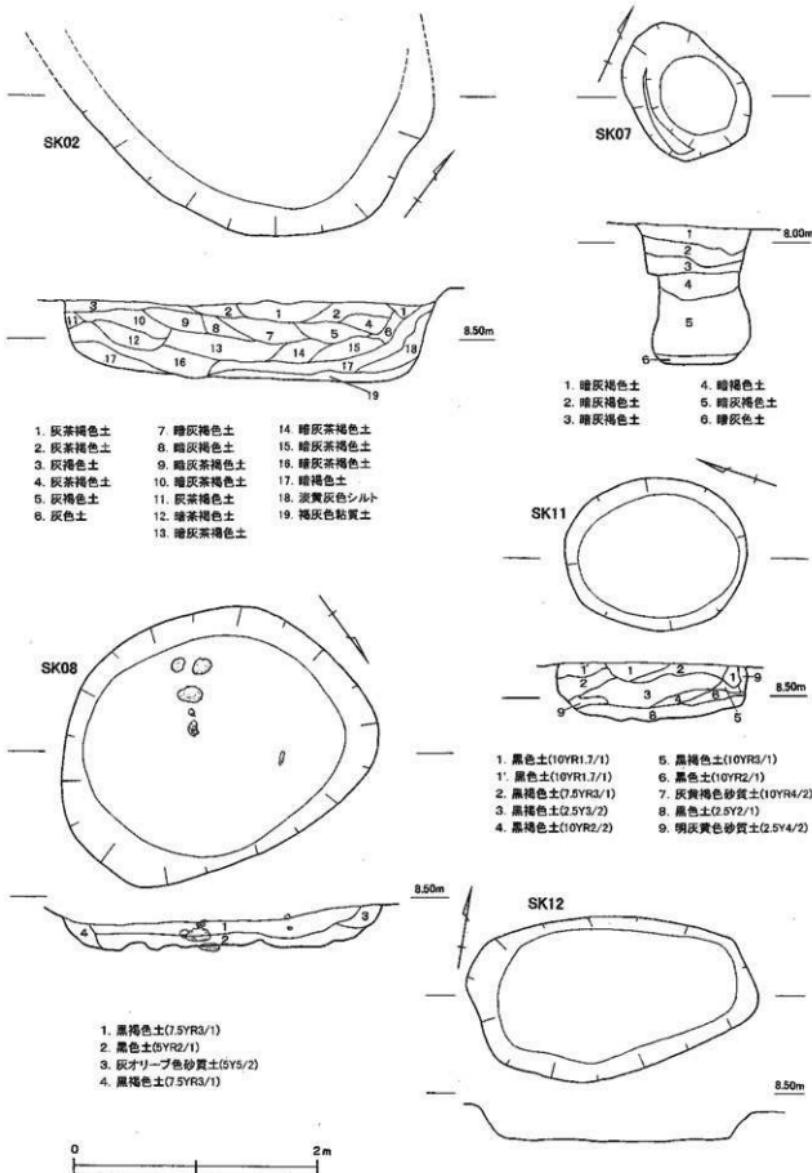
SK08はB87Grの標高8.43mの調査面においてSD20を切った状態で検出した。平面形は不整な楕円形を呈しておりN-84°-W方向に長軸を有している。検出規模は長径258cm、短径207cm、深さ34cmを測り、底(起伏を有)圓状の断面を呈している。

覆土は4層に分層でき、ここから少量の土師器、須恵器、鉄製品が出土している。これらのうち実測に堪えるものをE33-3・E34-1に示した。前者は須恵器の高杯で、後者は楔状の鉄製品である。E33-3は7世紀前半のものと思われるが、土師器の小片の中には回転式切り痕が観察できるものもあるため、遺構の時期は奈良時代以降と推定される。なお、遺構の性格については不明である。

SK11はB98Grの標高8.78mの調査面において、他の遺構に切られた状態で検出した。平面形は比較的整った橢円形を呈しN-20°-W方向に長軸を有している。検出規模は長径148cm、短径126cm、深さ48cm。



E30図 P9706・P9707実測図 ($S=1\%$)

E31図 その他の主要土坑実測図1 ($S=1\%$)

を測る。底は皿状で小さな凹凸を有しており、側壁の立ち上がりは垂直に近い。

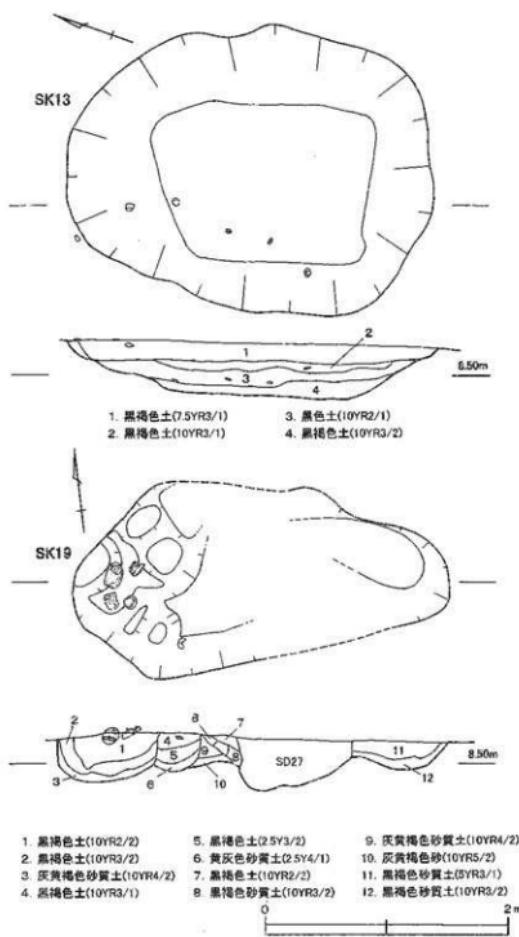
覆土は8層確認できここから少量の中世土師器、陶磁器の破片が出土している。このうち実測可能なものをE33-4に示した。弥生時代終末の鼓形器台の脚部と考えられるが、他に中世土師器も出土しているため遺構の時期は中世以降と推定できる。

SK12はB99GrからC99Grにかけての標高8.36mの調査面において検出した。N-75°-E方向に長軸を有する細長い平面形を呈し、検出規模は長さ228cm、幅130cm程度、深さ39cmを測る。底は概ね平坦で側壁の立ち上がりも比較的緩やかである。

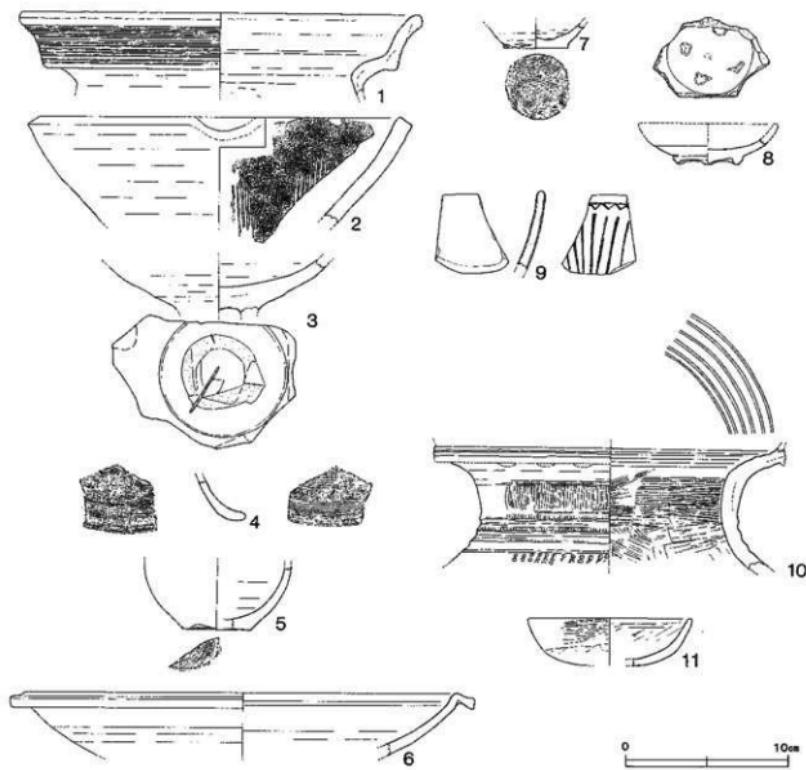
覆土からは少量の土器片のほか、E33-5・E33-6に示す陶磁器が出上した。両者とも近代の所産と考えられ遺構の時期を示すと思われる。なお、遺構の性格については不明である。

SK13はB99GrからB100Grにかけての標高8.77mの調査面において検出した。N-16°-W方向に長軸をとる平面形を呈しており、検出規模は長さ302cm、幅230cm程度、深さ44cmを測る。底は平坦で175cm×130cmの長方形形状を呈しており、側壁の立ち上がりは緩やかである。

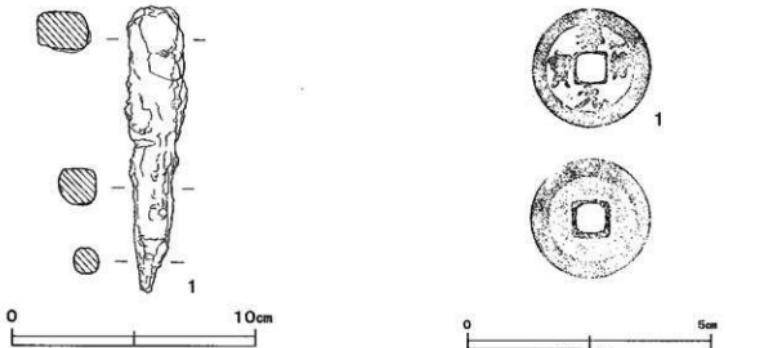
4層に分層可能な覆土からは少量の須恵器、中世土師器、陶磁器の破片及び古錢が出土しており、実測可能なものをE33-7～E33-9、E35-1に示した。E33-8・E33-9の白磁の皿は15世紀代の中国製と考えられることから遺構の時期はこれ以降と推測される。また、E35-1は宋錢で、裏は無文であるが表には「祥符元寶」の字が認められる。



E32図 その他の主要土坑実測図2 ($S=1\%$)



E33図 その他の主要土坑出土土器等実測図 ($S=\frac{1}{2}$)

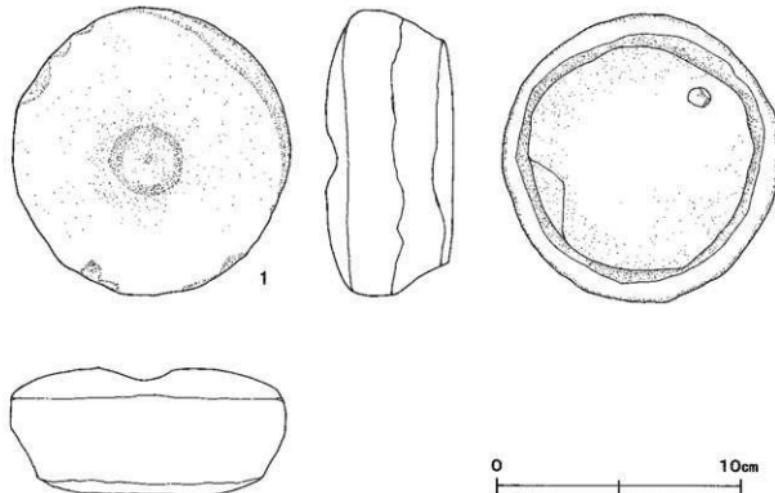


E34図 SK08出土鉄製品実測図 ($S=\frac{1}{2}$)

E35図 SK13出土古銭拓影 ($S=\frac{1}{2}$)

SK19はC104Grの標高8.73mの調査面において、SD27に切られた状態で検出した。調査時はN-85°-Wに長軸を有する、長さ3m程度の細長い土坑として捉えていたが、断面を観察すると数基の土坑が切り合っている様子が認められた。

覆土からは少量の弥生土器、土師器の破片及び石製品が出土しており実測に堪えるもののみをE33-10・E33-11及びE36-1に示した。E33-10は中期後葉の弥生土器であり他の破片も同時期頃のものが多い。E33-11は土師器の皿であるが時期は不明である。E36-1は凹石であり直径11.8cmを測る。表面中央に径3cm範囲に研磨による浅い凹みがあり、裏面も側面が削られ成形されている。



E36図 SK19出土凹石実測図 (S=1/2)

主要ピット (E37~E40図)

P8508はC85Grの標高8.70mの調査面で検出した。N-61°-E方向に細長い平面形を呈しており、検出規模は長さ186cm程度、幅43cm~60cmである。遺構の南西寄りで最も落ち込みこの箇所の深さは82cmを測る。覆土からは僅かに土師器、須恵器の小片が出土しており実測可能なものをE38-1~E38-3に示したが、時期など詳細は不明である。

P9501はC95Grの標高8.64mの地山面で検出した小規模なピットである。平面形は橢円形で、検出規模は長径23cm、短径17cm、深さ14cmを測る。覆土からは土師器片1点のほかにE39-1に示す石臼と考えられる石製品が出土したが、遺構の時期や性格は不明である。

P9612はC96Grの標高8.78mの調査面で検出した。他の遺構に搅乱を受けているため全容は不明であるが、最下底までの深さは31cmである。覆土からは僅かに土師器片が出土したほかに、E40-1に示した環状の鉄製品が出土しているが用途は不明である。

P9704はB97Grの標高8.74mの地山面で検出した。径120cm前後の円形の平面形を呈しており、平坦な底までの深さは30cmを測る。遺物については中世土師器の小片のほかに、E38-4に示す瓦質土器が出上している。中世後期のものと考えられ造構の時期を示すと思われる。

P9705はB97Grの標高8.64mの調査面において、他の造構を切った状態で検出した。不整ではあるが一辺50cm前後の正方形の平面形を呈しており、深さは15cmと浅い。覆土からはE40-2に示す短管の一部が出上しているが時期は不明である。

P9821はC98Grの標高8.69mの調査面において検出した。楕円形の平面形を呈しており、検出規模は長径52cm、短径32cm、深さ33cmを測る。覆土からは須恵器の小片が数点出土しており残存状態の良いものをE38-5に示した。高壙の脚部片と思われるが詳細は不明である。

P9823はC98Grの標高8.74mの調査面で、溝状の擾乱に一部を切られた状態で検出した。N-65°-E方向に長軸を有する不整な楕円形の平面形を呈し、検出規模は長径114cm程度、短径76cm、深さ64cmを測る。底は平坦面を有しており側壁の立ち上がりは比較的緩やかである。覆土からは少量の土師器片のほかにE39-2に示す砥石が出土している。

P9830はC98Grの標高8.74mの調査面において、他の造構に切られた状態で検出した。N-41°-W方向に長軸をとる楕円形の平面形を呈すると思われ、検出規模は長径68cm程度、短径50cm、深さ63cmを測る。覆土は1層のみ観察できここからE38-6に示す須恵器が1点出土した。7世紀末から8世紀前半にかけての所産と思われる造構の時期を示す可能性がある。

P9844はB98GrからC98Grにかけての標高8.76mの調査面で検出した。他の造構に擾乱を受けているが、検出規模は長さ96cm、幅80cmである。造構北寄りが最も落ち込みこの箇所の深さは68cmを測る、南寄りでは標高8.50m付近に段を有している。覆土は3層確認できており、ここから少量の土師器片のほかにE38-7に示した須恵器の蓋が出土しているが、小片であるため時期は不明である。

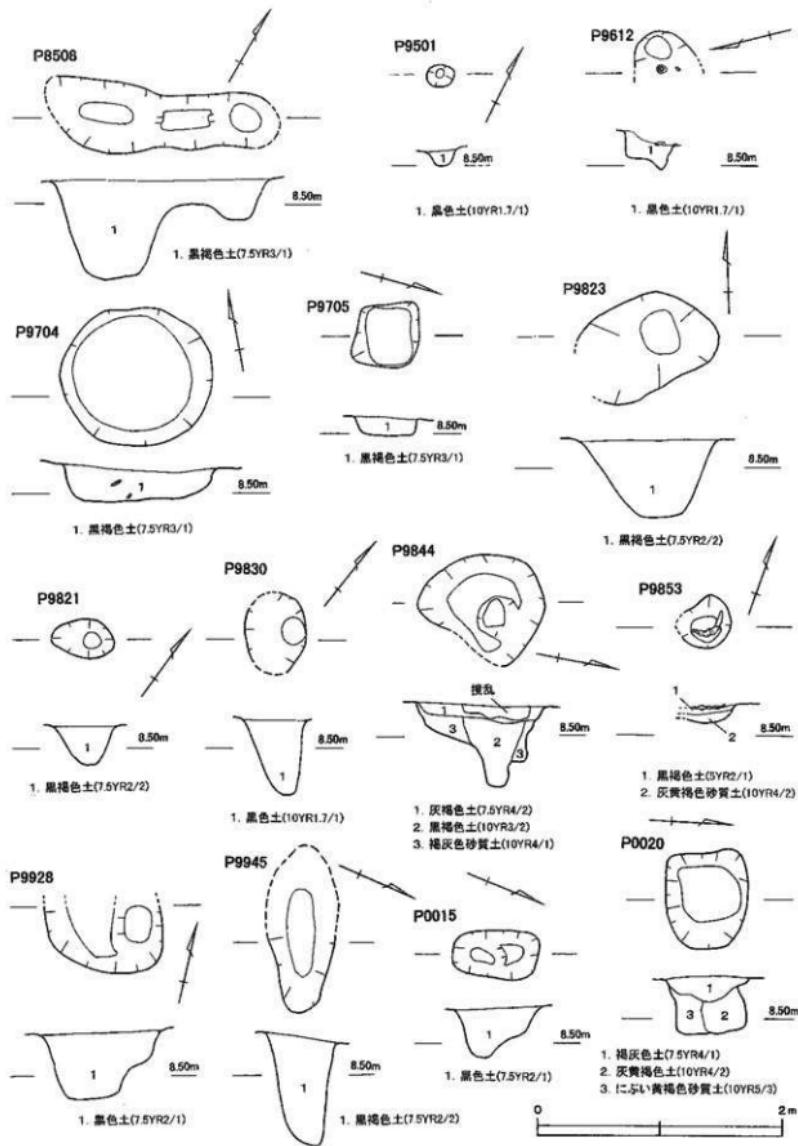
P9853はC98Grの標高8.77mの地山面で検出した、径40cm前後、深さ16cmを測る造構である。2層に分層可能な覆土の第1層からは僅かな土師器片のほかにE40-3に示す錆が出土しているが、時期は不明である。

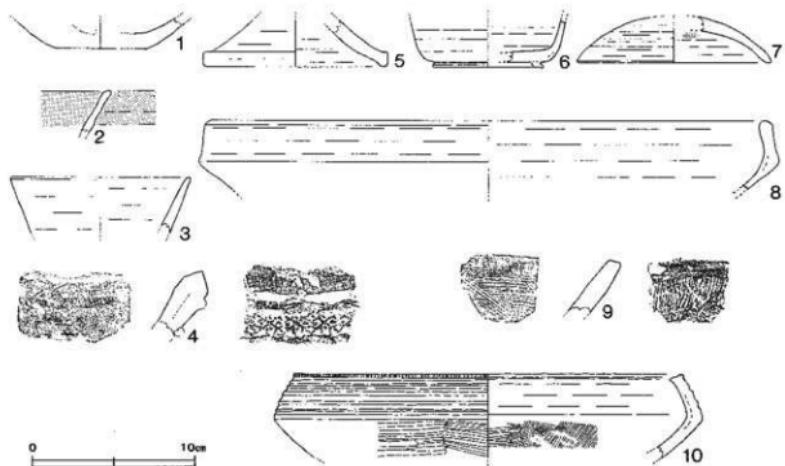
P9928はC99Grの標高8.87mの地山面で検出した。調査区Dライン際での検出となつたため全容はつかめてないが、検出規模は幅96cm程度、深さ56cmを測る。1層のみ観察できる覆土からは僅かな土師器片のほかにE38-8に示す焼鉢が出土している。

P9945はB99Grの標高8.85mの調査面で検出した。SK12に切られており全容は不明であるがN-69°-E方向に軸をとり、規模は長さ推定140cm、幅60cm程度、深さ92cmを測る。覆土からは僅かな土師器片のほかにE40-4に示す手鏡と思われる鉄製品が出土しているが詳細は不明である。

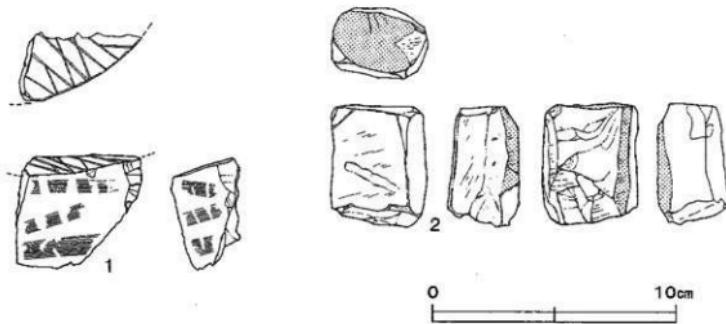
P0015はB100Grの標高8.79mの調査面で他の造構を切った状態で確認した。N-21°-W方向に長軸をとり、検出規模は長さ71cm、幅40cm、深さ41cmを測る。覆土からはE38-9に示した擂鉢と考えられる破片が1点のみ出土している。

P0020はC100Grの標高8.85mの地山面で検出した。N-16°-E方向に長軸をとり、検出規模は長さ79cm、幅67cm、深さ48cmを測る。覆土は3層確認できここから数点の土師器片のほかに、E38-10に示す弥生土器が出土した。中期後葉の高壙であるが混入したものであろう。

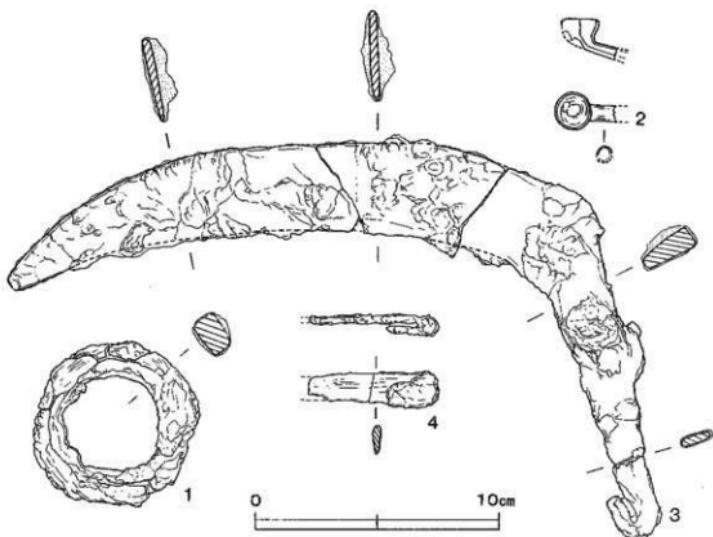
E37図 主要ピット実測図 ($S=1\%$)



E38図 主要ピット出土土器等実測図 ($S=1/2$)



E39図 P9501・P9823出土石製品実測図 ($S=1/2$)

E40図 主要ピット出土金属製品実測図 ($S=\frac{1}{2}$)

溝状遺構

SD04 (E41~E46図)

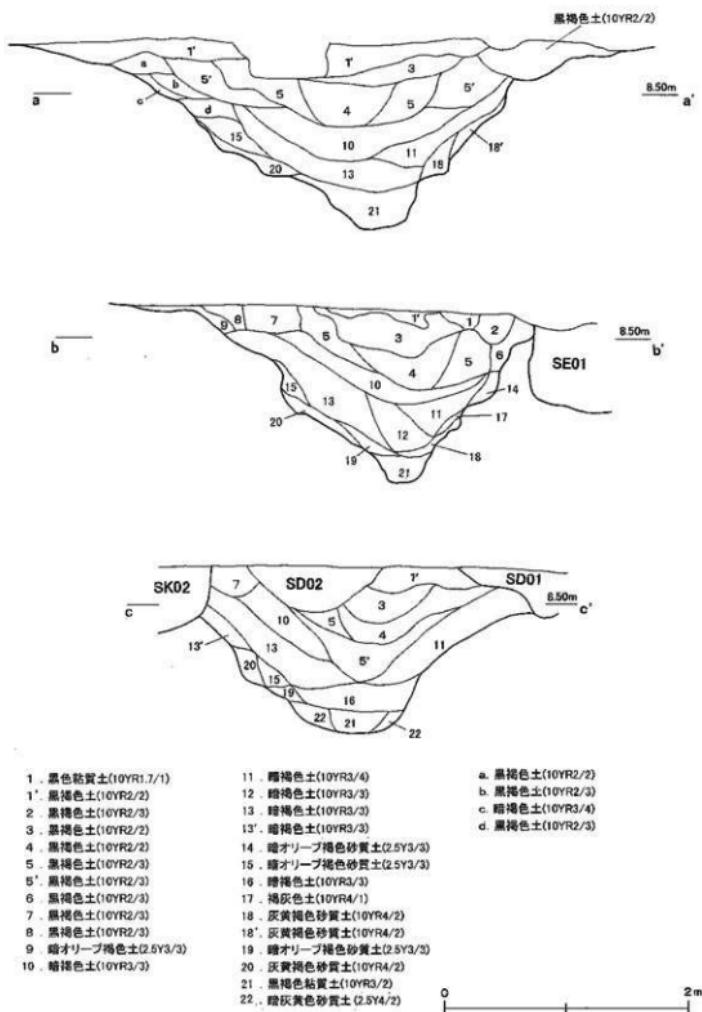
SD04はD89-B90ライン付近の標高8.75mの地山面で検出した。SE01、SK02、SD01、SD02などによって擾乱を受けてはいるが調査に影響を与えるものではなかった。調査区内では蛇行は認められずN-68°-W方向に直線的に伸びていた。検出した長さは12.5mであり、上幅3.3m、下幅0.25m、深さ1.4mを測る大型の溝状遺構である。断面形は「V」字形を呈しており、側壁の立ち上がりは北側で40°、南側で52°であり、南側の側壁の立ち上がりが北側と比較しやや急である。また、底から30cm程度は両者とも急傾斜で立ち上がっている。よって、断面形をより正確に表現するなら「Y」字形または漏斗形となろう。

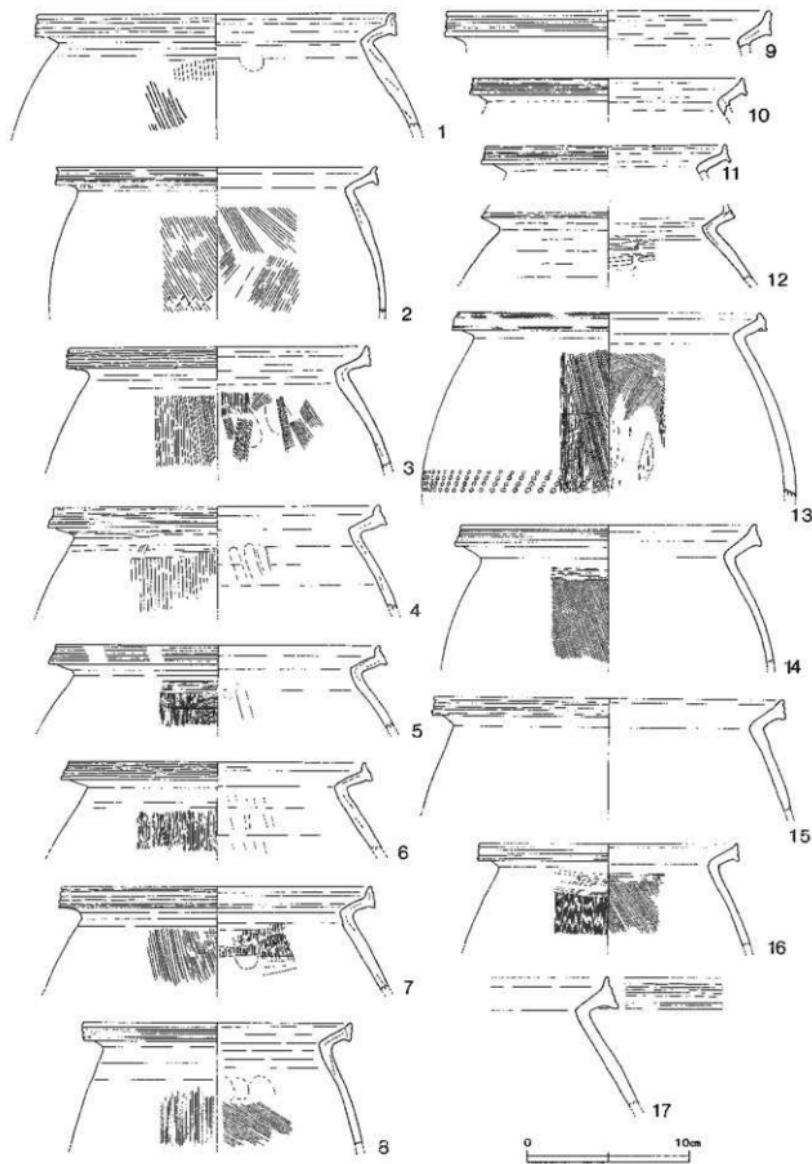
底については実測図からも見て取れるように概ね平坦である。また、底の標高が西端で7.43m、中央で7.32m、東端で7.39mであり一定方向への勾配は認められない。

覆土についてはb-b'ラインセクションで22層に分層可能であった。堆積の状況から幾たびかの掘り返しを繰り返しながら機能を維持させていたことがうかがえる。また、土の堆積は溝内の流水によるものではないと思われる。つまり、溝内の流水により堆積したと考えられるのは第21層の下層付近の数センチであり、それより上位の堆積については周辺の土が風雨により溝内に流れ込んだ様相を呈している。この周囲からの流れ込みについても興味深い点がある。第10層と第13層に注目すると土が北側の側壁に沿う形で遺構の内部に流れ込んでいる様子が見て取れる。もちろん南側からの土の流入も



E41図 SD04実測図 ($S=1\%$)

E42図 SD04土層図 ($S=1\%$)



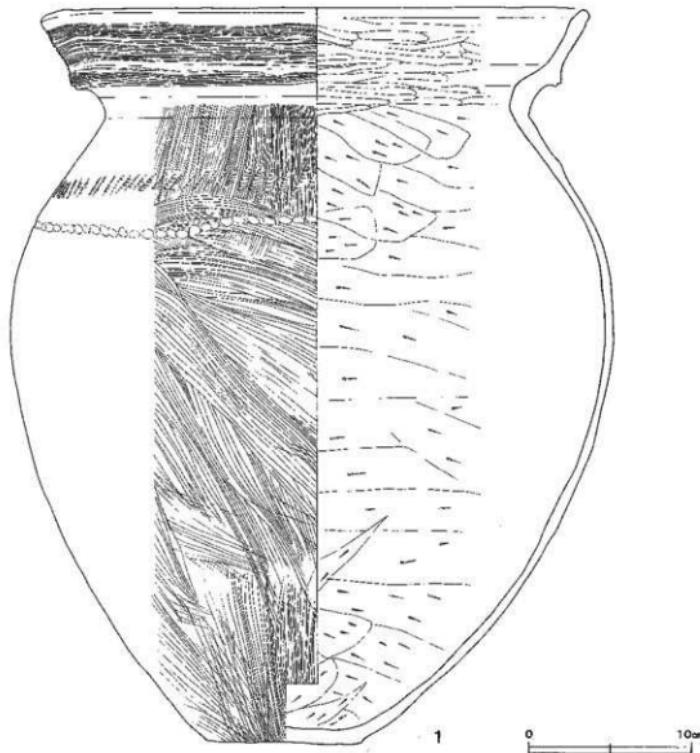
E43図 SD04出土弥生土器実測図1 ($S=1/3$)

認められるのであるが、流れ込む土の量は南側より北側からの方が多い。これは、掘削した土を溝の北側に置いた可能性を示唆するものであろう。

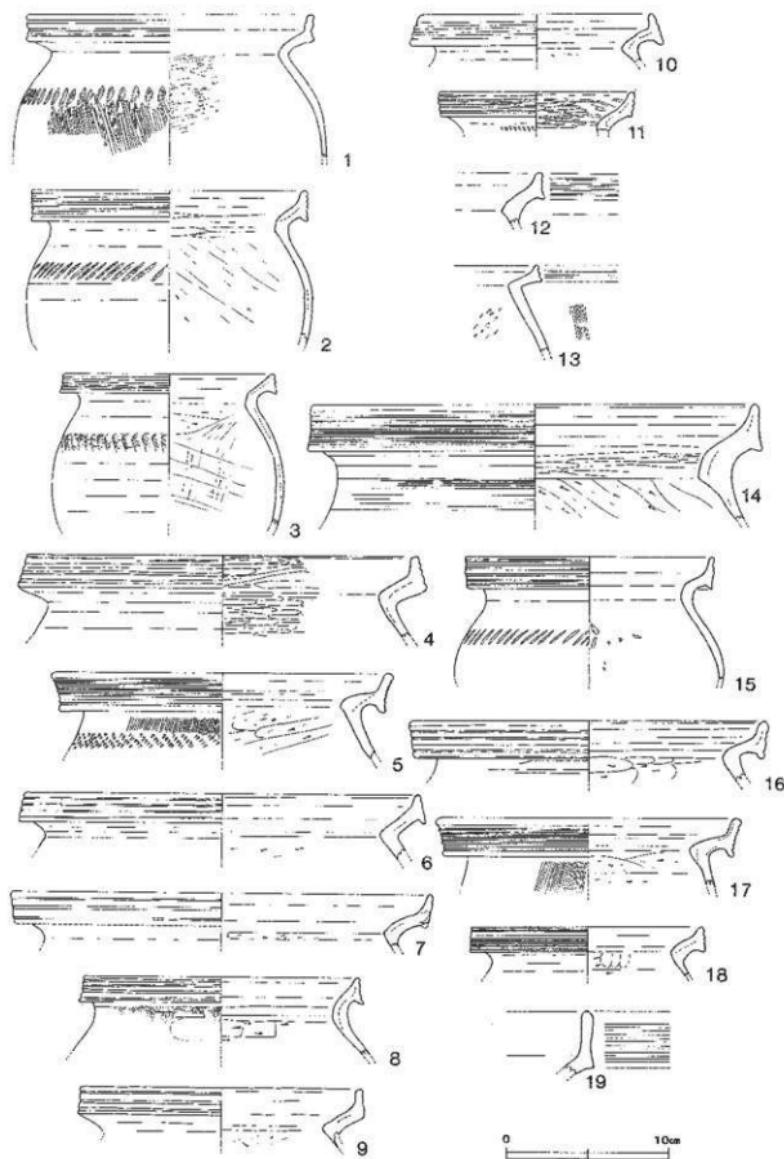
出土遺物については覆土全体から壺、壺、高杯、蓋などの弥生土器の破片がコンテナ半分程度出土しており、このうち残存状態の良いものを図示した。

E43-1～E43-17には中期後葉の壺を示した。口縁端部が内傾気味に上下に拡張し、端面に2～3条の凹線文を施されているものが多い。また、頸部は「く」字状に屈曲し、頸部以下の内面にケズリ調整は認められない。これらは松本IV-2期に相当するものと考えられる。

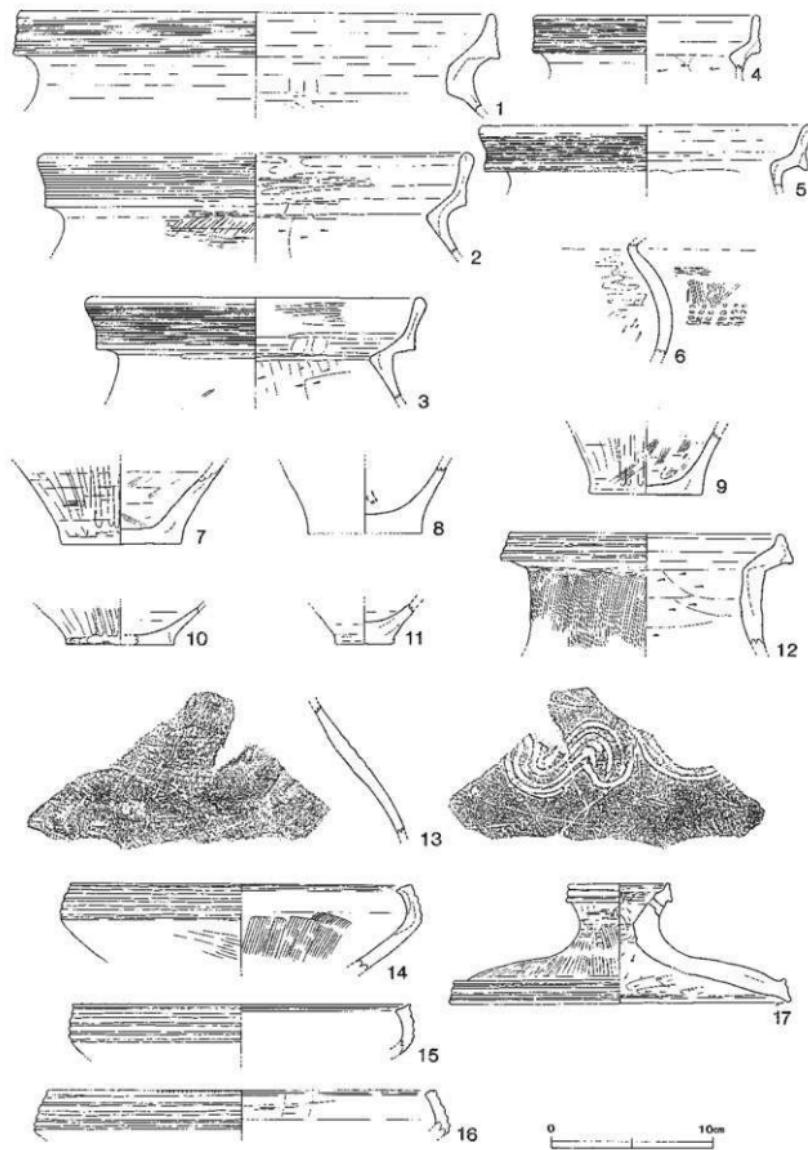
E44-1～E46-6には後期の壺を示している。E44-1は大型の壺で草田2期に相当すると考えられる。a-a' ラインの第10層で口縁部から頸部の破片が出土しているが、肩部以下の破片の多くはその下に堆積する第13層から出土している。ほぼ完形に復元できており、第10層と第13層の堆積時期を示すと考えられる。なお、E45-1～E45-19には草田1～2期に相当すると思われるものを、E46-1～E46-5には草



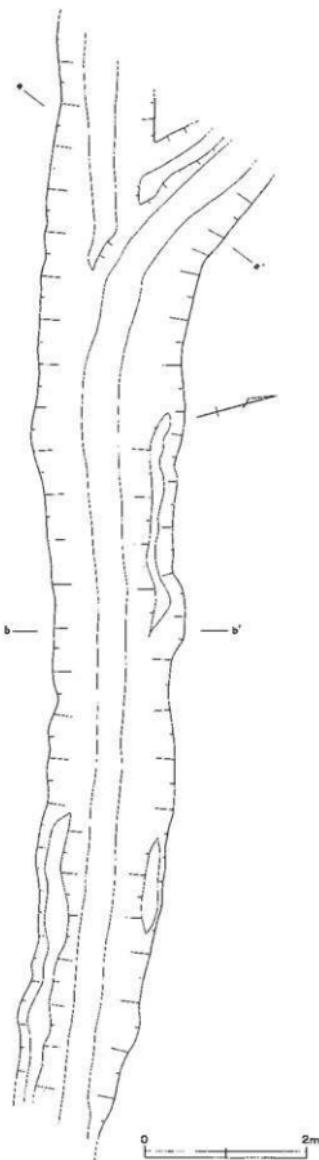
E44図 SD04出土弥生土器実測図2 ($S=1/2$)



E45図 SD04出土弥生土器実測図3 ($S=\frac{1}{3}$)



E46図 SD04出土弥生土器実測図4 (S=1/2)



E47図 SD05実測図 (S=%)

出3期に相当すると考えられるものを図示している。

統いて、E46-7～E46-11には底部を示した。壺あるいは壺の底部片であるが、いずれも平底であることから、出土した壺あるいは壺の時期に合致するものと考えられる。

E46-12・E46-13には壺を示した。前者は口縁部から頸部にかけての破片であり、草田1～2期頃に相当すると考えられる。後者は壺の肩部付近の破片と思われる。ヘラによりS字状渦文が描かれており搬入品の可能性がある。

E46-14～E46-16には高坏を示した。いずれも坏部で器壁が内傾しており、外面に数条の凹線文が施されている。これらは松本IV-2期に相当するものであろう。

E46-17は唯一出土した蓋である。上下の端部付近外面には凹線文が施され、下部は内面にケズリ調整がなされている。それに対し、搬部の内面は見栄えを意識したためか、細かなミガキ調整が施されている。また、搬部には器壁を貫通する孔を対に穿っている。時期については他の遺物の範疇に収まると考えられる。

以上のように、出土遺物の上限は松本IV-1期であり下限は草田3期である。各層ごとに遺物の時期が分かれることはなく、遺構覆土の上層から下層にわたり先に示した時期の遺物が満遍なく出土するという状況であった。したがって、この時期幅でSD04は機能していたと推定でき、E44-1が埋まっている間もなく廃棄されその機能を失ったと考えられる。

遺構の性格については、空堀りであったと推定されることや、規模及び断面形などから集落の外縁を囲繞する環濠である可能性が指摘できる。なお、SD05やSD14と軸方向がほぼ一致するため一連の遺構である可能性がある。

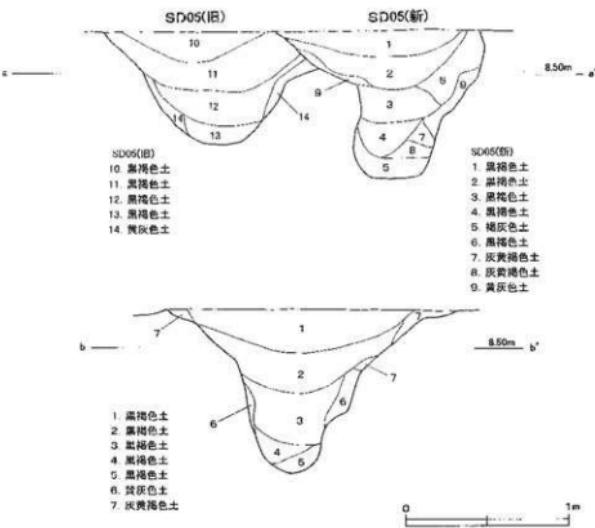
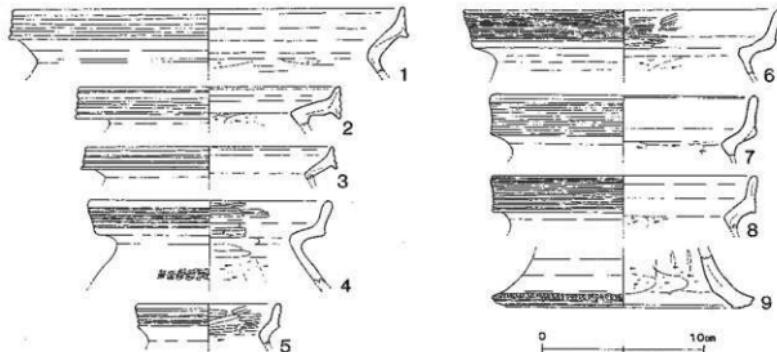
SD05 (E47～E49図)

D91-B92ライン付近の標高8.75mの地山面において、SD07に一部を切られた状態のSD05を検出した。調査区内では概ね直線的に検出され、軸方向はN-73°-Wである。検出した長さは13mで、上幅は1.5m前後、下幅は30cm前後の規模を有している。断面は「U」字形を呈しており、底は丸く凹んでいる。

検出時には確認できなかったが、この遺構については断

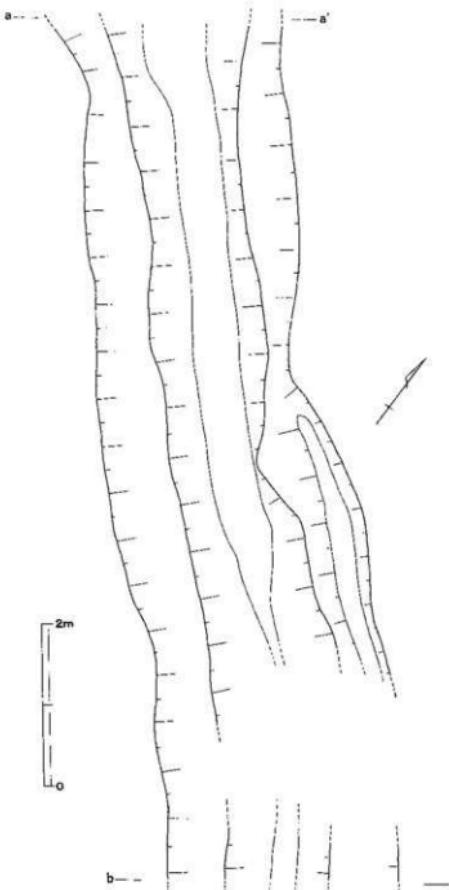
面を観察した結果、a-a' ラインで新旧の溝の切り合ひが確認できた。この切り合ひから推定すると、旧SD05は先ほど示した方向を軸に直線的に延びていたようであるが、後にa-a' ライン付近で46°程度北に振った方向に掘削し直されたようである。これがどのような必要性から行われたかは不明であるが、再掘削際に溝の深さは20cm以上深くなっている。旧SD05は調査区内でかろうじて検出されており、検出できた長さも2.5m程度である。また、深さは70cmで断面は新SD05同様「U」字形を呈している。一方、新SD05は底の標高はa-a' ラインで7.85m、b-b' ラインで7.73m、Bラインで7.73mであり、勾配は認められない。新SD05の覆土についてはb-b' ラインセクションで5層確認した。第1層から第4層は溝全体に堆積する基本的な土層であるが、これらは溝の中の流水による堆積ではなく、遺構周囲の土が風雨により流れ込んで堆積したものと考えられる。

この遺構からは弥生土器片が出土しているがその量は少なくビニール袋半分に満たない。これらのうち実測可

E48図 SD05土層図 ($S=1/30$)E49図 SD05出土弥生土器実測図 ($S=1/3$)

能なものを図示した。E49-1～E49-8には壺を示した。E49-1～E49-3は松本IV-2期に相当すると考えられ、その他は草田2～3期のものと思われる。E49-9には高壺の脚部片を示した。これは松本IV期に相当するものであろう。

出土遺物の時期からSD05は、弥生時代中期後葉から後期にかけて機能していたと考えられる。また、SD04と軸方向がほぼ平行しており遺構の時期も同時期頃と考えられることから、SD04とSD05は一連の遺構である可能性が指摘できる。この考えからSD05の性格については、柵列遺構である可能性を考慮して精査したが、これを裏付ける痕跡は見当たらなかった。このため、SD05はSD04と同様に空掘の状態で機能していたものと思われる。



E50図 SD07実測図 (S=1%)

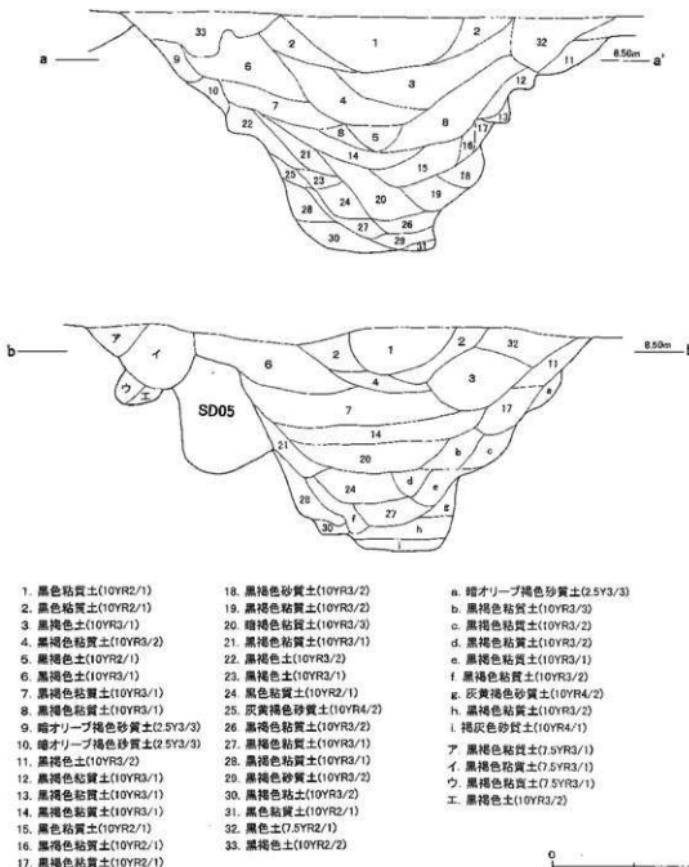
SD07 (E50～E52図)

B92-D92ライン付近の標高8.70m前後の調査面においてSD07を検出した。他の遺構と切り合い関係にあり、SK04に切られ、SD05、SD14などを切っていた。調査区内では若干蛇行が認められるが大局的にはN-43°-W方向にほぼ直線的に延びている。検出した長さは10.6mであり、この間での規模は上幅3.0m、下幅0.5m前後、深さ1.4mを測る。側壁の立ち上がりは東側が55°であるのに対し西側は49°～66°と変化している。このように、比較的急な勾配を呈する側壁であるが、やや湾曲して立ち上がっているため、断面形は「V」字形というよりは「U」字形に近い。

底面については、a-a'ライン付近とb-b'ライン付近の底の標高はそれぞれ7.32mと7.27mであるため、概ね平坦であるといえる。

覆土については、a-a'ラインでの断面観察で31層確認している。中層以下や側壁際での分層は特に細分可能であったが、これは側壁が幾たびも崩れては掘り返すという作業が繰り返された結果形成されたものと思われる。また、溝の規模は徐々に小さくなっていたことが土層堆積状況から推測されよう。

出土遺物については、ビニール袋半分に満たない少量の土器片が出土しており実測

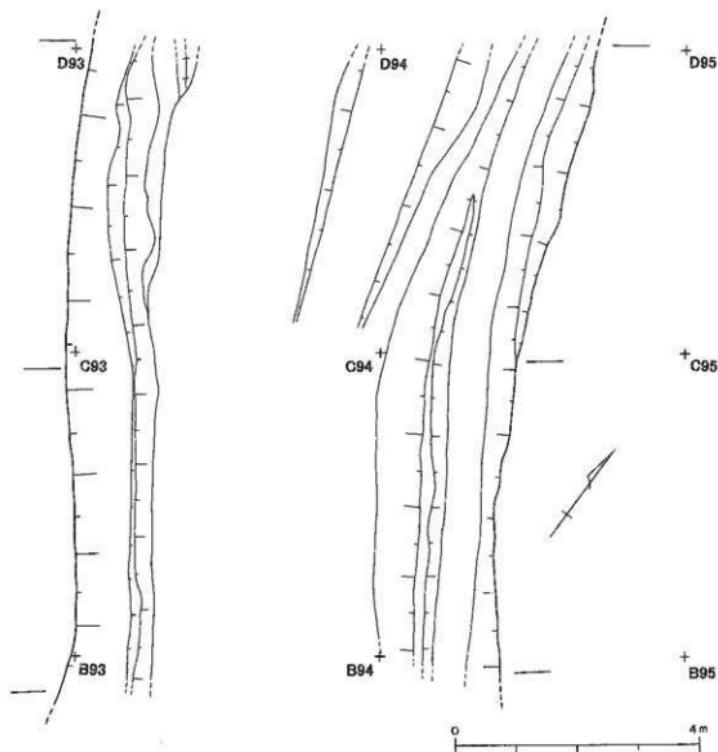
E51図 SD07土層図 ($S=1\%$)E52図 SD07出土弥生土器等実測図 ($S=1\%$)

に堪えるものだけを図示した。E52-1～E52-5は弥生土器の壺であり、時期はE52-1が中期後葉、E52-2・E52-3が後期前半、E52-4が後期後半、E52-5が終末のものと考えられる。なお、E52-6は底部、E52-7は高杯脚部であるがいずれも時期は判然としない。

出土遺物からこの溝状造構は弥生時代終末頃に機能を失ったと思われる。また、造構の性格については環濠である可能性が指摘できる。

SD13 (E53～E62)

B93-D93ラインからB95-D95ラインの間での標高8.40m～8.74mの調査面において、大型の溝状造構であるSD13を検出した。調査区にはば直交しており検出した長さは10.5mである。また、調査区内においてはB93-D93ライン付近の南西側の肩が直線的に延びており、その指向する方向はN-35°-Wである。これに対し北東側の肩はB94Grでは西側と同じ方向を指向するが、C94Grではやや東に振りN-22°-W方向を指向している。このため、この造構の上幅はBライン付近では7m前後を測るが、Dライン付近では

E53図 SD13実測図 ($S=1\%$)

8.3mとやや広がっている。下幅もこれに伴いBライン付近で3.7m、Dライン付近で5.0mと変化している。

次に、底の標高に着目すると、Bライン、Cライン、Dラインでの最下底がそれぞれ7.15m、7.20m、7.16mであり勾配は認められなかった。

底の形状については、小さな起伏は認められるものの大局的には断面が凹面状を呈していると言える。しかし、Dライン際ではちょうどSK06が検出された箇所で底が盛り上がっている様子が確認できた。また、北東の側壁沿いには標高7.60m付近で段が認められた。この段はBラインからCラインに至るまでの間で確認されており、幅は60cmを測るものである。

以上はSD13の完掘後の形態の特徴について述べたが、SD13の覆土を徐々に掘削して調査を進めるにあたっては、平面的に溝状造構の形態を呈するものが複数認められた。これらについては個別に後述することとし、まずはそれ以外の覆土および出土遺物について述べたい。

土層堆積状況観察は3箇所の断面観察によって行った。この結果、複雑に切り合う多数の土層を確認している。また、これら覆土からはコンテナ1箱分に上る土器片が出土しており、主なものを選別しE57-1～E62-1に図示している。

はじめに壺をE56-1～E56-13に示した。E56-1は直口壺であり松本IV-1期頃のものと思われる。肩部から胴部に4段の列点文を巡らせているのが特徴的である。E56-2・E56-3は広口壺であり松本IV期に属するものであろう。後者は頸部に爪による刺突文を2段巡らせている。E56-4・E56-5は複合口縁を有する壺である。両者とも頸部にまでケズリ調整が施されているが前者は草田1期、後者は草田3期と思われる。E56-10～E56-12は肩部付近の破片と考えられるが、両者とも棒状浮文と円形浮文が施されるなど共通点多いため同一個体と考えられる。

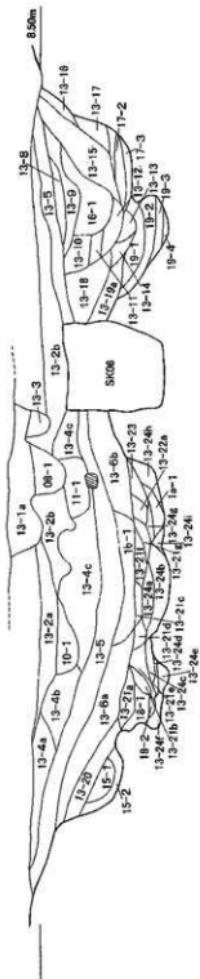
壺については松本IV-1期から草田6期までのものが出土している。E58-1～E58-14は松本IV期、E58-15～E58-18は草田1期、E58-19～E59-23は草田2期、E58-24～E59-4は草田3期、E59-5・E59-6が草田4期、E59-7が草田6期のものと思われる。E59-8はミニチュアである可能性があるので、後期のものと考えられる。なお、E59-9～E59-12には胴部片を、E59-13～E59-27には底部片を示している。

次に、高壺と思われるものをE60-1～E60-8に示した。脚柱部に複数条の凹線文を施すものが目立ち、時期は松本IV期から草田3期にかけてのものと考えられる。なお、E59-7・E59-8は鼓形器台の脚部である可能性も残す。また、E60-9は蓋、E60-10は瓶の把手、E60-11は分銅形土製品である。

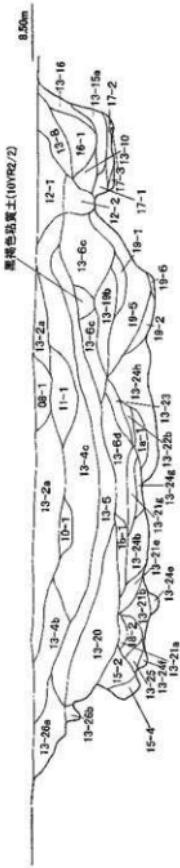
SD13からは土師器、須恵器、中世土師器など弥生時代より新しい遺物も出土しているため、これらをE61-1～E61-12に示した。E61-1・E61-2はとともに土師器で、前者が碗、後者が皿と考えられる。両者とも器面に赤色顔料が塗布されていた痕跡が残る。E61-3・E61-4は中世土師器であり、両者とも12世紀頃の所産と思われる。E61-5は土鍤を示した。管状紡錘形土鍤であるが時期は不明である。E61-6～E61-11は須恵器である。壺、壺、壺などであるが須恵器の出土量はごく少量にとどまっている。E61-12は瓦質の擂鉢である。底部のみの出土であり時期は判然としない。

E62-1にはSD13から唯一出土した石製品を図示した。第5層から出土した砂岩の砥石であり、1面に研ぎ面が残っている。

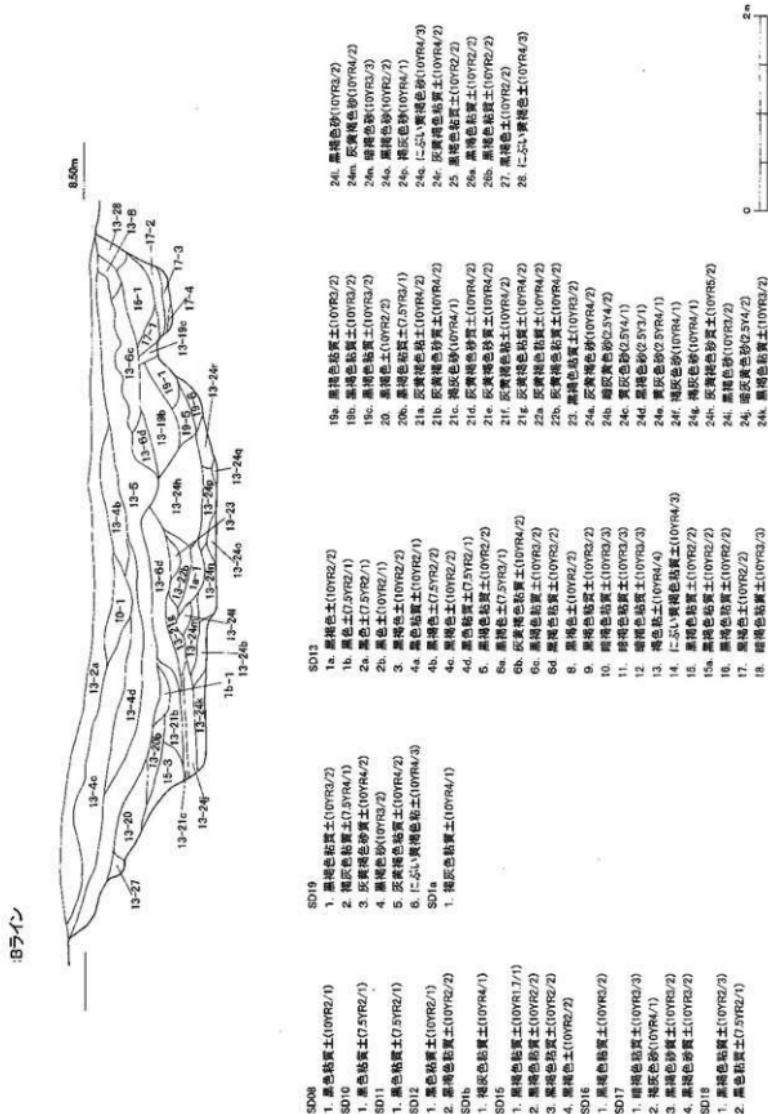
このようにSD13の覆土からは弥生時代中期から中世にかけての出土遺物が認められる。しかし、これらは各層から満遍なく出土するわけではなく、層ごとに時期が大別できる。このため、出土遺物の



E54図 SD13土層図1 ($S=\frac{1}{50}$)

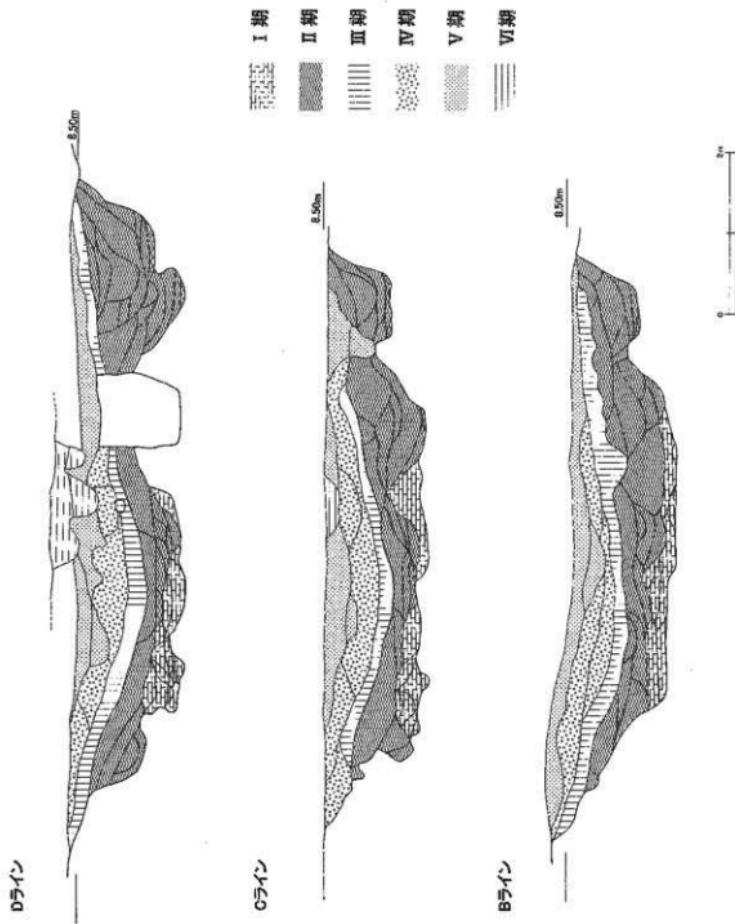


— 318 —

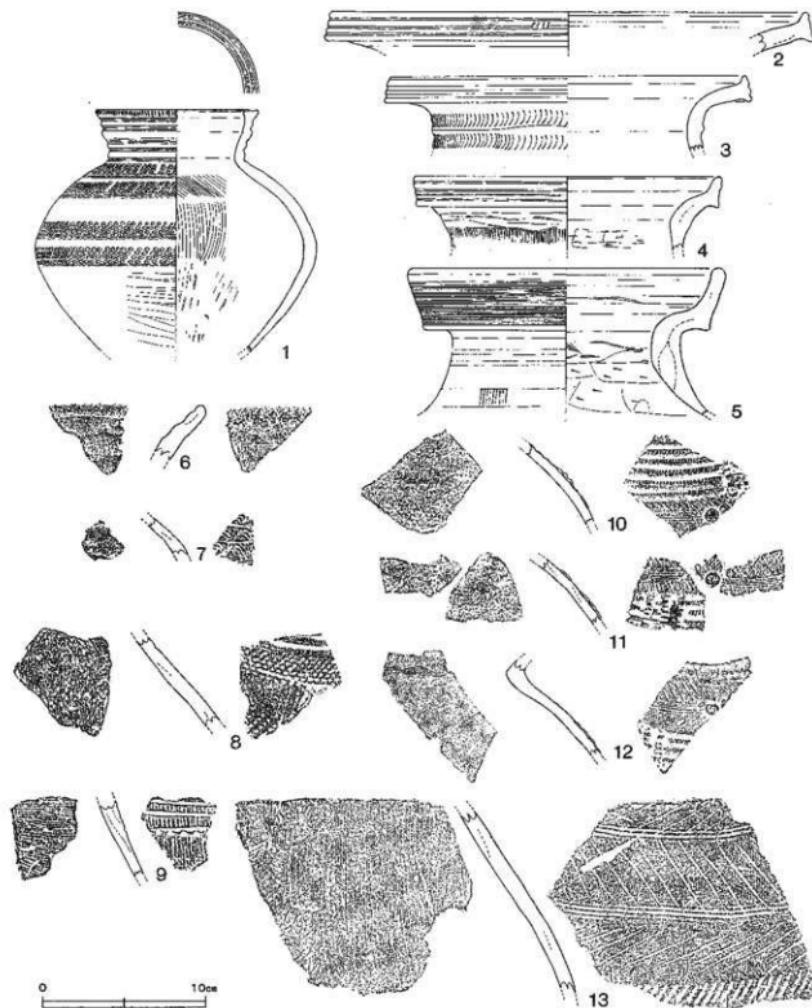


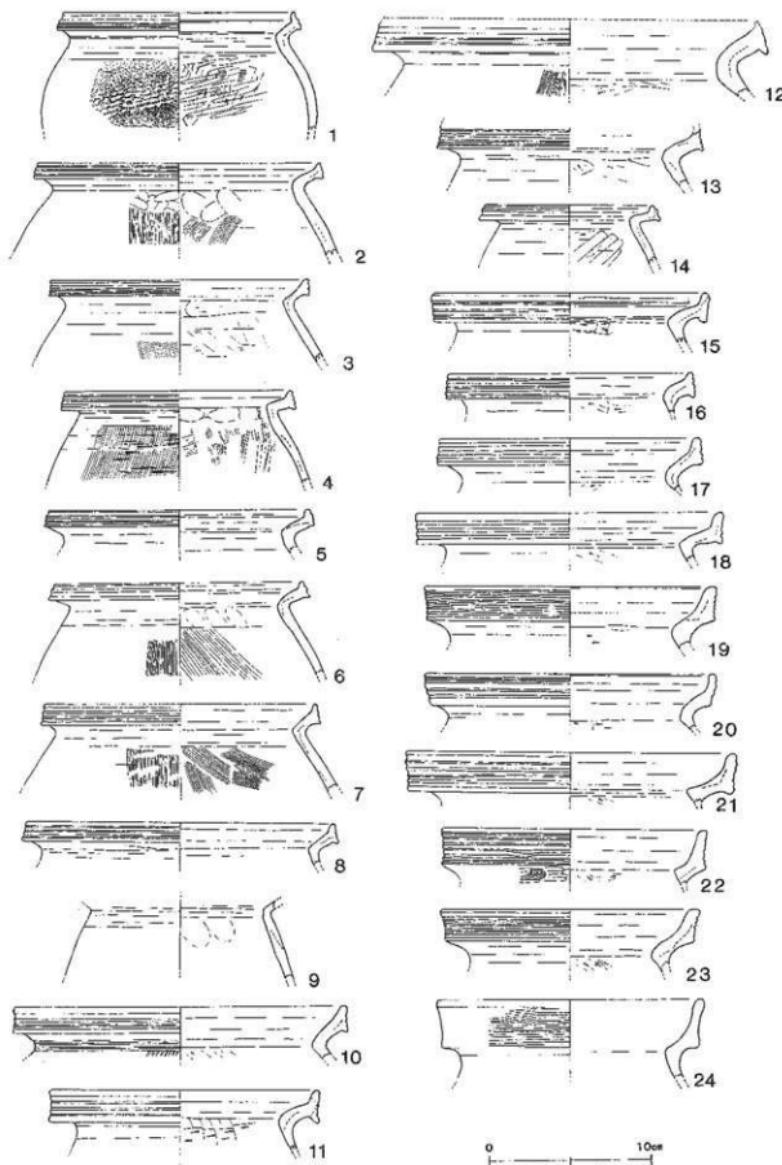
E55図 SD13土層図2 ($S=1\%$)

時期、各層の切り合い、SD13内検出構造造構の時期を考慮して、各層を時期ごとにブロック分けしたもののがE56図である。つまり、Ⅰ期は弥生時代中期後葉から弥生時代後期、Ⅱ期は弥生時代後期から弥生時代終末期、Ⅲ期は弥生時代終末及び古墳時代初頭以降、Ⅳ期は奈良時代以降、Ⅴ期は中世、Ⅵ期は近世の遺物が出上する層のブロックとなっている。

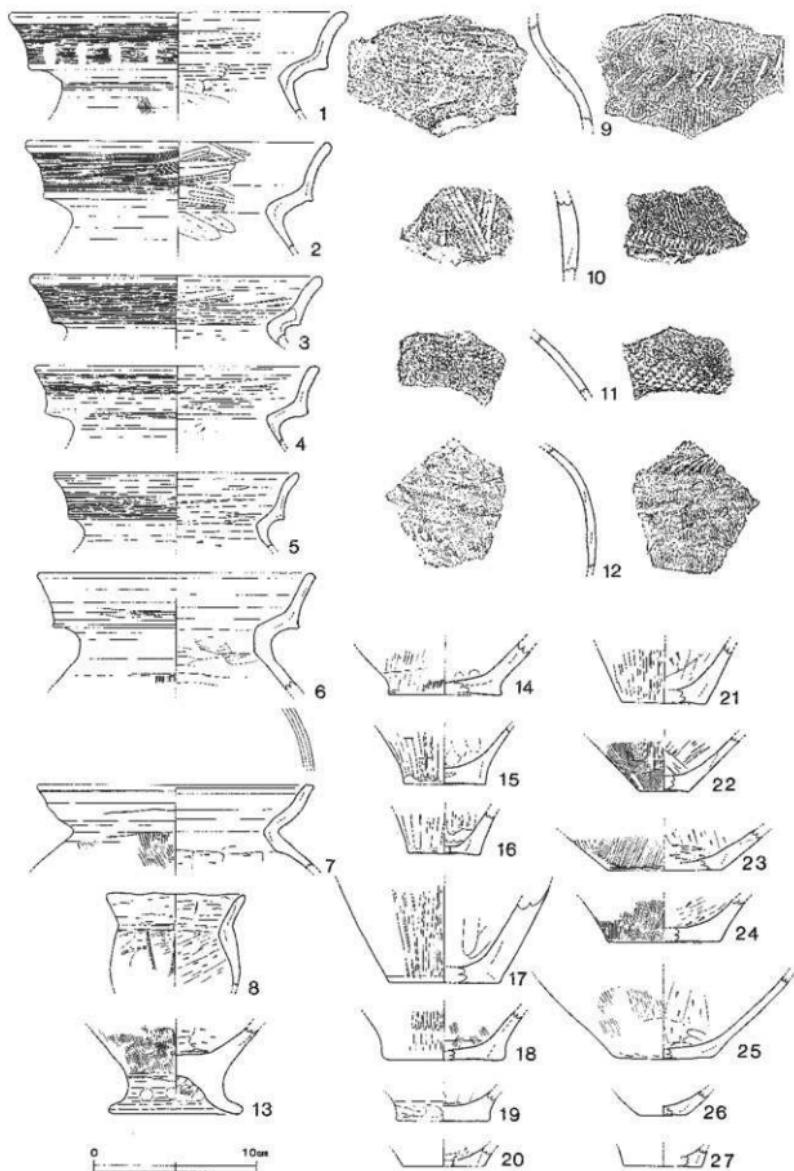
E56図 SD13土層時期区分図 ($S=%$)

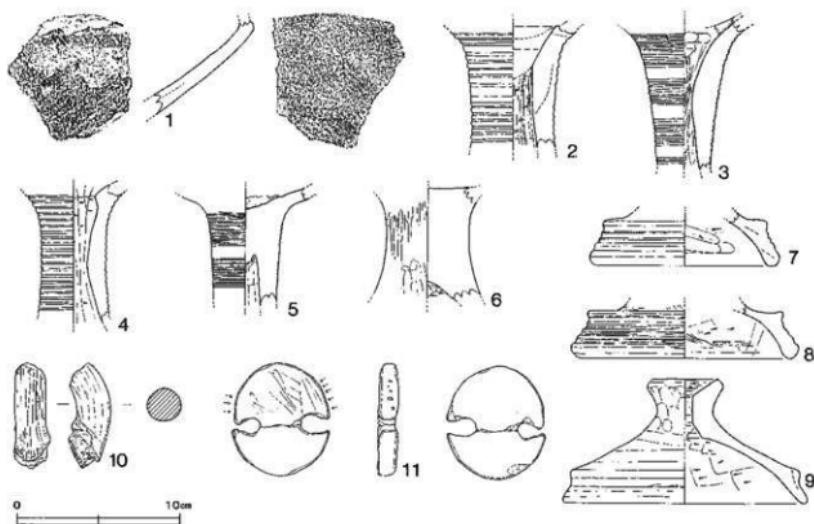
以上のことからSD13はⅠ期に築かれた後に、Ⅱ期ではやや幅を広げている。これは、規模の拡大や隣接地での掘り替えなどが想定される。また、Ⅲ期に一端完全に埋められた後は、Ⅳ期からⅥ期にかけては浅い溝として利用されていたと推定できる。なお、Ⅰ期とⅡ期のSD13は環濠として利用されていた可能性も考えられる。

E57図 SD13出土弥生土器実測図1 ($S=1/2$)

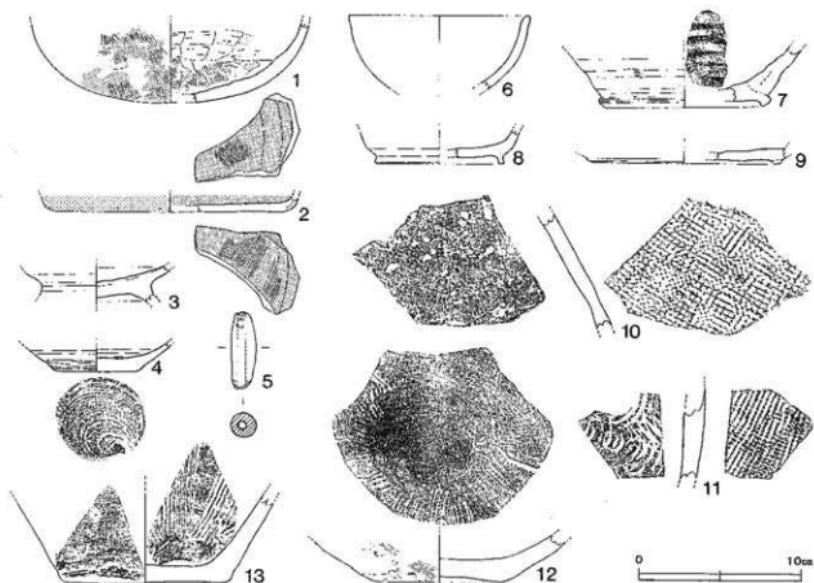


E58図 SD13出土弥生土器実測図2 (S=1/2)

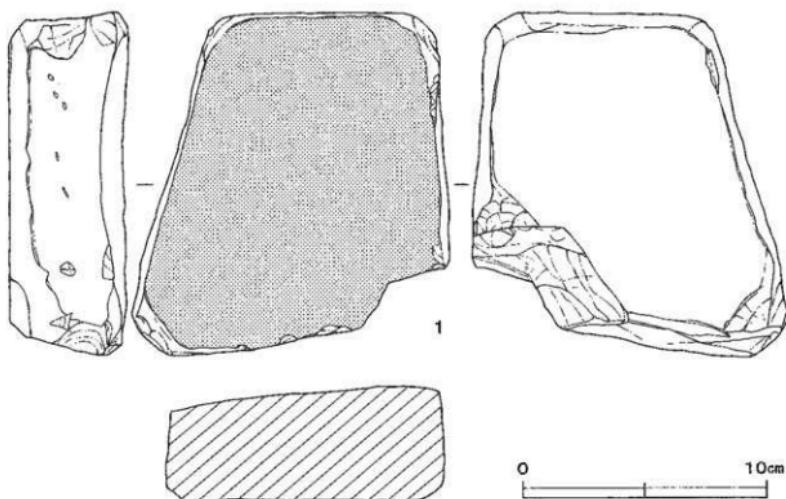
E59図 SD13出土弥生土器実測図3 ($S = \frac{1}{2}$)



E60図 SD13出土弥生土器実測図4 ($S=\frac{1}{3}$)



E61図 SD13出土土器等実測図 ($S=\frac{1}{3}$)



E62図 SD13出土砥石実測図 (S=1/2)

SD13内検出溝状遺構

SD13を覆土を徐々に掘削して調査を進めるにあたり、各層の調査面で溝状遺構の形状を呈するものがあったため、SD13覆土の切り合ひ関係と出土遺物の時期を基にして、新しいと思われるものから順に概要を説明する。

SD08 (E63・E67図)

SD08はSD13覆土の2a層、2b層などを切って落ち込む溝状遺構である。N-27°-W方向にはば直線的に延びているが、検出できたのはDラインからCライン付近の長さ4.7m間である。標高8.58mの調査面で確認しており上幅は50cm前後を測る。また、断面は「U」字形を呈しており、底の標高についてはDライン付近で8.26m、Cライン付近で8.41mである。覆土からはE67-1に示す唐津系の碗の破片が1点出土していることから、この遺構は近世以降のものと思われる。

SD12 (E64・E67図)

SD12はSD13覆土の4c層、6c層、8層などを切って落ち込む「L」字に折曲する溝状遺構であり、延べ18.5mにわたり検出した。B95Gr、B96GrではN-59°-Eを指向するが、B94Grで90°屈曲しN-31°-Wを指向している。標高8.19mの調査面で平面図作成を行ったが、実際はそれより上位から落ち込んでいることがSD13のCラインセクションの観察により確認できた。よって、本来は断面「V」字形を呈しており上幅120cm以上、深さ58cm以上を測る規模を有していたものと思われる。なお、底の標高は7.87mである。

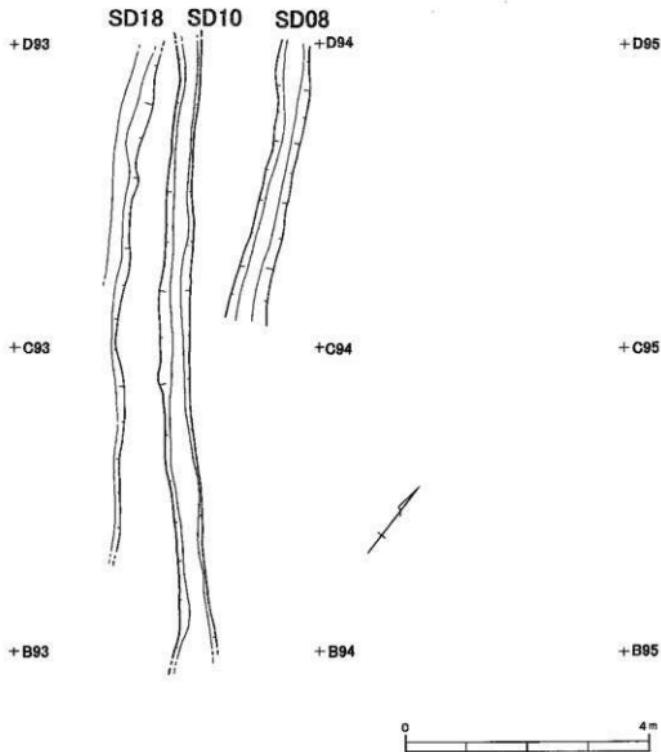
覆土は2層に分層可能でありここから少量の弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器の破片が出土しており、実測に堪えるものをE67-2～E67-6に示した。E67-6は備前焼の擂鉢であることからこの遺構は中世以降に築かれたものと思われる。

SD10 (E63・E67図)

SD10はSD13覆土の4b層、4c層から落ち込む溝状遺構である。N-39°-W方向にはば直線的に延びているが、検出した長さはDラインからBラインまでの10.1m間である。標高8.25mの調査面で検出しており、この面での上幅は50cm前後である。断面形は緩やかな「U」字形を呈し、底の標高は8.00m~8.10mである。覆土からは弥生土器、須恵器、中世土師器の破片が少量出土しており、このうち図化に堪えるものをE67-7に示した。高坏の坏底部から脚柱部にかけての破片であり時期は弥生時代中期後葉と考えられる。しかし、他に中世土師器の破片が認められるため、この遺構の時期は中世以降であろう。

SD11 (E65・E67図)

SD11はSD13覆土の4c層を切り込む溝状遺構である。N-28°-W方向にはば直線的に延びており、検出した長さは10.3mである。標高8.20mの調査面で検出しており、この面での上幅は70cm程度である。また、断面は逆台形を呈しており、底の標高は8.03mである。覆土からは少量の弥生土器、土師器、須



E63図 SD13内検出溝状遺構実測図1 (S=%)

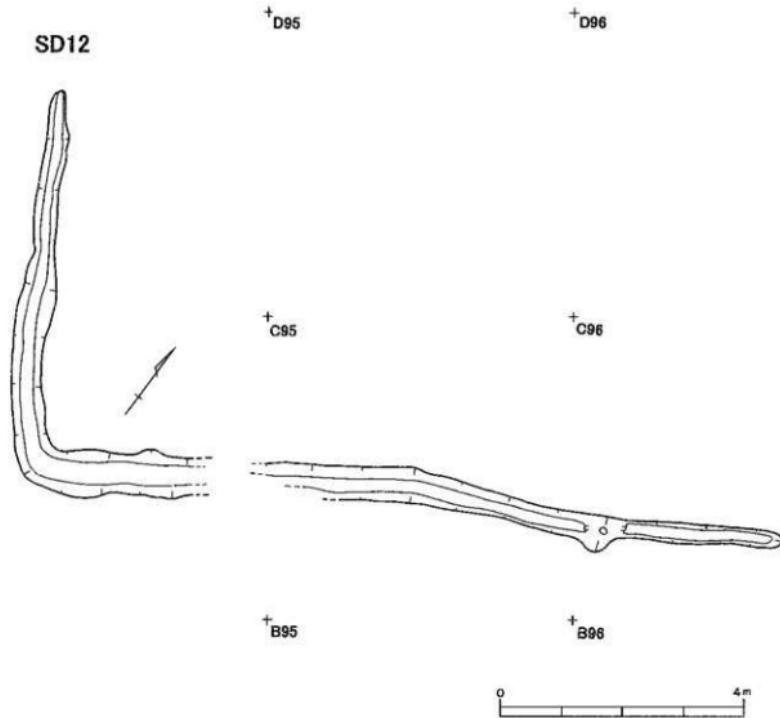
恵器の小片が出土しており、このうち実測可能なものをE67-8に示した。8世紀中葉頃の須恵器の坏であることから、この遺構は奈良時代以降のものであると推定できる。

SD1b (E66図)

SD1bはSD13覆土の6a層、6b層などを切って落ち込む溝状遺構である。南西に若干膨らむもののほぼN-27°-W方向に延びており検出した長さは10.2m間である。標高7.75m前後の調査面で検出しており、この面での上幅は80cm~140cmを測る。断面は逆台形を呈しており、底の標高は7.54m~7.62mである。覆土からは少量の弥生土器片が出土しており実測可能なものをE67-9~E67-11に示した。中期後葉から後期前半にかけてのものであることから、遺構の時期は弥生時代後期以降であろう。

SD15 (E65・E67図)

SD15はSD13覆土上の21a層、21b層やSD18を切って落ち込む溝状遺構である。N-36°-W方向にはば直線的に延びており、検出した長さはDラインからBラインまでの10.2m間である。SD13の南西壁に沿った斜面で検出しており、検出した調査面は標高7.64m~8.10mである。また、断面は「U」字形を呈しており、底の標高は7.42m~7.65mである。覆土からは若干の弥生土器片が出土し、実測可能なものを



E64図 SD13内検出溝状遺構実測図2 (S=1/50)

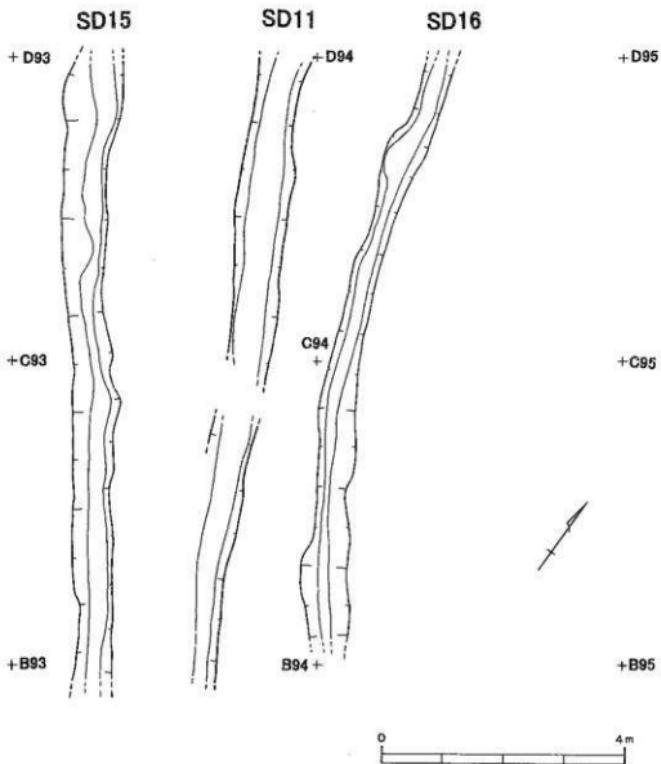
E67-12に示した。終末期の堀であり造構の時期を示すものと思われる。

SD16 (E65・E67図)

SD16はSD13覆土の10層、15層、16層などを切り込む溝状造構である。南西方向にやや湾曲して膨らんでおり、検出した長さは9.8mである。標高8.10m前後の調査面で検出しているが、この面での上幅は15cm～75cmを測る。断面は緩やかな「U」字形を呈しており、底の標高は7.78m～7.84mである。覆土からは若干の弥生土器片が出土しており、実測可能なものをE67-13～E67-18に示した。中期から後期にかけてのものであるため造構の時期は弥生時代後期以降と推定できる。

SD17 (E66・E67図)

SD17はSD13の北東壁沿いで検出した溝状造構であり、SD13覆土の19c層とSD19を切っている。この造構は平面的に観察すると屈曲しており、BラインからCライン付近まではN-30°-Wを指向し、Cライン



E65図 SD13内検出溝状造構実測図3 (S=%)

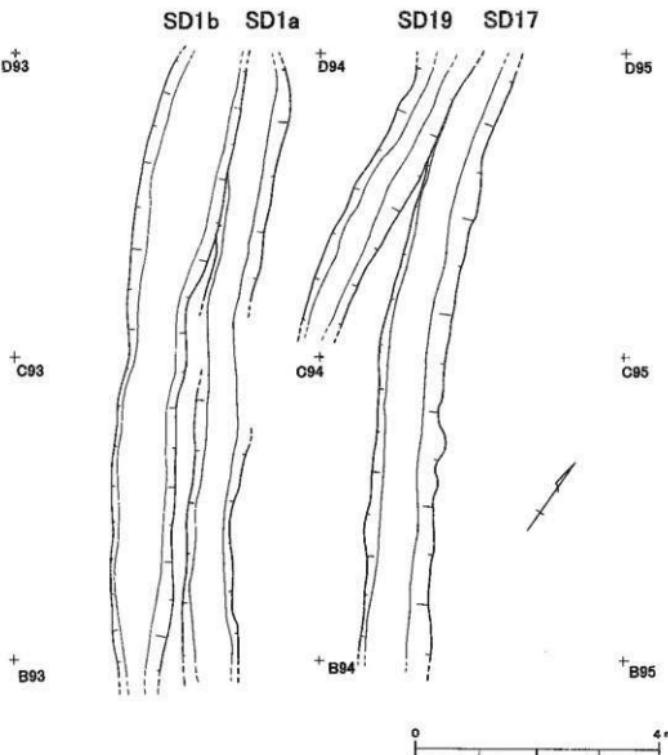
付近からDラインまではN-9°-Wを指向している。標高7.84m~7.96mの調査面で確認され上幅は110cm前後を測る。また、断面は逆台形を呈しており、底の標高は7.58m~7.68mである。覆土からはE67-19に示す弥生土器片が1点のみ出土した。後期後半の壺であることから遺構の時期はこれ以降であろう。

SD19 (E66・E67図)

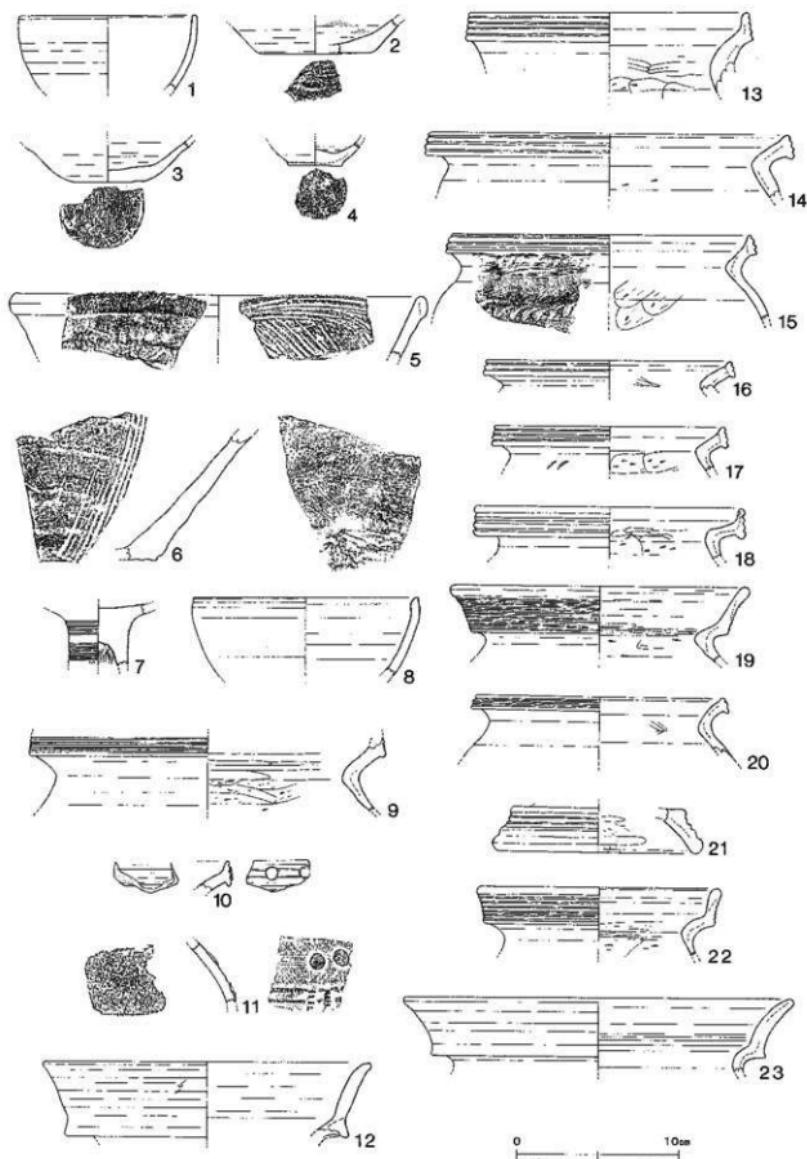
SD19はSD13覆土の24h層を切り込んでいる溝状遺構である。この遺構はDラインからCライン付近までの長さ4.75m間を検出しており、直線的にN-9°-W方向に延びている。標高7.52m~7.73mの調査面での上幅は65cm~80cmで、断面は緩やかな「U」字形を呈しており、底の標高は7.21m~7.30mである。覆土からは少量の弥生土器片が出土しており、主なものをE67-20・E67-21に示した。前者は中期後葉、後者は後期前半のものと思われることから、遺構の時期は弥生時代後期以降であろう。

SD18 (E63図)

SD18はSD13覆土の21b層、25層を切り込む溝状遺構である。DラインからBライン付近までの8.2m間



E66図 SD13内検出溝状遺構実測図4 (S=%)



E67图 SD13内検出溝状造構出土土器等実測図 ($S=1/3$)

を検出しており、ほぼ直線的にN-33°-W方向に延びているのが確認できた。標高7.68m~7.62mの調査面で検出しており、上幅は50cm程度であると思われるが大半をSD15によって攪乱を受けているため、正確な数値は不明である。断面は「U」字形を呈しており、底の標高は7.33m~7.37mである。なお、覆土からは中期から後期にかけてのものと思われる弥生土器片が少量出土している。

SD1a (E66・E67図)

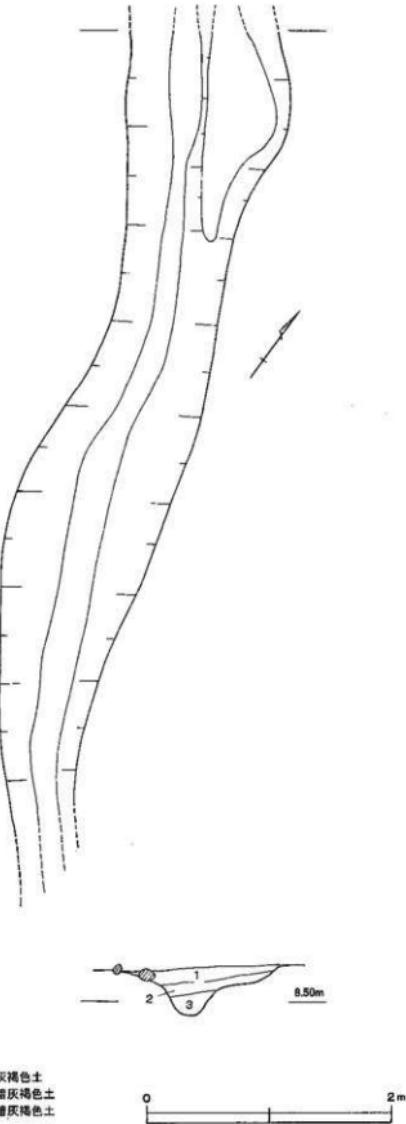
SD1aはSD13覆土の24h層などを切り込む溝状遺構である。南西に若干膨らむがほぼN-30°-Wを指向し、検出した長さは9.9mである。標高7.48m~7.54mの調査面で検出しており、この面での上幅は75cm~90cmを測る。断面は緩やかな「U」字形を呈しており、底の標高は7.24m~7.32mである。覆土からは少量の弥生土器片が出土しており実測可能なものをE67-22・E67-23に示した。前者は後期後半、後者は終末のものと考えられることから、この遺構の時期は弥生時代終末頃と推定できる。

その他の主要溝状遺構

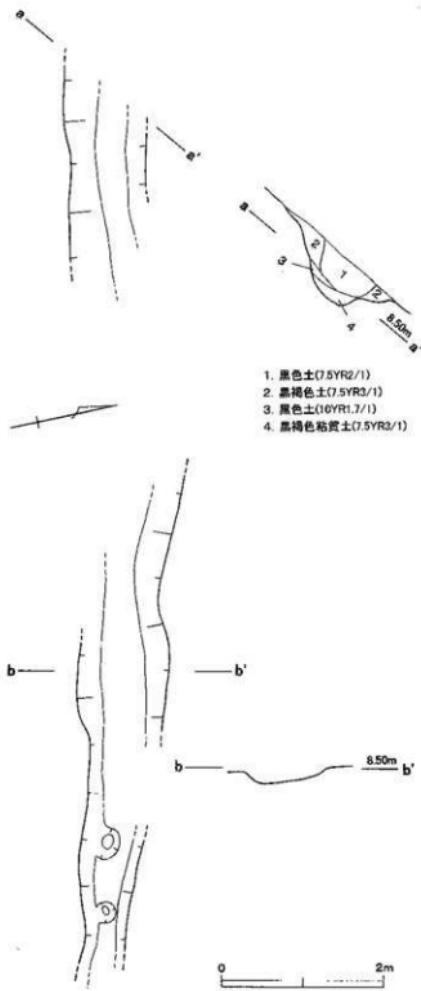
SD01 (E68・E71図)

B88GrからC88Grの標高8.80mの調査面においてSE01に切られた状態でSD01を検出した。やや蛇行しているものの、大局的にはN-30°-Wを指向している。検出した長さは6.6mで、規模は上幅50cm~120cm、下幅20cm~30cm、深さ42cmを測り、底の標高は8.38mである。断面は「U」字形を呈しており、側壁の立ち上がりは緩やかである。また、Dライン付近の北東側の側壁には標高8.64m付近に段を有している。

覆土は3層確認できここから中世土師器



E68図 SD01実測図 (S=1%)

E69図 SD14実測図 ($S=1\%$)

覆土からはビニール袋半分弱の弥生上器片が出土しており、実測に堪えるものをE71-2に示した。特殊壺の胴部片であり弥生時代後期のものと思われる。SD27からは弥生土器の破片だけしか出土していないが、切り合い関係にあるSK19からは土師器片が出土しているため、この造構の時期は古墳時代以降と考えられる。

などの小片が若干出土している。これらうち実測可能なものをE71-1に図示した。備前焼の擂鉢で15世紀頃のものと考えられ、造構の時期を示すと思われる。

SD14 (E69図)

D92-B93ライン付近の標高8.83m調査面において、SD07、SD13、SK05に切られた状態でSD14を検出した。若干蛇行するものの大局的にはN-77°-Wを指向し、検出した長さは10.4mである。

検出規模は上幅50cm~110cm、下幅20cm~50cm程度を測り、底の標高は8.30mである。

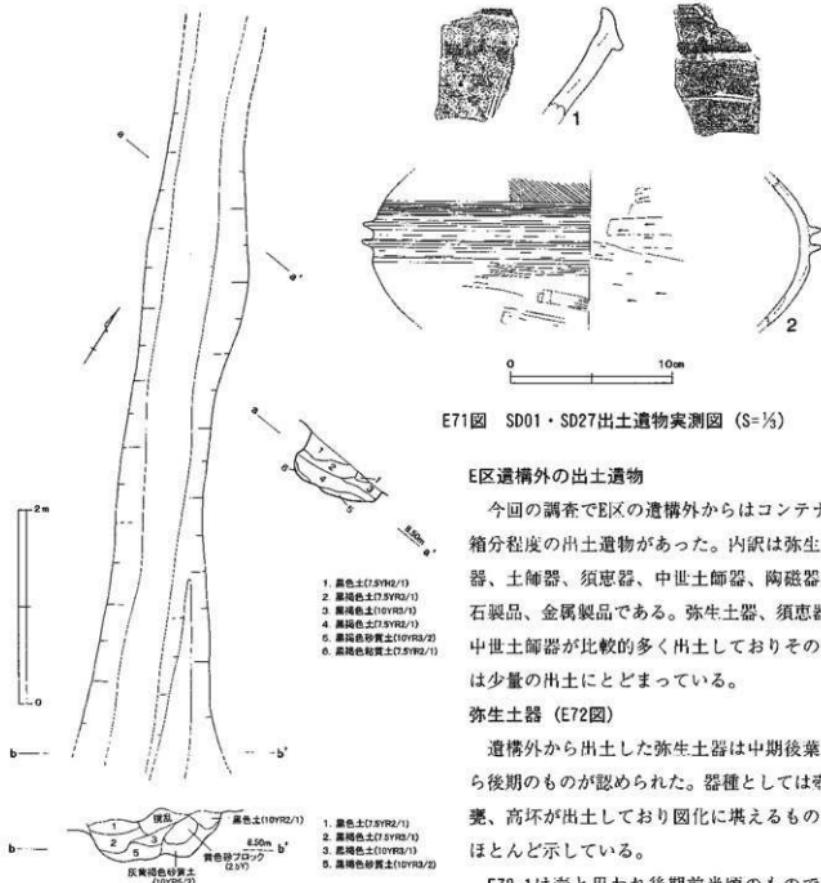
覆土は4層確認できたが、出土遺物は弥生土器片1点のみである。平底の底部片であり弥生時代中期頃のものと思われる。

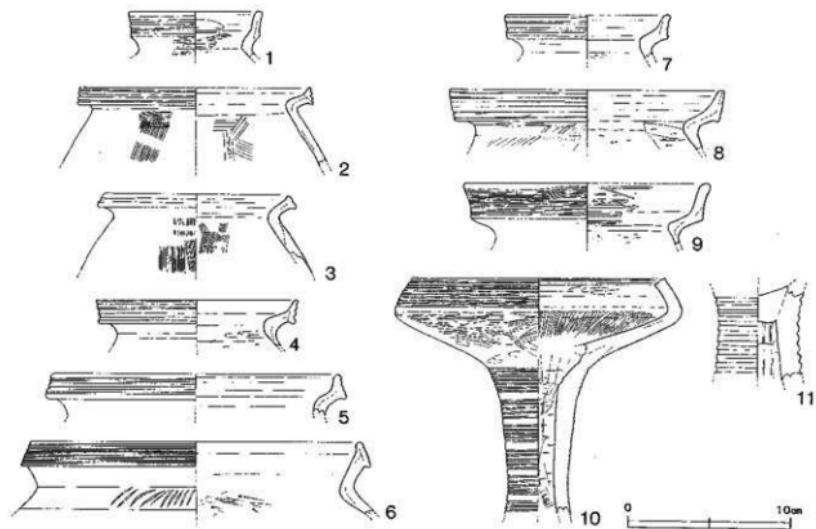
この溝状造構の時期及び性格について不明な点が多いが、SD04、SD05と軸方向が近いため、何らかの関係をもつてゐる可能性が指摘できる。

SD27 (E70・E71図)

B104GrからC104Grにかけての標高8.70m~8.81mの調査面において、SE06とSK19を切った状態でSD27を検出した。N-25°-W方向には直線的に延びており検出した長さは6.6mである。

検出規模は上幅80cm~140cm、下幅34cm~50cm、深さ42cmを測り、底の標高はa-a'セクションで8.28m、b-b'セクションで8.38mであり、南東方向に下がる若干の勾配が認められる。





E72図 E区遺構外出土弥生土器実測図 (S=1/2)

土師器・須恵器 (E73図)

土師器の出土量は中世土師器を除くと僅かであり、時期も不明なものがほとんどである。また、中世土師器は比較的多く出土しているものの、いずれも小片であり実測可能なものは僅かである。

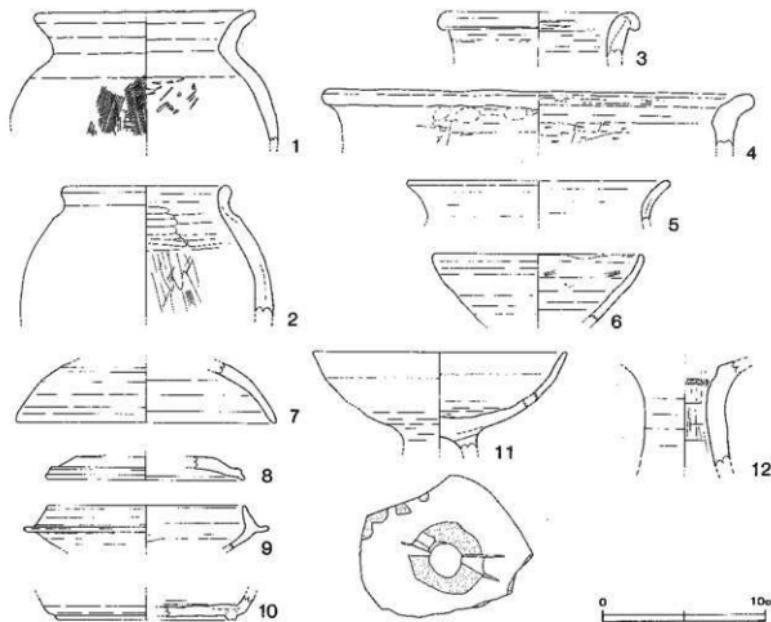
E73-1～E73-3には壺を示した。E73-1は口縁部が外反しており胴部内面にケズリ調整が認められる。E73-2は短頸壺と思われる。肩部付近の内面に横方向のミガキ調整が認められる。E73-3は口縁部が直立して開口するが、端部が玉縁口縁状に折り返されている。続いて甕を示した。E73-4は口縁部が短く折れて開口し、頸部以下の内面は粗いケズリ調整が施される。E73-5は口縁部が外反して開口するものであり器壁が薄い。これは4世紀から5世紀のものであろう。E73-6は壊であり中世の所産と考えられる。

遺構外出土遺物の中で須恵器は目立つが、大甕の胴部片が多い。以下、その他のものを報告する。

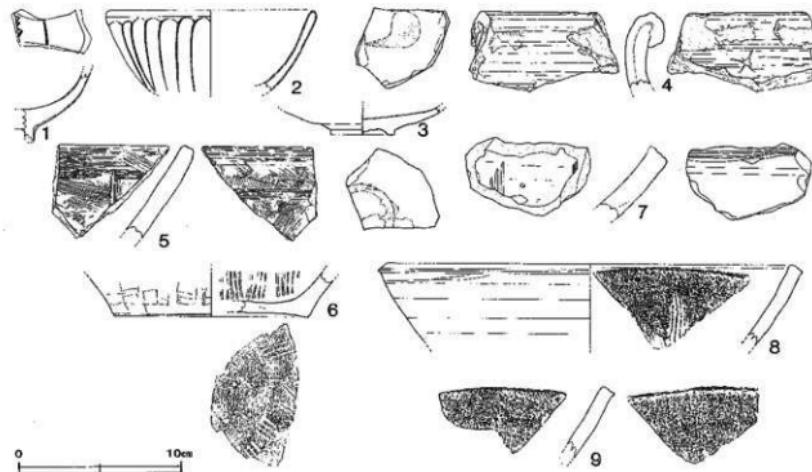
E73-7・E73-8は蓋である。前者は器壁が内湾しながら開口し6世紀頃のものと思われる。後者は端部付近で器壁を若干下方に引き出し開口するもので、平安時代前半頃の所産であろう。E73-9は壊身である。受部の立ち上がりは内傾するあまり高くないことから、7世紀前葉のものであろう。E73-10は高台付壊と思われる。底面外縁に低い高台が張り付けられており8世紀頃の所産と考えられる。E73-11・E73-12には高壊を示した。前者は壊部の器壁が内湾しており、脚柱部上位に2方向の透しが認められるが後者ではない。两者とも7世紀頃の所産と思われる。

陶磁器等 (E74図)

陶磁器なども僅かに出土しているがいずれも小片である。以下、主なものについてのみ取り上げる。



E73図 E区遺構外出土土師器・須恵器実測図 ($S=\frac{1}{2}$)



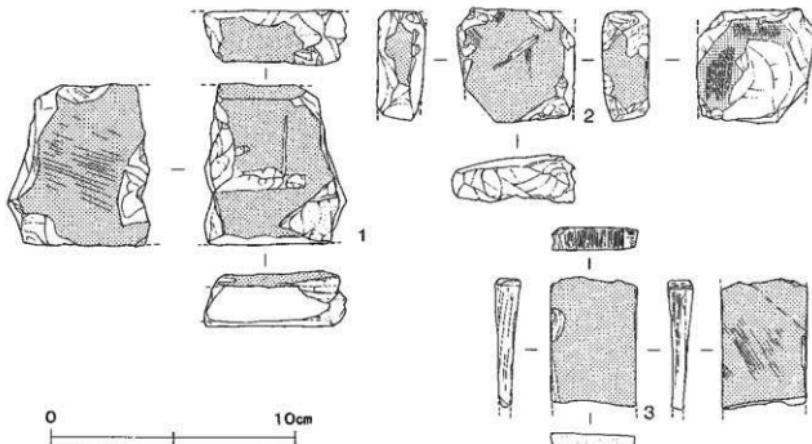
E74図 E区遺構外出土陶磁器等実測図 ($S=\frac{1}{2}$)

E74-1・E74-2は青磁の碗である。前者は高台を有しており底部内面に陰刻が認められる。後者は外間に逆弁文が施され中国産である。両者とも15世紀の所産と考えられる。E74-3は唐津焼の皿である。低い高台を有しており器壁は緩やかに内湾して立ち上っている。16世紀後半から17世紀前半のものである。E74-4は備前焼の盃である。口縁端部を外側に折り曲げ玉縁状口縁をなしている。次に捕鉢を取り上げた。E74-5・E74-6は瓦質のものであり、E74-7は備前焼第Ⅲ期に相当すると考えられるところから鎌倉時代後半の所産であろう。なお、E74-8・E74-9は時期や産地が不詳のものである。

石製品 (E75図)

遺構外から石製品の出土は少なく3点にとどまっている。いずれも砾石でありすべて掲載した。

E75-1は3面に、E75-2は4面に、E75-3は2面にそれぞれ研磨面を残している。E75-1・E75-2は粗い砾石であるが、E75-3は細かい砾石である。

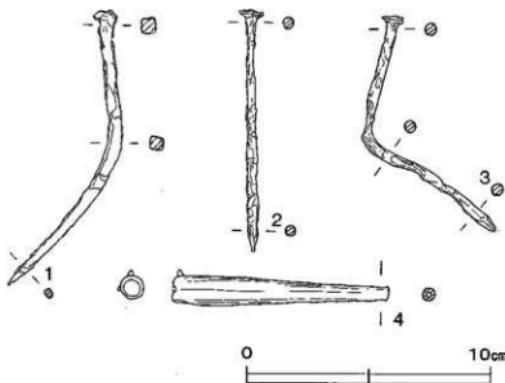


E75図 E区遺構外出土石製品
実測図 ($S=\frac{1}{2}$)

金属製品 (E76図)

金属製品は僅かに出土している。いずれも時期が明確ではないが比較的新しいものであると思われる。

E76-1～E76-3には釘を図示した。E76-2・E76-3の断面が円形であるのに対し、E76-1は四角形を呈しているためやや古いと思われる。E76-4は煙管の吸口部分であるが詳細は不明である。



E76図 E区遺構外出土金属製品実測図 ($S=\frac{1}{2}$)

F区の調査結果

F区の調査結果

F区の調査概要（第2図、F01・02図）

F区は下古志遺跡の中央やや東寄りに位置する長さ60mを測る調査区である。この調査区においても、調査区壁の崩壊を考慮し調査区幅は10mにとどめた。また、109Grと110Grは本調査の現場事務所を設置していた箇所であるが、工事予定地となる前には民家が立っており、遺構面に至るまで擾乱を受けていると考えられたため、未調査のまま調査を終了している。

F区の調査は平成9年(1997)11月から平成10年(1998)2月にかけて実施した。F区の調査前の地盤は宅地及び畠であり、地表から30cm～50cmは耕作土が盛土されていた。よって、この部分は調査に先立ち、重機掘削によって土を除去した。この重機掘削については111Grから118Grまでが平成9年3月、C107Grと108Grが平成9年11月と2回に分けて実施している。

F区においても調査着手の際、他の調査区と同様に5m×5mの基準杭を3列設置し、各杭に他の調査区にも関連する連番の名称を与えた。この結果、F区の基準杭はB107～B119、C107～C119、D107～D119となっている。また、グリッド名についてもE区、G区などと同様に南角に位置する杭の名称を与えた。

調査は南西から北東に向かい順次進めた。グリッド毎に手掘りによって土を徐々に取り除いていくと標高9.00m～9.20m付近で地山面に至った。この面で遺構が認められたため精査を行い、個別に遺構の調査にあたった。なお、F区の地山面の標高は他の調査区と比較し最も高い値を記録していることから、下古志遺跡内で最も標高が高い箇所のひとつと推定できる。

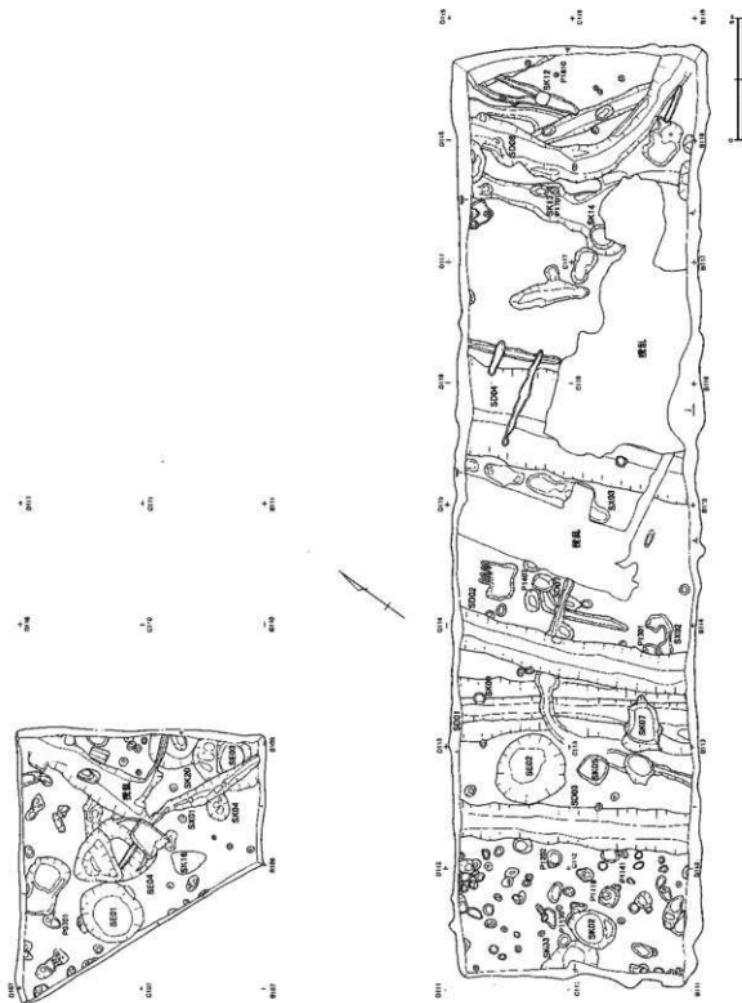
F区の遺構と遺物

地山面での遺構検出を行ったところ、多数の遺構が検出できた。この調査区は111Grで土の地山面が認められたほかはすべて砂地となっていた。また、B115GrからB117Grにかけては深い擾乱を受けており、この箇所の遺構の多くはすでに破壊されていた。

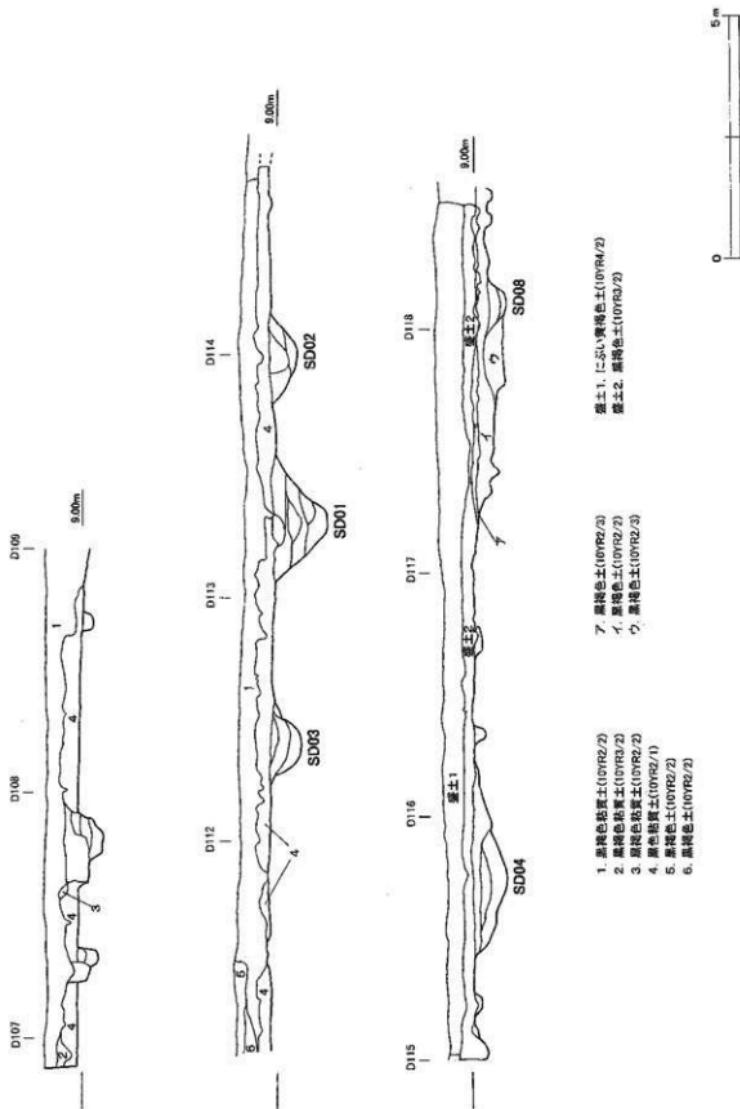
このような状況下、検出した遺構の種類は井戸跡、土坑、ピット、溝状遺構などである。これらのうち良好な出土遺物のあった遺構を主として以下に個別に報告する。

杭名称	X座標	Y座標	杭名称	X座標	Y座標
B107	-73147.749	52188.003	B114	-73126.966	52216.164
C107	-73143.726	52185.034	C114	-73122.943	52219.133
D107	-73139.703	52182.065	D114	-73118.920	52222.102
B110	-73138.842	52200.072	B117	-73118.058	52228.233
C110	-73134.819	52203.041	C117	-73114.035	52231.202
D110	-73130.796	52206.010	D117	-73110.012	52234.171
B111	-73135.873	52204.095	B119	-73112.120	52236.279
C111	-73131.850	52207.064	C119	-73108.097	52239.248
D111	-73127.827	52210.033	D119	-73104.074	52242.217

第3表 F区主要基準杭座標一覧表



F01図 F区遺構配置図 ($S=1/200$)

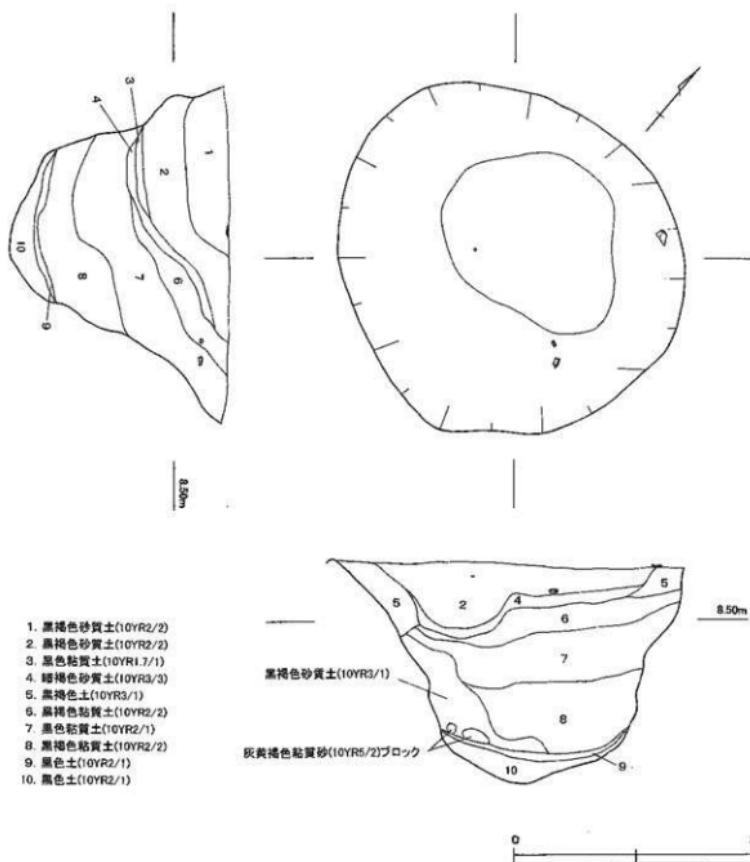
F02図 F区Dラインセクション図 ($S=1/100$)

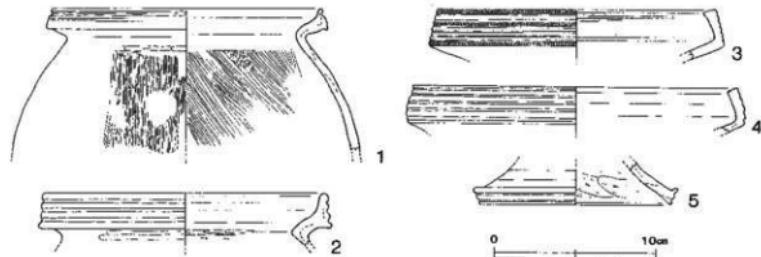
井戸跡

SE02 (F03~F05図)

C112GrからC113Grにかけての標高8.97mの地山面でSE02を検出した。上端の平面形は径2.8m程度の不整な円形を呈しているが、下部に向かうほど径が小さくなり、底付近では径1.4m程度となる。また、検出面から底までの深さは180cmを測り、標高は6.70mである。

覆土は10層に分層可能で、ここからビニール袋1袋分の土器片のほか、古銭が1点出土している。土器片は弥生土器を主としており、その他に土師器や中世土師器片が少量混ざっている。これら出土遺物のうち実測可能なもののみを選別し図示した。

F03図 SE02実測図 ($S=1/40$)

F04図 SE02出土弥生土器実測図 ($S=1/3$)F05図 SE02出土古銭拓影 ($S=1/1$)

F04-1～F04-5は中期から後期にかけての弥生土器片であるが、図示したもの以外に中世土師器の破片が出土していることから、これらの弥生土器片は遺構の時期を示すものではない。SE02は弥生時代中期から後期にかけての土器片を出土するSD01を切って焼かれているため、おそらく、図示した弥生土器片はこの遺構から混入したものと思われる。

F05-1には古銭を示した。表の文字が磨滅しており解読不能であるため詳細は不明である。また、裏には文字の痕跡は残っていない。

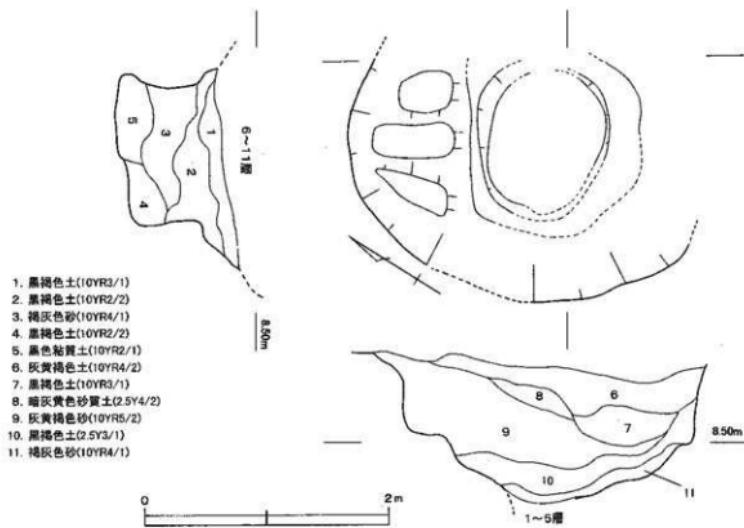
この遺構の性格については、底部付近で湧き水が著しいことから井戸と考えられる。また、井戸側を有していた痕跡が認められず覆土中にもその残骸などが見当たらないため、素掘りであった可能性が高い。

SE03 (F06図)

B108Grの標高9.24mの調査面でSE03を検出した。調査区壁に阻まれ、他遺構の搅乱も受けているため一部の検出にとどまっているが、上端で径3m程度の円形の平面形を呈すると推測される。また、底の平面形は径1m程度の円形を呈しており、最下底の標高は7.35mである。調査の立ち上がりは変則的で、底から標高8.04m付近まではほぼ垂直に立ち上がっている。それから標高8.50mまでは比較的緩やかであり、更に上位の上端に至るまでは急である。また、遺構の北西壁には標高8.56m付近に段が認められる。

覆土については11層に分層可能であるが、包含遺物は少なく、須恵器と中世土師器の破片が僅かに出土しただけである。これらは、上層からの出土であるため遺構の時期を示すものではない。

なお、この遺構の性格については井戸と考えられるが、覆土中に石や板材などが検出できなかったことから、井戸側を有しない素掘りであったと推定できる。

F06図 SE03実測図 ($S=1/40$)

SE04 (F07~F10図)

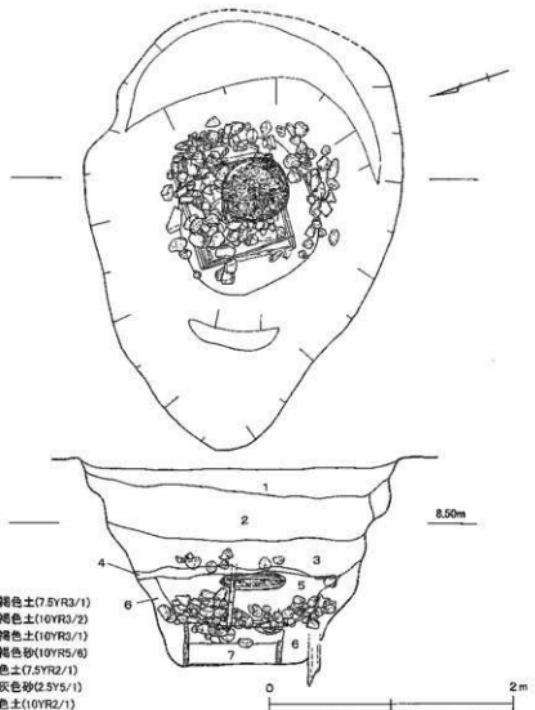
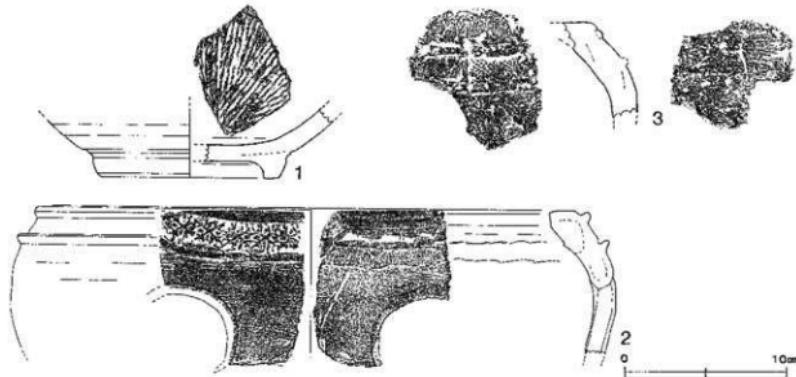
C107GrからC108Grにかけての標高9.04mの調査面でSE04を検出した。他の遺構によって上部に搅乱を受けているが、調査に影響を与えるものではなかった。上端の平面形は梢円形を呈しており、規模は長径3.6m程度、短径2.6mであるが、下端では径130cm前後の円形におさまっている。また、深さについては170cmを測り、底の標高は7.34mである。

この遺構は井戸跡であり、下部施設が残存していた。覆土の上層から順に述べると、まず、第3層から第7層で5cm~15cm程度の砾を多数検出した。これらの砾は、井戸側を形成していたものと思われる。

続いて第5層上層において竹製の笊を検出した。径55cmの円形を呈しており、幅0.6cm~1cmの薄く切った竹材を市松状に編んだものを、幅2cmの薄い部材で枠を止めている。井戸廃棄時の祭祀に用いられたものであろう。

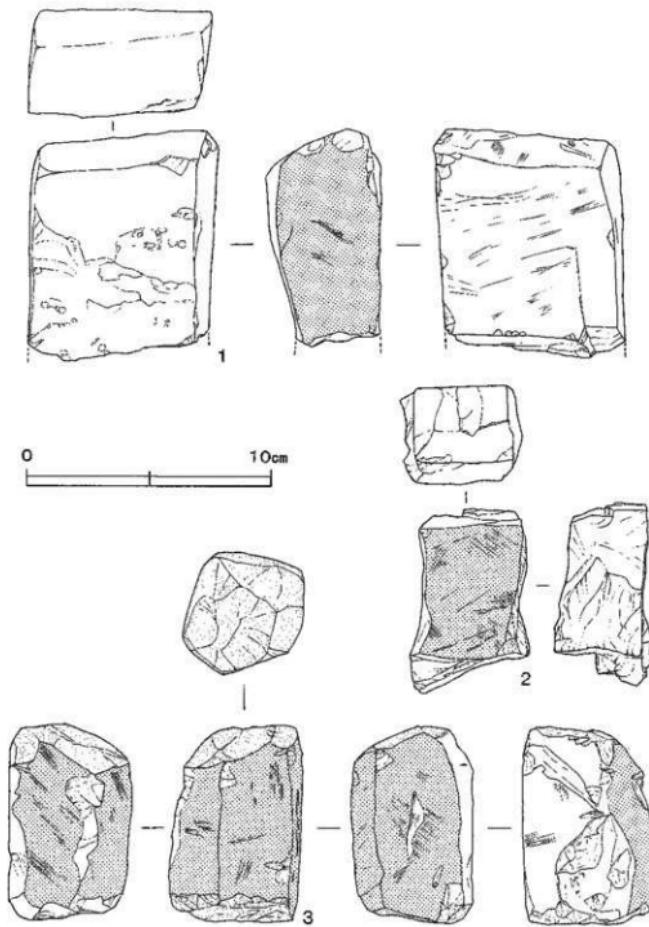
この笊から第7層にかけては竹筒が立った状態で検出できた。径4cmを測るものであり節は抜かれている。残存している長さは44cmであるが上端には折れた形跡が残り、先ほどの笊を突き破っていたようである。笊上位の土の重みによっての現象か、あるいは、当初から笊を突き破った状態で埋められたのかは不明である。また、竹筒の下端は斜めに鋭く削られていることから、埋設時には竹筒を突き刺して立て、周りに土を埋めたと推定できる。この竹筒も廃棄時の祭祀に関わるものと考えられる。

最後に木枠の施設を検出した。最下底上面に設置されていることから、この施設は水溜と考えられる。平面形は一辺84cmの正方形であり、横板によって形成されたものが二段確認できた。横板に用いられている部材の寸法は、長さ82cm、幅15cm~18cm、厚さ2.5cm~4cmである。それぞれの部材はF10図

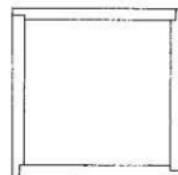
F07図 SE04実測図 ($S=1/4$)F08図 SE04出土瓦質土器実測図 ($S=1/4$)

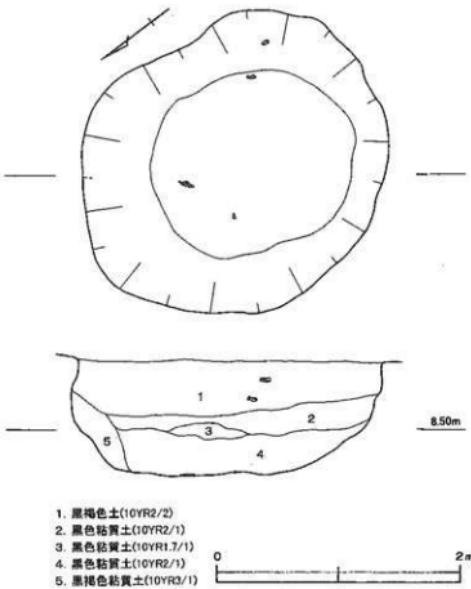
に示したとおり一端の内側を鉤状に加工し、そこに他の部材の加工が施されていない。端を直角に接合している。なお、釘やたがなどは出土していないため、各部材の接合方法は不明である。また、四隅に隅柱はなかったものと思われる。

出土遺物については、少量の土師器、須恵器、瓦質土器、陶磁器の小片のほか、石製品も確認しており残存状態の良いものを図示した。F08-1は指鉢であり、貼り付け高台を有している。F08-2・F08-3は火鉢であり前者の体部には長径6cm程度を測る橢円の透しが認められる。また、F09-1～F09-3には磁石を示している。

F09図 SE04出土砥石実測図 ($S=\frac{1}{2}$)

図示した火鉢はいずれも第5層から出土している。瓦質土器であり14世紀から15世紀の所産と思われる。第5層と第7層は井戸廃棄時の埋上と考えられることから、この井戸の廃棄時期は14世紀から15世紀と推定できる。なお、第6層は井戸が築かれた際に水溜の外側に裏込めされた土と考えられるが、出土遺物がないため築造時期は不明である。

F10図 SE04木組井戸模式図
(上から)



F11図 SE01実測図 (S=1%)



F12図 SE01出土弥生土器実測図 (S=1%)

底付近でやや膨らむ袋状を呈している。また、遺構南東寄りには段を有している。

覆土は10層観察できここから少量の弥生上器片が出土しているが、いずれも小片であり遺構の時期を示すかどうかは不明である。

SK03はSK02の西で検出した土坑である。調査区壁の沿いで検出したため全体の半分以下の検出にとどまっている。したがって、規模は不明であるが検出した範囲での深さは56cmである。坑底は緩やかな起伏を有し側壁の立ち上がりも比較的緩やかである。

覆土は4層確認できここからビニール袋1袋弱の弥生土器片が出土した。このうち実測に堪えるもののみを図示した。F14-1～F14-6は甕で、F14-7は高环の脚部である。いずれも弥生時代中期後葉のもの

土坑

SE01 (F11・F12図)

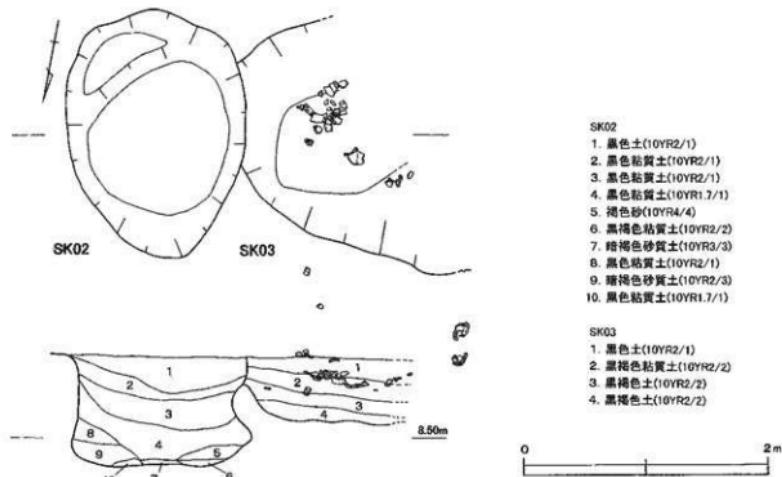
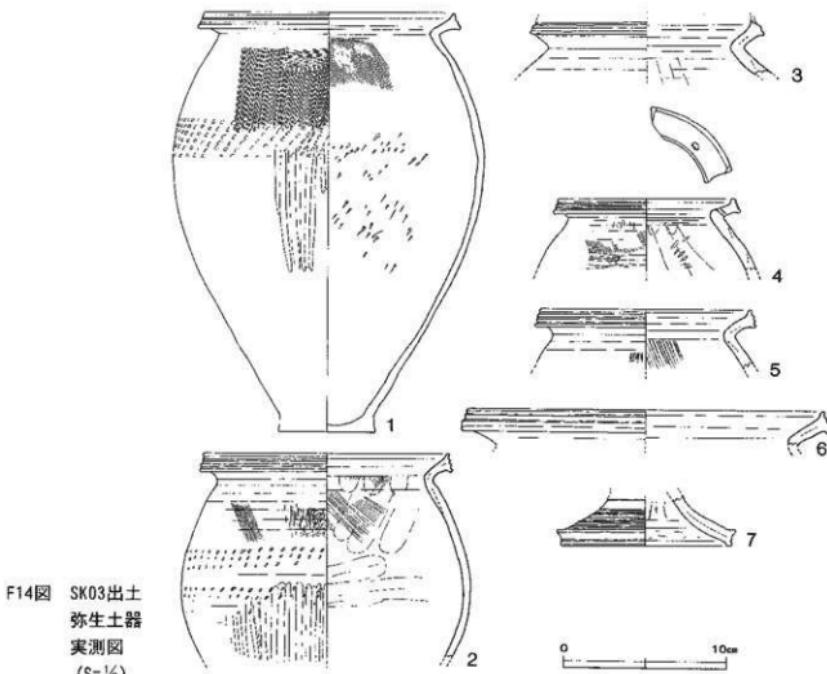
C107Grの標高9.08mの地山面でSE01を検出した。検出時には井戸跡として扱っていたが、調査の結果、遺構の性格は不明であるが土坑であったためここで取り上げる。上端、下端とも平面形は不整な円形を呈しており、それぞれ直径は250cmと150cm程度である。坑底は比較的平坦であり深さは96cmを測る。側壁の立ち上がりは底付近では緩やかであるが、上端付近ではほぼ垂直に変化している。

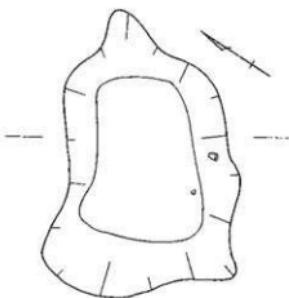
覆土は5層確認でき、ここから弥生土器、須恵器、中世土師器、陶磁器の小片がそれぞれ少量出土している。このうち実測可能なものをF12-1に示した。第1層から出土した弥生時代中期後葉の甕であるが、他に陶磁器片の出土も確認されているため遺構の時期を示すものではない。

SK02・SK03 (F13・F14図)

B111GrからC111Grにかけての標高9.16mの調査面で、切り合ひ関係にあるSK02とSK03を検出した。

SK02は不整な楕円形の平面形を呈する遺構でSK03を切った状態で検出した。長軸はN-16°-Wを指向しており、検出規模は長径204cm、短径147cm、深さ88cmを測る。坑底はほぼ平坦であるが、断面は側壁が

F13図 SK02・SK03実測図 ($S=1/40$)

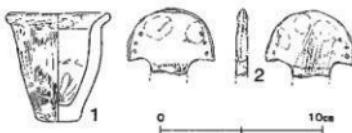
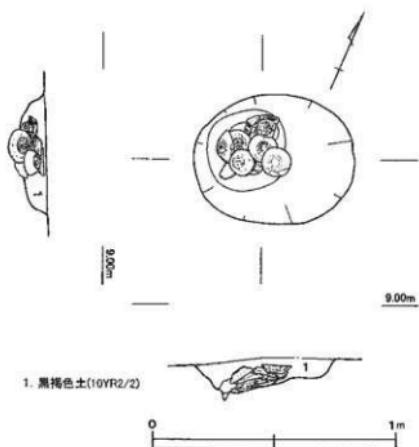
F15図 SK07実測図 ($S=1/20$)

のであり遺構の時期を示すと考えられる。

SK07 (F15・F16図)

B113Grの標高8.82mの調査面でSD01を切った状態でSK07を検出した。N-55°-E方向に長軸を有する不整な方形の平面形を呈しており、検出規模は長辺220cm程度、短辺140cm前後、深さ142cmを測る。坑底は平坦であり側壁の立ち上がりは急である。また、底付近からは湧き水が多かった。

覆土は9層観察でき、ここから弥生土器の破片などがビニール袋半分程度出土している。このうち実測可能なものを図示した。F16-1

F16図 SK07出土弥生土器・土製品実測図 ($S=1/3$)F17図 SK12実測図 ($S=1/20$)

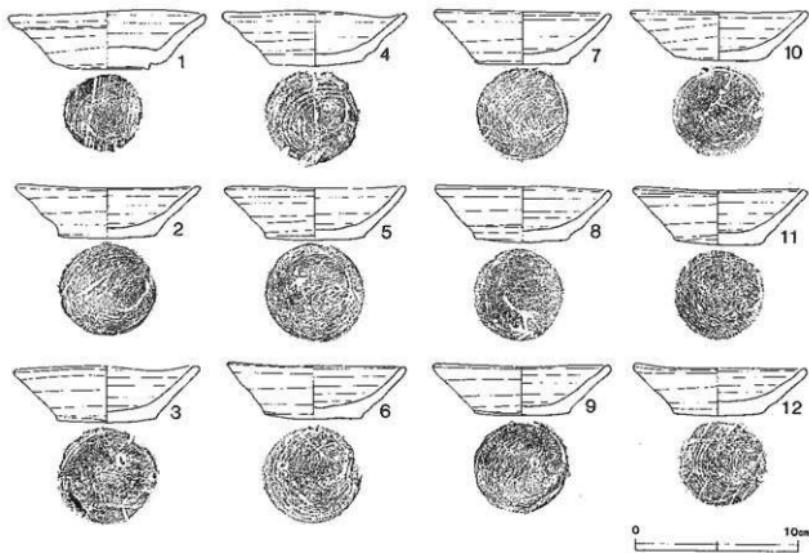
は第5層から出土したミニチュア土器であり、F16-2は第8層から出土した分銅形土製品である。いずれも弥生時代のものであるが、他の出土遺物には中世土器の破片も認められるため遺構の時期を示すものではない。

なお、SK07から出土する弥生時代の遺物は、切り合い関係にあるSD01から混入したものと推定される。

SK12 (F17・F18図)

C118Grの標高8.79mの調査面において他の遺構を切った状態でSK12を検出した。平面形はN-67°-E方向に長軸をとる楕円形を呈しており、検出規模は長径67cm、短径54cmを測る。坑底は遺構南西寄りが最も落ち込むのであるが、この箇所の深さは15cmと浅い。しかし、

この中から12点のほぼ完形の壺が重なって出土している。それぞれ若干法景が異なり、また、体部での器皿の立ち上がりが直線的であるものや、やや外反するものなど多少の違いが認められるが、いずれも16世紀頃の所産と考えられ遺構の時期を示す。これらは鍋壺具である可能性もあるが、確証がないため遺構の性格は不明である。



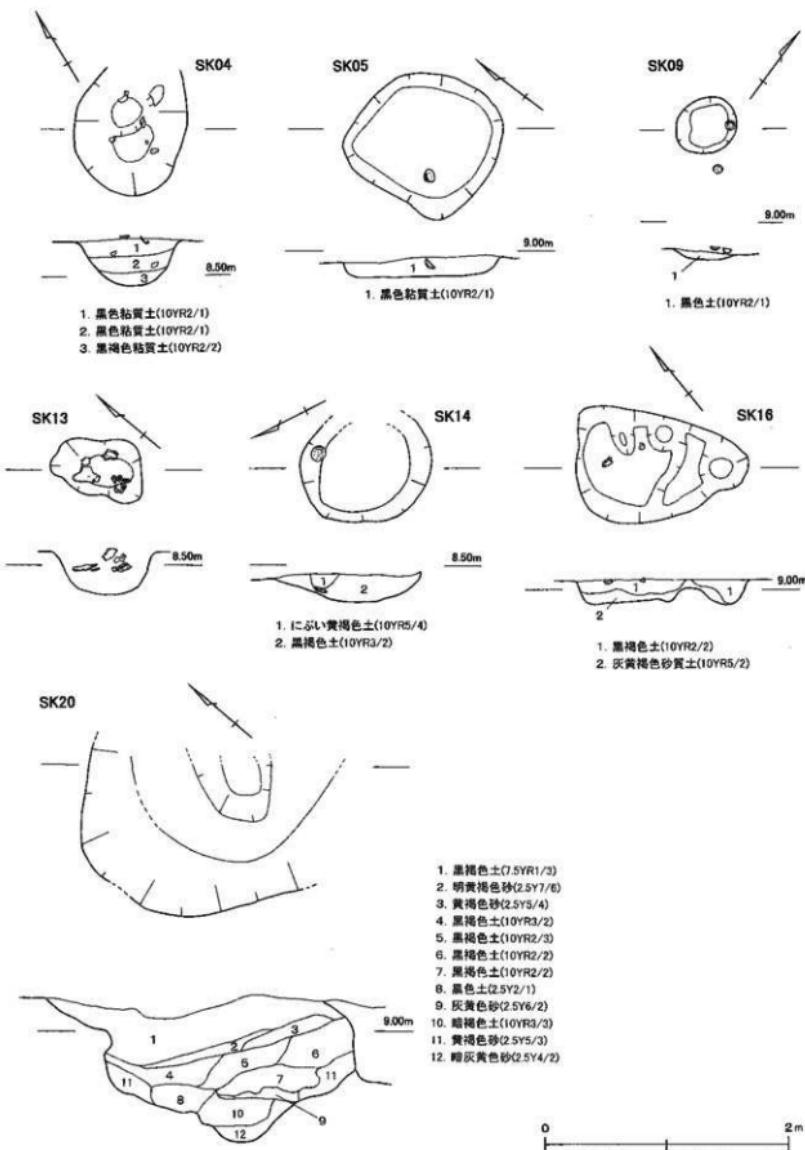
F18図 SK12出土中世土師器実測図 (S=1%)

その他の主要土坑 (F19・F20図)

SK04はB108Grの標高8.81mの調査面でSX01に切られた状態で検出した。平面形はN-39°-E方向に長軸をとる長径120cm程度、短径90cmの楕円形を呈しており、深さは40cmを測る。覆土は3層に分層可能で、ここから少量の弥生土器片が出土しており実測に堪えるものをF20-1に示した。中期後葉の壺であり遺構の時期を示すと考えられる。

SK05はB112Grの標高8.96mの調査面で検出した。平面形は長さ115cm、幅110cmの不整な方形を呈しており、平坦な底までの深さは18cmと浅い。覆土からはF20-2に示す中世土師器の壺が1点のみ出土した。12世紀から13世紀のものと考えられ遺構の時期を示すと思われる。

SK09はC113Grの標高8.78mの調査面でSD01を切った状態で検出した。平面形は径48cmの円形を呈しており、深さは9cmと浅い。覆土からはF20-3・F20-4に示す中世土師器が2点完形で出土した。前者は小型であるが壺と考えられる。時期は不明であるが、後者の小皿が12世紀から13世紀の所産と考えられることから同時期頃のものと思われる。これらの遺物は遺構の時期を示すと推定される。



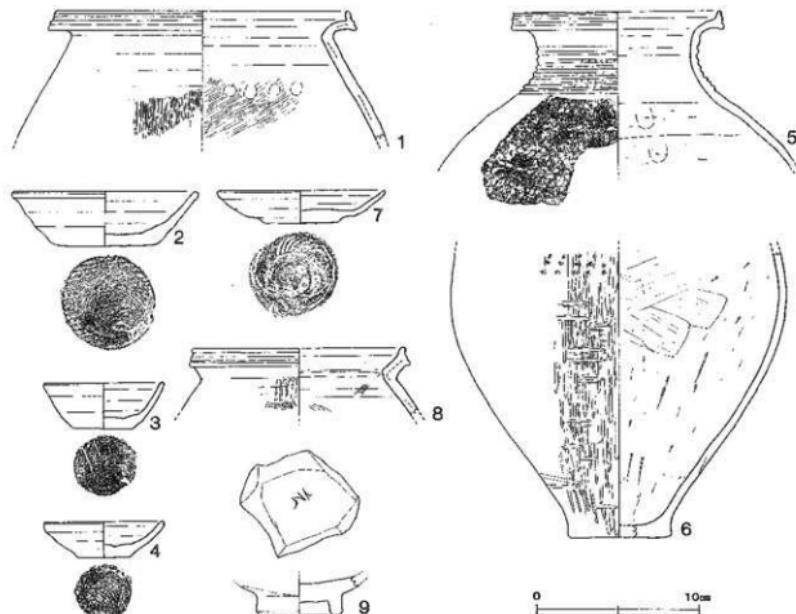
F19図 その他の主要土坑実測図 (S=1%)

SK13はC117Grの標高8.61mの調査面で他の遺構を切った状態で検出した。いびつな平面形を呈しており検出規模は長さ75cm、幅45cm前後、深さ35cmを測る。覆土からはF20-5・F20-6に示す比較的大きな弥生時代中期後葉の土器片が出土しておりこれらが遺構の時期を示す可能性はあるが、他に出土した小片の中には須恵器片が1点認められることから断定はできない。

SK14はB117Grの標高8.44mの調査面で他の遺構を切った状態で検出した。一部に擾乱を受けてはいるが調査に影響を与えるものではなかった。円形の平面形を呈しており、検出規模は径100cm程度、深さ24cmを測る。2層に分層可能な覆土からはF20-7に示す土師器の皿が完形で1点のみ出土している。12世紀の所産と思われる遺構の時期を示す遺物であろう。

SK16はB107GrとB108Grにまたがる箇所の標高9.09mの地山面で検出した。平面形は不整形であり、検出規模は長さ142cm、幅38cm～96cmを測る。遺構の南東寄りと北西寄りの2箇所でやや深く落ち込み、ともに深さは20cm程度である。覆土は2層確認でき、ここから少量の弥生土器片が出土した。F20-8は中期後葉の甕であり遺構の時期を示すと考えられる。

SK20はB108Grの調査区壁際標高9.30mの調査面においてSE03に切られた状態で検出した。一部の調査にとどまつたが、平面形は円形または楕円形を呈すると推測され、検出規模は径280cm程度、深さ121cmを測る。12層に分層可能な覆土からは、少量の中世土師器片のはかF20-9に示す青磁が出土している。15世紀から16世紀の所産と考えられ遺構の時期を示すと思われる。なお、遺構の性格は不明である。

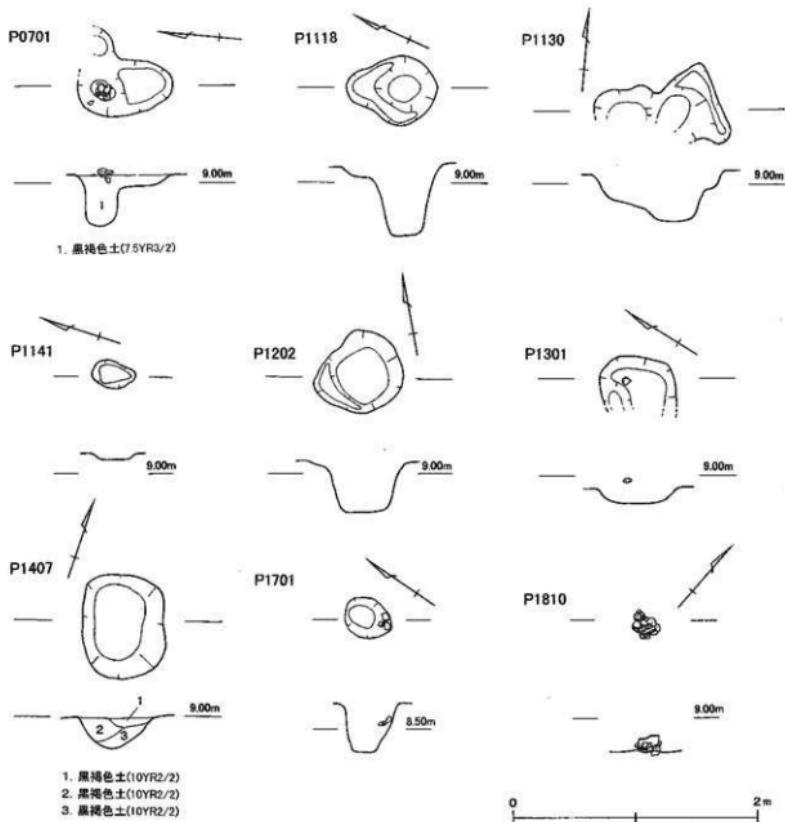


F20図 その他の主要土坑出土土器等実測図 ($S=1/3$)

ピット (F21・F22図)

P0701はC107Grの標高9.07mの調査面で他の遺構に切られた状態で検出した。「L」字状に折れた平面形を呈しているが、中央が最も落ち込みこの箇所の深さは42cmを測る。覆土は1層のみ確認でき、これからF22-1に示す比較的大きな鉢の破片が出土している。弥生時代中期後葉のものであり遺構の時期を示すと考えられる。

P1118はB111Grの標高9.14mの地山面で検出した。平面形は不整な円形を呈しており、検出規模は径60cm前後、深さは58cmを測る。覆土からは少量の弥生土器片が出土しており実測可能なものをF22-2～F22-4に示した。器種は順に甕、直口口縁の鉢、土鍤である。遺構の時期はF22-2から推定して弥生時代中期後葉と思われる。

F21図 主要ピット実測図 ($S=1\%$)

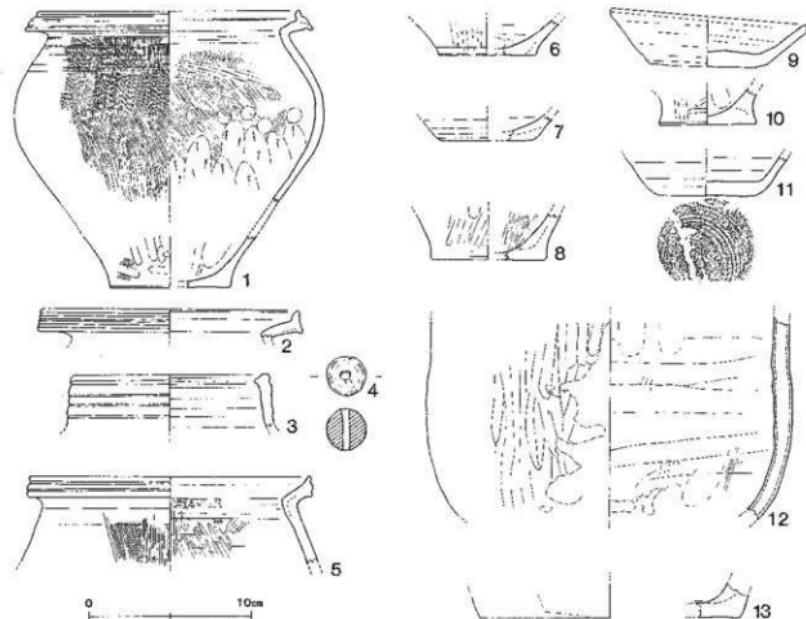
P1130はB111Grの標高9.10mの調査面で検出した。SK02によって搅乱を受けているため平面形や規模などについては不明であるが、検出できた範囲での深さは41cmを測る。覆土からは弥生土器片が僅かに出土しており実測可能なものをF22-5に示した。中期後葉の壺であり遺構の時期を示すと考えられる。

P1141はB111Grの標高9.17mの地山面で検出した。楕円形の平面形を呈するが検出規模は長径36cm、短径22cm、深さ5cmと小さい。覆土からはF22-6に示す弥生土器の底部片が1点だけ出土しているが、遺構の時期を示す資料であるか定かではない。

P1202はC112Grの標高9.09mの地山面で検出した。不整な円形の平面形を呈しており検出規模は径70cm程度、深さ41cmを測る。覆土からは土器の小片が2点出土しており、うち実測可能な1点をF22-7に示した。中世土師器の坏底部と思われるが時期は判然としない。

P1301はB113Grの標高8.91mの調査面において検出した。SD02によって搅乱を受けており全容は不明であるが、検出した範囲では幅が62cmで、深さは13cmと浅い。覆土からはF22-8に示す弥生土器の底部片が出土した。出土遺物がこの1点だけであるため、遺構の時期を示すかどうかは定かではない。

P1407はC114Grの標高9.00mの調査面で検出した。平面形は丸味を帯びた方形を呈しており長軸はN-50°-Wを指向する。検出規模は長辺86cm、短辺66cm、深さ26cmを測る。覆土は3層観察できここから



F22図 主要ピット出土土器等実測図 (S=1%)

F22-9に示す中世土師器の坏が1点だけ出土した。16世紀頃の所産と思われ、第2層からほぼ完形で出土したことから遺構の時期を示すものであろう。

P1701はC117Grの標高8.71mの調査面で他の遺構を切った状態で検出した。平面形は楕円形を呈し、検出規模は長径40cm、短径32cm、深さ40cmを測る。覆土からは少量の弥生土器片が出土しており、実測に堪えるものをF22-10に示した。中期のものと思われ遺構の時期を示す可能性がある。

P1810はC118Grの標高8.74mの地山面で検出した。この遺構はかろうじて底付近を検出したものであるが、上位に2cm~8cm程度の礫とF22-11~F22-13に示す土器片が密集して出土している。これらが遺構の内部に入っていたものとすると、遺構の規模は径24cm、深さ16cmと推定できる。遺構の性格は不

明であるが、遺構の時期はF22-11に示す坏から推定すると中世と思われる。

溝状遺構

SD01 (F23~F31図)

SD01はB113GrからC113Grにかけての標高9.00m前後の調査面において検出した。SK07とSD02によって擾乱を受けてはいるが、部分的であり調査に影響を与えるものではなかった。SD01は調査区には直交して延びておりその方向はN-33°-Wを指向するが、ごく僅かに北東方向の湾曲も認められる。

検出した長さは9.5mであり、上幅2.0m~2.5m、下幅0.6m前後、深さ1.1mであった。断面形は漏斗形を呈しており側壁の立ち上がりは40°前後で変化している。底の標高はa-a'ラインで7.95m、b-b'ラインで7.92m、c-c'ラインで7.92mとほぼ同じであることから、調査区内での勾配は認められない。

覆土については全体で9層確認しており、これらの状況から数回の掘り返しが行われたものと思われる。また、第3層と第3'層で砂質土が認められるものの、砂はランダムに含



F23図 SD01実測図 ($S=1/60$)

まれており葉理構造などを形成することはないと推定できる。

覆土からは多く出土遺物がありその量はコンテナ2箱分に上る。すべて、弥生土器の破片であり実測可能なものに若干選別を施し図示した。

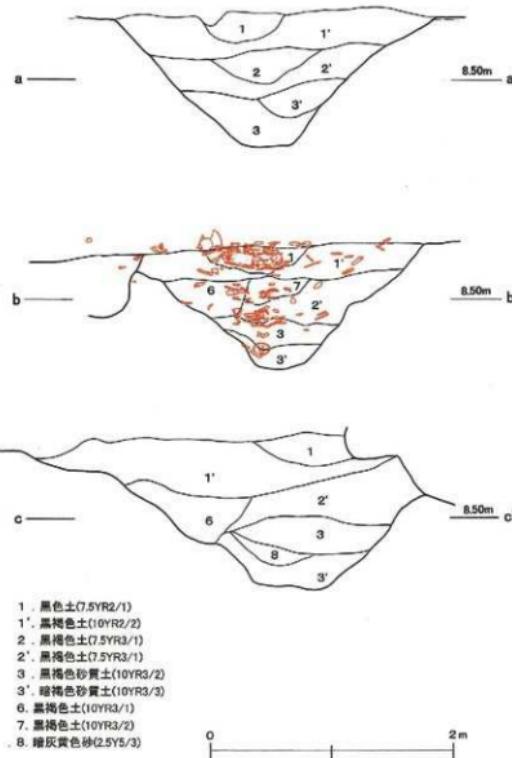
F25-1～F26-8には壺を示した。F25-1～F25-4の通常の壺のほかに、F26-1～F26-4の広口壺、F26-5～F26-8に示す直口壺が出土している。なお、F26-8は把手を有しており、胴部内面を除く全面に赤色塗彩が施される秀品である。壺の時期については、F25-1～F25-4とF26-8が松本IV-2期から松本V-1期、F26-1～F26-7が松本IV-1期から松本IV-2期の範疇に収まるであろう。

次に壺を図示した。F27-1は大型の壺である。口縁部と底部を欠損しているものの胴部の破片はほとんど接合した。この壺は、破片の出土状況から破損したものと廃棄したものと考えられる。法量が中程度の壺は最も多く出土しており、これらをF28-1～F29-14に示した。F28-1～F29-8には松本IV-1期から松本IV-2期までのものを取り上げ、F29-12～F29-14には松本V-1期から松本V-2期のものを示した。

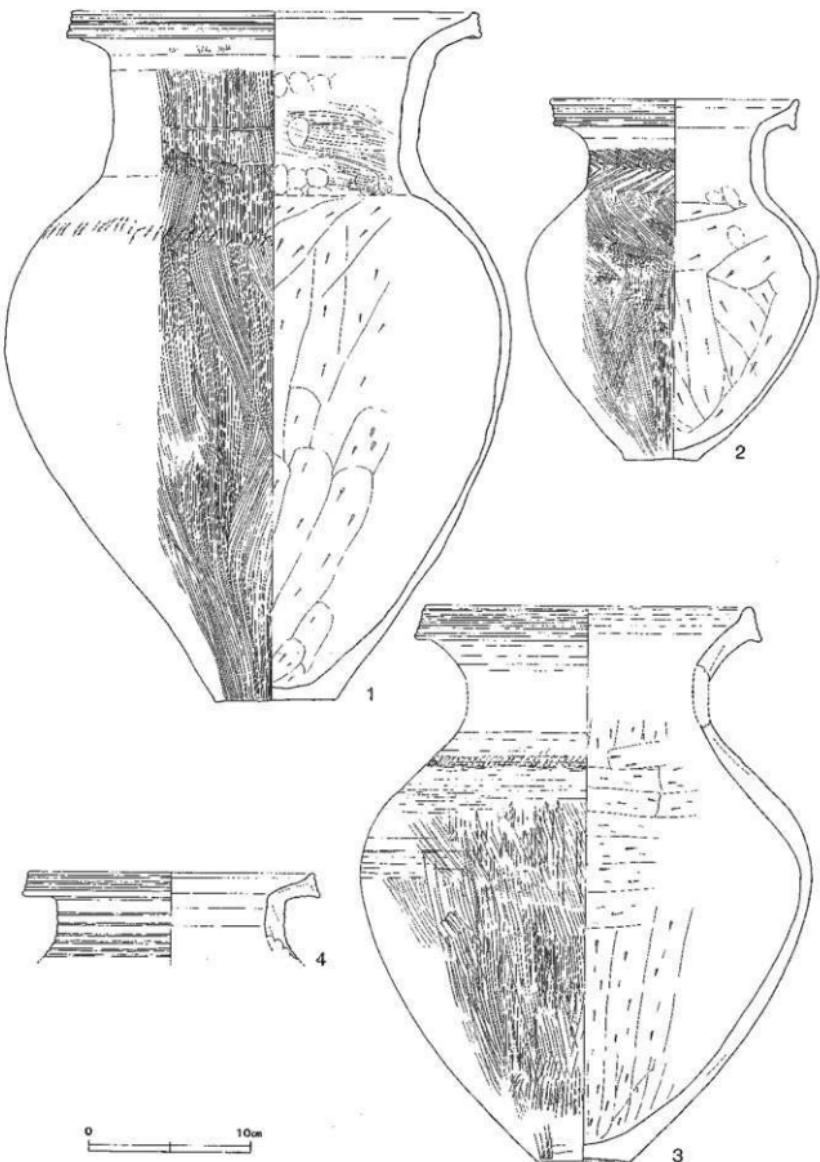
統いて鉢と考えられるものを取り上げている。F30-1は頸部がくびれないタイプのものであり、F30-2～F30-4は頸部が屈曲して開口するものである。また、F30-5は台付鉢であり、F30-6は台部のみの破片である。鉢の時期はF30-1～F30-3が松本IV-1から松本IV-2期、F30-4・F30-5が松本V-1期に相当すると考えられる。

F30-7～F30-15には高壺を取り上げた。F30-7・F30-8は壺部が内湾して開口し、F30-9～F30-11は屈曲して開口している。また、F30-12・F30-13は口縁端部付近で器壁が屈曲しており、上下に拡張した端面に凹線文を巡らせており、F30-15は壺部を欠いているが、全面に赤色顔料が塗布されており、凹線文と刻目文で賑々しく飾られている。高壺の時期は、F30-7～F30-11とF30-15が松本IV-2期、F30-12・F30-13が松本V-1期に相当すると考えられる。

最後に出土例が少ないものをまと

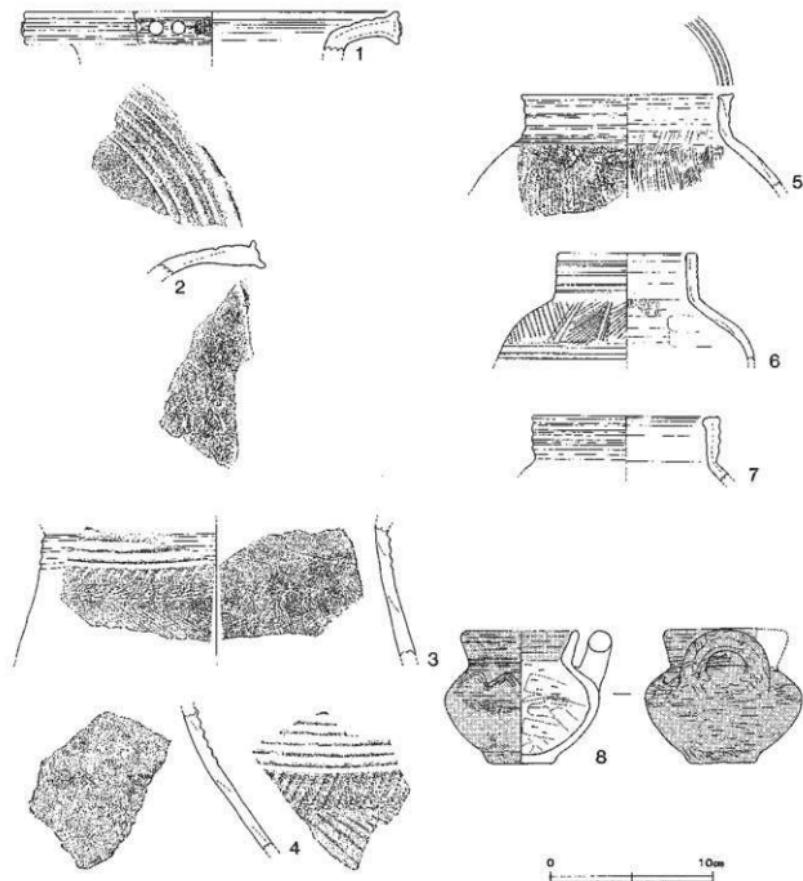


F24図 SD01土層図 (S=1%)

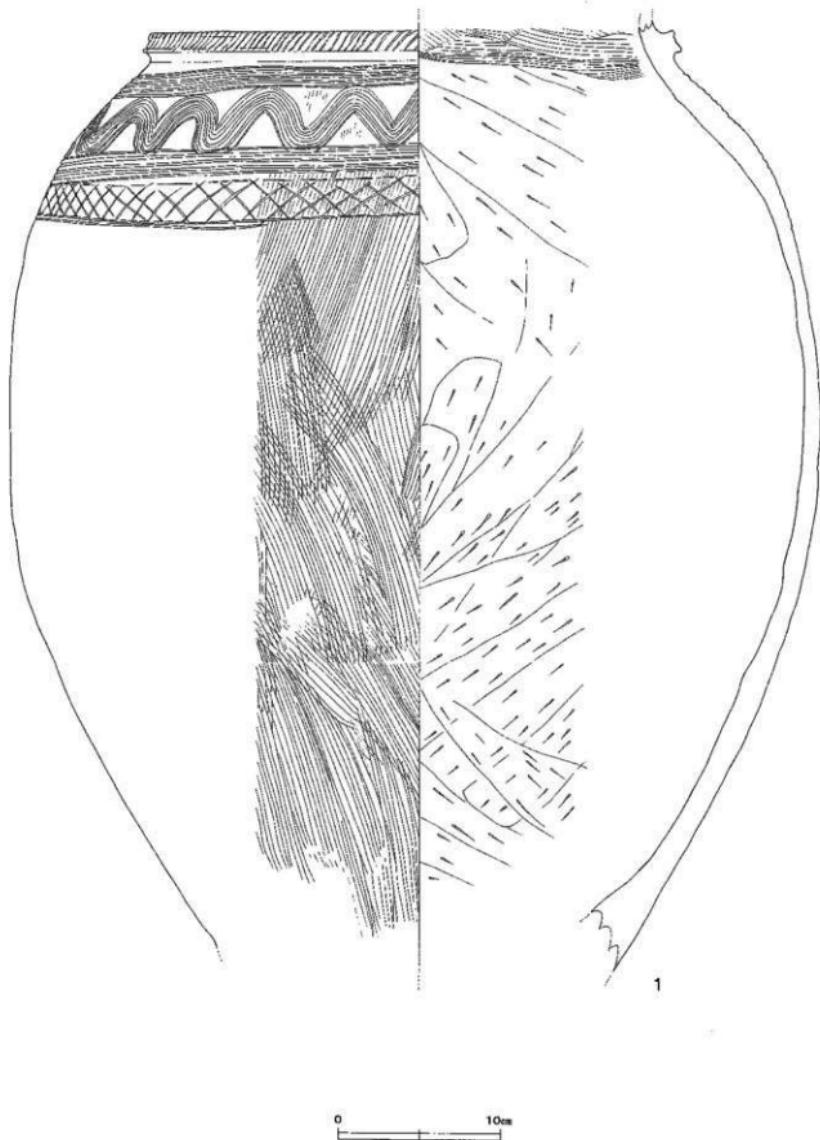


F25図 SD01出土弥生土器実測図1 (S=1%)

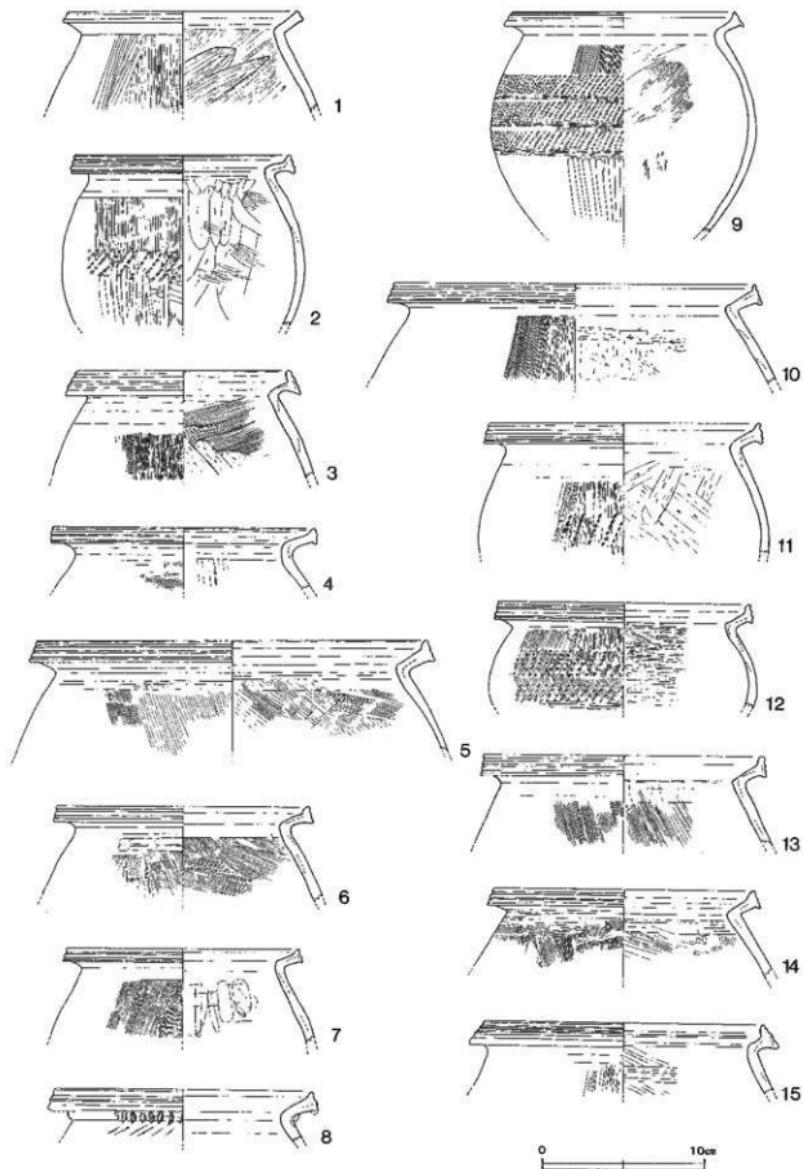
めて示した。F31-1は口径32.2cmを測る大型の土器である。器壁はほぼ垂直に立ち上がって開口しており、口縁端部付近には把手に用いられたとも思われる突起部が巡らされている。なお、この土器の用途や時期は不明である。F31-2は台形土器の上半部である。頂部の平坦部は小さく据部が大きく広がる器形と思われる。外面全面に櫛歯状工具により平行沈線を施している。松本V-1期に相当するものであろう。F31-3はミニチュア土器である。口縁部は短く外反して開口し胴部はやや膨らみを持つ。また、底は平底であるが安定性を欠いている。なお、この土器の時期は不明である。F31-4～F31-6には把手を示した。いずれも把手付台付鉢のものと思われ、時期は松本IV期頃と考えられる。



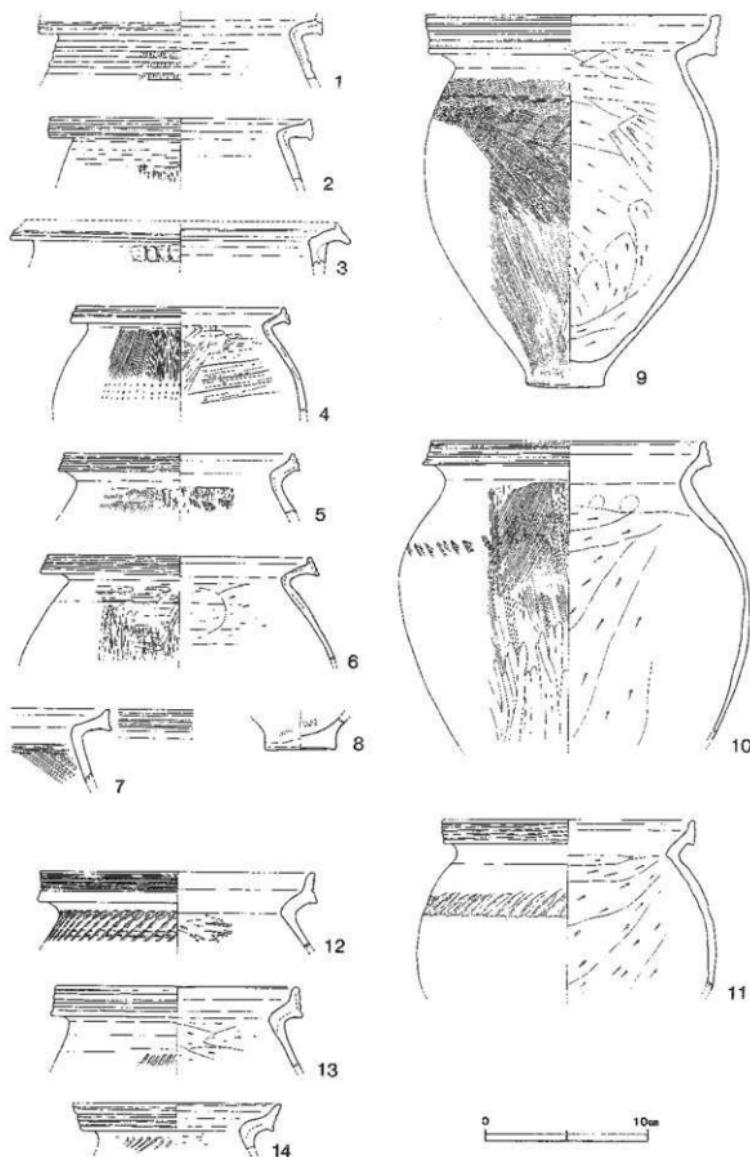
F26図 SD01出土弥生土器実測図2 (S=1/2)



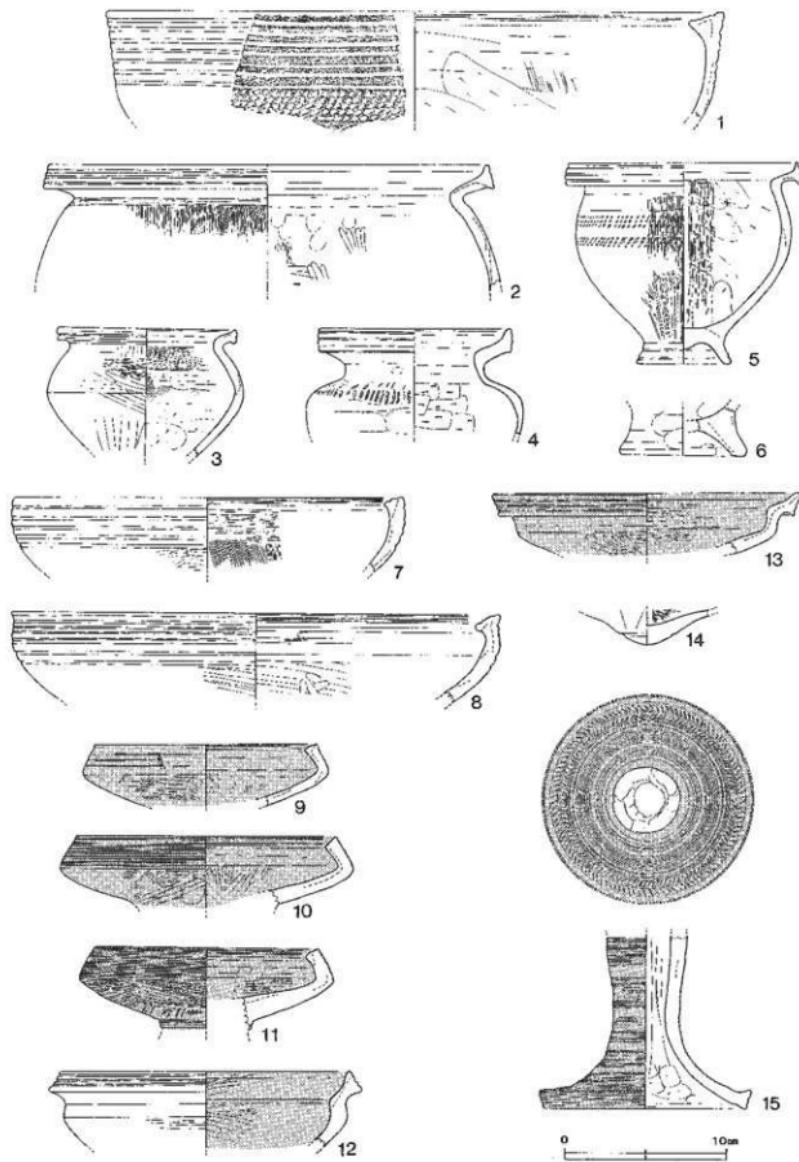
F27図 SD01出土弥生土器実測図3 ($S= \frac{1}{3}$)



F28図 SD01出土弥生土器実測図4 (S=1/2)

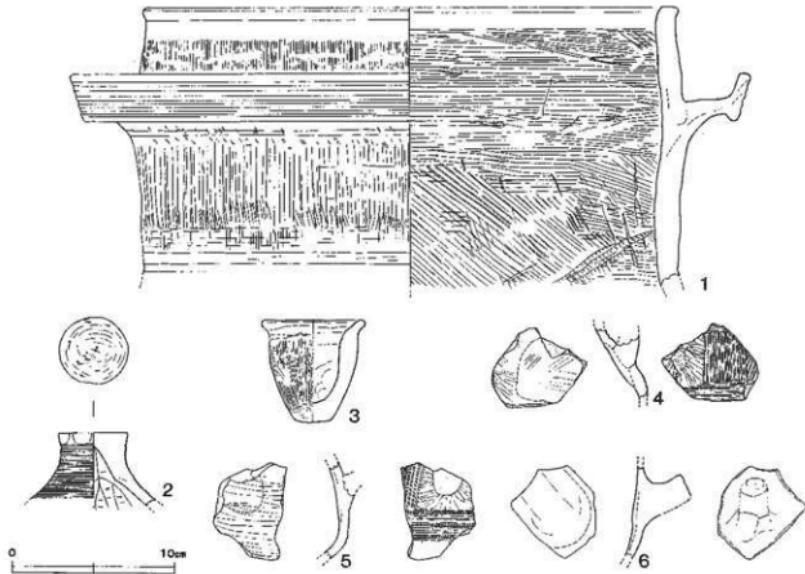


F29図 S001出土弥生土器実測図5 ($S=1/3$)



F30図 SD01出土弥生土器実測図6 (S=1/2)

このように出土遺物は松本IV-1から松本V-2までのもの、つまり、弥生時代中期後半から後期前半までのものが出土しているが、層ごとに遺物の時期が分かれるということはない。また、出土量が多いのは松本IV-2期のものであることから、この溝状造構は弥生時代中期後葉に築かれた後にしばらくしてから中核期を迎える、後期前半まで機能していたものと推定できる。また、造構の性格については環濠が考えられよう。

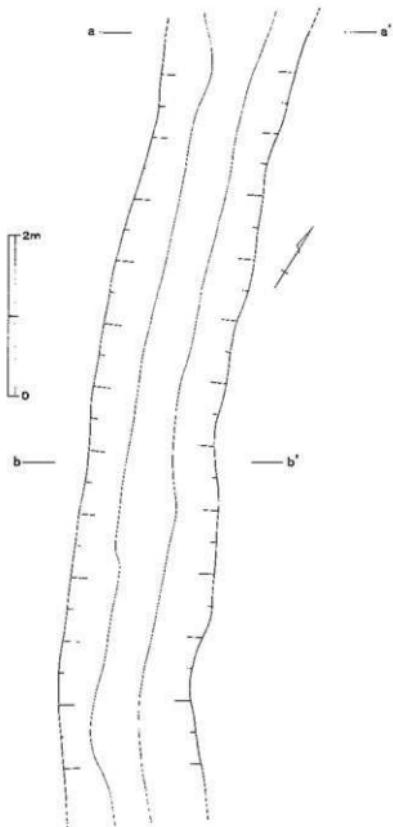
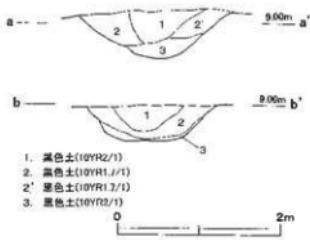
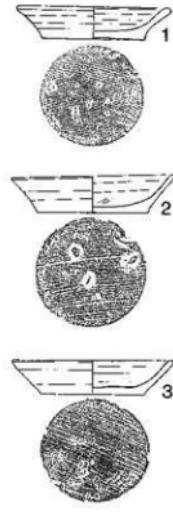


F31図 SD01出土弥生土器実測図7 (S=1/2)

SD02 (F32~F34図)

SD02はSD01の北東に隣接する溝状造構である。標高9.00m~9.14mの調査面で検出しており、P1301、SD01、SD07、SX02などを切っているのが確認できた。DラインとBライン付近の底の中心を結ぶ直線はN-25°-Wを指向するが、東方向への若干の湾曲が認められる。検出規模は上幅146cm~176cm、下幅44cm~70cmを測り、断面は緩やかな「U」字形を呈している。底の標高はa-a'ラインで8.57m、b-b'ラインで8.56m、Bラインで8.52mであることから、調査区内での勾配は認められない。

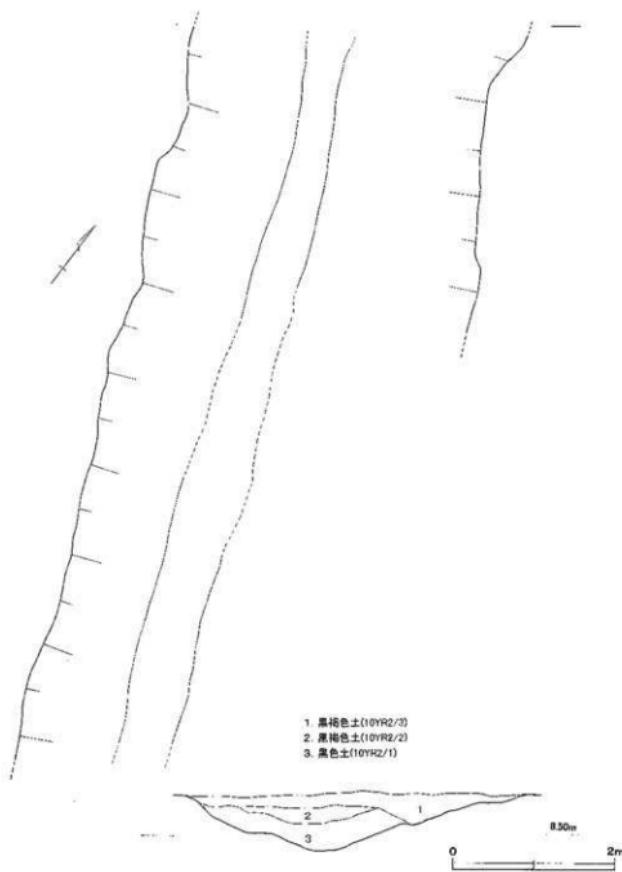
覆土は4層確認できここから少量の弥生土器、土師質土器が出土している。これらのうち実測可能なものをF34-1~F34-3に示した。いずれも土師質土器の皿で、器壁は直線的あるいは僅かに外反して立ち上がり開口し、底面には静止糸切り痕が残っている。これらの時期は古志本郷遺跡土師質土器編VI期に相当することから、造構の時期は近世に下がる可能性もある。

F32図 SD02実測図 ($S=1/60$)F33図 SD02土層図 ($S=1/60$)F34図 SD02出土土師質土器
実測図 ($S=1/3$)

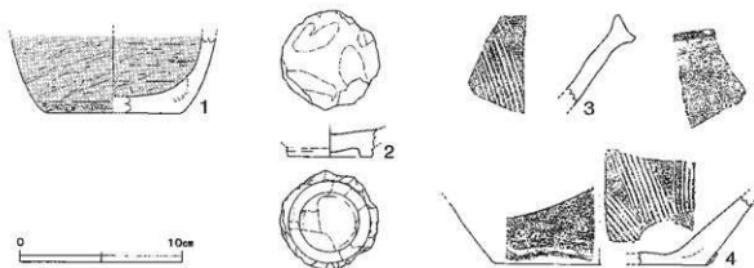
SD04 (F35・F36図)

SD04はB115GrからC115Grにかけての標高9.00mの調査面で検出したやや大型の溝状遺構である。現代の掘削によって一部に擾乱を受けているが、調査にさほど影響を与えるものではなかった。調査区内ではこの遺構はN-33°-W方向に延びており、検出規模は上幅370cm~420cm、下幅44cm~74cmを測る。断面は非常に緩やかな「U」字状を呈しているが、西の側壁の立ち上がりは東の側壁よりやや急勾配である。なお、底の標高はDラインで8.31mである。

覆土は3層確認でき、ここから僅かに弥生土器、土師器、陶磁器の小片が出土した。これらのうち



F35図 SD04実測図 ($S=\frac{1}{6}$)



F36図 SD04出土土器・陶磁器実測図 ($S=\frac{1}{6}$)

実測可能なものを図示した。F36-1は土師器で壺の底部と思われる。全面に赤色顔料が塗布されているが時期は不明である。F36-2は高台を有する底部片であり内外面に施釉されている。朝鮮からの搬入品で16世紀から17世紀のものであると思われる。F36-3・F36-4は備前焼の擂鉢で同一個体と思われる。備前焼第IV期に相当するとみられる。

SD04の性格は不明であるが、出土遺物から遺構の時期は近世以降と推定できる。

SX01 (F37・F38図)

SX01はB108Grの標高9.05mの調査面でSE03、SE04、SK04を切った状態で検出した。この遺構は屈曲しており、BラインからCライン付近まではN-67°-W方向に延びるのであるがそれ以東ではN-89°-Eを指向し、C108-D108ライン付近で途切れている。よって、検出できた長さは7.5mであり、規模は上幅23cm～76cm、下幅8cm～22cmを測る。底の標高はBライン付近で8.36mであるが以西では変化している。

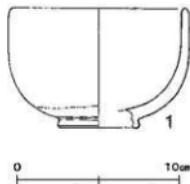
覆土からはF38-1に示す陶器の碗が1点のみ出土しているが、産地や時期は不明である。

その他の主要溝状遺構

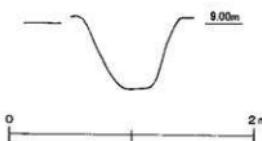
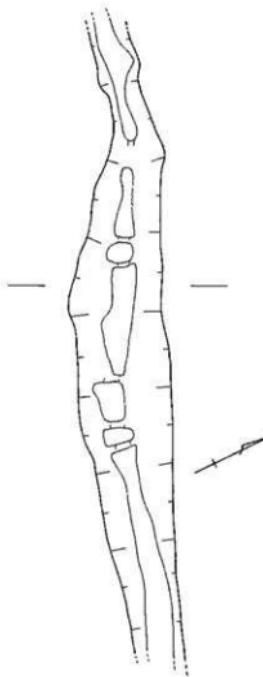
SD03 (F39図)

SD03はB112GrからC112Grにかけての標高9.08m～9.14mの調査面において、他の遺構を切った状態で検出した。調査区にはほぼ直交して延びておりその方向はN-34°-Wを指向する。調査区内で検出した長さは9.4mであり、規模は上幅125cm～170cm、下幅50cm～70cm、深さは52cm～64cmを測る。断面は「U」字状を呈しており、底の標高はCラインで8.56m、Dラインで8.50mであり若干の勾配が認められる。

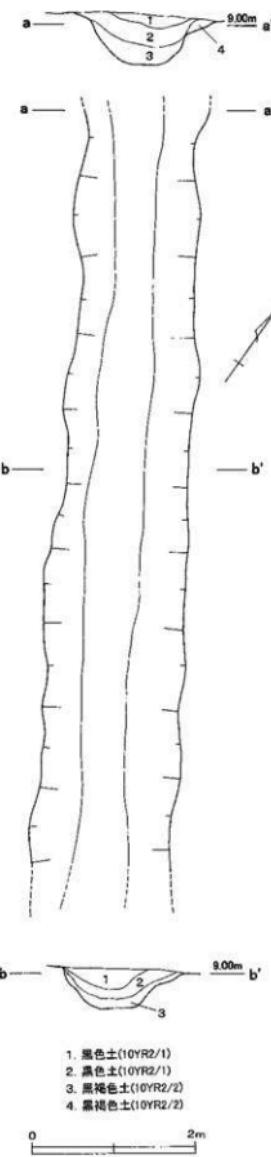
覆土は4層観察でき、ここから僅かに土器片が出土しているが、いずれも小片であり時期など詳細は不明である。



F38図 SX01出土陶器
実測図 ($S=\frac{1}{3}$)



F37図 SX01実測図 ($S=\frac{1}{30}$)

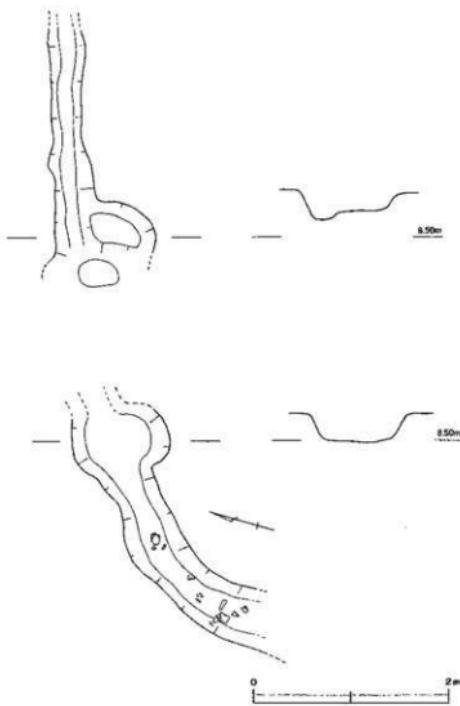
F39図 SD03実測図 ($S=1/50$)

SD07 (F40図)

SD07はC113GrからC114Grにかけての標高8.78m～8.98mの調査面で検出した。SD01を切っておりSD02に切られていた。東方と西方では遺構が途切れていたため、検出した長さは6.8mである。平面的には湾曲しており検出規模は上幅30cm～54cm、下幅12cm～34cmを測る。断面は逆台形を呈しており、底の標高は遺構の東方で8.68m、西方で8.48mとなっている。

覆土からは弥生土器、須恵器、中世土師器の小片が少量出土しており、弥生土器はSD01のものと接合するものも認められた。

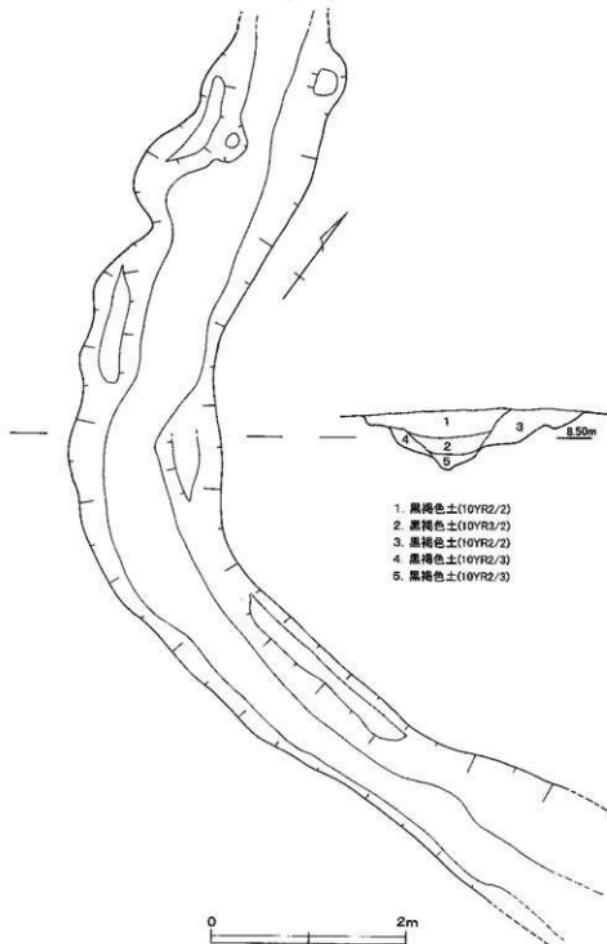
遺構の時期は出土遺物と他遺構との切り合い関係を勘案し中世と考えられる。なお、遺構の性格は不明である。

F40図 SD07実測図 ($S=1/50$)

SD08 (F41図)

SD08はB118-D118ライン付近の標高8.80mの調査面において、長さ10.9mにわたって検出した溝状遺構である。調査区内では緩やかに「L」字状に屈曲しているため、BラインとCライン間ではN-89°-W、CラインとDライン間ではN-18°-Wを指向している。検出規模は上幅90cm～158cm、下幅28cm～68cmを測り、底の標高は8.18m付近である。また、側壁の立ち上がりは比較的緩やかである。

覆土からは少量の中世土器片が出土している。よって、この遺構の時期は中世以降と思われる。

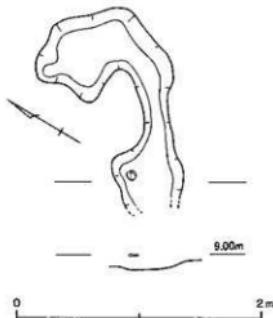
F41図 SD08実測図 ($S=1/50$)

その他の主要遺構

SX02 (F42・F43図)

SX02はB113GrからB114Grの標高8.95mの調査面において、SD02によって切られた状態で検出した。平面形はいびつで、検出規模は長さ180cm程度、幅20cm～70cmを測り、深さは8cmと浅い。

覆土からはF43-1に示す中世土師器が1点のみ出土している。壺の底部と思われる底面には回転糸切り痕が認められる。この遺物は遺構の時期を示すと考えられる。なお、遺構の性格については不明である。

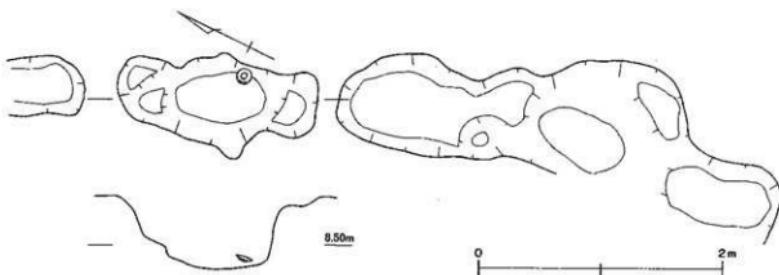
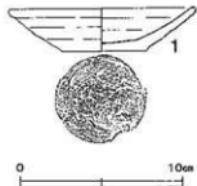
F42図 SX02実測図 ($S=1/50$)F43図 SX02出土中世
土師器実測図
($S=1/50$)

SX03 (F44・F45図)

SX03はB115GrからC115Grの標高8.90mの調査面で検出した遺構である。

当初、平面で観察すると溝状に覆土が繋がっていた。しかし、完掘した結果、N-24°-W方向を長軸にして土坑状の落ち込みが3基並んでいるのが確認できた。このため、この3基の土坑を一連の遺構と捉えている。

規模は南の落ち込みが長さ372cm、

F44図 SX03実測図 ($S=1/50$)F45図 SX03出土中世土師器実測図 ($S=1/50$)

幅64cm～110cm、中央の落ち込みが長さ164cm、幅54cm～82cm、北の落ち込みが長さ54cm以上、幅50cmを測る。

出土遺物があったのは中央の落ち込みだけであり、その他の落ち込みからはなかった。F45-1に示す中世土師器が中央の落ち込みから出土した唯一の遺物であり、標高8.31mの底からやや浮いた箇所でほぼ完形で出土している。12世紀頃の所産であり遺構の時期を示すものであろう。

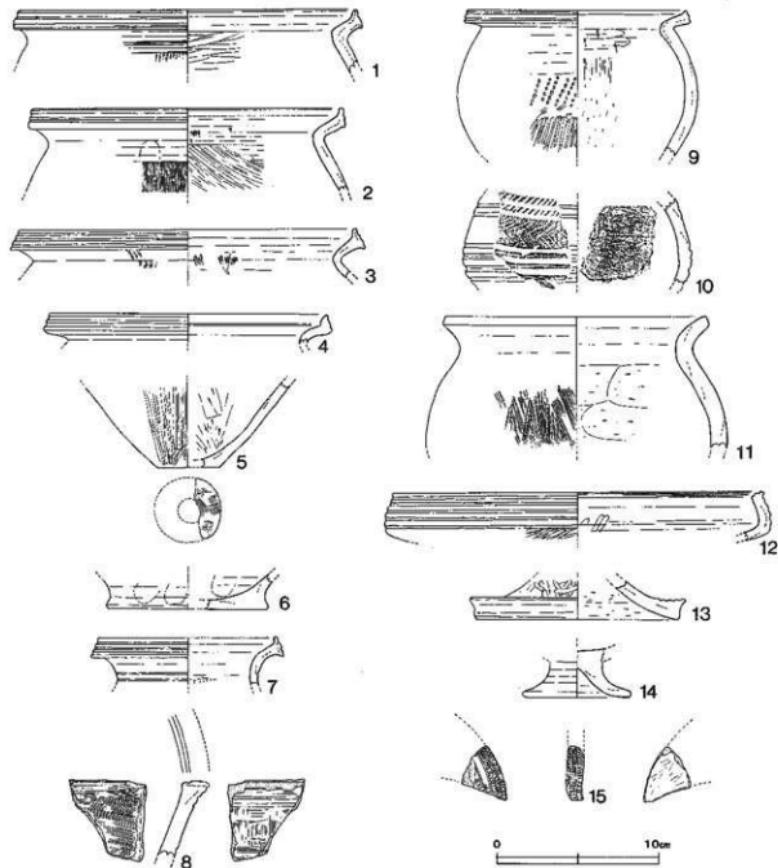
F区遺構外の出土遺物

F区の遺構外からはビニール袋3袋程度の出土遺物があった。内訳は弥生土器、土師器、中世土師器、陶磁器、石製品である。量については弥生土器が目立ち、その他は僅かであった。

弥生土器 (F46図)

弥生土器は中期後葉から後期前半のものが出土している。器種は壺、壺、鉢、高杯、低脚杯、分銅形土製品が認められ、実測に堪えるものはほとんど掲載した。

まず、壺を図示した。F46-1～F46-4は口縁端部が上下に拡張し端面に凹線文を巡らすものであり、松本IV-2期に相当するものである。F46-5・F46-6は壺の底部と思われる。前者には底面に径13mm程度の穿孔が施されている。両者とも時期は中期後葉と思われる。次に、壺を示した。F46-7は口縁端部



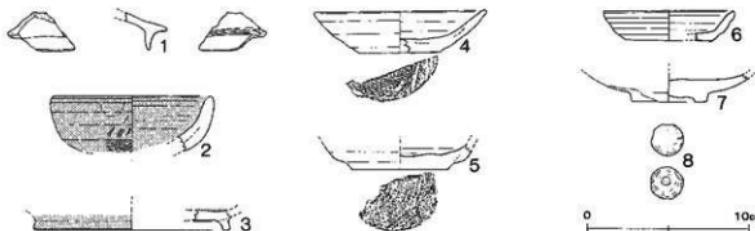
F46図 F区遺構外出土弥生土器実測図 (S=1/2)

が上下に拡張し端面に凹線文を3条巡らせており、松本IV-2期に相当するものである。F46-8は直口壺である。口縁部が外傾して開口するものであり、松本IV期の範疇に収まると思われる。続いて鉢を取り上げた。F46-9は口縁端部が上方に拡張し端面に凹線文を施している。F46-10は高い脚状の台が付く鉢の胴部片と思われる。上方に凹線文と刺突文が組み合わされた文様が施されており、塩町式土器の系譜を引くものと考えられる。F46-11は単純口縁を有する鉢である。この土器の時期は不明であるが、F46-9・F46-10は松本IV-2期に相当するものと考えられる。F46-12・F46-13は高壺を示した。両者とも松本IV-2期頃のものと考えられる。F46-14は低脚壺の脚部であり松本V-4期に相当するものであろう。F46-15には分銅形土製品を示した。小片であるがG区のSD04から出土したG87-16と酷似するパターンの文様が施されているため、同一個体である可能性が高い。

須恵器、土師器、陶磁器等 (F47図)

須恵器、土師器、陶磁器は僅かであるが出土しているため、実測に堪えるものを全て掲載した。

F47-1に須恵器を示した。体部の深さが浅いようであるため壺蓋と思われるが、壺身である可能性もある。大谷5期頃のものであろう。続いて土師器を取り上げた。F47-2は壺である。肉厚の器壁内外面に赤色顔料が塗布されている。F47-3は低い高台が付く底部である。底部外面以外に赤色顔料が塗布されており、平安時代頃の所産と思われる。次に中世土師器を示した。F47-4は底部を僅かに絞り、体部が若干内湾して開口する皿であり、12世紀頃のものと考えられる。F47-5は壺である。底部を強く絞り、底面には回転糸切り痕が認められる。F47-6は小皿である。ごく小片であるが体部が強くナデられており、底面には回転糸切り痕が観察できる。F47-7は中国製の白磁であり、15世紀のものと考えられる。F47-8は径20mmの土玉であり穿孔は施されていない。



F47図 F区遺構外出土須恵器・土師器・陶磁器等実測図 (S=1/2)



石製品 (F48図)

石製品はF48-1に図示した石鏃1点のみの出土であった。

流紋岩製の凹基無茎式石鏃であり、背面と腹面の両面に素材面が残っている。

F48図 F区遺構外出土石鏃実測図 (S=1/2)

G区の調査結果

G区の調査結果

G区の調査概要（第2図、G01～G04図）

G区は下古志遺跡の東隅付近に位置し古志本郷遺跡に隣接する長さ155mにわたる調査区である。この調査区においても調査区壁の崩壊を考慮し調査区幅は基本的に10mにとどめたが、必要が認められた箇所については一部拡張し調査に臨んだ。

G区の調査は平成9年(1997)2月から平成10年(1998)2月までの2年度にまたがって実施している。各年度における調査の実施箇所は平成8年度が120Grから126Gr付近まで、残りは平成9年度に実施した。

G区は工事予定地になる前の地目が田であり、E区、F区などと同様に地表から20cm～40cmは耕作による擾乱を受けていたため、平成9年1月に重機掘削によって土を取り去った。また、基準杭の設置についても5m×5mの間隔で3列設置して、各杭に他の調査区と連続する連番の名称を与えた。この結果、G区の基準杭はB120～B151、C120～C151、D120～D151となっている。また、グリッド名についてもE区、F区などと同様に南角の杭の名称を用いている。調査を進める方向も他の調査区と同様に南西から北東に向かった。重機掘削以下の土については手掘りによって徐々に掘削したところ、標高8.80m～8.00m付近で地山が確認でき同時に遺構も検出したため、この面で精査を行い個別に遺構の調査にあたった。

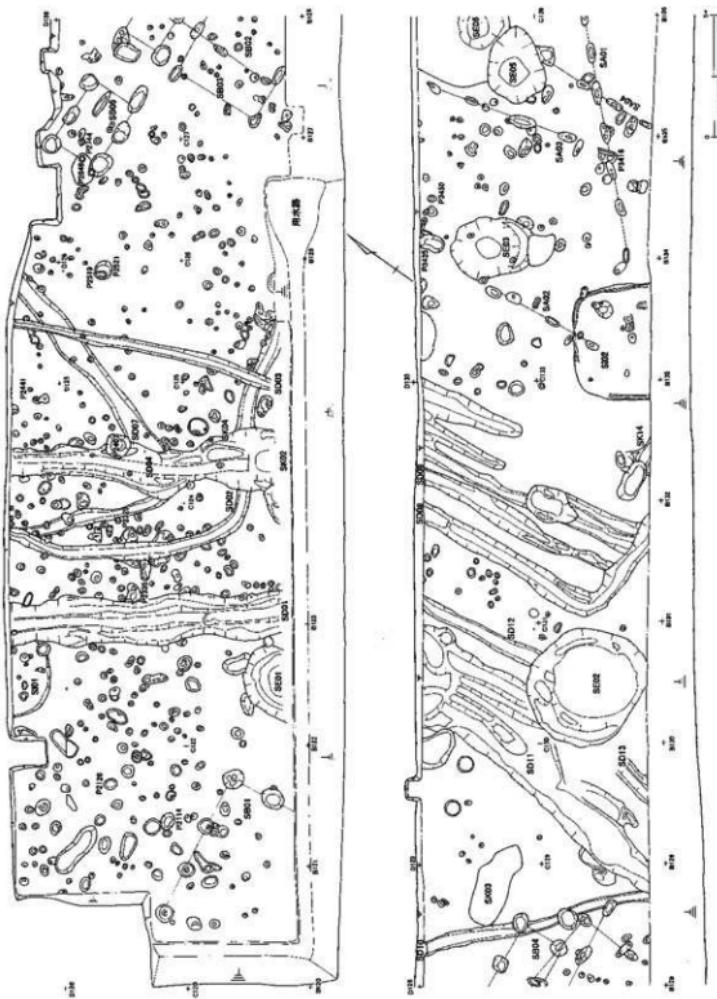
G区の地山は他の調査区とは異なり南東に向かうに連れて徐々に標高が下がっている点が注目される。121Grでは標高8.80m前後で検出できた地山面が、150Grでは8.40m以下に下がっており、特に148Grから149Grにかけては帯状に8.00m以下に落ち込む箇所が認められた。この落ち込みは下古志遺跡の北東縁辺に延びるものと考えられ、下古志遺跡と古志本郷遺跡を分断している低地と推測される。

G区の遺構と遺物

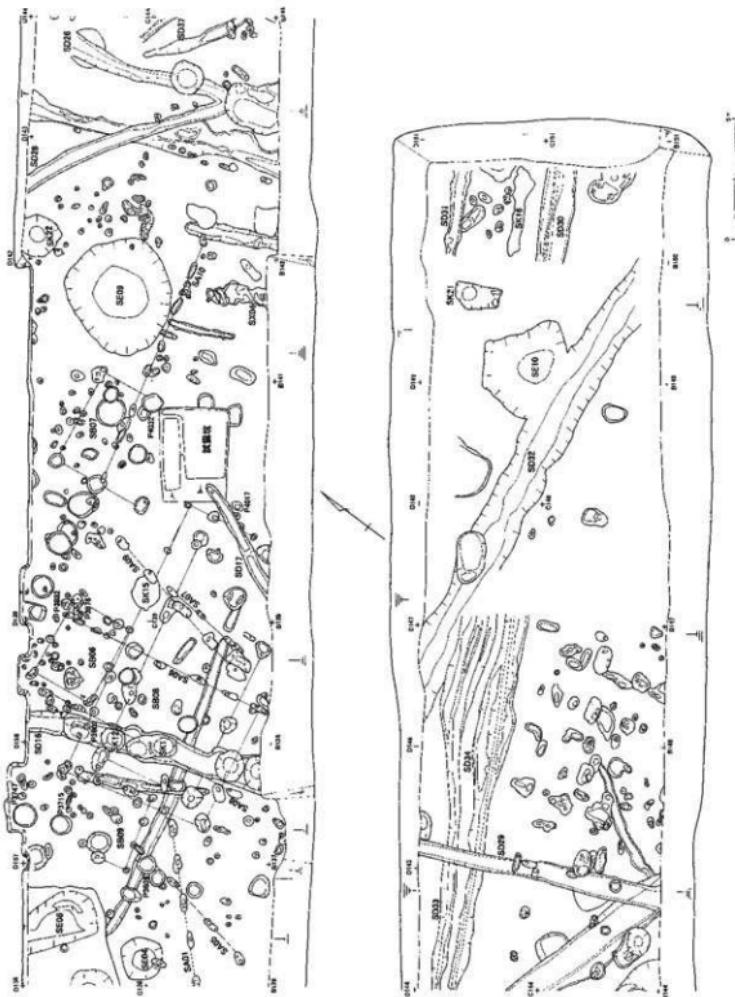
G区においても地山面に土と砂地が観察できた。特に132Grから141Gr付近では広範囲にわたり砂地が広がっていた。検出した遺構の種類については、堅穴住居跡、掘立柱建物跡、井戸跡、土坑、ピット、溝状遺構、柵列跡、杭跡などがあげられる。これらのうち図化可能な出土遺物があった遺構を中心に、以下に報告する。

杭名称	X座標	Y座標	杭名称	X座標	Y座標
B121	-73106.182	52244.325	B138	-73055.709	52312.717
C121	-73102.159	52241.356	C138	-73051.686	52309.748
D121	-73098.136	52238.387	D138	-73047.663	52306.779
B126	-73091.337	52264.440	B144	-73037.895	52336.855
C126	-73087.314	52261.471	C144	-73033.872	52333.886
D126	-73083.291	52258.502	D144	-73029.849	52330.917
B132	-73073.523	52288.579	B150	-73020.080	52360.993
C132	-73069.500	52285.610	C150	-73016.057	52358.024
D132	-73065.477	52282.641	D150	-73012.034	52355.055

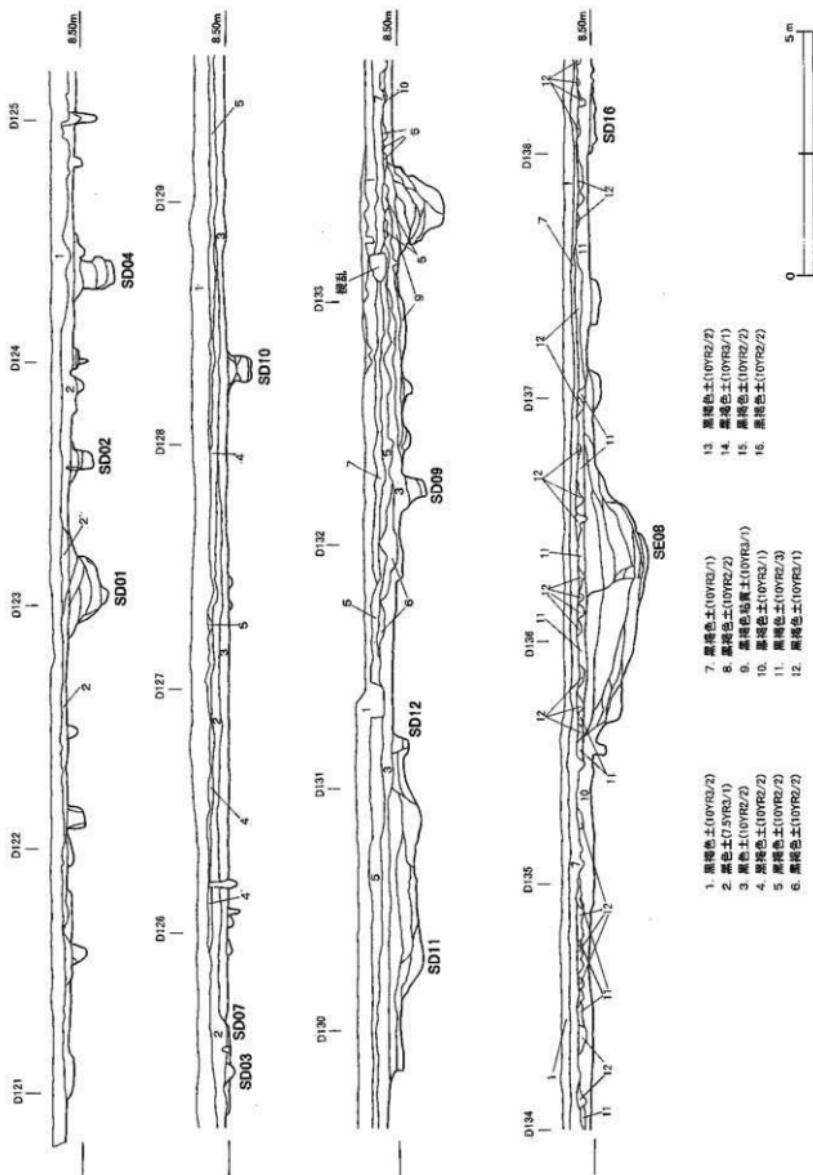
第4表 G区主要基準杭座標一覧表



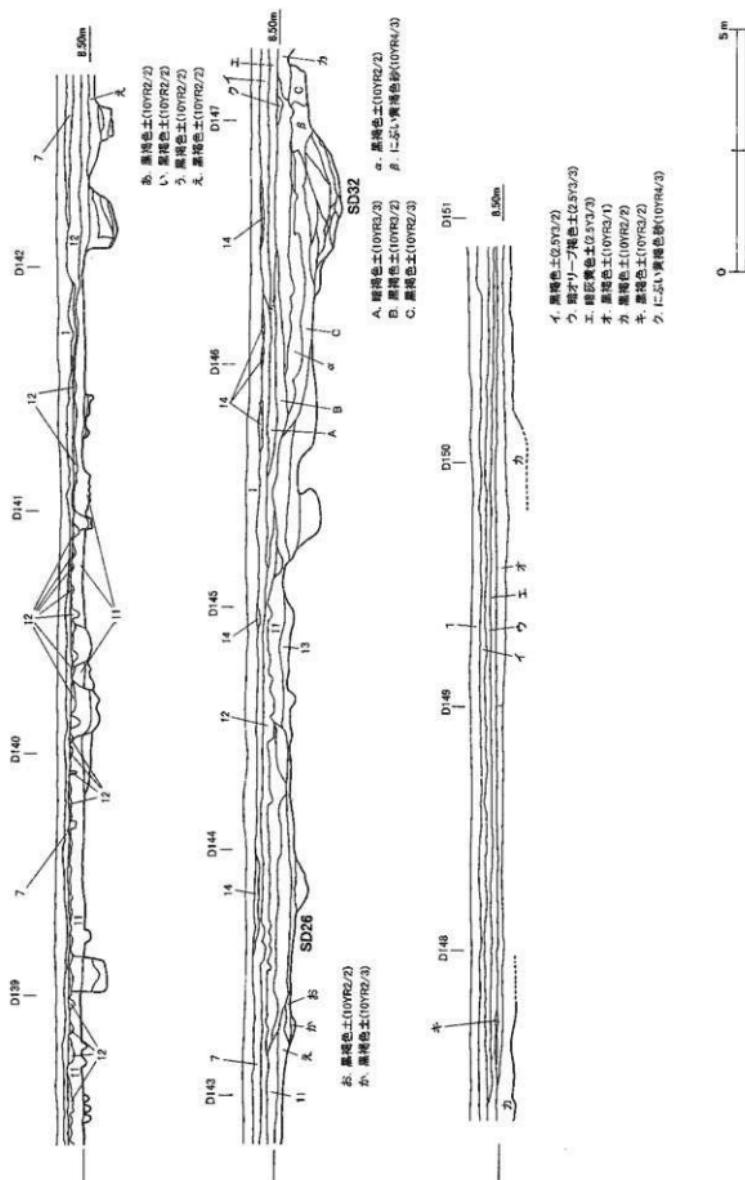
G01図 G区遺構配置図1 ($S = \frac{1}{200}$)



G02図 G区遺構配置図2 ($S=1/200$)



G03図 G区Dラインセクション図1 (S=1/100)

G04図 G区Dラインセクション図2 ($S=1\%$)

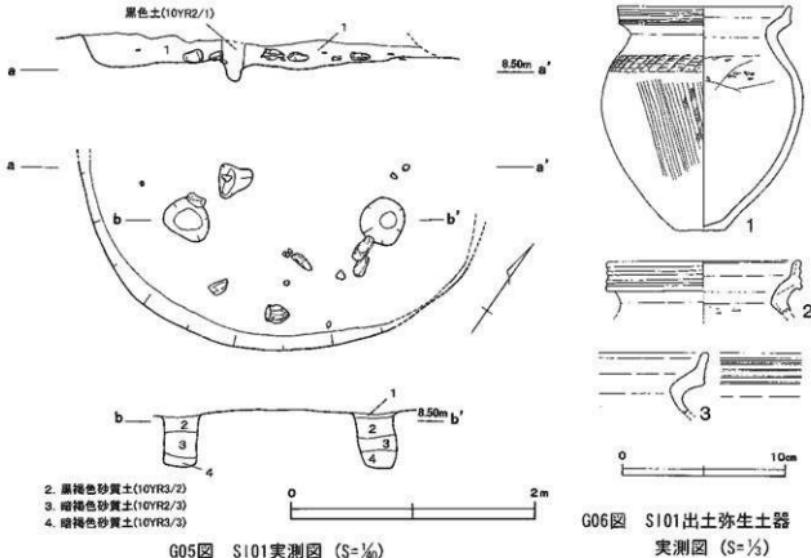
豎穴式住居跡

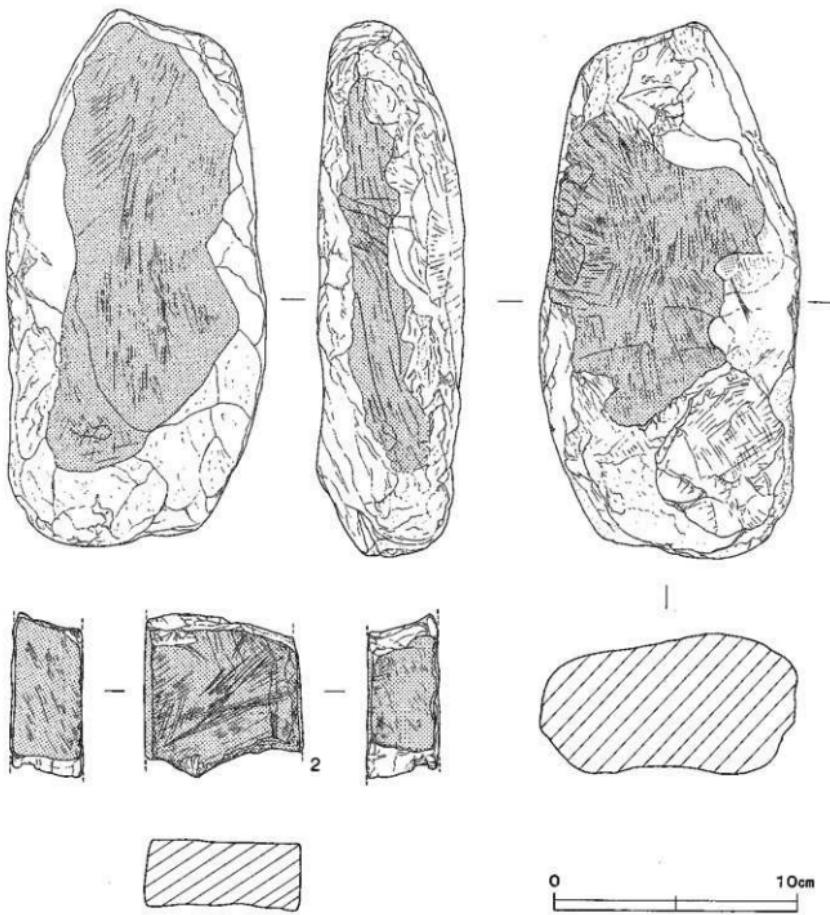
S101 (G05～G07図)

D122Grの調査区Dライン際標高8.79mの調査面においてSI01を検出した。遺構は調査区外にも及んでおり、半分程度の検出にとどまっているが、円形の平面形を呈する豎穴住居跡と考えられる。検出した範囲で推定すると、径は3.6m程度と考えられ比較的小規模な豎穴住居跡である。検出面から床面までの深さは22cm～26cmであり、床面に若干の凹凸が認められる。また、床面には南西寄りと北東寄りにピットが2基確認できた。規模は南西寄りのものが径37cm、深さ41cm、北東寄りのものが径37cm、深さ44cmで両者ともほぼ同規模であり、2基の中心の間隔は約1.6mである。これらは主柱穴と考えられることから本来この豎穴住居は主柱を4本有するものと思われる。なお、削平を受けているため周囲の有無は不明である。また、床面で貼床、周溝は確認できなかった。

この遺構の覆土は、床面上位で第1層、主柱穴内で第2層～第4層の計4層が確認された。遺物が出土したのは第1層のみであり弥生土器のほか磁石が2点出土している。G06-1はほぼ完形で出土した弥生時代後期の壺である。床面からやや浮いた状態の覆土中での出土である。G06-2・G06-3はいずれも後期の弥生土器片である。また、G07-1は使用痕が残る石製品であり、G07-2は砥石である。なお、その他の出土遺物は若干の弥生土器の小片、16cm～20cmの自然礫数点である。

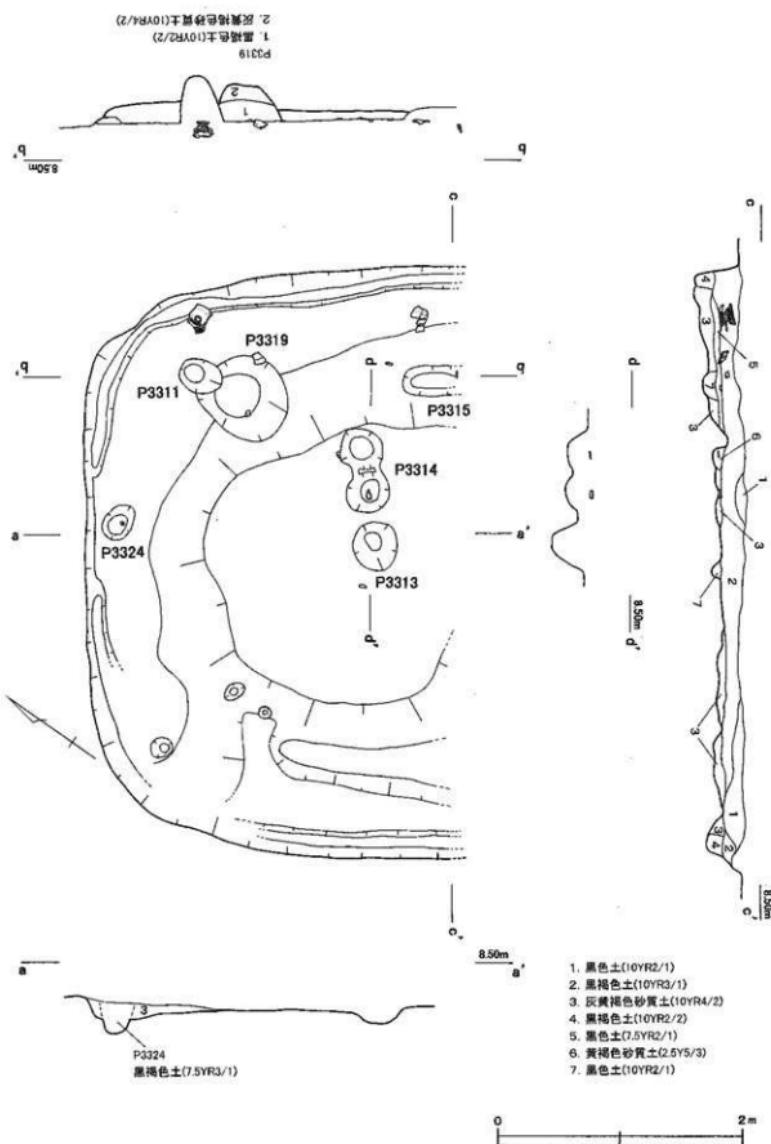
SI01はSD01と一部重複関係にあるが切り合はは判然としなかった。しかし、SI01の出土遺物が後期のものであるのに対して、SD01は中期までのものしか出土していないことから、SI01がSD01より新しい遺構であると思われる。なお、遺構の時期は出土した土器片から弥生時代後期と推定できる。



G07図 SI01出土石製品実測図 ($S=\frac{1}{2}$)

SI02 (G08・G09図)

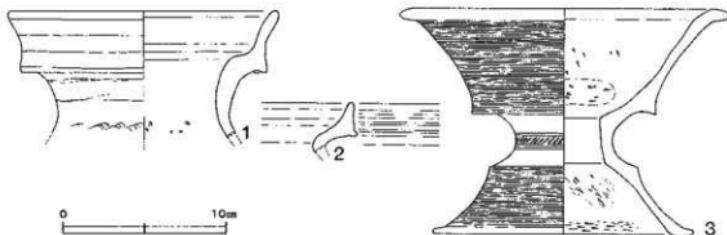
B132GrからB133Grの調査区Bライン際標高8.39mの地山面においてSI02を検出した。この遺構も部分的な調査にとどまっているが、隅丸方形を呈する竪穴住居跡と考えられる。検出規模はN-54''-Eを指向する辺が486cm、N-36°-Wを指向する辺が306cm以上を測り、検出面から平坦に成形されたと考えられる床面までの深さは16cmと浅い。床面では9基のピットが存在していたが床面から落ち込んでいることが確認できているのはP3313、P3314、P3315、P3324の4基である。しかし、これらには規則性が認められないため主柱穴であるかどうかは不明である。また、床面側壁際には幅15cm前後、深さ15cm

G08図 SI02実測図 ($S = \%$)

前後の周溝が確認できた。北西壁の中央付近で80cm程度とぎれている箇所が認められることから、ここを出入り口としていた可能性が指摘できよう。なお、この竪穴住居跡はかなりの削平を受けていると考えられることから周提を有していたかどうかは不明である。

覆土は7層確認できた。第1層と第2層は自然堆積によるものと考えられるが、第3層、第5層、第6層は上面がほぼ平坦に掘うことから貼床と考えられる。特に第3層は縞まりがある土層であった。また、周溝内の第4層は第3層を切っていることから周溝の形成は床面成形後と推定できる。

覆土からは弥生土器片が少量出土しておりこのうち実測に堪えるものを図示した。G09-1は壺であり草田3期のものと考えられる。G09-2は口縁部外面に凹線文を巡らす壺であり草田2期頃のものであろう。G09-3は約2/3が残存していた鼓形器台であり草田3期のものと考えられる。これらはいずれも第2層から出土していることから、この竪穴住居跡の廃棄時期を示すと考えられる。



G09図 S102出土弥生土器実測図 ($S=1/3$)

掘立柱建物跡

SB01 (G10・G19図)

SB01はC120GrからB121Grにかけての標高8.79mの調査面で検出した、P2005、P2101、P2102、P2103、P2118によって形成される掘立柱建物跡である。調査区外に遺構が及んでいると思われることから全容は不明であるが、N-82°-E方向に主軸をとり、梁間1間(1.8m)以上×桁行3間(6.3m)以上の規模を有するものと考えられる。

柱穴については、平面形は不整な円形あるいは椭円形を呈しており、規模は径54cm~94cm、深さ48cm~64cmを測り、底面の標高も比較的掘っている。

柱穴の覆土からは合わせてビニール袋半分弱の弥生土器片が出土しており、このうち実測可能なものをG19-1~G19-3に図示した。G19-1は壺の口縁部であり松本IV-2期に相当する。G19-2は壺の口縁部であり草田1期のものである。G19-3は平底の底部であり中期後半のものとみられる。これらの遺物からSB01は弥生時代後期前半の遺構と推定できる。

SB02 (G11図)

SB02はB127GrからB128Grにかけての標高8.48mの調査面で検出した、P2705、P2706、P2801、P2802、P2803によって形成される掘立柱建物跡と思われる遺構である。遺構の一部が遺構外に及んでおり判然としないが、座標北に主軸をとる、梁間1間(3.3m)×桁行2間(4.9m)の規模であるとみられる。

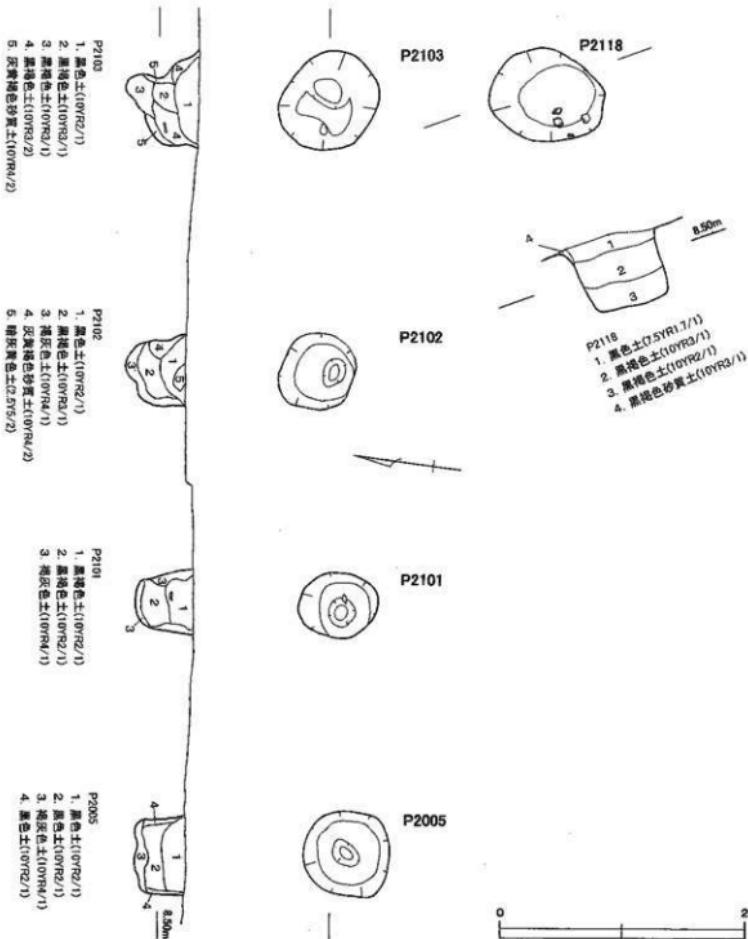
柱穴は建物主軸に平行して長軸をとる長径64cm~46cm、短径26cm~47cmを測る椭円形の平面形を呈

しており、深さについては16cm~43cmとそれぞれやや差がある。また、P2801はSB04の柱穴であるP2821を切っていることから、SB02はSB04より新しい遺構であることがうかがえる。

一部の柱穴の覆土からは僅かに中世土師器の小片が出土している。このため、SB02は中世以降の遺構と判断できよう。

SB03 (G12図)

SB03はB127GrからB128Grにかけての標高8.48mの調査面で検出した、P2701、P2702、P2703、P2704、

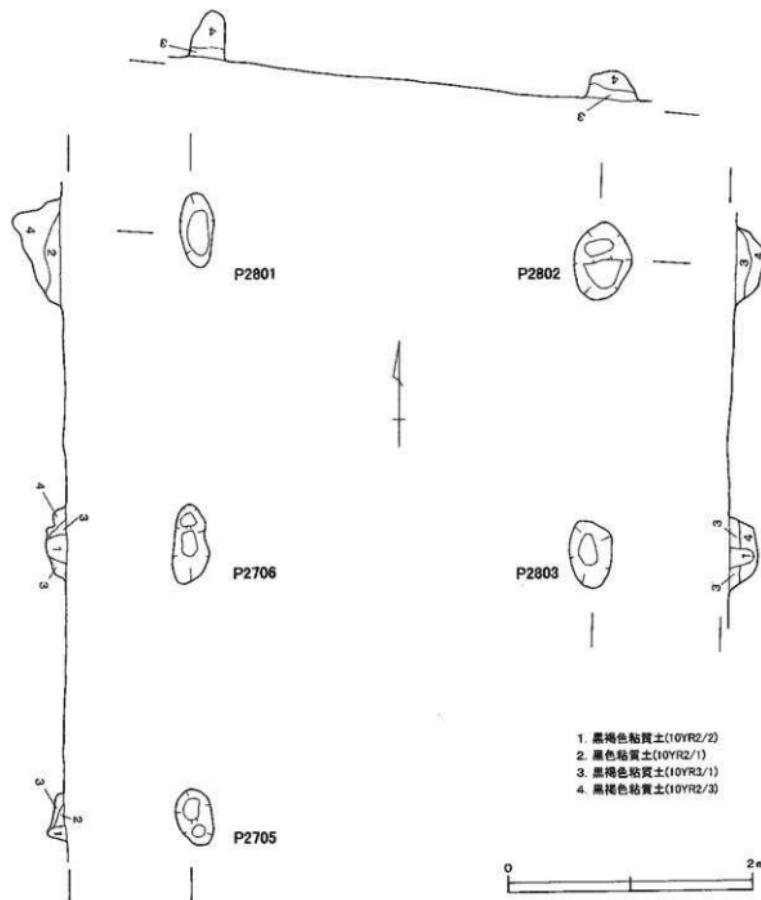


G10図 SB01実測図 ($S=1/40$)

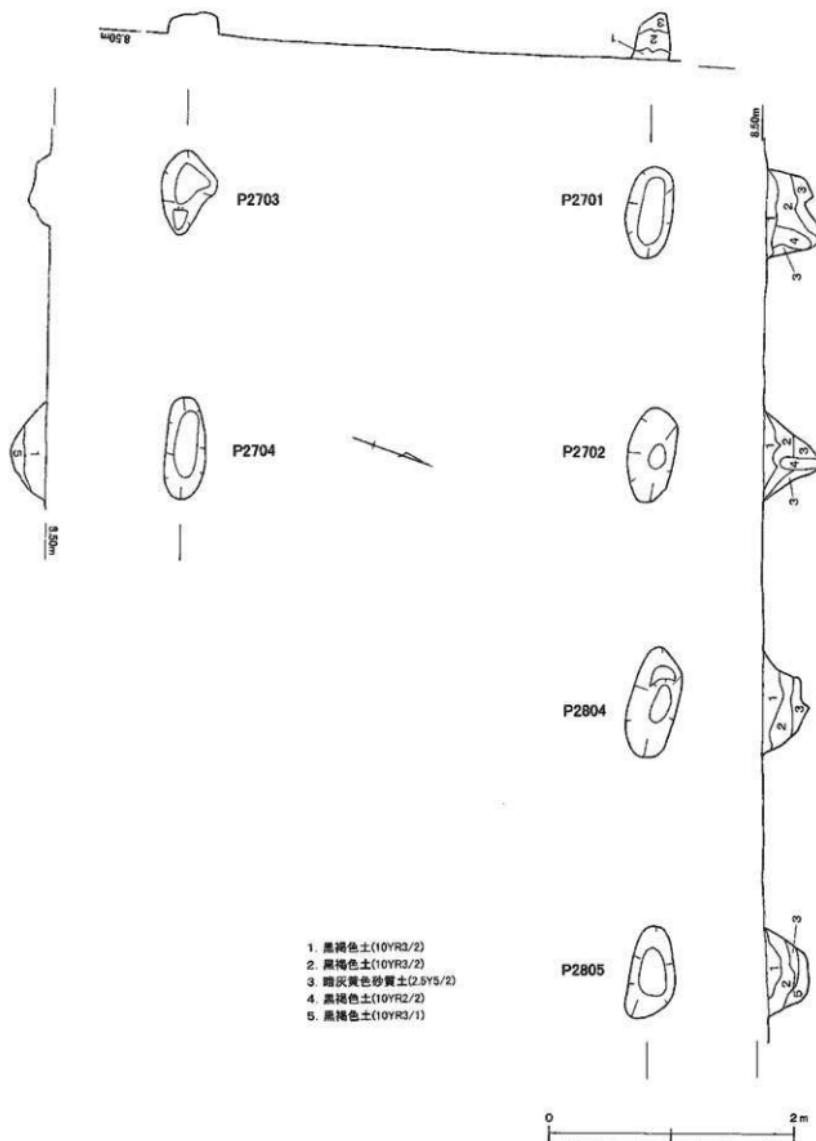
P2804、P2805によって形成される掘立柱建物跡と考えられる遺構である。遺構の一部が調査区外にかかっているが、N-82°-E方向に主軸をとり、梁間1間(3.8m)×桁行3間(6.3m)の規模であると推定できる。

柱穴は建物主軸方向に長軸をとる長径70cm~90cm、短径32cm~46cmを測る楕円形の平面形を呈しており、深さは18cm~40cmである。また、P2703を除く柱穴は、形態と規模、底面の標高が比較的揃っている。

柱穴の覆土からは数点の弥生土器、中世土師器の小片が出土していることから、SB03は中世以降に築かれたものであると考えられる。

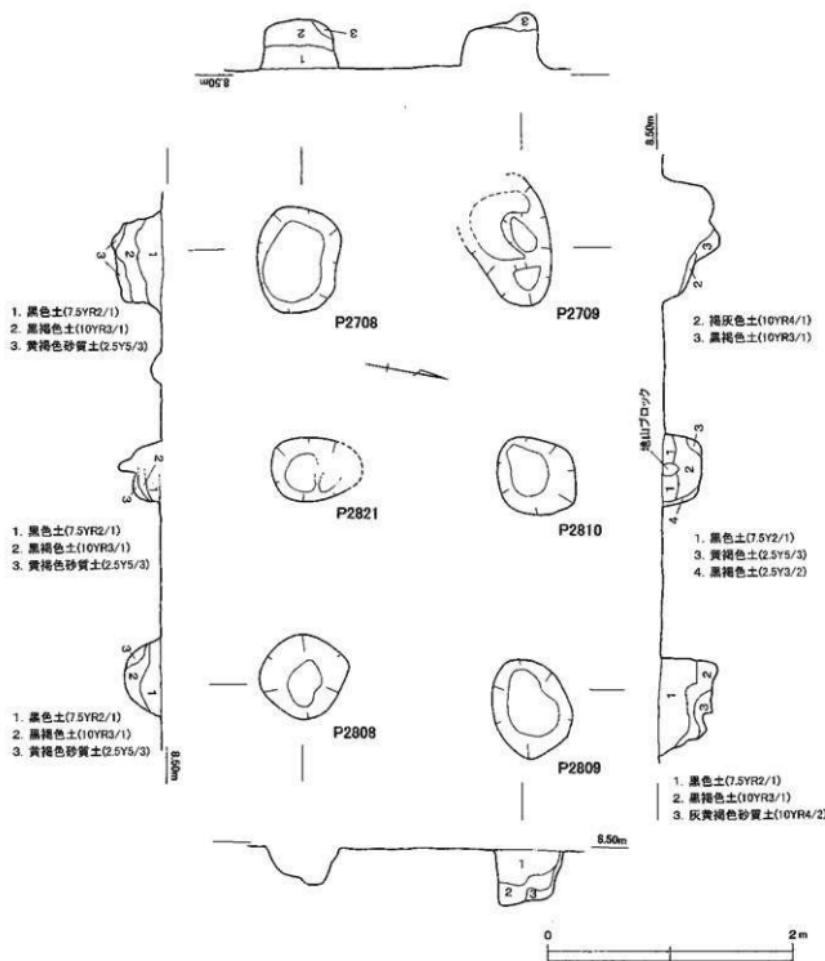


G11図 SB02実測図 (S=1%)

G12図 S803実測図 ($S=\frac{1}{40}$)

SB04 (G13・G19図)

SB04はCI27Gr及び隣接するグリッドの標高8.46mの調査面において検出した、P2708、P2709、P2808、P2809、P2810、P2821によって形成される掘立柱建物跡である。この遺構はN-80°-E方向に主軸をとる、梁間1間(1.8m)×桁行2間(3.8m)の規模を有している。また、SB04のP2821はSB02のP2801によって切られれていることから、SB02より古い遺構であることがうかがえる。

G13図 SB04実測図 ($S=\frac{1}{40}$)

柱穴はいずれもしっかりとしたものであり、不整形な円形または楕円形の平面形を呈している。また、規模は径及び長径が70cm～110cm、深さ31cm～48cmを測る。

柱穴の覆土からは少量の弥生土器の小片が出土しており、実測可能なものをG19-4に図示した。松本IV期に相当するものであり遺構の時期を示す可能性がある。しかし、図示しなかった小片の中には、明確ではないものの後期と考えられるものも数点見受けられるため、SB04の時期は後期に下がる可能性も残る。

SB05 (G14・G19図)

SB05はC126GrからC127Grにかけての標高8.48mの調査面において検出した、P2602、P2711、P2712、P2713、P2714、P2747によって形成される掘立柱建物跡である。この遺構はN-84°-E方向に主軸をとり、梁間1間(2.2m)×桁行2間(3.1m)の規模を有している。また、SB05のP2602はP2649を切っていることからSB05はP2649より新しい遺構であることが明らかである。

柱穴は不整な円形または楕円形の平面形を呈している。円形のものはP2602、P2713、P2747であり規模は径66cm前後、深さ40cm～48cmを測る。楕円形のものはP2711、P2712、P2714であり規模は長径81cm～123cm、深さ46cm～52cmを測る。いずれの柱穴もしっかりとしたものであり、底面の標高は比較的揃っている。

柱穴の覆土からは少量の弥生土器と思われる土器の小片が出土しており、実測可能なものをG19-5・G19-6に示した。両者とも松本IV期に相当するものであり遺構の時期を示すと思われる。なお、SB05はSB04の主軸方向と柱穴の規模や形態が類似しているため、同時期あるいは近い時期に似た性格を有している建物であった可能性も指摘できよう。

SB06 (G15・G19図)

SB06はC138GrからC139Grの標高8.40mの調査面で検出した、P3820、P3821、P3822、P3823、P3824、P3906によって形成される掘立柱建物跡と思われる遺構である。この遺構はN-83°-E方向に主軸をとり、梁間1間(2.6m)×桁行2間(3.5m)の規模を有している。

柱穴は円形またはいびつな楕円形の平面形を呈している。規模は円形のものが径29cm～37cm、深さ14cm～30cm、楕円形のものが長径48cm～62cm、深さ16cm～33cmであり、底面の標高にややばらつきがある。

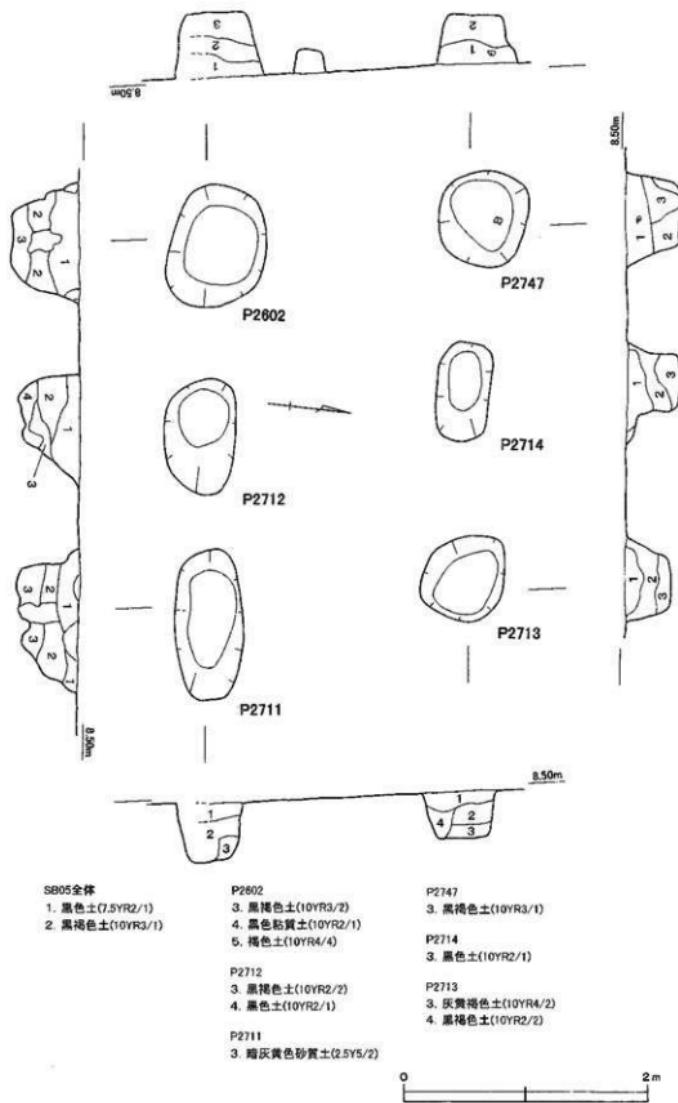
また、SB06の柱穴として扱っているP3820はSB08を形成するものもある。このため、SB06とSB08が同時に存在した可能性はないと考えられる。しかし、SB06のP3821とSB08のP3834から出土した破片が接合しているため時期差はあまりないと考えられる。なお、この接合した土器はG18-7に示す中世土師器の皿である。

SB07 (G16図)

SB07はC140Grの標高8.40mの調査面で検出した、P3913、P4004、P4005、P4006、P4007によって形成される掘立柱建物跡と推定される遺構である。一部に試掘坑による擾乱を受けてはいるものの、この遺構はN-9°-W方向に主軸をとり、梁間1間(4.0m)×桁行2間(4.1m)の規模を有すると考えられる。

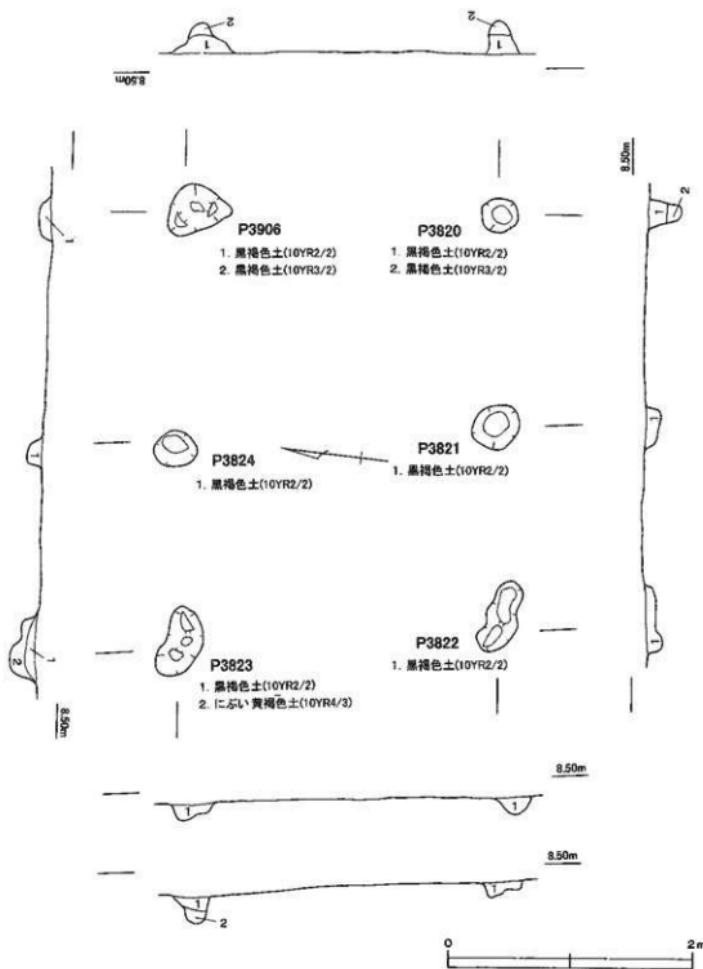
柱穴はP4006以外は円形の平面形を呈している。これらの径は57cm～80cmを測り、深さは10cm前後と浅いことからかなりの削平を受けていることがうかがえる。

柱穴から出土遺物は全くなかった。よって、遺構の時期については不明である。

G14図 SB05実測図 ($S=1/40$)

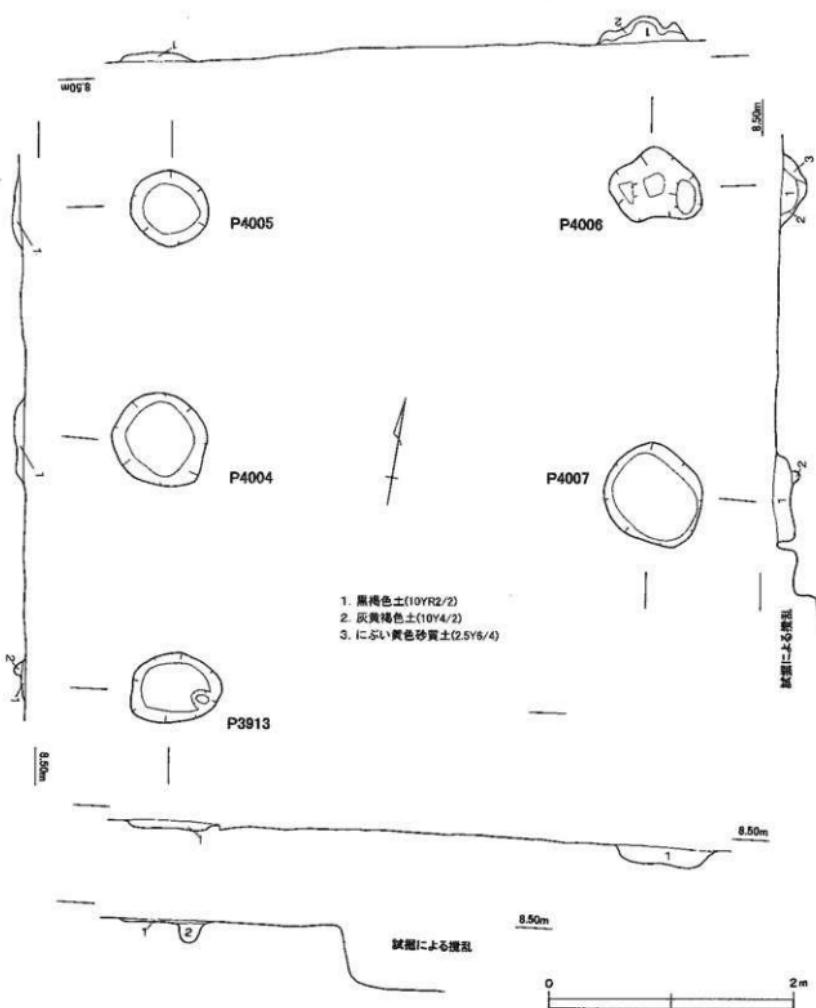
SB08 (G17~G20図)

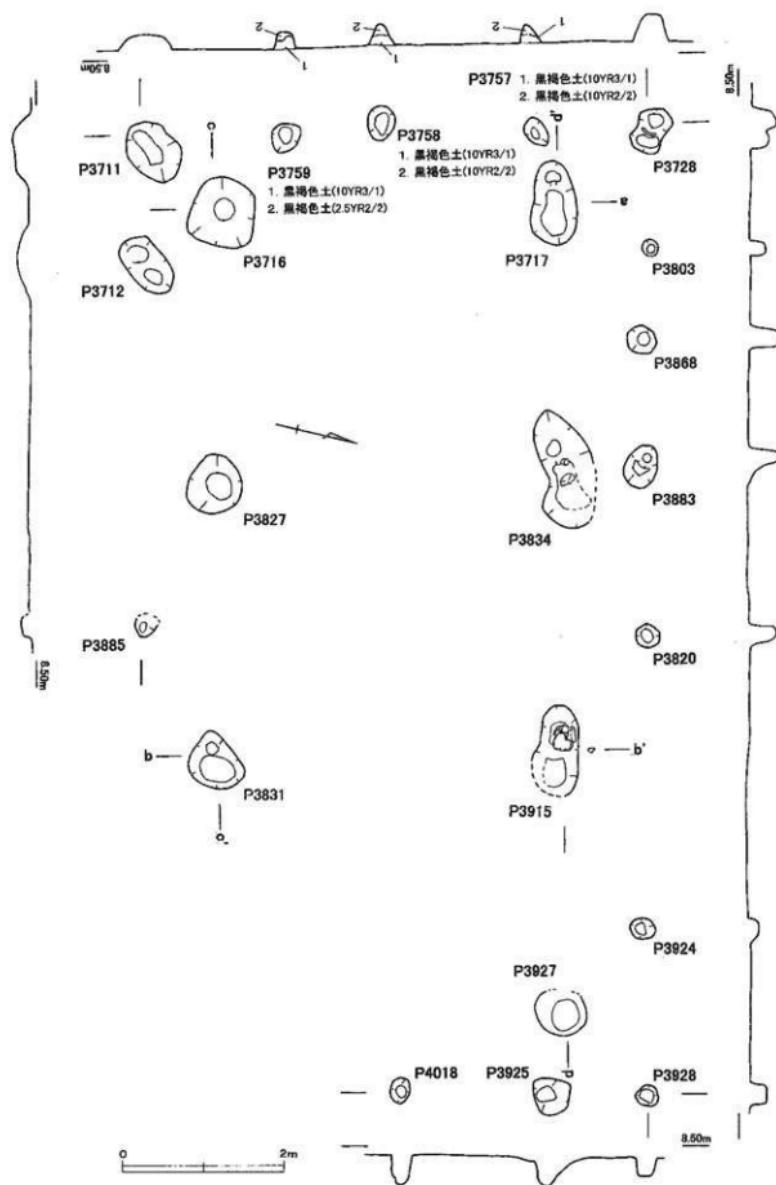
SB08はBC137GrからBC139Grの標高8.40mの調査面で検出した、P3716、P3717、P3827、P3834、P3831、P3915、P2927によって形成される掘立柱建物跡である。一部は造構外にまで及んでいるものの、この造構はN-77°-E方向に主軸をとり、梁間1間(4.1m)×桁行3間(10.0m)の規模を有していると考えられる。柱穴の形態については平面形が長径103cm～150cmの梢円形のものと、径65cm～85cmの円形のものがみ

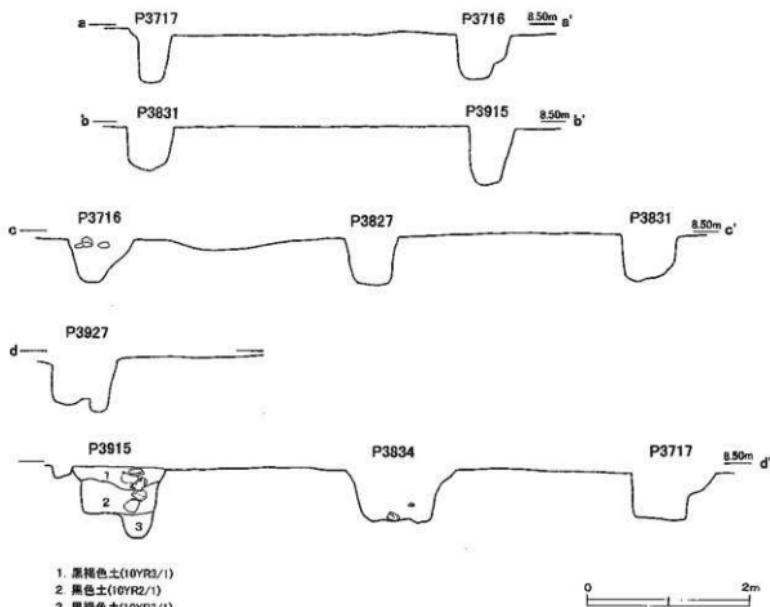
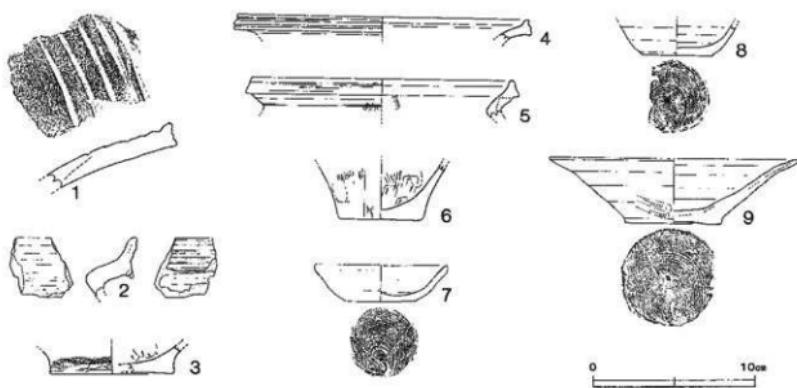
G15図 SB08実測図 ($S=1/40$)

られるが、深さについてはいずれも60cm前後であるため、底面は比較的揃っている。

また、これらの柱穴の周囲を取り囲む様に、P3757、P3758、P3759、P3711、P3712、P3885、P3928、P3924、P3820、P3883、P3868、P3728、P3803、P3925、P4018を検出した。これらの規模や間隔にはば

G16図 SB07実測図 ($S=1\%$)

G17図 SB08実測図 ($S=1/50$)

G18図 SB08主柱穴エレベーション図 ($S=1\%$)G19図 堀立柱建物跡出土土器実測図 ($S=1\%$)

らつきがあるが、先に述べた柱穴の中心線から90cm前後外側を巡るように設置されているため、建物の庇を支えるための柱穴である可能性が指摘できよう。

柱穴の覆土からは全部でビニール袋半分弱の中世土師器を中心とする土器片のほか、鉄製品が1点

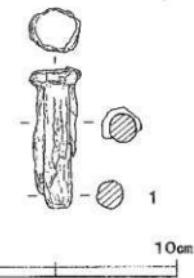
出土している。これらのうち、実測に堪えるものをG19-7～G19-9とG20-1に図示した。G19-7・G19-8は中世土師器の皿であるが時期は判然としない。G19-9の皿は姫原西遺跡のG区3号古墓から出土したものと形態が似るため16世紀の所産である可能性がある。G20-1は軸の太い釘と思われる。打頭は17mmの円形であり、軸の断面形は径11mmのU形を呈している。

これらの出土遺物からSB08の時期は中世後半頃と推定できよう。

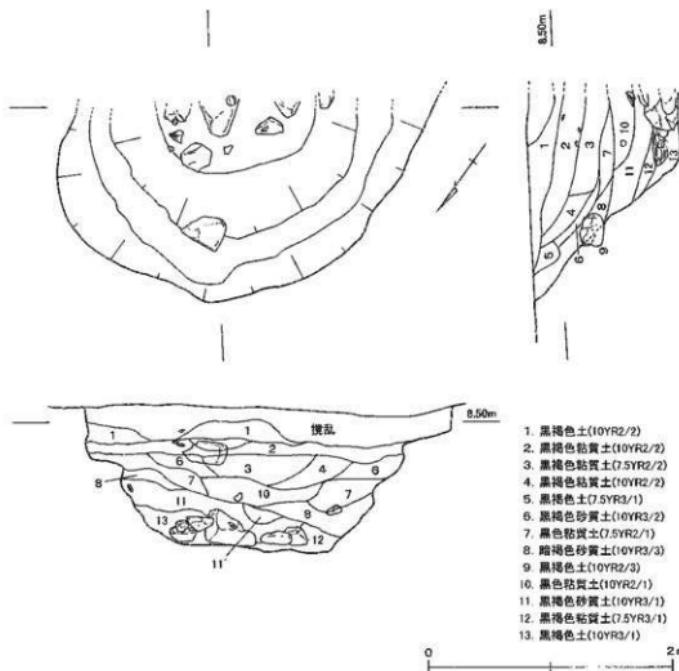
井戸跡等

SE01 (G21～G23図)

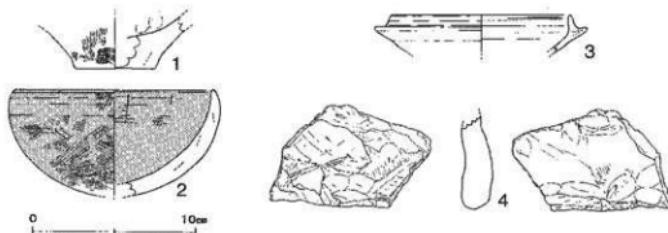
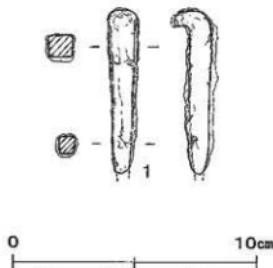
B122GrのBライン際標高8.74mの調査面で他の遺構を切った状態でSE01を検出した。全体の半分程度の検出にとどまっているが、円形の平面形を呈する井戸跡と考えられる遺構である。検出規模は径が



G20図 SB08出土金属製品実測図 ($S=\frac{1}{2}$)



G21図 SE01実測図 ($S=\frac{1}{40}$)

G22図 SE01出土土器実測図 ($S=1/2$)G23図 SE01出土鉄製品実測図
($S=1/2$)

推定で320cm、深さは125cmを測り、標高8.18m～8.38m付近の側壁には段が巡っている。また、標高7.49mでは底に至り湧き水があった。この底はほぼ平坦であり、平面形は径120cm程度の円形を呈すると推定される。なお、下部施設が検出できなかつたためこの井戸は素掘りであったと思われるが、10cm～40cm大の礫が数点底付近で確認できたため、本来は石組みの井戸側などの施設が存在していた可能性は残る。

覆土は13層に分層可能で、ここからビニール袋半分弱の土器の小片が出土している。内訳は弥生土器、土師器、須恵器、中世土師器、鉄製品であり、量は中世土師器が大半を占め他のものは僅かである。これら出土遺物のうち図化に堪えるものを掲載した。G22-1は弥生土器の底部であり中期のものと思われる。G22-2は土師器の碗である。内外面に赤色塗彩が施されており、奈良時代頃のものと思われる。G22-3は須恵器の壺身として掲載したが壺蓋の可能性もある。人谷5期頃のものであろう。G22-4については詳細不明だが、手捏によって成形されているようである。G23-1は鉄釘で一端を鉤状に曲げており断面は方形を呈している。

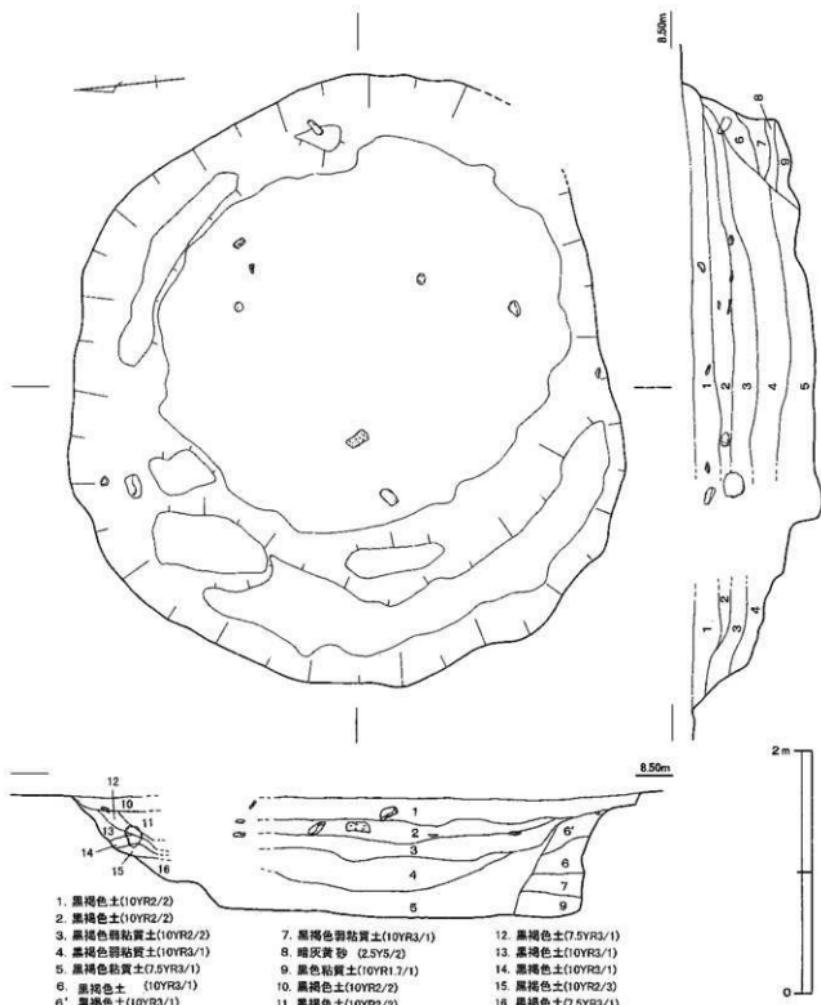
このように古い遺物も認められるものの出土遺物の大半が中世土師器であるため、この遺構の時期は中世であると考えられる。

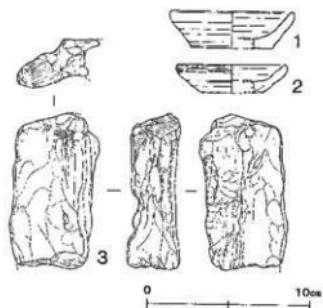
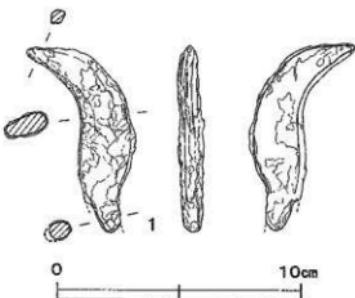
SE02 (G24～G26図)

B130Grの標高8.31mの調査面で他の遺構を切った状態でSE02を検出した。大型の遺構であったが、調査区内では全体を確認できた。この遺構の平面形は殆ど円形を呈しており、検出規模は長径5.0m、短径4.4m、深さ1.0mを測る。また、標高7.31mで最下底に至り湧き水が認められた。特に施設などは認められないことから、この遺構は素掘りのまま利用されていたものと思われる。底はほぼ平坦であり、平面形は径3.3mの円形を呈している。側壁の立ち上がりについては、北、南、東では急であるが、西では段を有しており緩やかである。このような形状から推測しSE02は溜池として利用されていた可能性が考えられる。

覆土中からはビニール袋半分の土器片などが出土している。内訳は弥生土器、土師器、須恵器、中世土師器、鉄製品であり、土師器と中世土師器が大半を占めている。これらのうち図化に堪えるもの

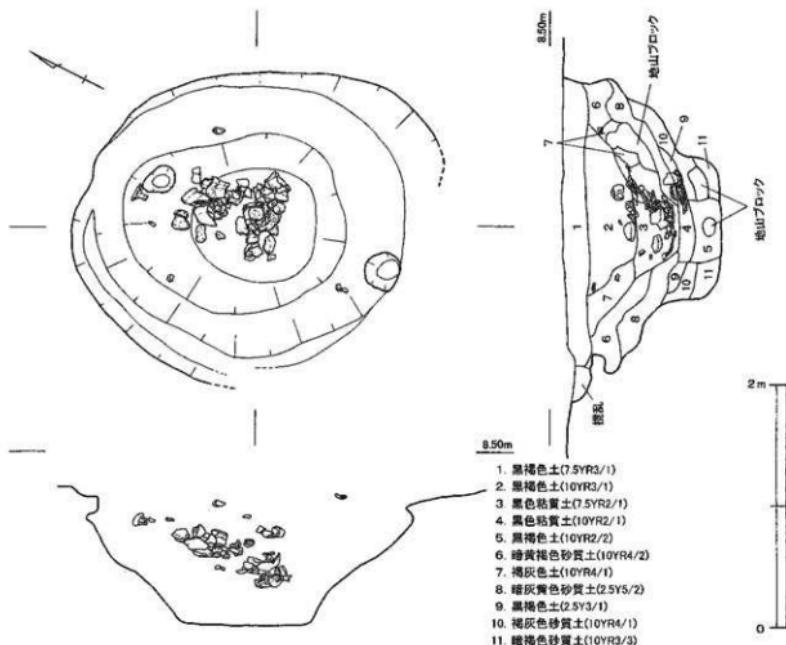
を図示した。G25-1・G25-2は中世土師器の小皿であり13世紀頃のものと思われる。G25-3の器種は不明であるが手捏によって成形されている。G26-1は鉄製品である。厚さが8mmありしっかりしたものである。基部は三日月状を呈しており、一端は茎状になっているため柄が装着されるものと思われる。これら出土遺物からこの遺構の時期は中世と考えられる。

G24図 SE02実測図 ($S=1/40$)

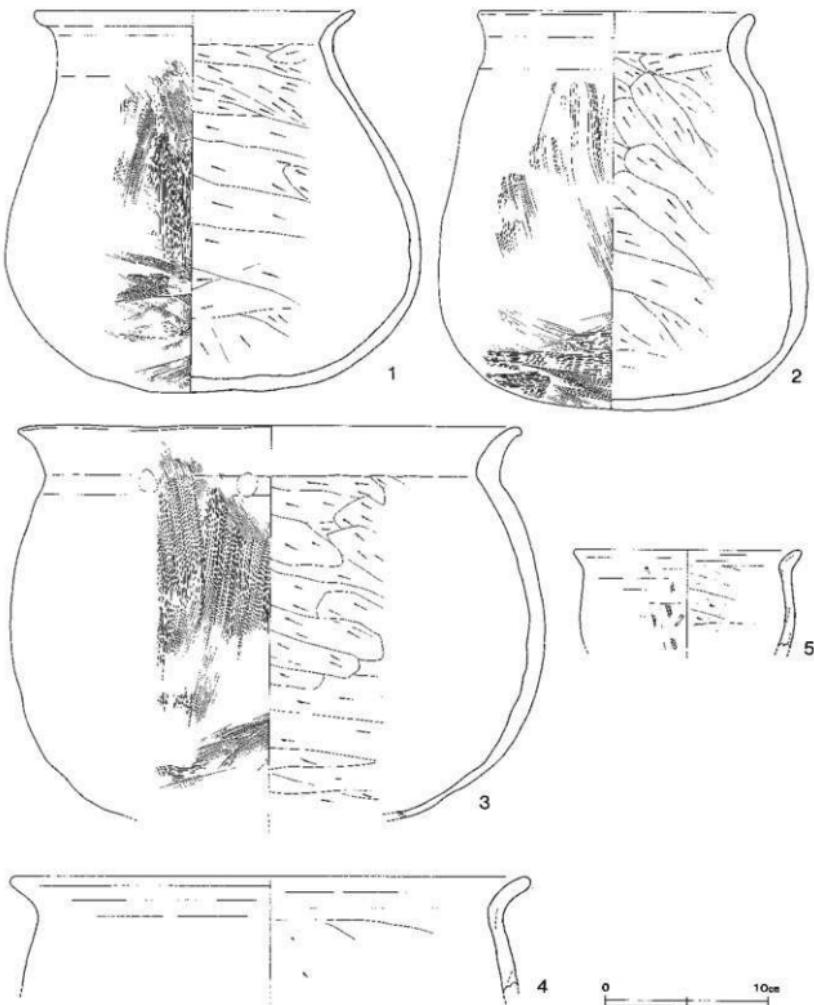
G25図 SE02出土土器実測図 ($S=1/3$)G26図 SE02出土鉄製品実測図 ($S=1/2$)

SE03 (G27~G29図)

SE03はC133GrとC134Grの標高8.40mの調査面において検出した井戸跡と考えられる遺構である。平面形はN-27°-W方向に長軸をとる楕円形を呈しており、検出規模は長径310cm程度、短径260cm程度、深さ130cmを測る。また、最下底からは湧き水があった。底は径100cm程度の不整な円形を呈しており平坦

G27図 SE03実測図 ($S=1/4$)

であった。側壁は底から標高7.46m付近までは急勾配で立ち上がり、この間の覆土を観察すると第4層、第5層及び第9層～第11層が堆積していた。これらの堆積状況から第4層、第5層は水溜内に堆積した上で、第9層～第11層は水溜の外側に埋められた上である可能性が考えられる。この場合、水溜の径は50cm程度であったと推測できる。これより上位の標高7.86m付近までの側壁の立ち上がり

G28図 SE03出土土師器甕実測図 ($S=\frac{1}{2}$)

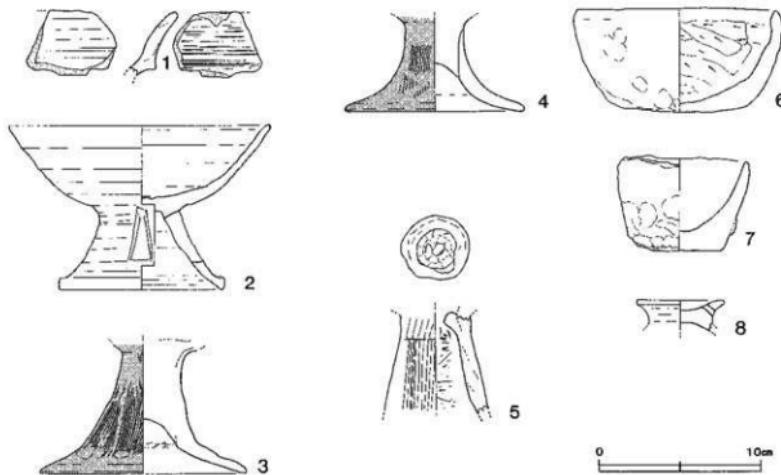
は緩やかになっている。また、遺構の中央寄りでは比較的大きな土器片が集中して出土している。これらは井戸側内に廃棄されたものと思われる。さらに上位の標高8.02m前後では側壁が抉られていた。これはほぼ同一標高で側壁に巡っていることから、SE03内に溜まった水の浸食によるものとみられる。

また、側壁には遺構の中心付近を通るN-E-W方向の直線上に、径28cmを測るピットが2基確認できた。ピット間の距離は2mを測り、遺構の中心からほぼ等間隔に配されていることから、井戸の地表部施設を支える柱跡である可能性が指摘できる。なお、これらのピット底面の標高は北側のものが7.38m、南側のものが7.62mである。

覆土からはコンテナ1箱分の土器片が出土している。これらの大部分はG28-1～G28-3に示す土師器の壺であり、ほぼ完形に復元できた。その他のものとしては弥生土器、須恵器などの破片が少量出土しているに過ぎない。

最初に土師器の壺を示した。いずれも口縁部が短く外反して開口するものであるが、G28-1・G28-2は胴部下方が膨らむのに対し、G28-3～G28-4は胴部中央付近に最大径を有している。次にその他の土器片を示した。G29-1は弥生土器の壺口縁部、G29-2～G29-5は高壺、G29-6・G29-7は手捏土器、G29-8は蓋と思われる。G29-2に示す須恵器の高壺は第2層から出土したものであり、大谷5期に相当するものと考えられる。このことから、SE03の廃棄時期は7世紀前半と推定できる。

SE03は側壁に水の浸食によるとみられるオーバーハングした箇所が認められるため、井戸側施設を持たない素掘りであった可能性が高い。土層の堆積状況から掘り返しを繰り返して管理していたものと思われる。また、出土遺物は井戸が使用されなくなり、オーバーハング部に第8層が堆積した後に廃棄されたものと考えるのが合理的であり、井戸廃棄時の祭祀に用いられたものとは考えにくい。



G29図 SE03出土土器実測図 (S=1/2)

SE04 (G30・G31図)

SE04はB136GrとC136Grの標高8.36mの地山面で検出した井戸跡と考えられる遺構である。平面形は径1.8mの不整な円形を呈し、深さは134cmで底の標高は7.02mである。底は比較的平坦であり平面形は径90cm程度の円形におさまっている。側壁の立ち上がりについては、底から標高7.70m付近までは急であり一部の側面は垂直に近いが、それより上位では比較的緩やかになり上端に至る。また、標高8.00m付近は側壁が抉られている。これは水の浸食によるものと考えられる。

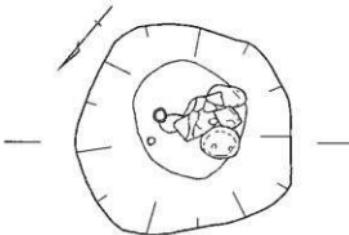
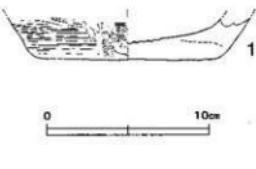
この遺構の覆土からの出土遺物は少なく、底直上とやや上位で20cm~35cm大の自然縞が数点認められたほかには、僅かに土師器と中世土師器が出土した過ぎない。このうち実測可能なものをG31-1に示した。中世土師器の底部と思われ、底径は10.5cmを測るやや大きなものである。底部内面にはヘラによる線刻が認められるが時期は不明である。この土器は第10層から出土しており、比較的大きな破片であるため井戸の廃棄時期を示すと思われる。

なお、底で自然縞が出土しているがその数が少ないため、石組み井戸側の残骸と言うよりは捨てられたものといった感が強い。よって、SE04は本来素掘りの井戸であったと思われる。

SE05 (G32・G33図)

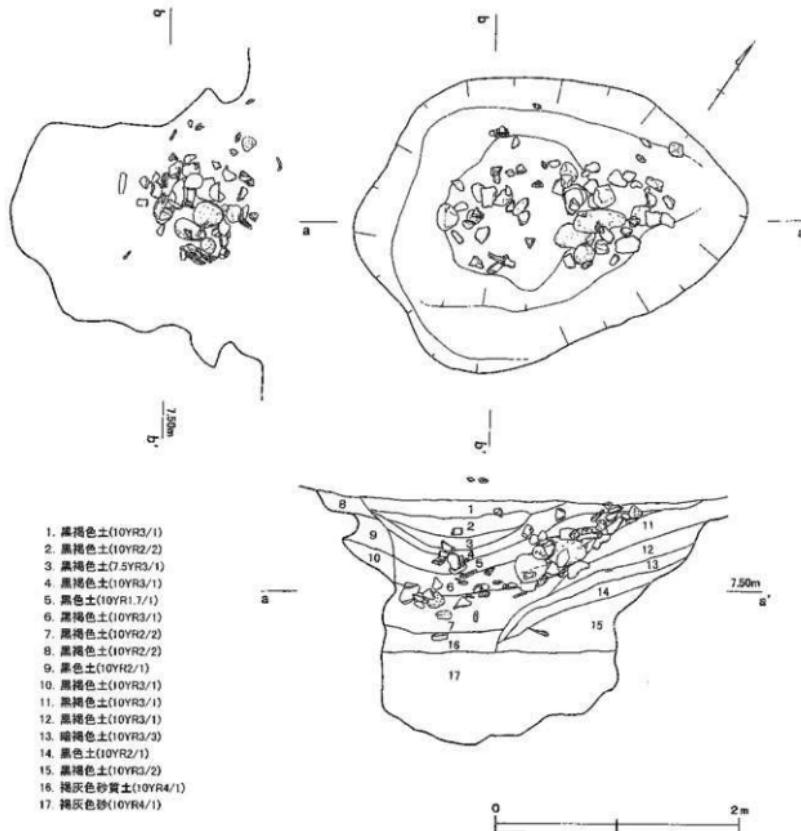
SE05はC135Grの標高8.32mの調査面で検出した井戸跡と考えられる遺構である。N-56°E方向に長軸とする不整な横円形の平面形を呈しており、検出規模は長径3.2m、短径2.4m、深さは2.1mである。底の平面形は1.2m程度のいびつな円形であるが、底面は凹面状を呈している。側壁の立ち上がりは底から標高7.50m付近まではほぼ垂直であるが、それから上位では上端に至るまで緩やかな勾配である。また、標高7.92m付近では側壁の一部が抉られており、水による浸食作用が働いたことを示唆している。

覆土は17層に分層可能で、ここからビニール袋半分弱の土器片が出土しているが、出土量が多かったのは

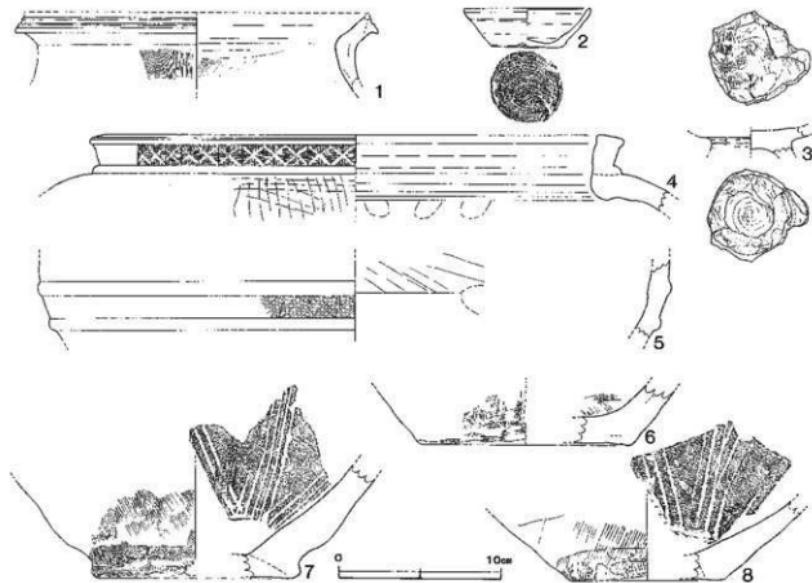
G30図 SE04実測図 ($S=1\%$)G31図 SE04出土中世土師器実測図 ($S=1\%$)

第4層から第7層にかけてであった。これら出土遺物のうち実測可能なものをG33-1～G33-6に図示した。G33-2は中世土師器の皿でありほぼ完形で出土している。G33-3は須恵器の高杯片である。G33-4～G33-6は瓦質土器である。G33-4・G33-5は火鉢であり同一個体と考えられる。G33-6は鉢の底部と思われる。G33-7・G33-8は陶質の捕鉢である。これら出土遺物のうちG33-4・G33-5は15世紀の所産であることから、SE05の廃棄時期を示すと考えられる。

なお、覆土中には10cm～40cm大的な自然礫が認められたが、これらは井戸側を構成したものではなく井戸廃棄後に流れ込んだものと考えられる。したがって、SE04は素掘りであった可能性が高い。



G32図 SE05実測図 (S=1/40)

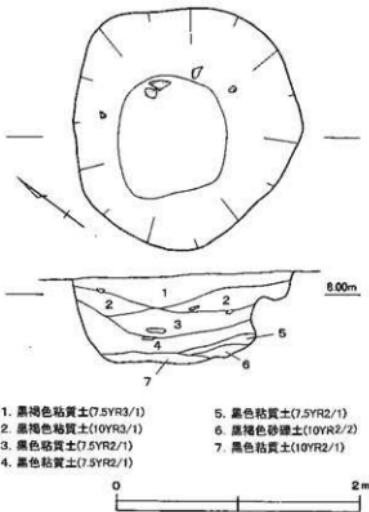
G33図 SE05出土土器等実測図 ($S=1/2$)

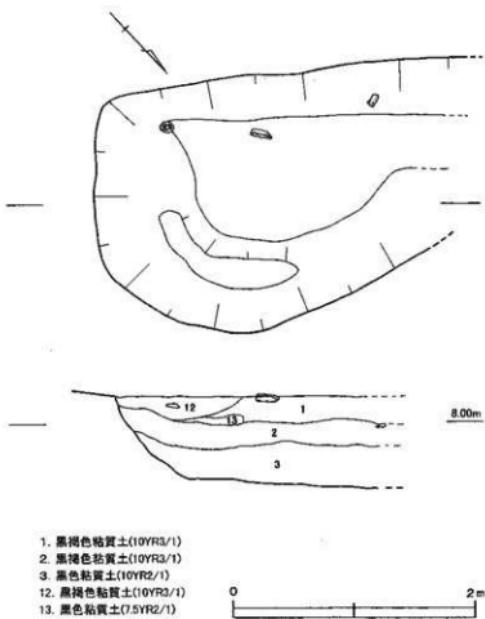
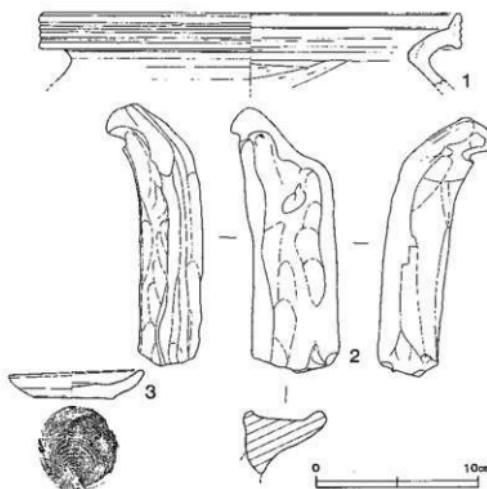
SE06 (G34図)

SE06はC135GrからC136Grにかけての標高8.17mの調査面で検出した土坑状の遺構であり、井戸跡であるかどうかは不明である。平面形は径207cm前後の不整な円形を呈しており、深さは74cmで底の標高は7.43mである。底は円凸を有しており平面形は100cm前後の円形である。また、側壁の立ち上がりはやや急である。

覆土は7層に分層可能で、ここから少量の土器片が出土している。内訳は土師器、須恵器、中世土師器であり、中世土師器が多数認められる。

これらの出土遺物から、SE06の時期は中世以降と推定される。底の標高がやや高いため遺構の性格については定かではないが、断面に井戸側の痕跡が見あたらいため、井戸跡であった場合は素掘りであったと考えられる。

G34図 SE06実測図 ($S=1/2$)

G35図 SE08実測図 ($S=1/6$)G36図 SE08出土土器実測図 ($S=1/3$)

SE08 (G35・G36図)

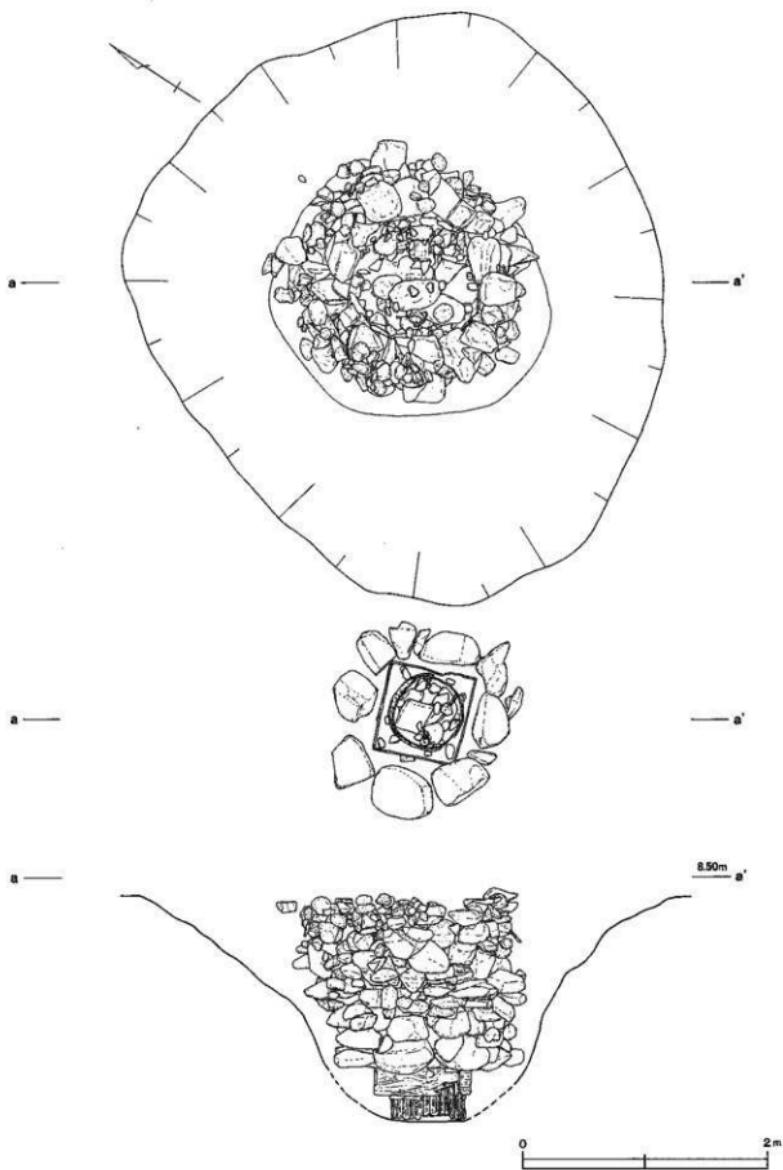
C136GrのDライン際標高8.22mの調査面でSE08を検出した。遺構の一部は調査区外に及んでいるが、N-54°-W方向に反軸をとる長細い平面形を呈している。検出規模は長さ300cm以上、幅160cm~210cm、深さ74cmを測り、底の標高は7.48mである。底はほぼ平坦であり、側壁の立ち上がりはやや急である。また、遺構北東寄りには一部段が認められる。

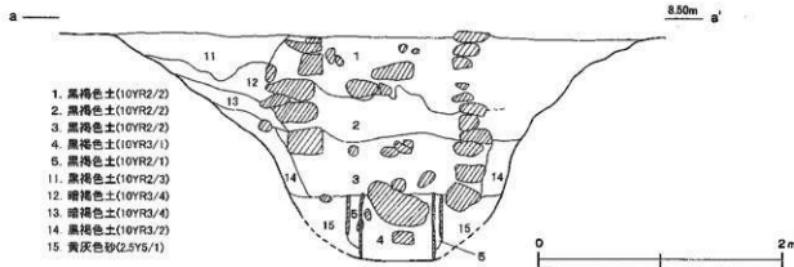
覆土からは少量の弥生土器、土師器、中世土師器が出土しているが中世土師器の割合が高い。これら出土遺物のうち実測可能なものを示した。G36-1は弥生時代後期の甕である。G36-2は移動式甕の破片と考えられる。G36-3は中世土師器の小皿である。これらの出土遺物からこの遺構は中世以降に築かれたものと考えられる。なお、遺構の性格については不明である。

SE09 (G37~G39図)

C141Grの調査面でSE09を検出した。この遺構は井戸跡であり井戸側、水溜とも残存状態は良好であった。

まず、標高8.40mの地山面で掘り方を検出した。平面形は径460cm前後の不整な円形を呈しており、深さについては190cmを測る規模であった。また、最下底の標高は6.60mであり、掘り方の側壁は底から標高7.50m付近までは急勾配で立ち上がるが、それより上位から上端に至るまではやや緩やかになっている。この掘り方を検出した際、中央には石組の井戸側の上端付近が確認できた。調査の結果、この石組の井戸側は円筒形を呈しており、外径170cm、内径105cm、深さ140

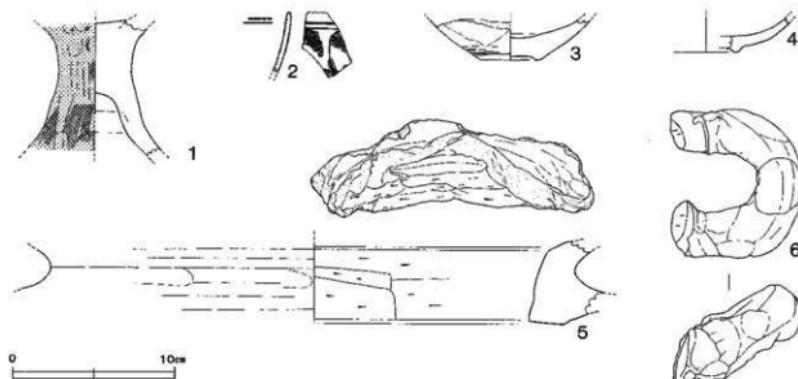
G37図 SE09実測図 ($S=1\%$)

G38図 SE09土層図 ($S=1/40$)

cmの規模を有するものであった。井戸側を形成する石は5cm程度の小さなものから60cmを測る大きなものまで認められるが、30cm～40cm大のものが最も多い。また、井戸側内部には崩れ落ちたと思われる石が若干入り込んでいた。標高7.04m以下には水溜が検出できた。この水溜は方形の木枠の内部に、円形の木枠が設置されていた。前者は一辺74cmの方形の平面形で深さ30cmを測るものであり、厚さ2cm程度の横板材4枚で形成されていた。後者は径58cmを測る円形の平面形で深さ54cmを測るものであり、厚さ1cm、幅4cm～6cmの縦板材31枚で形成されていた。なお、この水溜付近では湧き水が着しかった。

この遺構の覆土は10層に分層可能であった。井戸側内のものを第1層～第5層、井戸側外のものを第11層～第15層とした。前者からは少量の土師器、中世土師器、陶磁器が出土しており、後者からは土師器、須恵器、中世土師器が僅かに出土している。これらのうち実測可能なものを図示した。

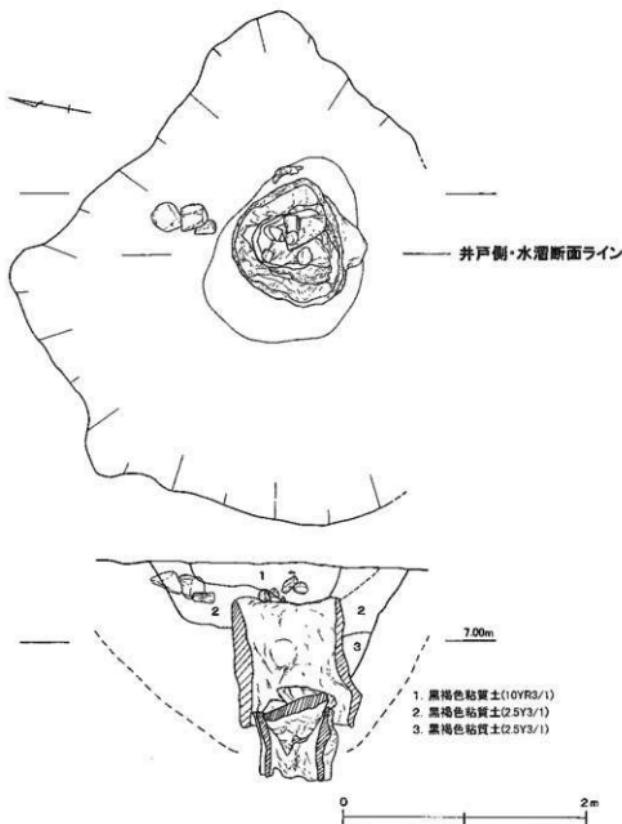
G39-1は高坏の脚部であり外面に赤色顔料が塗布されている。弥生時代終末頃のものであろう。G39-2は中国産の磁器であり16世紀中頃から後半のものと思われる。G39-3・G39-4は唐津焼の皿であり、前

G39図 SE09出土土器・陶磁器等実測図 ($S=1/3$)

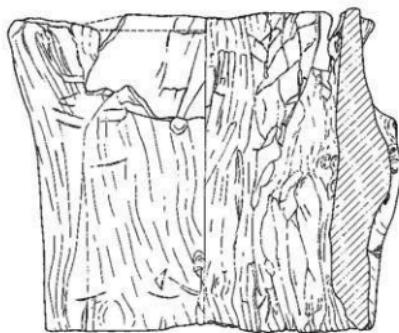
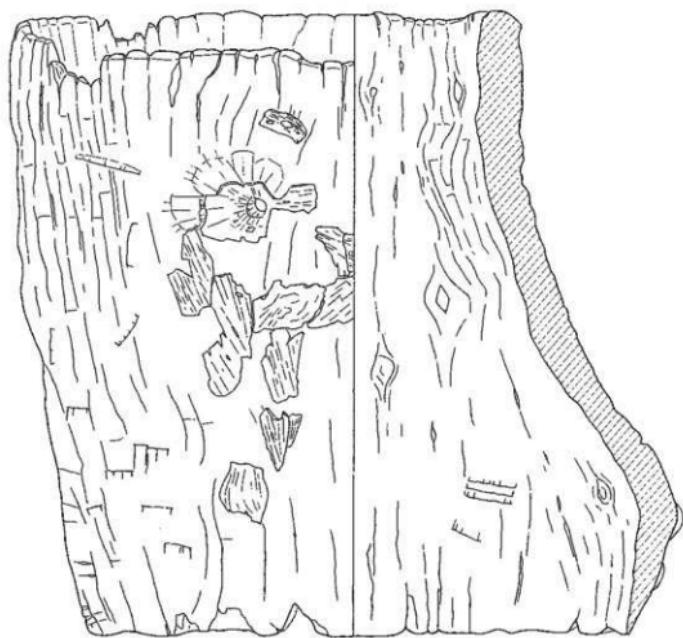
者は16世紀後半から17世紀前半頃の所産と考えられる。G39-5・G39-6の器種は判然としないが、前者が竈で後者が瓶形土器の把手と思われる。以上、掲載遺物はいずれも井戸側内部から出土したものである。よって、この井戸の廃棄時期は中世終わりから近世初頭頃と推定される。なお、井戸側外部から出土した遺物の下限遺物は中世上層器であるが、小片で時期が判然としないため、この井戸が築かれた時期は不明である。

SE10 (G40～G42図)

SE10は杭C149付近の標高7.64mの調査面において、SD32を切った状態で検出した井戸跡である。調査面が軟弱で一部不鮮明であったため精査には至っていないが、掘り方の平面形は径420cm程度のいびつな円形を呈していると思われる。また、標高6.07mで平坦な底に至るのであるが、ここでの平面形は長径160cm、短径120cmの不整な椭円形におさまっている。側壁の立ち上がりは東側半分では急であ



G40図 SE10実測図 ($S=1/40$)



0 40cm

G41図 SE10出土井戸側・水溜実測図 ($S=1/8$)

るが、その他は比較的緩やかになっている。

この井戸においては丸木を削り抜いた井戸側と水溜が検出できた。井戸側は標高6.30m～標高7.36mに設置されており、水溜は標高5.86m～標高6.46mに据えられていた。また、水溜は下部が井戸底に20cm程度埋まった状態であった。周辺が砂地で側壁が崩れやすいため、このようにしっかりと設置されたものと考えられる。また、水溜の上部には50cmを測る板状の石が2枚、蓋をするような状態で出土している。これが祭祀に関するものか廃棄されただけのものであるかは判然としない。

この井戸側と水溜は調査後持ち帰り保存処理を施して保管している。また、実測を行いG41図に示している。それぞれの規模は井戸側が高さ102cm、外径82cm～100cm、厚さ5cm前後であり、水溜が高さ50cm、外傾70cm前後、厚さ3cm～8.5cmであった。両者とも外面及び内面に繊維が残る面のほか、自然面も認められる。適度に表面を調整し成形されたことがうかがえる。また、木材については樹種同定の結果、ケヤキであることが判明している。

この井戸から出土した遺物はごく僅かであり、実測に堪えるものはG42-1～G42-3に示す3点を数えるに過ぎない。いずれも中世土師器の坏であるが、それぞれの出土地点はG42-1が井戸側内、G42-2が第3層、G42-3が第1層である。よって、G42-2が井戸の築造時期、G42-1・G42-3が井戸の廃棄時期を示す資料と考えられるが、これらが作られた時期は判然としない。しかし、これらに時期差があるとも感じられないため、この井戸の築造から廃棄までの期間は比較的短期間であったと思われる。



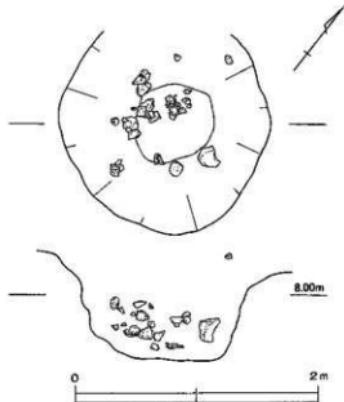
G42図 SE10出土中世土師器実測図 (S=1%)

SK22 (G43・G44図)

SK22はC142GrのDライン際標高8.34mの地山面で検出した井戸跡と考えられる遺構である。遺構の一部が調査区外に及んでいるが、平面形は径174cmの円形を呈しており、最下底までの深さは87cmを測る。また、底はほぼ平坦で、平面形は径63cmの円形におさまっている。この底では湧き水が著しいが、水溜などの施設は確認されておらず、上位でも井戸側の痕跡が認められなかった。よって、この井戸は素掘りであったものと思われる。

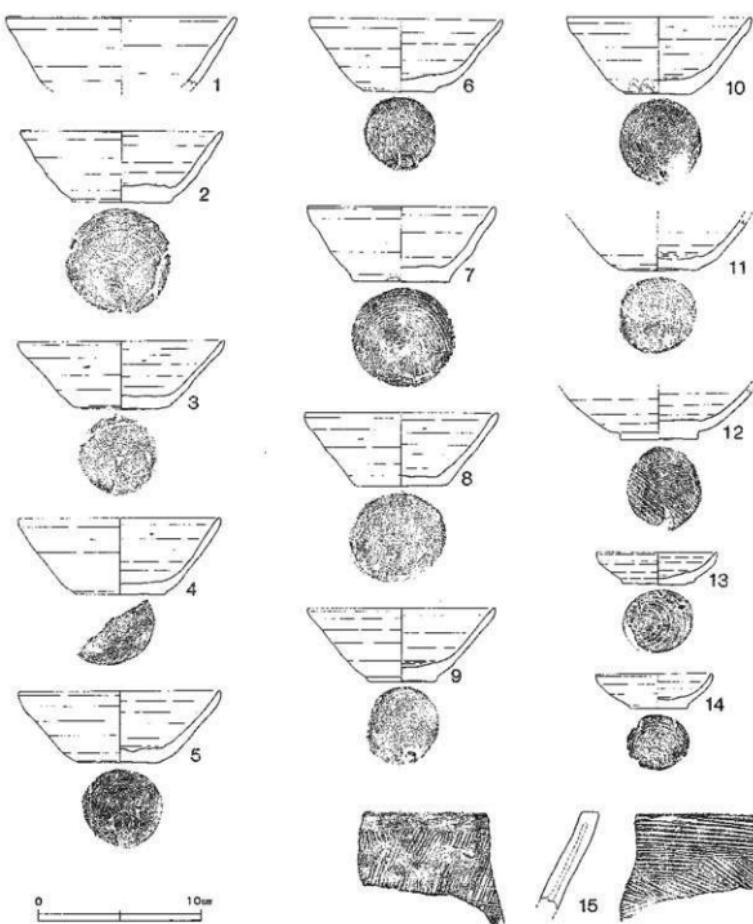
覆土からはビニール袋1袋半程度の中世土師器などが出土しており、ほぼ完形に復元できたものも多かったためこれらを中心的に図示した。

G44-1～G44-12は中世土師器の坏であり、歳小路西遺



G43図 SK22実測図 (S=1%)

跡遺物編年試案1期と2期に類似品が認められる。また、G44-13・G44-14は中世土師器の小皿であり、G44-15は瓦質土器の鉢と考えられる。これらの出土遺物からSK22は12世紀後半から13世紀前半にかけての造構と思われる。



G44図 SK22出土中世土師器等実測図 (S=%)

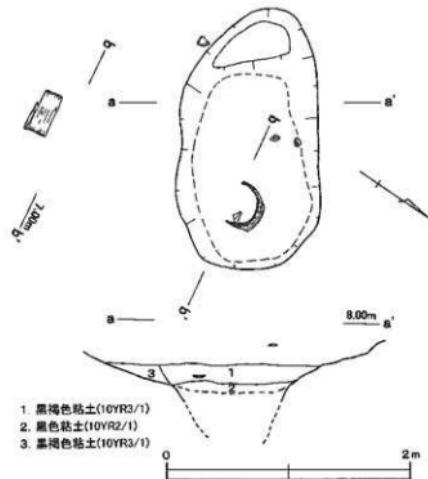
SK25 (G45・G46図)

SK25はC147Grで検出した遺構である。調査面が脆弱で精査が困難であったため検出に至ったのは標高7.65mであったが、本來はより上位から落ち込んでおりSD32を切っていたと考えられる遺構である。N-58°-E方向に長軸をとる楕円形の平面形を呈すると考えられ、検出規模は長径212cm、短径115cmを

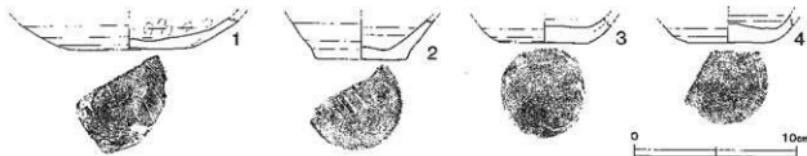
測る。また、この遺構の下方では標高6.68m～6.86m間で曲物が半分出土している。断面の観察には至らなかったが、この曲物はSK25に伴うものと考えられる。よって、曲物出土位置の最下底がこの遺構の底であると推定できることから、その標高は6.68mであったと思われる。

覆土からは上器片が4点出土しており、これらをG46-1～G46-4に図示した。いずれも中世土器の坏底部片であるが、部体から口縁部を欠いているため時期は判然としない。

なお、この遺構の性格については、1m程度の深さを有しており、最下底に曲物が設置されていたことを勘案すると、素掘りの井戸である可能性が指摘できるが、詳細は不明である。また、遺構の時期については出土遺物から中世と判断できよう。



G45図 SK25実測図 (S=1%)



G46図 SK25出土中世土器実測図 (S=1%)

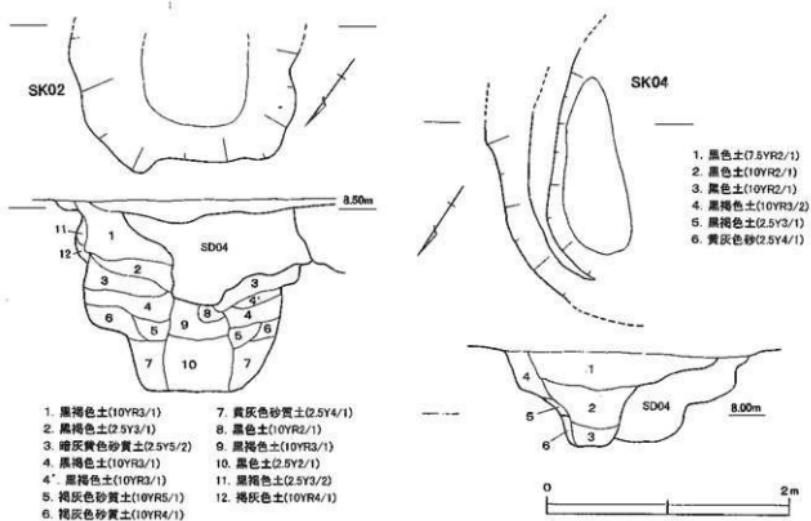
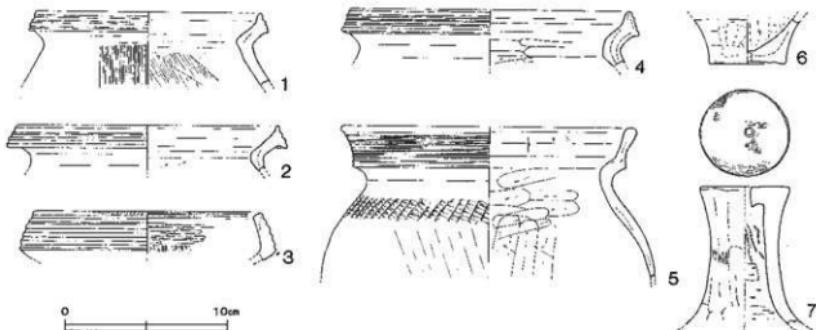
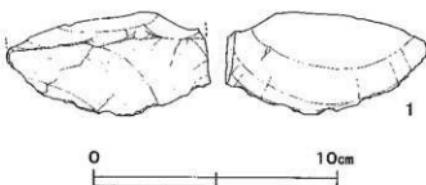
土坑

SK02・SK04 (G47～G49図)

SK02とSK04はいずれもSD04の底で確認した遺構である。断面で切り合い関係を観察した結果、SK02はSD04に切られており、SK04はSD04を切っているようであった。

SK02はB124GrのBライン際で検出したもので、標高8.57mから落ち込む遺構である。遺構の一部が調査区外に及んでおり半分程度の検出にとどまっているが、平面形は径200cm程度のいびつな円形を呈すると推定され、深さは157cmを測り底の標高は7.00mである。底はほぼ平坦であり、平面形は径90cm程度の不整な円形におさまっている。また、側壁の立ち上がりは急であり垂直に近い。

覆土からは少景の弥生土器片が出土しており、このうち図化に堪えるものをG48-1～G48-3に示した。いずれも弥生時代中期後葉のものであり遺構の時期を示すと考えられる。また、遺構の性格については判然としないが、井戸である可能性もある。なお、出土遺物のうち数点はSD04の遺物と接合した

G47図 SK02・SK04実測図 ($S=1\%$)G48図 SK02・SK04出土弥生土器実測図 ($S=1\%$)G49図 SK04出土石製品実測図 ($S=1\%$)

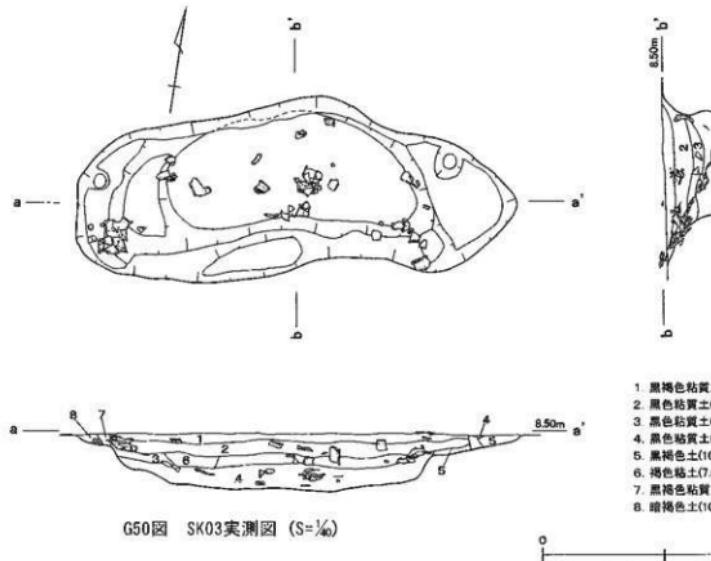
が、これらはSD04の遺物として扱っている。

SK04はB124Grの標高8.52mの調査面で確認したるものであり、平面形はN-40°-W方向に長軸をとる楕円形を呈しているようである。規模については長径290cm程度、短径170cm程度、深さ79cmを測ると推定される。側壁の立ち上がりについては、底から標高8.10m付近まで急であるが、それより上位では緩やかになっている。

覆土からはビニール袋半分の弥生土器と1点の石製品が出土しており、実測に堪えるものをG48-4～G48-7とG49-1に示した。このうちG48-5が後期のものであり造構の廃棄時期を示すと考えられる。

SK03 (G50～G53図)

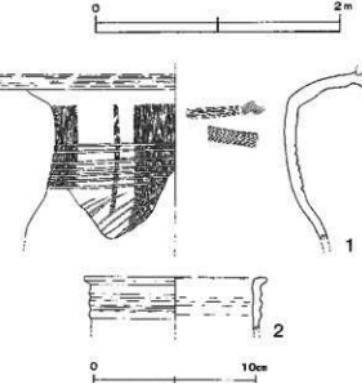
C128GrからC129Grの標高8.47mの地山面においてSK03を検出した。N-81°E方向に長軸をとる不整な椭円形の平面形を呈しており、検出規模は長径360cm、短径140cmを測る。深さについては造構中央付近が最も落ち込み47cmを測るのであるが、その周囲から側壁に至るまでの坑底は非常に緩やかな勾配で高くなっている。また、坑底から標高8.30m付近までの側壁の立ち上がりは急であるが、それより



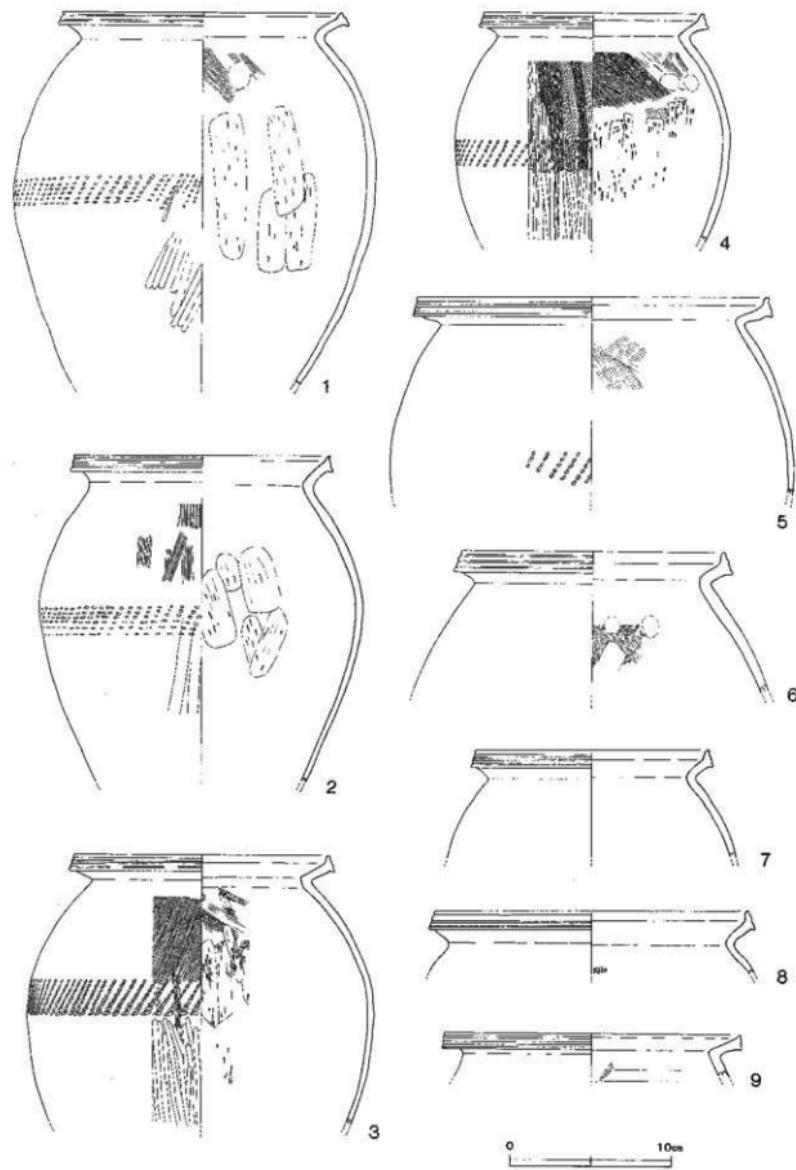
G50図 SK03実測図 ($S=1\%$)

上位から上端に至るまではいずれの側壁も緩やかになり、北側を除く側壁については一部段を有するようになる。なお、北側壁の坑底沿いには一部抉れた箇所も認められた。

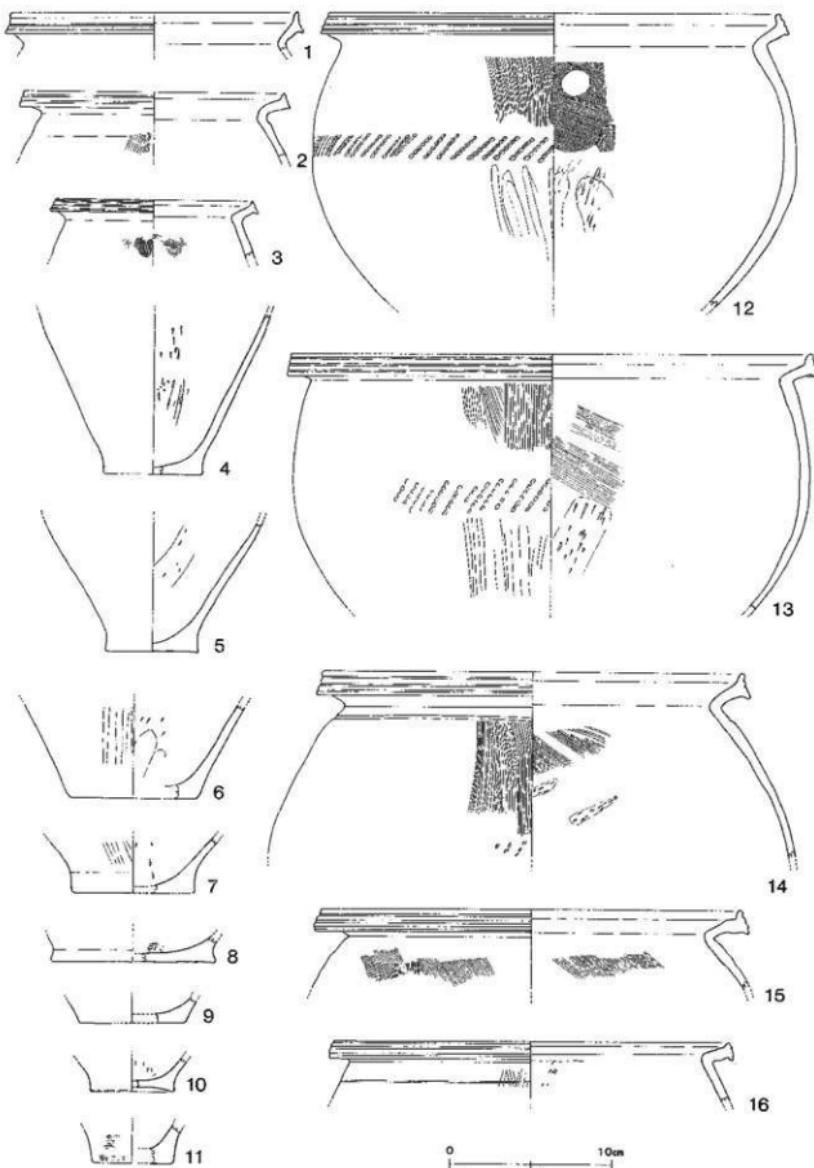
覆土は8層に分層可能であるが、基本的な層を構成するのは第1層から第4層となっており、ほぼ造構全体を覆うように横方向に広がり重なっている状態である。各層で弥生土器が出土したのであるが、層ごとの遺物に時期差は認められないことから、比較的の短期間に堆積したか埋められたと推定される。造構全体から出土した弥生土器片の量はコンテナ1箱分であり、図化に堪えるものはほぼ掲載したが割愛



G51図 SK03出土弥生土器実測図 ($S=1\%$)

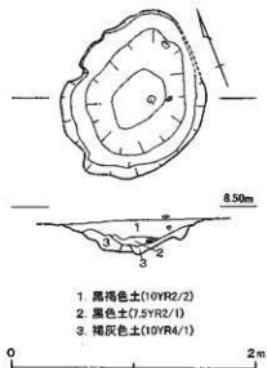


G52図 SK03出土弥生土器実測図2 ($S=\frac{1}{3}$)

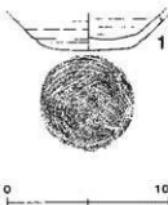
G53図 SK03出土弥生土器実測図3 ($S=1/2$)

したものも若干ある。

最初に壺を示した。G51-1は広口壺、G51-2は直口壺であり、両者とも松本IV-2期に相当するものと思われる。続いて壺をG52-1～G53-3に示した。いずれも口縁端部が上下に拡張し、端面に四線文を複数条巡らせている。また、内面のケズリ調整は頭部まで至っていないため、これらは松本IV-2期の範疇に収まると考えられる。G53-12～G53-16には鉢と思われるものを示した。これらも、壺と同様の特徴を持ち松本IV-2期に当たると思われる。

G54図 SK15実測図 ($S=1/2$)

このように出土した弥生土器片はいずれも松本IV-2期に相当すると考えられるため、遺構の時期は中期後葉と推定される。また、遺構の性格としては土坑墓や貯蔵穴などが考えられる。

G55図 SK15出土中世土 径142cm、短径114cmを測る。深さにつ
師器実測図 ($S=1/2$)

SK15 (G54・G55図)

杭C139のやや北東でSK15を確認した。標高8.40mの地山面で検出しておらず、一部他の遺構によって擾乱を受けていたが調査に影響を与えるものではなかった。平面形はN-43°-E方向に長軸をとる楕円形を呈しており、検出規模は長

いては遺構の中心付近の坑底が最も落ち込みこの箇所で29cmを測る。側壁の立ち上がりは比較的緩やかであるが、標高8.30m付近では特に緩やかになり段状を呈している。

覆土は3層確認でき、ここから少量の土師器、須恵器、中世土師器の小片が出土している。これらのうち実測可能なものをG55-1に示した。中世土師器の坏底部であるが時期は判然としない。この遺物は遺構の時期を示すと思われるが、遺構の性格については不明である。

G56図 SK21実測図 ($S=1/2$)

SK21 (G56・G57図)

C149Grの標高7.72mの地山面でSK21を検出した。地山が水を含んだゆるい砂地であったため精査には至っていないが、N-32°-W方向に長軸をとる長細い平面形を呈している。検出規模は長さ183cm、幅72cm～109cmである。また、遺構の北西寄りが最も落ち込みこの遺構の底となるのであるが、この坑底は径60cmの円形

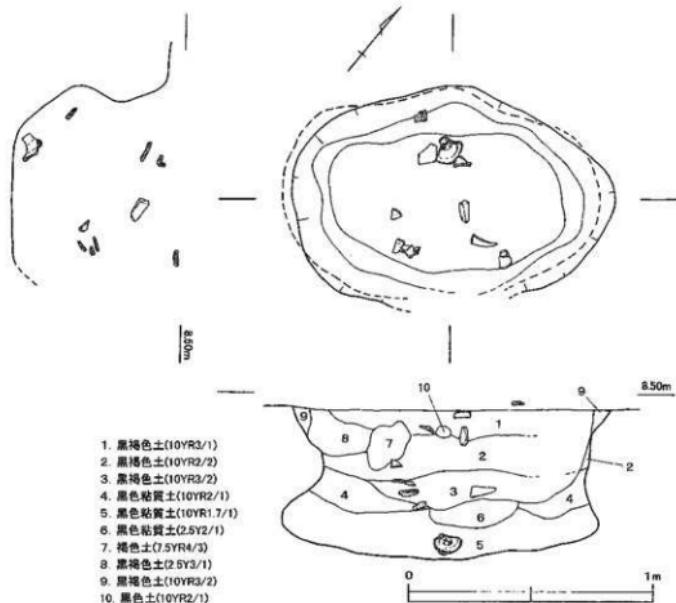
におさまり標高は6.76mである。側壁については底から標高7.34m付近までは調査中に崩壊してしまったが、上位では抉れていたことが確認できた。これは水による浸食が及んだためと思われることから、この遺構の性格としては井戸であった可能性も考えられる。

覆土からはG57-1に示す中世土師器が1点だけ出土している。これは台付皿の台部で13世紀頃のものと思われる。この遺物は遺構の時期を示す可能性がある。

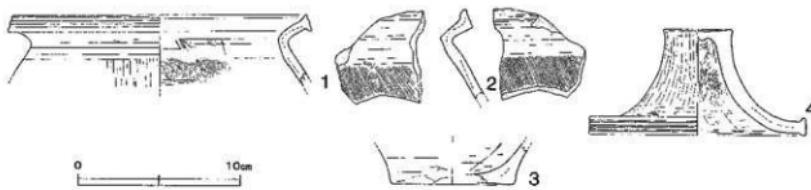
ピット

P2649 (G58～G60)

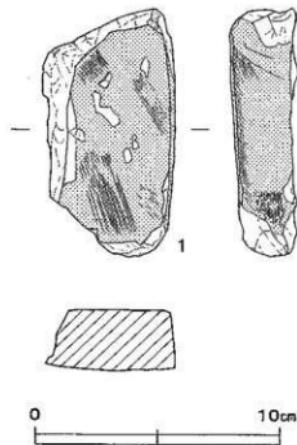
C126Grの標高8.44m調査面においてP2649を検出した。一部がSB05などにより擾乱を受けているが、平面形はN-51°-E方向に長軸をとる楕円形を呈しており、検出規模は長径132cm、短径95cm、深さ62cm



G58図 P2649実測図 (S=%)



G59図 P2649出土弥生土器実測図 (S=%)

G60図 P2649出土磁石実測図 ($S=\frac{1}{2}$)

を測る。底は中心付近が最も落ち込んでいるが、側壁に近づくにつれて徐々に高くなっていく。また、この遺構は平面的に底面の径が側壁の径より大きくなっている、断面形は袋状を呈している。

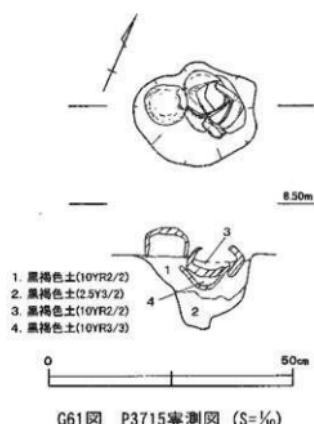
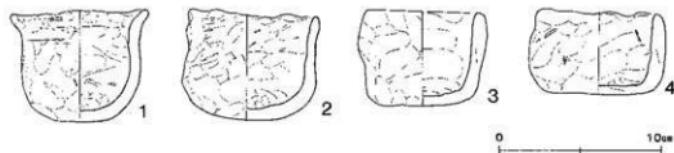
覆土からは少量の弥生土器と砥石が1点出土しており、実測可能なものを図示した。G59-1・G59-2には蓋を示した。いずれも口縁端部が拡張し、端面に凹線文を施している。また、頸部以下の内面はハケ調整が認められる。G59-4は蓋でありほぼ完形で出土している。これら土器片は松本IV-2期に相当するものであり、遺構の時期を示すと考えられる。G60-1は砥石であり2面に研磨面が残っている。

調査時には柱穴として取り扱ったが、形状や出土遺物からこの遺構の性格は貯蔵穴や土坑墓の可能性も残る。

P3715 (G61・G62)

C137BGの標高8.40mの地山面においてP3715を検出した。平面形は不整な円形を呈しており、検出規模は径23cm後、深さ16cmを測る。しかし、検出面より上位でのこの遺構に伴うと考えられる遺物が出土しているため、本来、深さは20cm以上あったものと推定される。

覆土からは手捏土器が4点出土したため、G62-1～G62-4に示した。G62-1は口縁部がやや外反して開口しており、底は丸くおさめられている。粗雑な作りではあるが他のものよりは比較的丁寧に仕上げられている。G62-2の底部はやや丸味を帯びており、器壁は体部から口縁端部に至るまではほぼ垂直である。G62-3・G62-4はともに底部が平たく、器壁の立ち上がりも垂直に近いが、G62-4はやや器高が低い。遺構の時期については手捏土器の時期が判然としないため不明である。性格については地鎮に関係するものである可能性はあるが推測の域を出ない。

G61図 P3715実測図 ($S=\frac{1}{10}$)G62図 P3715出土手捏土器実測図 ($S=\frac{1}{2}$)

ピット列（G63～G68図）

SA01はB134GrからB137Grに至る標高8.41m調査面で検出した、P3401、P3402、P3403、P3404、P3501、P3502、P3503、P3602、P3603、P3708、P3709、P3707によって形成されるピット列である。このピット列は全長18.4mを測りN-44°-Eを指向している。各ピットの平面形はほぼ列方向に長軸をとる楕円形を呈しており、検出規模は長径58cm～94cm、短径22cm～39cm、深さ24cm～41cmで、ピット中心間の距離は1.5m～1.9mを測る。出土遺物については全ピットあわせてもごく僅かであり実測可能なものをG66-1～G68-1に示した。G66-1は備前焼の擂鉢、G67-1・G67-2は砥石であり、G68-1は釣針と思われる金属製品である。これらの遺物からSA01の時期は中世以降であると考えられる。

SA02はB133GrからC133Grに至る標高8.23mの調査面で検出した、P3301、P3303、P3304によって形成されるものである。このピット列は全長4.5mを測りN-6°-Wを指向する。各ピットの平面形は列方向に長軸をとる楕円形を呈しており、検出規模は長径55cm～63cm、短径27cm～40cm、深さ26cm～44cmで、ピット中心間の距離は1.8mを測る。遺物についてはP3304から中世土師器と思われる破片が1点だけ出土している。よって、SA02の時期は中世以降と思われるが判然としない。

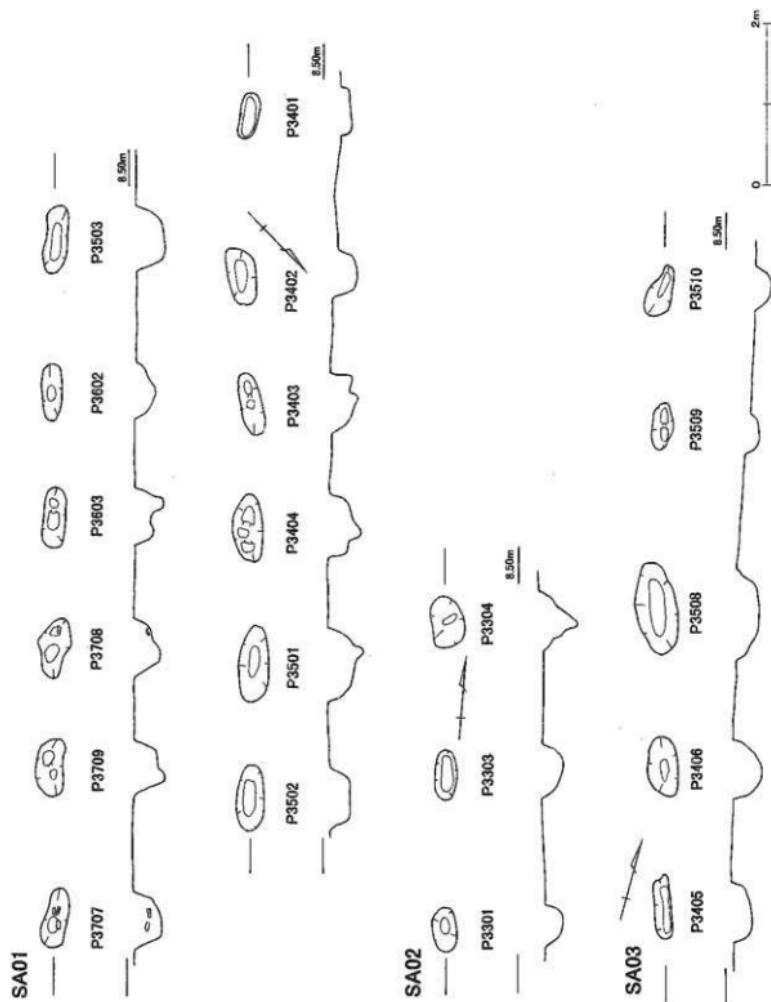
SA03はB134GrからC135Grに至る標高8.15m～8.40mの調査面で検出した、P3405、P3506、P3508、P3509、P3510によって形成されるピット列である。このピット列は全長7.7mを測りN-16°-Wを指向する。各ピットの平面形はほぼ列方向に長軸をとる楕円形を呈しており、検出規模は長径58cm～112cm、短径20cm～50cm、深さ14cm～34cmで、ピット中心間の距離は1.7m～2.1mである。遺物はP3405から中世土師器と思われる小片が2点だけ出土している。よって、SA03の時期は中世以降であろう。

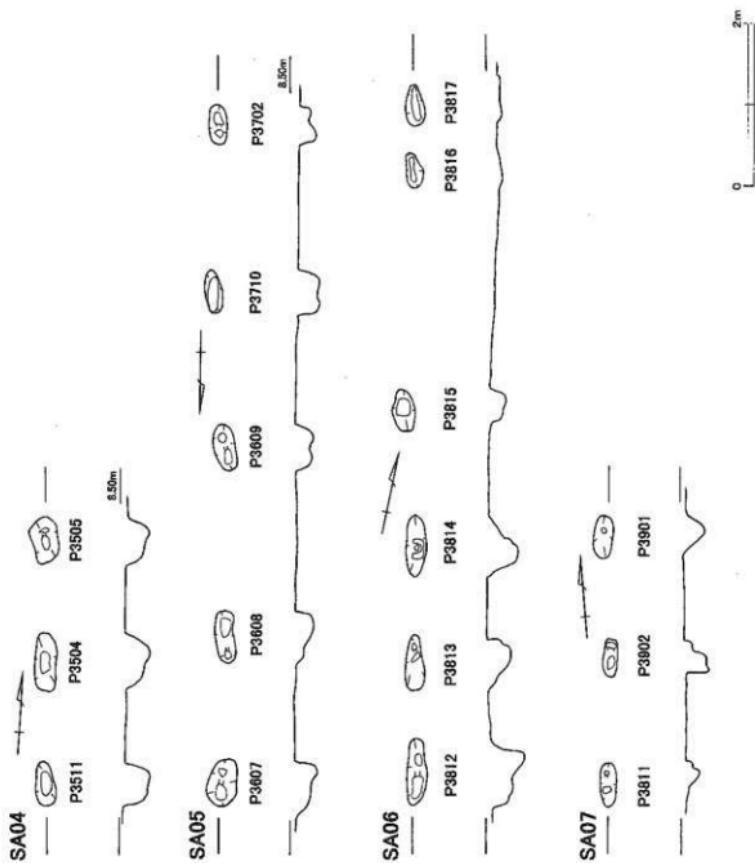
SA04はB135Grの標高8.42mの調査面で検出しており、P3511、P3504、P3505によって形成されている。このピット列は全長3.0mを測りN-4°-Wを指向する。各ピットの平面形は列方向に長軸をとる楕円形であり、検出規模は長径54cm～72cm、短径24cm～30cm、深さ28cmで、ピット中心間の距離は1.5mである。遺物は中世土師器と思われる破片が2点出土している。よって、SA04の時期は中世以降であろう。

SA05はB136GrからC137Grに至る標高8.40m前後の調査面で検出した、P3607、P3608、P3609、P3710、P3702によって形成されるものである。このピット列は全長8.2mを測りN-12°-Eを指向する。各ピットの平面形はほぼ列方向に長軸をとる楕円形であり、検出規模は長径48cm～64cm、短径21cm～35cm、深さ21cm～26cmで、ピット中心間の距離は1.8m～2.3mである。ピットからは少量の土師器、須恵器、中世土師器の小片が出土しているため、SA05の時期は中世以降と考えられる。

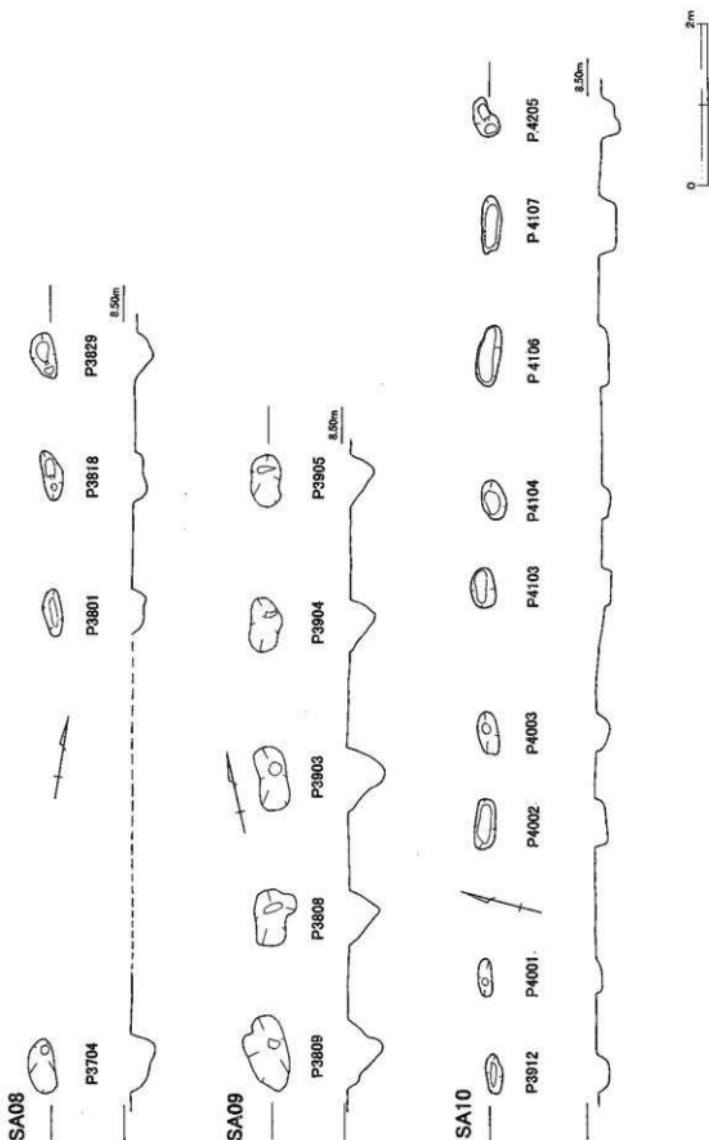
SA06はB138GrからC138Grに至る標高8.37m～8.50mの調査面で検出した、P3812、P3813、P3814、P3815、P3816、P3817によって形成されるピット列である。このピット列は全長8.3mを測りN-11°-Wを指向する。各ピットの平面形はほぼ列方向に長軸を有する楕円形を呈しており、検出規模は長径44cm～82cm、短径25cm前後、深さ6cm～40cmで、ピット中心間の距離は0.8m～2.9mを測る。ピットからは土師器、須恵器、中世土師器が出土していることから、SA06の時期は中世以降と思われる。

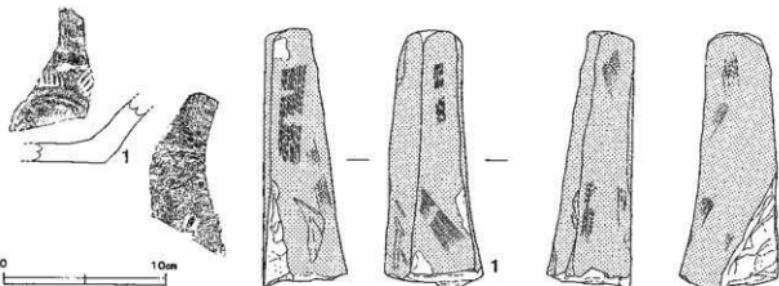
SA07はB138GrからB139Grに至る標高8.46mの調査面で検出した、P3811、P3902、P3901によって形成されるものである。このピット列は全長3.1mを測りN-5°-Eを指向している。各ピットの平面形は列方向に長軸を有する楕円形を呈しており、検出規模は長径50cm前後、短径20cm前後、深さ18cm～30cmで、ピット中心間の距離は1.6mを測る。ピットからは僅かに土器片が出土しているが時期は判然としない。

G63図 SA01～SA03実測図 ($S=1\%$)

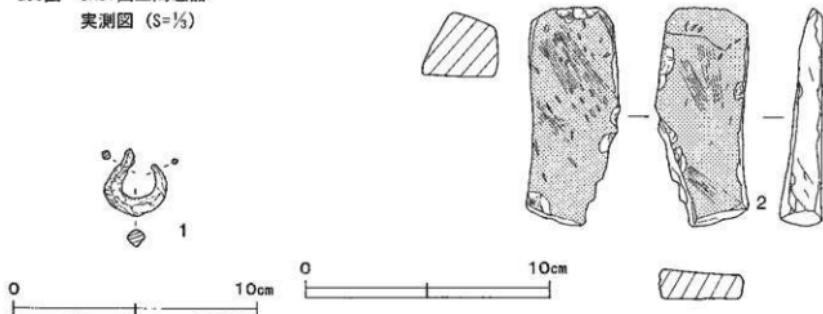
G64図 SA04～SA07実測図 ($S=1\%$)

SA08はB138GrからC138Grに至る標高8.40mの調査面で検出した、P3704、P3801、P3818、P3829によつて形成されるものである。このピット列は全長8.8mでN 9° -Wを指向している。各ピットの平面形はほぼ列方向に長軸をとる楕円形を呈しており、検出規模は長径57cm～66cm、短径23cm～32cm、深さ16cm～26cmで、ピット中心間の距離は1.5m～1.7mを測る。ピットからは僅かに中世上飾器の破片が出土しているため、SA08の時期は中世以降であろう。

G65図 SA08～SA10実測図 ($S = \frac{1}{50}$)



G66図 SA01出土陶磁器
実測図 ($S=\frac{1}{2}$)



G68図 SA01出土金属製品
実測図 ($S=\frac{1}{2}$)

G67図 SA01出土砥石実測図 ($S=\frac{1}{2}$)

SA09はB138GrからC139Grに至る標高8.44mの調査面で検出した、P3879、P3809、P3808、P3916、P3904、P3905によって形成されるピット列である。このピット列は全長8.8mを測りN-12°-Eを指向している。各ピットは列方向に長軸をとる楕円形を呈しており断面は三角形を呈している。検出規模は長径64cm～94cm、短径34cm～49cm、深さ32cm～44cmで、ピット最下底間の距離は1.7m～1.9mを測る。ピットからは少量の土師器、須恵器、中世土師器が出土している。よって、SA09の時期は中世以降であろう。

SA10はC139GrからB142Grに至る標高8.38mの調査面で検出した、P3912、P4001、P4002、P4003、P4103、P4104、P4106、P4107、P4205によって形成されるピット列である。このピット列は全長11.8mを測りN-75°-Eを指向している。各ピットの平面形はほぼ列方向に長軸をとる楕円形を呈しており、検出規模は長径46cm～75cm、短径17cm～30cm、深さ7cm～27cmで、ピット中心間の距離は1.1m～1.9mを測る。ピットからは出土遺物が全くないためSA10の時期は不明である。

その他の主要ピット (G69~G72図)

P2114はC121Grの標高8.78mの地山面で検出した。N-77°-E方向に長軸をとる楕円形の平面形を呈しており、検出規模は長径60cm、短径52cm、深さ35cmを測る。覆土からは土器片が僅かに出土しており実測可能なものをG71-1に示した。弥生土器の底部であるが他の破片には中世土師器も認められるため、遺構の時期を示すものではない。

P2126はB121Grの標高8.80mの地山面で検出した。N-38°-E方向に長軸をとる楕円形の平面形を呈しており、検出規模は長径54cm、短径47cm、深さ35cmを測る。この遺構からは杭が検出できたが掘削時に折れたようである。覆土からは土器片が僅かに出土しており実測に堪えるものをG71-2に示した。弥生時代土器であるが他の破片には中世土師器が認められるため、この遺構は中世以降のものであろう。

P2329はC123Grの標高8.62mの調査面において、SD02を切った状態で検出した。N-67°-W方向に長いいびつな平面形を呈しており、検出規模は長さ81cm、幅50cm~65cmで、最下底までの深さは32cmを測る。覆土からは僅かに土器片が出土しており実測可能なものをG71-3に示した。弥生時代中期のものであるが、他の破片には中世土師器も認められる。

P2335はC123Grの標高8.62mの調査面において、SD01を切った状態で検出した。N-58°-E方向に長軸をとる不整な楕円形の平面形を呈しており、検出規模は長径76cm以上、短径58cm、深さ35cmを測る。覆土からはG71-4に示す土師器が1点のみ出土した。奈良時代の壺と思われ遺構の時期を示す可能性がある。

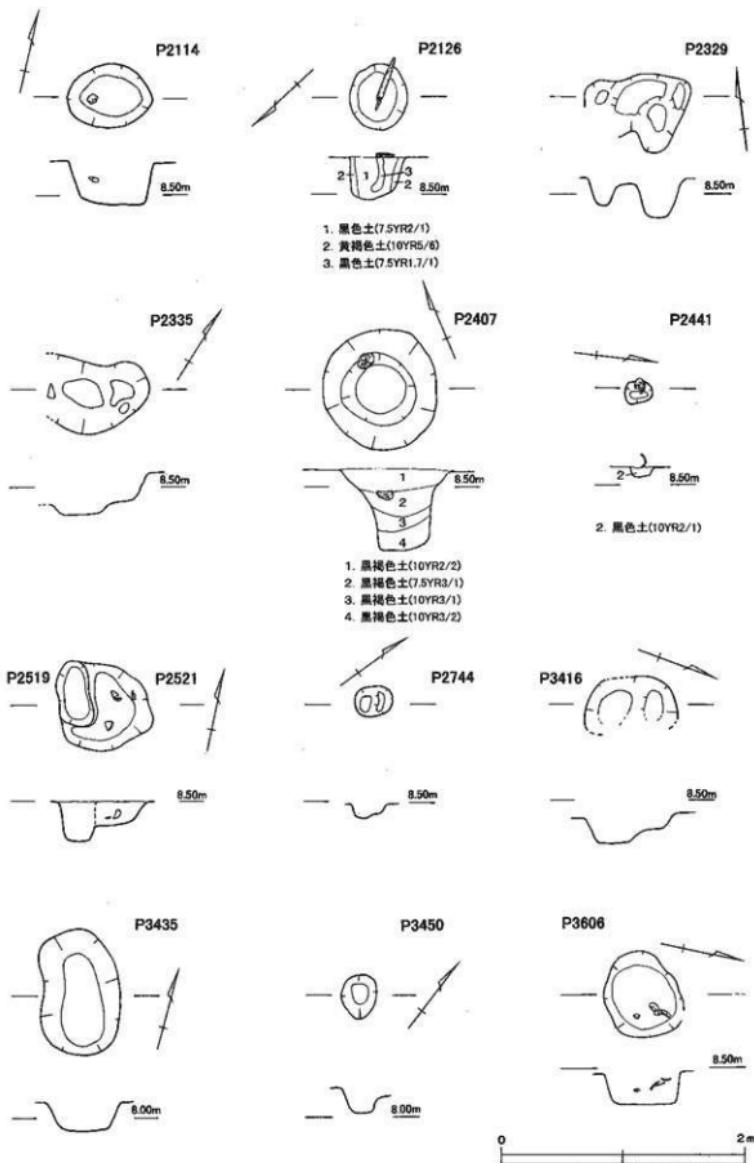
P2407はC124Grの標高8.67mの調査面でSD04を切った状態で検出した。平面形は円形を呈しており、検出規模は径96cm、深さ67cmを測る。底は比較的平坦であり、側壁の立ち上がりは中位まではほぼ垂直であるが、上位では緩やかになっている。覆土からは中世土師器が少量出土している。このうちほぼ完形で出土した壺をG71-5に示した。13世紀の所産と思われ遺構の時期を示すと考えられる。

P2441はD124Grの標高8.64mの地山面で検出した。平面形はN-4°-W方向に長軸をとる不整な楕円形を呈しており、検出規模は長径22cm、短径18cm、深さ8cmを測る。検出面直上ではこの遺構に伴うと考えられるG71-6に示す中世土師器の壺が出土した。14世紀の所産と思われ遺構の時期を示すと考えられる。

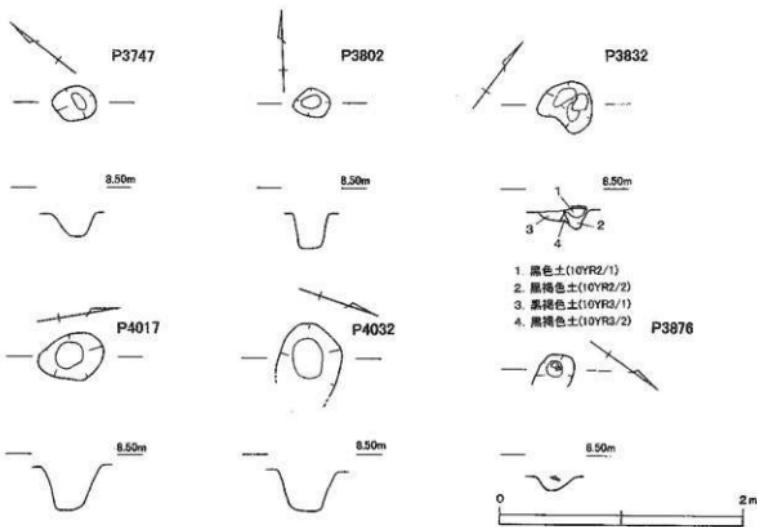
P2519はC125Grの標高8.50mの調査面でP2521を切った状態で検出した。N-20°-W方向に長軸をとる楕円形の平面形を呈しており、検出規模は長径55cm、短径24cm、深さ33cmを測る。覆土からは僅かに土器片が出土しており実測可能なものをG71-7に示した。弥生土器であるが他のものには中世土師器片と考えられるものも認められる。

P2521はC125Grの標高8.50mの調査面で検出した。P2519によって底まで攪乱を受けているが平面形は不整な円形を呈していると思われ、検出規模は径70cm程度、深さ20cmを測る。覆土からは弥生土器片が僅かに出土しており実測に堪えるものをG71-8に示した。中期後葉の壺であり遺構の時期を示すと考えられる。

P2744はC127Grの標高8.48mの地山面で検出した。N-33°-E方向に長軸をとる楕円形の平面形を呈しており、検出規模は長径31cm、短径24cm、深さ12cmを測る。覆土からはG71-9に示す弥生土器片



G69図 その他の主要ピット実測図1 (S=1/40)

G70図 その他の主要ピット実測図2 ($S=1/6$)

が1点のみ出土した。中期後葉の窓であり遺構の時期を示す可能性がある。

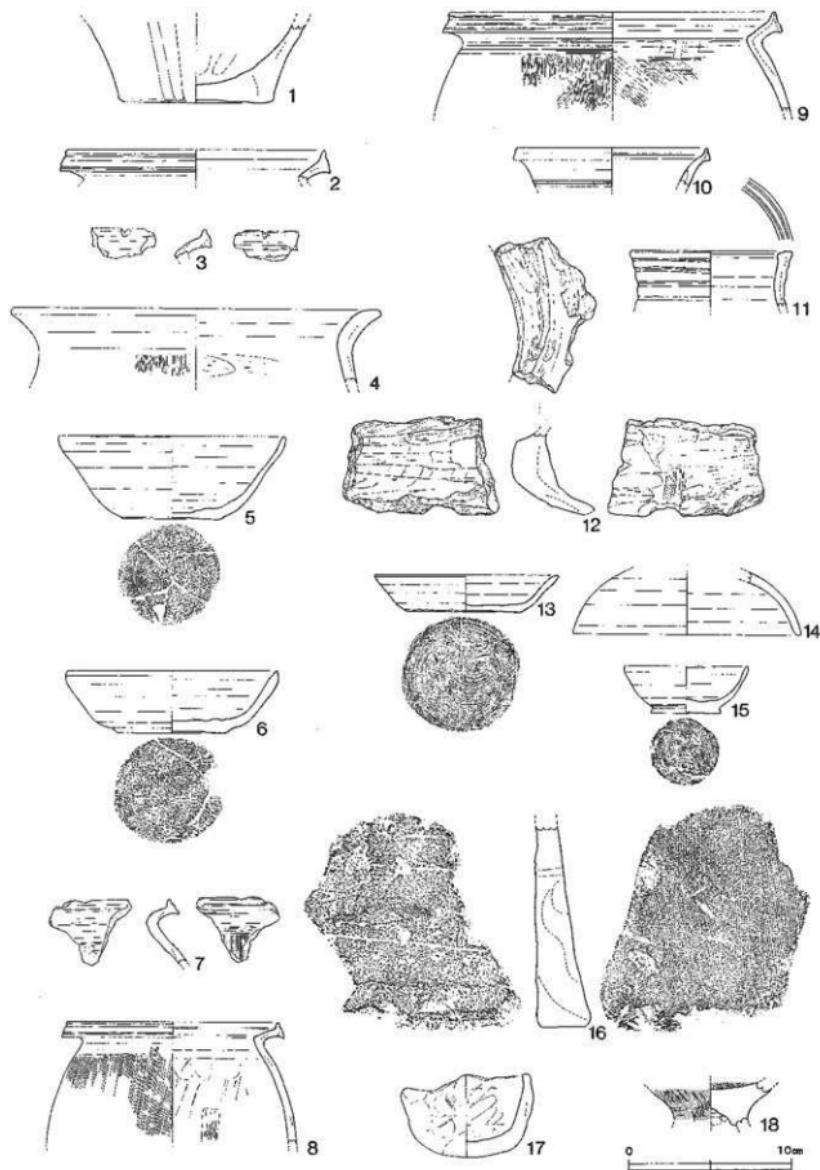
P3416はB134Grの標高8.38mの地山面において、P3403とP3405に切られた状態で検出した。N-20°-W方向に長軸をとる楕円形の平面形を呈しており、検出規模は長径74cm、短径50cm程度、深さ24cmを測る。覆土からは土器師、須恵器の小片が僅かに出土しており実測に堪えるものをG71-10に示した。須恵器長径壺の口縁部であり、奈良時代頃のものと思われる遺構の時期を示す可能性がある。

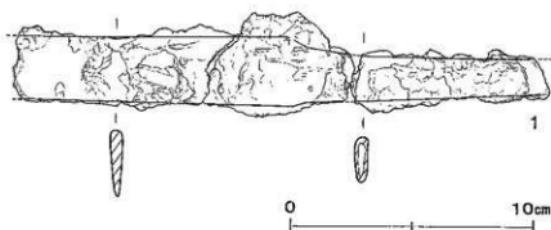
P3435はC134Grの標高8.13mの地山面で検出した。N-27°-W方向に長軸をとる楕円形の平面形を呈しており、検出規模は長径103cm、短径54cm、深さ25cmを測る。覆土からは上器片が僅かに出土しており実測可能なものをG71-11に示した。弥生土器の直口壺であるが他の破片に中世土器も認められるため遺構の時期を示すものではない。

P3450はC134Grの標高8.24mの地山面で検出した。N-39°-W方向に長軸をとる楕円形の平面形を呈しており、検出規模は長径36cm、短径29cm、深さ20cmを測る。覆土からは僅かに中世土器片が1点のみ出土しているが器種や時期は不明である。

P3606はB136Grの標高8.47mの調査面で検出した。他の遺構によって一部擾乱を受けているが、不整な円形の平面形を呈しており、検出規模は径67cm前後、深さ27cmを測る。覆土からは僅かに中世土器片が出土しており実測可能なものをG71-13に示した。入念なつくりの皿であり完形で出土しているため遺構の時期を示すと考えられるが、製作時期は不明である。

P3747はD137Grの標高8.29mの地山面で検出した。N-38°-W方向に長軸をとる楕円形の平面形を呈しており、検出規模は長径36cm、短径28cm、深さ20cmを測る。覆土からはG71-14に示す須恵器の壺蓋が1点のみ出土している。古墳時代末期頃のものと考えられ遺構の時期を示す可能性があろう。

G71図 その他の主要ピット出土土器等実測図 ($S=1/3$)



G72図 P4032出土刀実測図 (S=1/2)

P3802はC138Grの標高8.29mの調査面でSD16を切った状態で検出した。N-89°-W方向に長軸をとる楕円形の平面形を呈しており、検出規模は長径30cm、短径23cm、深さ28cmを測る。覆土からはG71-15に示す中世土師器の壊が1点のみ出土しており遺構の時期を示す可能性があるが、製作時期は不明である。

P3832はC139Grの標高8.34mの地山面で検出した。いびつな平面形を呈しており、検出規模は長さ43cm、幅35cm程度、深さ16cmを測る。検出面直上でこの遺構に伴うと考えられる土器片が出土しており、これをG71-16に示したが、器種や時期は不明である。

P3876はC139Grの標高8.33mの調査面で他の遺構に切られた状態で検出した。N-82°-E方向に長軸をとる楕円形の平面形を呈すると思われ、検出規模は長径28cm以上、短径28cm、深さ11cmを測る。覆土からはG71-17に示す小型の鉢が1点のみ出土しているが製作時期は判然としない。

P4017はB139Grの標高8.41mの地山面で検出した。N-8°-W方向に長軸をとる楕円形の平面形を呈しており、検出規模は長径55cm、短径39cm、深さ37cmを測る。覆土からは僅かに土器片が出土しており実測可能なものをG71-18に示した。土師器の高壊であり外面には赤色顔料が塗布されている。他の破片には中世土師器も認められるため、遺構の時期は中世以降であろう。

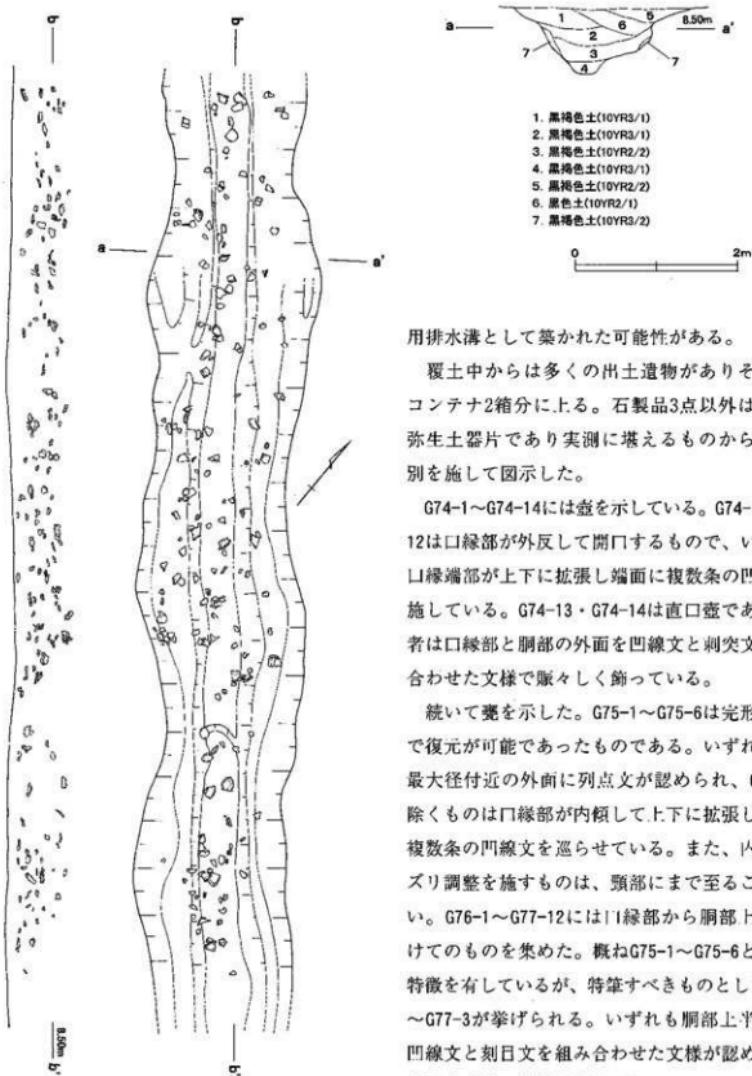
P4032はC140Grの標高8.38mの調査面でP4007によって切られた状態で検出した。N-87°-E方向に長軸をとる楕円形の平面形を呈すると考えられ、検出規模は長径50cm以上、短径50cm、深さ35cmを測る。覆土からはG72-1に示す刀が1点のみ出土しているが、時期など詳細は不明である。

溝状遺構

SD01 (G73~G79図)

B123-D123ライン際の標高8.76mの調査面でSD01を検出した。調査区を横断して延びており、検出した範囲ではごく僅かに南西に膨らんでいるものの大体的にはN-39°-Wを指向している。調査当初はCラインからDライン間の検出にとどめていたが多量の遺物が出土したため、調査区をDラインから北西に約2mまで拡張した。その結果、検出した長さは11.1mであり、規模は上幅144cm~215cm、下幅40cm前後、深さ80cm前後であった。側壁の立ち上がりについては場所によって変化するのであるが、概ね底から標高8.10m付近までは急で、より上位では緩やかになっている。また、標高8.36m付近の両側壁は水の浸食作用によって抉られている。底については標高7.93m~8.06mの範囲で緩やかに変化する起伏が観察できたが、検出した範囲での勾配の有無は明確ではない。

覆土については全体で7層確認しているが基本をなす層は第1層から第4層であり、掘り返しによって管理されていたことがうかがえる。この溝はどのような意図で築かれたものかは判然としないものの、標高8.36m付近のオーバーハング箇所はその標高付近で水面があったことを裏付けているため、



G73図 SD01実測図 (S=1/60)

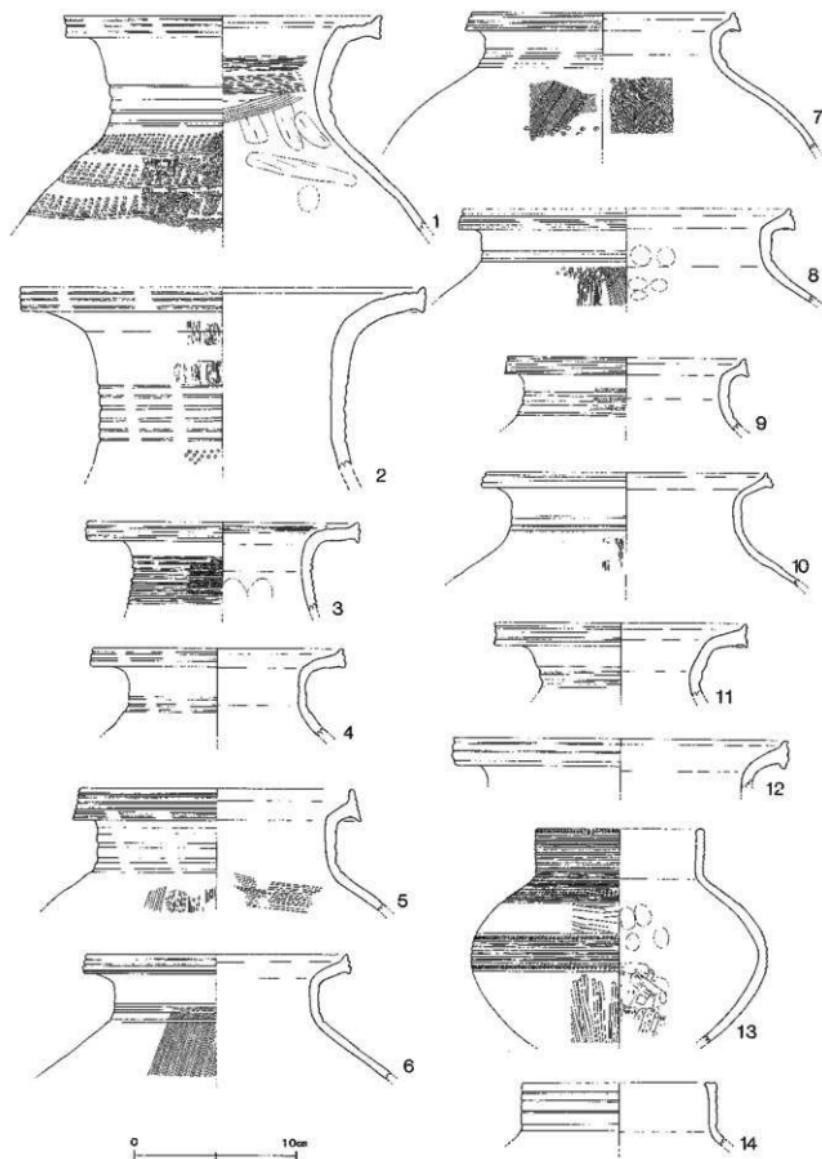
用排水溝として築かれた可能性がある。

覆土中からは多くの出土遺物がありその量はコンテナ2箱分に上る。石製品3点以外はすべて弥生土器片であり実測に堪えるものから若干選別を施して図示した。

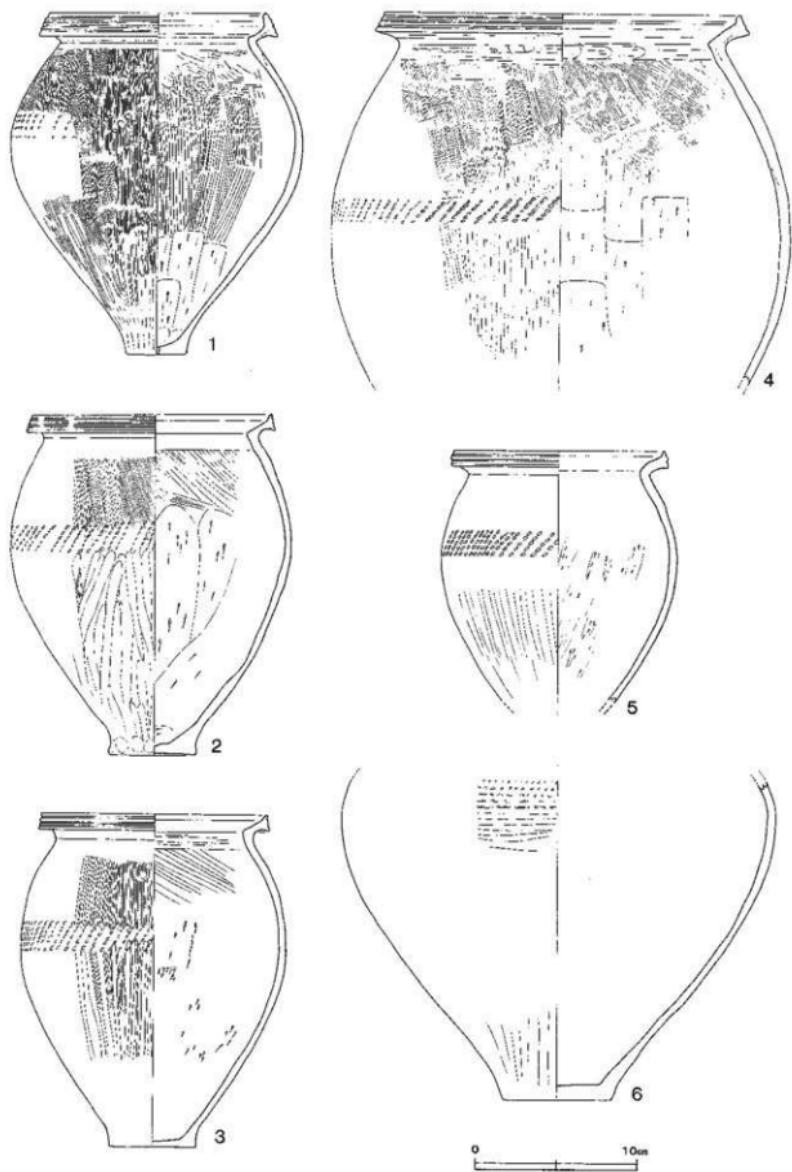
G74-1～G74-14には壺を示している。G74-1～G74-12は口縁部が外反して開口するもので、いずれも口縁端部が上下に拡張し端面に複数条の凹線文を施している。G74-13・G74-14は直口壺である。前者は口縁部と胴部の外面を凹線文と刺突文を組み合わせた文様で賑々しく飾っている。

続いて壺を示した。G75-1～G75-6は完形近くまで復元が可能であったものである。いずれも胴部最大径付近の外面に列点文が認められ、G75-6を除くものは口縁部が内傾して上下に拡張し端面に複数条の凹線文を巡らせている。また、内面にケズリ調整を施すものは、頸部にまで至ることはない。G76-1～G77-12には口縁部から胴部上半にかけてのものを集めた。概ねG75-1～G75-6と同様の特徴を有しているが、特筆すべきものとしてG77-1～G77-3が挙げられる。いずれも胴部上半外面に凹線文と刻目文を組み合わせた文様が認められ、塩町式土器の影響が認められる。

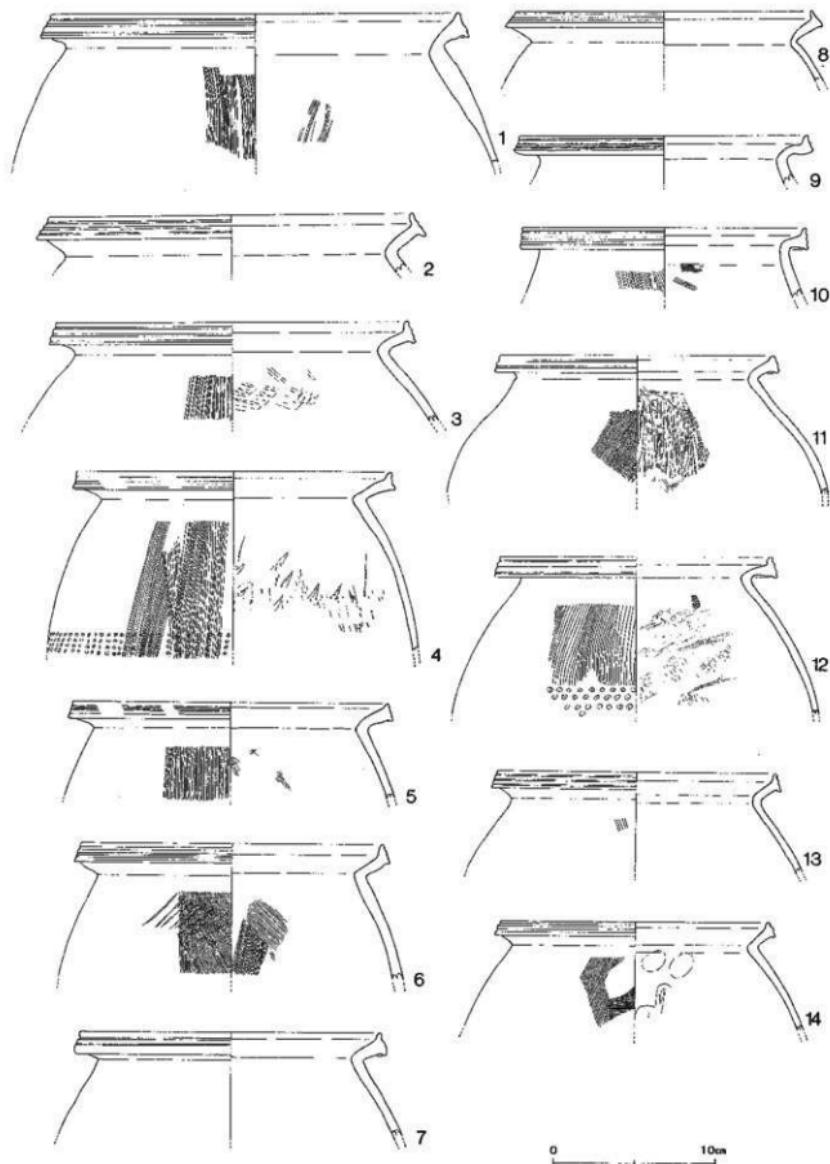
G78-9～G78-12には鉢と思われるものを示した。G78-9～G78-11は体部から口縁部にかけての器壁が内湾しており、口縁端部は拡張し凹線文が複数



G74図 SD01出土弥生土器実測図1 ($S=\frac{1}{2}$)



G75図 SD01出土弥生土器実測図2 (S=1%)

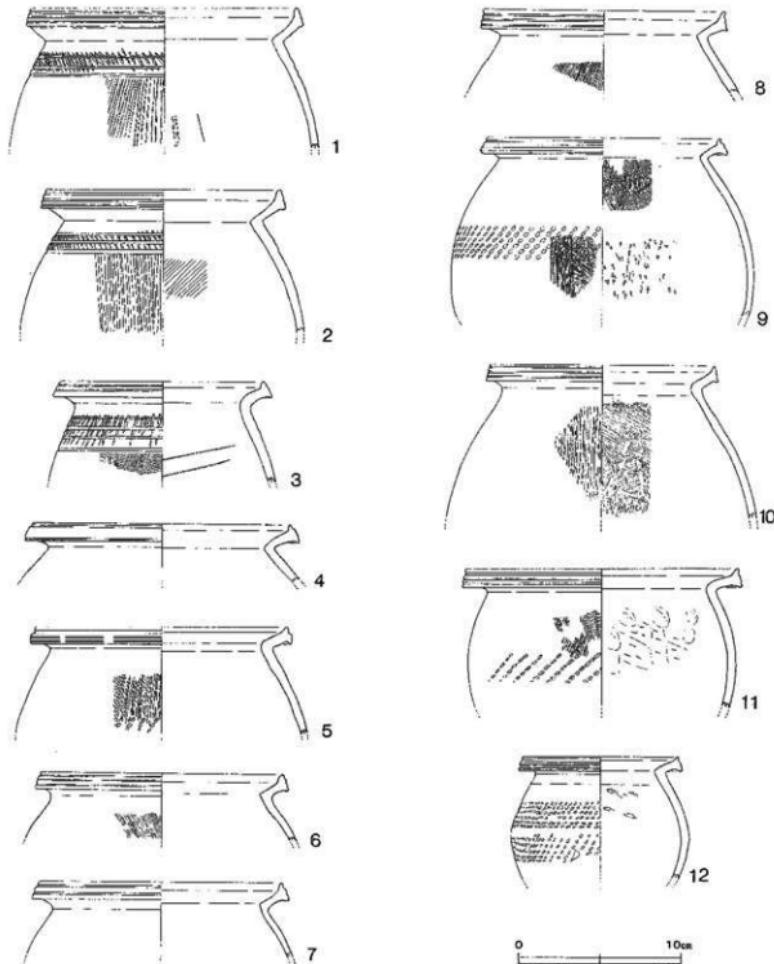


G76図 SD01出土弥生土器実測図3 ($S=1/2$)

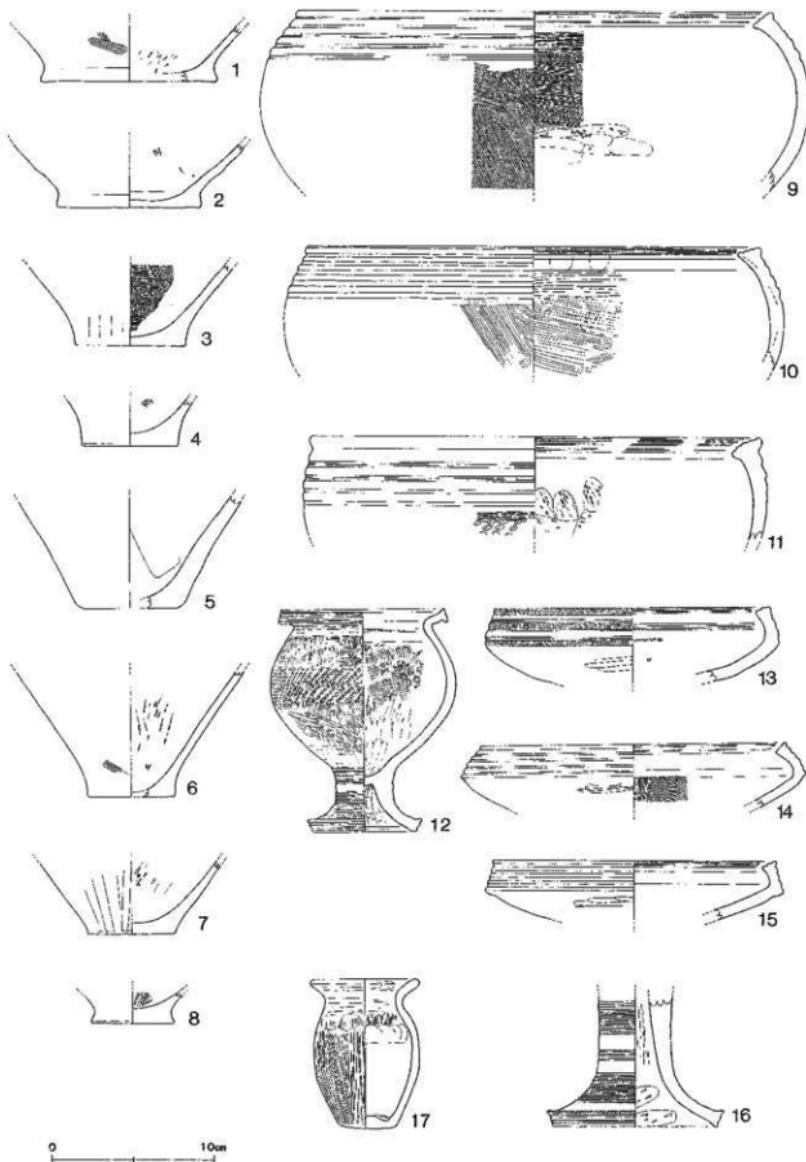
条施されている。G78-12は台付鉢である。口縁部端面と底部から台部にかけての外面に凹線文が複数条施され、また、胴部最大径付近には列点文が2段巡らされている。

G78-13～G78-16は高坏である。G78-13は坏部の器壁がやや緩く屈曲するのに対して、G78-14・G78-15は鋭く屈曲している。G78-16は脚部の破片であるが、外面に凹線文が多数条施され端部付近には刺突文も認められる。

G78-17は壺のミニチュア土器と思われる。口縁部は単純に外反して開口し、胴部はあまり張り出さ



G77図 SD01出土弥生土器実測図4 (S=1/2)



G78図 SD01出土弥生土器実測図5 ($S=\frac{1}{3}$)

ない。

G79-1～G79-3には石製品と考えられるものを取り上げており、いずれも砥石と考えられる。

弥生土器は上層から下層に至るまでの層で溝遍なく出土している。これらの時期ほぼすべて松本IV期の範疇であると思われ、松本IV-2期のものが多数を占めているようである。よって、この遺構は比較的短期間で役目を終えたと思われる。また、時期は異なるがSD04と形態や規模、軸方向などで類似点が認められることから何らかの関連を持つ可能性がある。

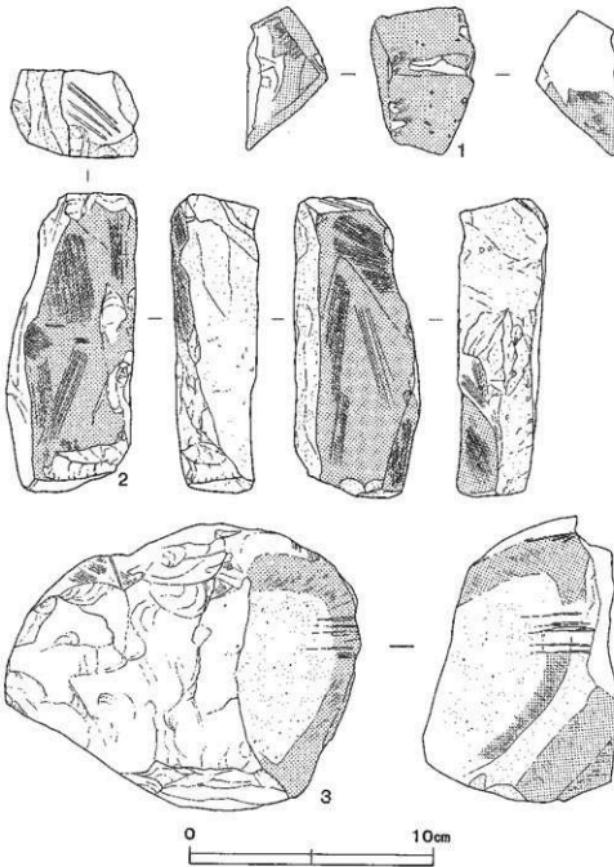
なお、SD01はSI01と切り合い関係にあるが、切り合い箇所の土層を観察しても新旧は判然としなかった。しかし、

SD01の出土遺物がSI01よりも古いため本来SI01に切られていた可能性が高い。

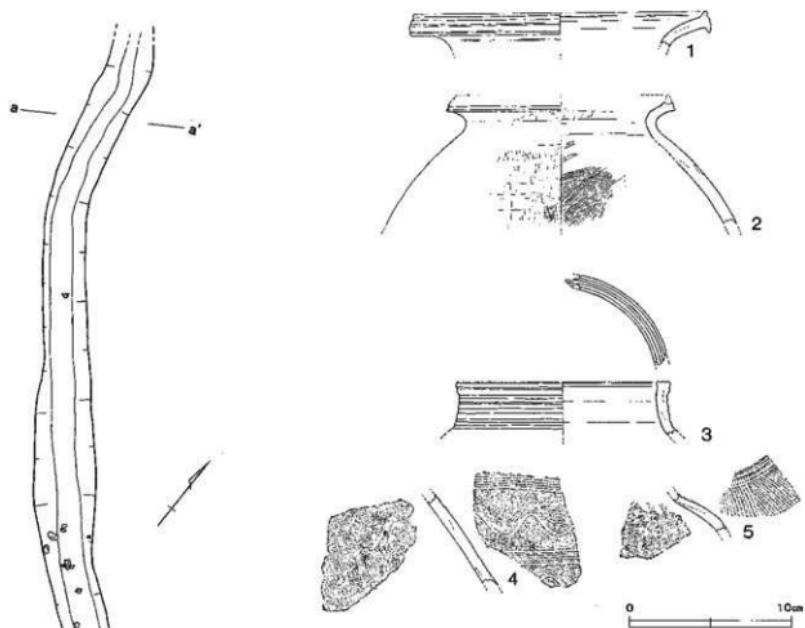
SD02 (G80～G83図)

SD02は「L」字状に折れ曲がった溝状遺構であり、123Gr、B124Gr、B125Grにかけての標高8.60mの付近の調査面で検出した。この遺構についてもDラインから北西に約2m拡張して調査を行っており、検出した長さは全体で17.1mに及んでいる。指向方向は大局的にはN-39°-WとN-58°-Eであるが、直線的ではなく湾曲が認められる。検出規模は上幅50cm～76cm、下幅15cm～45cm、深さ38cmを測り、底は標高8.22mで概ね平坦である。また、水が流れていた痕跡も認められないことから、この溝状遺構は何らかの区画溝として用いられていた可能性がある。

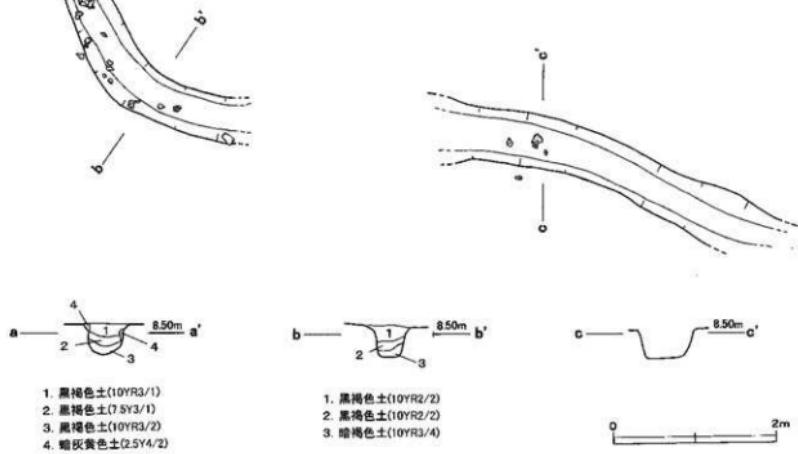
覆土は4層に分層可能であるが基本的な層は第1層から第3層であり、これらはSD02内の全体に認め



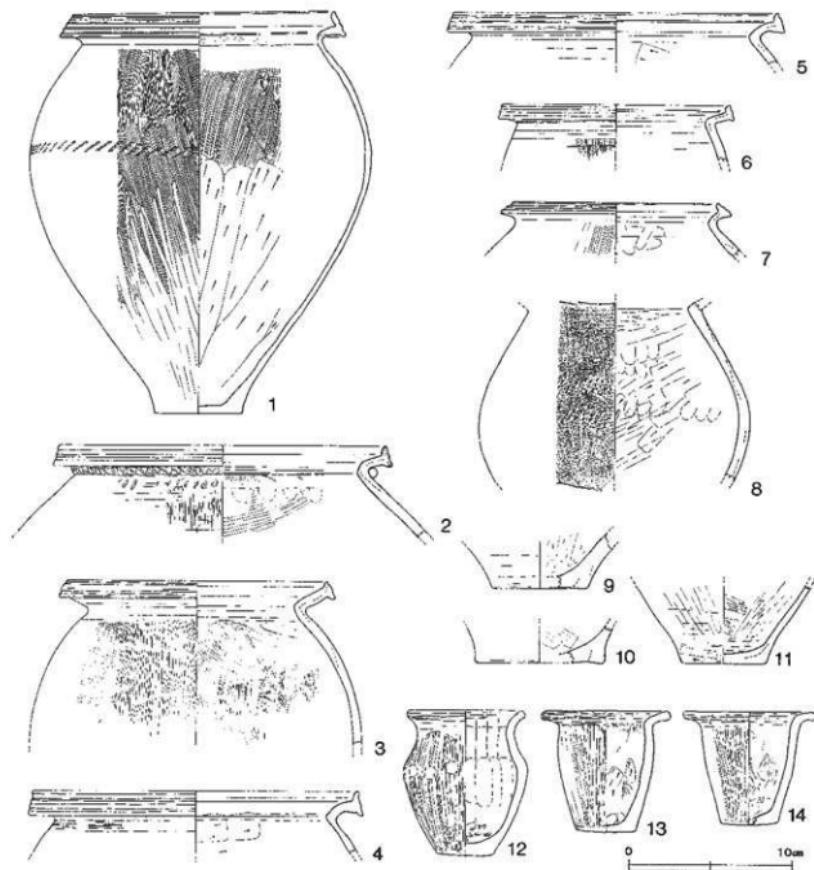
G79図 SD01出土砥石実測図 (S=½)



G81図 SD02出土弥生土器実測図1 ($S=1/3$)



G80図 SD02実測図 ($S=1/60$)



G82図 SD02出土弥生土器実測図2 (S=1/2)



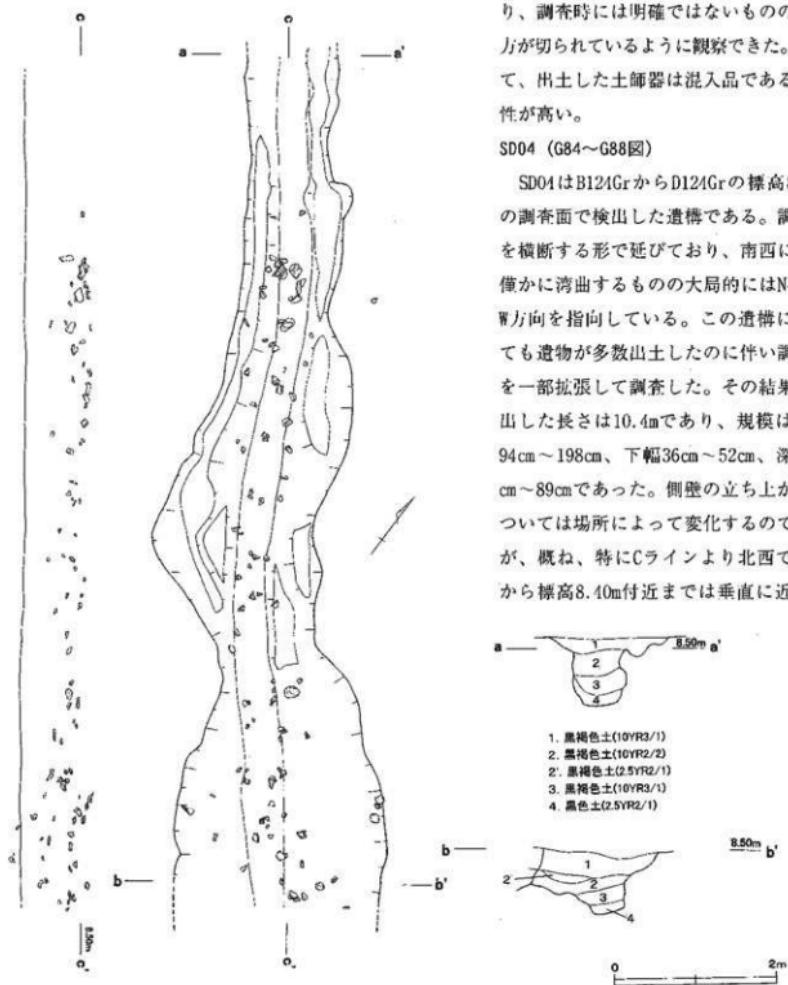
G83図 SD02出土土師器実測図 (S=1/2)

られるものである。出土遺物は比較的多く、覆土からはビニール袋3袋程度の土器片が出土している。これら出土遺物のうち図化に堪えるものを示した。

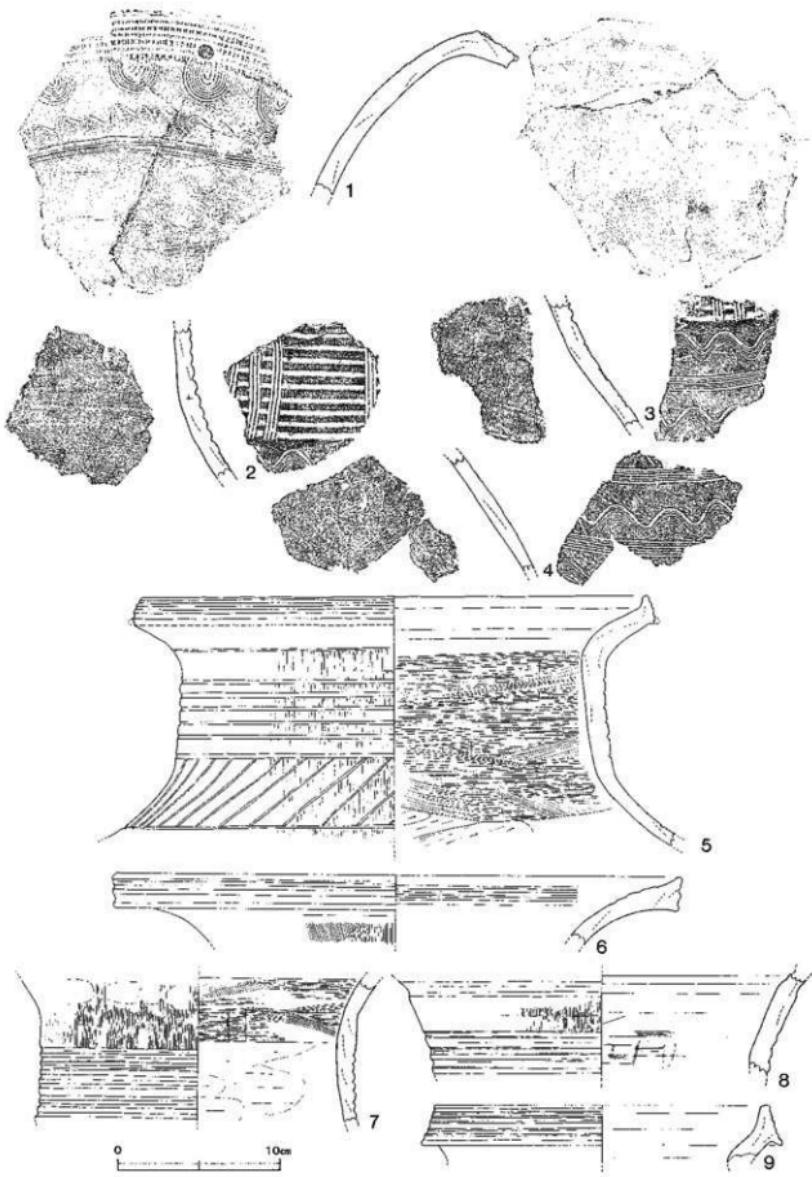
G81-1～G82-14には弥生土器を示した。いずれも松木IV期のものであり、かつ、松木IV-2期のものが多い。また、他の土器片のはほとんどが同時期のものであることから、これらはSD02の時期を示すと考えられる。G83-1～G83-4には僅かに出土した土師器を示している。SD02はSD04と切り合い関係にあり、調査時には明確ではないもののSD02方が切離されているように観察できた。よって、出土した土師器は混入品である可能性が高い。

SD04 (G84～G88図)

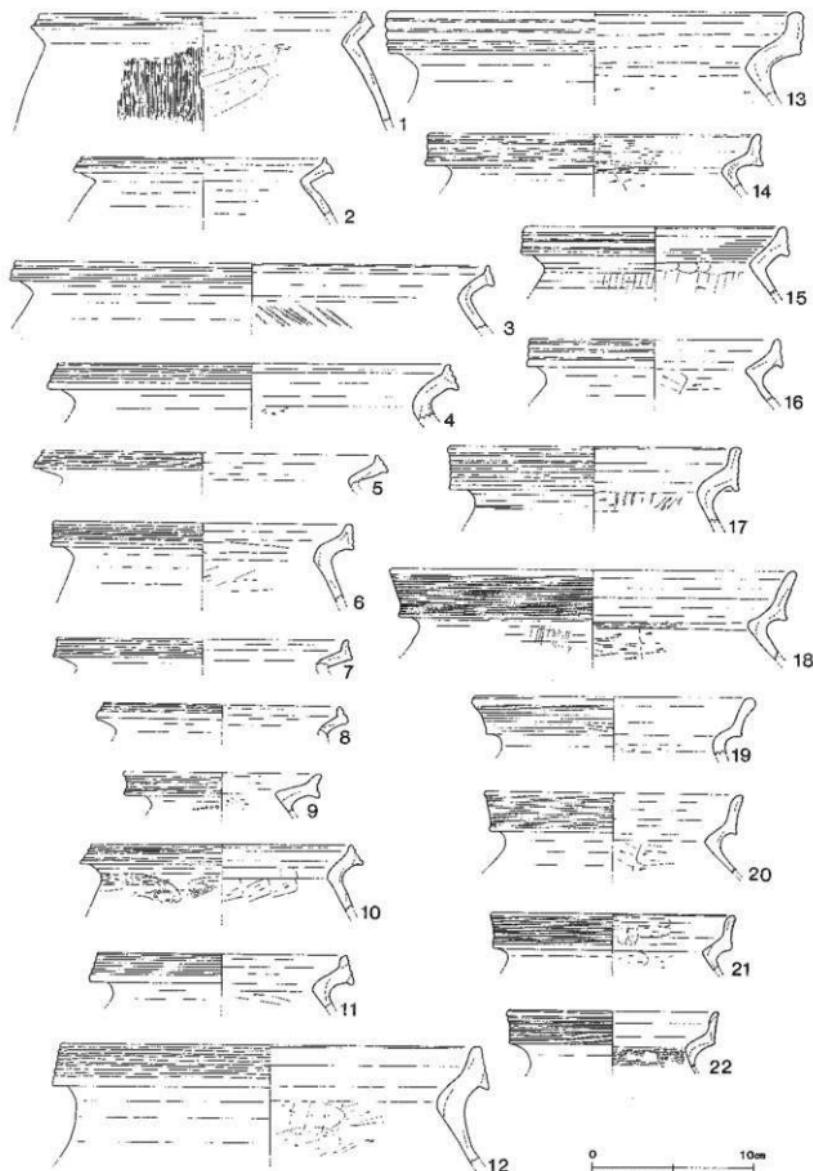
SD04はB124GrからD124Grの標高8.65mの調査面で検出した遺構である。調査区を横断する形で延びており、南西にごく僅かに湾曲するものの大局的にはN-38°-W方向を指向している。この遺構についても遺物が多数出土したのに伴い調査区を一部拡張して調査した。その結果、検出した長さは10.4mであり、規模は上幅94cm～198cm、下幅36cm～52cm、深さ82cm～89cmであった。側壁の立ち上がりについては場所によって変化するのであるが、概ね、特にCラインより北西では底から標高8.40m付近までは垂直に近く、



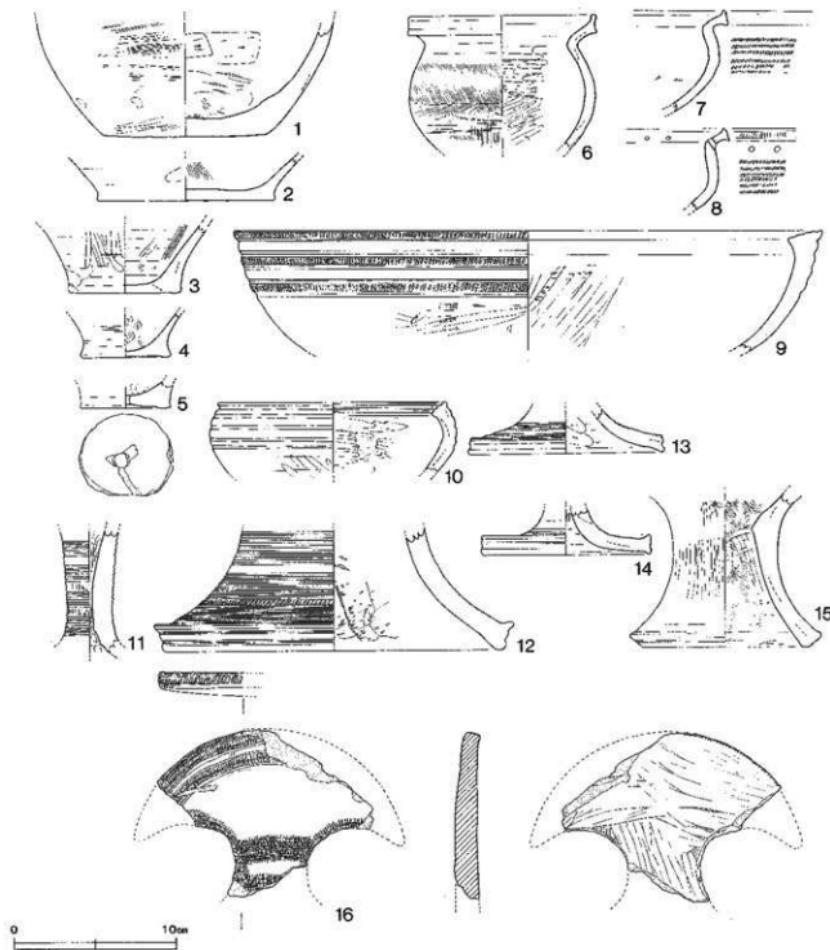
G84図 SD04実測図 ($S=1/60$)



G85図 SD04出土弥生土器実測図1 (S=1/2)



G86図 SD04出土弥生土器実測図2 ($S=\frac{1}{2}$)



G87図 SD04出土弥生土器実測図3 (S=%)

より上位から上端に至るまでは緩やかになっている。また、この遺構についても標高8.20m付近の側壁が所々抉れていたが、これはSD01と同様に水の浸食作用によるものと考えられる。底の標高については7.76m~7.83mで微妙に変化する起伏が観察できたが、検出した範囲では勾配は認められない。

覆土については5層確認しており、ここからコンテナ2箱分の出土遺物があった。石製品と思われる1点を除いてはすべて弥生土器であり、実測可能なものに若干選別を加え以下に図示している。